

# 僕と騎士と武器召喚

ウエスト3世

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ここは騎士の国…。

その騎士の国の王都である文月にはたくさんの騎士が住んでいた。その騎士の中にはある一人のバカがいた。

騎士の世界を舞台にしたバカテスです。

# 目次

## 日常編

騎士の国	1
国家騎士	6
監視	16
監視初日	28
吉井明久 v s 土方十四郎	39
謎の奇襲	51
黒尽くめの男	62
姫探し	72
ヒメージ三世	81
王族暗殺集団	90
親子	100

## 国家騎士消失編

事件	110
狙いは…。	118
次の標的	126
不安と恐怖	135
仮面の正体	146
下級騎士 v s 国家騎士	156
黒い剣	167
根本恭二	175
決着	186
日常編Ⅱ	
二週間後	196
白い剣	206

過去編	怒り	死	因縁	奪われた武器	命日	死霊術士編	美波と美春	如月ハイランドⅣ	如月ハイランドⅢ	如月ハイランドⅡ	如月ハイランド	鉄人
	316	307	299	285	272		262	251	242	234	224	215

再会、そして…。	死霊兵の襲撃	死霊兵	脱獄	二年後	完結編	過去の記憶	血のクリスマス・イブ	ワスレナグサ	似た境遇	338	優秀な少女と落ちこぼれの少年	アリス
448	436	421	409	397		386	372	360	349			327

二重召喚	462
危機	475
羅刹	486
根本恭二と小山友香	498
馬鹿	509
軍勢	522
安倍晴明	534
西村宗一	545
聖女の祈り	559
阿修羅	571
明久とアリス	583
最後の戦い	596
騎士王の聖剣（エクスカリバー）、騎士	

王の宝剣（クラレント）	607
終わり	621



# 日常編

## 騎士の国

ここ、日本は騎士の国である。日本にはたくさんさんの騎士が住んでいるが、その中でも最も有力な騎士たちが住んでいるのは王都、文月だった。

そして、文月の騎士の戦い方は特殊である。自身の武器を召喚して戦うのである。この召喚した武器を『召喚武器』という。

武器の強弱は何故かテストの点数で決まり、そのテストの点数が高ければ高いほど武器の威力は高くなる。しかし、武器の力を使えば使うほど点数は減っていく、0点になると武器は消えてしまう。(補習あり)。また、そうならないように点数は日ごろから補充しとかなきゃいけない。でなければ、『召喚武器』の本来の力を全く引き出せないからだ。

しかし、一見便利そうなのこの武器も実は召喚出来る場所が限られている。王都の文月はどこでも召喚できるが、それ以外では限られた場所でしか召喚できない。この武器を召喚できる場所を『試験召喚フィールド』と言う。

また、これらのシステムを総合的に『試験召喚システム』である。

この『試験召喚システム』を考案したのは現在、皇帝の座についているカヲール二世（藤堂カヲール）である。

数年前まで小国に分裂していた日本だったが、その統一を果たしたのは当時、最も勢力のあった文月の軍だった。他の有力な小国の軍も文月軍との戦いによる敗北で従属を余儀なくされる。そうして今の日本は出来ている。

「この召喚システムのおかげで、王都の騎士は一層強くなったねえ…」

カヲール二世は満足げに笑う。この国の発展は全て自分のお陰だと言わんばかりの笑みだった。

「そうですね、ババ…じゃなくてカヲール王妃。」

側近の竹原は素っ気ない返答を返す。眼鏡をかけたいかにもクールそうなオッサンだ。礼儀正しい雰囲気や余所っているのだろうが、何処か誤魔化せていない。

「おい、今ババアって言いそうだったよな？おい！」

カヲール二世は側近を睨みつける。

「いいえ、なんでもありません。ババア」

「今こそババアって言ったよな？おい！」

そんな王と側近のやりとりの中…。

「た、大変です！王様！」



ある一人の騎士がカヲール二世の下へと駆けつける。焦燥を纏った表情だ。

「何だ、騒がしい！」

カヲール二世はただでさえ側近にババア呼ばわりされているのに、その他の問題を抱える予感を背中に感じ、苛立った表情を見せる。

「また、あの『バカ』がやらかしましたあアアアア！」

叫び声にも近い騎士の報告にカヲール二世は「ハア」とため息をつく。その『バカ』と呼ばれる者に心当たりがあった。

「まーた、あの『バカ』かい…。」

「い…いかが致しますか？」

恐る恐る騎士が尋ねる。すると…。

「あの『バカ』にはアイツを送る」

「アイツですか」

「アイツだ。」

☆☆☆

王都の町はたくさんある店で人々がにぎわっていた。王都の町というだけあって、店

の商品などもそれだけ豊富にそろっていた。

しかし、そんな賑わいとは別に、どうでも良いような物事で賑わっている者達もいた。

「雄二、そのソーセージは僕のもんだよ！」

「てめエ、明久。コレはオレが買ったソーセージだ。返してもらおう！」

にぎわっている理由はソーセージの取り合いだった。一人は長身で赤髪をワックスでツンツン立てた少年と、一人はいかにも思考能力の鈍そうな少年だった。

「雄二は良いよね？毎日『食』という文化を楽しめて！でも僕は毎日が塩と砂糖の毎日だ！何が食文化を大切にしろだ、バカヤローツ！」

思考能力の鈍そうな少年はまず食文化に文句をつける。

「やかましいツ！何、食文化に文句付けてんだ！食費をゲームにまで扱うお前が悪い！」  
続いて赤髪の少年が怒鳴る。とても正当された意見のようにも聞こえる。

「いい度胸だ、雄二。なら剣を交えて、勝った方が勝ちつてのはどうだい？」

雄二と呼ばれる少年は一瞬戸惑った表情を作っていたが、すぐに返答をする。

「いいだろう、ぜってえ負けねえ！」

ソーセージの取り合いごときで何故か二人の間には殺気が漲っていた。そんな二人を町の人々はハラハラした表情で見ていた。

「試験召喚、サモンツ！」

「サモン！」

明久と呼ばれた少年は木刀を、雄二と呼ばれる少年はメリケンサックを召喚する。

明久

雄二

数学

22点

vs

数学

33点

「うおおおおおおおおおおおッ！」

二人の剣と拳が交わろうとするその刹那…。

ギイイイイイイン！

金属を弾く音がする。雄二と明久の攻撃を受け止めたのだ。

「そこまでよ、二人とも」

目の前に一人の少女が現れる。

少女は二人を下賤なものを見るような瞳で見下した。

## 国家騎士

ギイイイイイイン!

金属を弾く高い音が響き渡る。

明久と雄二がぶつかろうとする中、一人の少女がその間に割り込む。

「……え……?」

明久と雄二は同時に呆けたような声を上げる。何が起きたのか理解できていないようだった。

自分たちの攻撃は弾かれ、そこにいたのは一人の少女。

「な、なんてことするんだッ!? 秀吉! この雄二のアンチクショーは僕の貴重な食料を横取りしようとして……!」

「テメー、明久! アレは元々オレのだと……!」

雄二が喋り終わらない内に……

ゴンツ!

その少女は明久を思いっきり殴り飛ばす。その一撃は少女の拳とは思えない一撃だった。

「い…だあああああッ」

見た目からはまったく感じられない、その重い攻撃に明久は悲鳴を上げる。

「フ…。秀吉。まさか、こんな短期間でそんな怪力を手にするとは…。流石、僕の嫁。」

明久は痛みを堪えながらも感嘆したように言う。

すると、その少女は不機嫌そうに倒れている明久を踏みつけ、

「あのバカと私のどこが似てるのかしら？」

「…え…？」

よく見ると、秀吉に似てはいたが、前髪の分け方に、プライドの高そうな態度が秀吉との決定的な違いだった。

「アレ？秀吉じゃないな。」

「当たり前よ！あんなバカと一緒にしないで。」

どうやらその少女は秀吉と同一視されるのを嫌っているようだ。

そこで明久が思案の表情で少女に告げる。

「なんか、こう…。秀吉はもつと可愛かったような…。」

「なっ…!？」

明久の発言に傷ついていたのか、その少女はさらに明久を強く踏みつけ、

「私の何処に魅力が欠けているのかしら…？」

「……ふ……ばばっばば……っ！」

明久は「すぐに暴力を振るところが魅力に欠けている」と訴えようとしますが、上手く言葉にならない。

そこで、明久は雄二に目でサインを送る。

（ちよつと、雄二！ボーツとしてないで、助けてよ！今にも顔の皮がはがれそうだよ！）  
すると、そのサインに気づいた雄二は、

（フツ。悪いな、明久。）

（雄二……？）

（実はな……オレは……）

（オレは……？）

雄二にしては妙に真剣な雰囲気を感じられる。明久は何だろう、と首をかしげる。

（ソーセージを食つてるところだ。）

そう、彼は先程、明久と取り合っていたソーセージを美味しそうに食べていたのだ。

友人の真剣な眼差しに自分も真剣な雰囲気を心に漂わせていたが、ソーセージを食べていると聞いては呆れるばかりである。

同時に腹立たしくも感じた。

（雄二イイイ！貴様……っ！今の真剣な雰囲気は何!? てか、いい加減、ソーセージを頭か

ら離せ！）」

明久は雄二に助けを求めた自分がバカだったと嘆く。

そして、そんなやりとりをしてるうちに、少女は踏みつけていた明久を解放する。

「ぶ……っ……はア……し、死ぬかと思った……。」

明久は声を荒らげて言う。左の頬は少女の足を擦りつけられたせいで、右の頬は地面に擦りつけたせいで赤くなっている。

「それはそうと、アナタ達下級の騎士は教官の許可がない限り、武器は召喚できないハズなんだけど……。」

すると、雄二と明久はお互い顔を見合わせて、「あ。」と言う。

この世界では下つ端の下級騎士と、それなりの戦闘訓練を受けた中級騎士に、高い戦闘力を持つ上級騎士、さらにその上は、王族に仕える七人しかいない国家騎士と階級分けされていた。

下級騎士は見習いの騎士で位の高い騎士の許可でもない限り、召喚は許可されない。自分で召喚できるようになれるのは中級クラスになってからである。

明久、雄二は下級騎士だ。つまり、規律を破ったことになる。

「まあ、アレは不可抗力というか……ね？雄二。」

「そ、そうだな。俺達、手が滑っただけだもんな。」

二人はぎこちなく笑う。すると、

「どう手が滑れば武器を召喚して戦うハメになるのかしら？」

その少女は満面の笑みを浮かべて、その二人に質問する。

しかし、その笑みの裏には殺意らしきオーラを感じる。少女は一步、そしてまたもう一步二人に近づく。雄二と明久はそれと同時に後ずさる。

「ぎぎぎやあああああああああああッ！」

王都の城下町に悲鳴が響きわたる。

☆☆☆

ここは下級、中級騎士が訓練を受ける『フミツキ訓練所』。ここで、戦闘訓練をする。また、戦闘だけでなく、『召喚武器』に必要なのは、点数である。その点数を補充するためにも学力は欠かせない。いわゆる学校みたいなどころだ。

そんな訓練所で、正座をさせられている二人の姿があった。

雄二と明久である。



「まったく、お前たちは何回言えば、分かるんだ!? お前たちは見習い騎士だから勝手な召喚はダメだと何回言えば……」

クドクドと説教するのはこここの訓練所の教官、西村教官である。一部の騎士には「鉄人」と呼ばれている。そう称される理由の一つはやはりこのがっしりとした体つきが要因の一つなのだろうか。

そして西村に注意を受けた二人は、

「すいまっせーん」

と、心のこもっていない謝罪をする。

「ハア……。もういい。お前らには言葉が通用しないみたいだからな……」

西村教官は深いため息をつく。

説教から解放されたと思つた明久は、

「イヤー、よく分かつてるじゃないか、鉄人。そうだ、僕に言葉は通用……ブツ！」

喋つてる途中で顔を殴られる。

「鉄人じゃない、西村教官と呼べ! 大馬鹿者!」

「……ハイ、スンマセン。」

少し調子に乗つてしまつたと、反省する。

二人は訓練所を出る。すると、訓練所の門の前に秀吉とムツツリーニが立っていた。

「お主らはまた酷く説教されたみたいじゃな。」

秀吉は苦笑しながら言う。

「……」

ムツツリーニも無言で頷く。

「それにしても、暴力反対だぜ。」

雄二は殴られた箇所を手で擦る。今日一日で明久と雄二は20発は殴られている。

一人は今朝会った少女、一人は西村教官。

「ホントだね、秀吉のそっくりさんにも会うし……。」

すると、秀吉は目を丸くし、

「もしかして姉上のことか？」

と、聞いてくる。

「姉上？ 秀吉お姉ちゃん居るの？」

「初めて聞くぞ、それは。」

「…初耳…。」

三人は興味津々に尋ねる。

「う、ウム。まあ、そっくりなのも無理は無いの。わしらは双子の姉弟だからの。」

「ふ、双子っ!？」

初めて聞くその話に三人は声を上げる。

「ただ、ワシもめつたに姉上とは会わんのじゃ。ワシは一番下の下級騎士じゃが、姉上は国家騎士の第三騎士なのじゃ。」

「こ、国家騎士イイイイイイーッ!?」

さらに声を上げる。

三人は同時に、秀吉にそんな偉大なお姉さんがいたとは…。と何故か感心する。

七人しかいない国家騎士は騎士の中でも一番上の階級だが、その国家騎士にもランクづけをされていた。

一番強い国家騎士を第一騎士、一番下の七番目は第七騎士と、数字により力の序列が決められていた。秀吉の姉は第三騎士。つまり、国家騎士の中でも三番目という極めて高い位を持っている。

明久は、そういえば秀吉のお姉さんのあのプライドの高さは国家騎士だからなのか、と納得する。

☆☆☆

王宮ではカヲール二世（藤堂カヲル）がイライラした表情で、何故かラーメンを食べていた。

皇帝が一般人の食すラーメンを口にしているというのはとても不釣り合いな光景である。

「吉井君と坂本君が暴れたせいで町の店五件から苦情が来ております。」

側近の竹原はクールな雰囲気で城下町の状況を報告する。

「分かってるよ。さつきもソレは三回聞いたよッ！」

「いえ、何回も言わないと、ババ……じゃない、陛下の脳みそにインプットされないんじゃないかと思ひまして……」

「年寄り扱いすんな、ボケ！アンタ、時々サラツと毒舌言うな、オイ！」

「そんなことねーよ、ボケ。」

「おい、言動が綻び始めてるぞ。」

とても、王と側近のやりとりとは思えない光景だ。こんなに私語と毒舌を言う側近があるだろうか？そして側近にこうも舐められている王が居て良いものだろうか、つい考えてしまいたくなる。

そんな状況下でもカヲール二世はハフハフとラーメンを食べ続ける。

そんな時だった。

「失礼します。」

少女の声だ。

「おお、優子じゃないか、待ちわびたよ！」

入室したのは王族に仕える国家第三騎士の木下優子だ。

「実はお前に話があるんだよ。」

「話……ですか？」

優子はキョトンとする。

「その前に、ラーメン食うかい？」

カヲール二世は自分が先程まで食べていたラーメンを優子に手渡そうとする。

優子は「うわぁ」と引くような目で、

「いえ、遠慮しておきます。」

と言う。

「そうかい。まあ、良い。話に移ろうか」

カヲール二世は再びラーメンを食べ始める。

## 監視

ズズズズズズズズズズズ

カヲール二世はラーメンを食べながら優子に、

「実はお前に頼みたいことがあるんだ。」

顔はとても真剣だが、ラーメンを食べるという場違いな光景はふぎけているようにしか見えない。

「その、頼みごとって何ですか？」

「ああ、それは…。」

カヲール二世は一枚の写真を優子に手渡す。

「あの、これは…。」

「吉井明久だ。」

「いえ、そうじゃなくて…。」

その手渡された写真の人物は吉井明久。王都を代表するバカである。先程優子を散々煩わせた問題児だ。

しかし、優子が聞きたいのはそんなことではない。

「あの、この男に何をしろと?」

「勘がいいね。今回はその男に関する任務だよ。」

優子は引きつったような顔をする。このバカに関わる任務は碌な任務じゃないだろうな、というような表情だ。

「コイツのせいで、この王都、フミツキは毎日のように問題が起きています。流石にコレをこのまま見逃すわけにはいなくてね。そこでアンタに頼みごとをしたくてね」

「いいですから、その頼みごとの内容を言ってください。」

いつまでも話が本題に入らず、優子はだんだんイライラし始める。

「国家第三騎士、木下優子に命ずる。今日より吉井明久の監視役の任務に就いてもらう。」

その命令の後、暫く沈黙の時間が訪れる。

「……ハ……?」

優子は何が起きたか分からないような表情をする。

「バカ……じゃない、吉井明久のか、監視?」

「ああ、そうだ。アイツはどれだけ注意してもコチラの言うことなんて全く聞かないからね。アンタみたいなしつかりとした娘が監視でもしてないと、あのバカは問題を起こし続けるだろう。」

優子はさらに引きつけたような表情で、

「その、監視の任務って何をすれば…。」

「朝昼夜、一日中アイツの隣で問題を起こしてないか確認するのさ。もちろん問題を起こした時は肅清を許可するよ。」

「あの、その監視の任務って、どれくらいで外れますか?」

「あゝ…。アイツが真面になるまで。」

優子はガツカリした表情で下を俯く。

(あのバカに真面がやって来る日なんて永遠に来るわけないじゃない。)

優子はブツブツと下を向いたままグチを言う。

「いいか、優子。これはあのバカが問題を起こすか起こさないかを左右する超重要任務だ! よって、この任務はAランク任務とする。」

Aランクは任務のランクとしても段階的に二番目の中々高度な任務だ。

バカの監視がAランク任務というのも馬鹿馬鹿しいが、確かにあのバカを真面にさせるにはランクの高い任務というのも否定できない。

優子はフミツキを代表する国家騎士の一人。それに対し、明久はフミツキを代表するバカ。

プライドの高い優子にとってこれ程屈辱的な任務はない。しかし、それでも陛下の言



うことには従わなければならない。

「ハ……イ。分かり……ました。」

優子は声をブルブルと震わせて返事をする。

☆☆☆

「今日もひどい目にあった……。」

明久は溜め息をつきながら家のドアを開ける。明久の住む家は一人暮らし用のアパート。

しかし、アパートとはいっても、西洋風で何処かオシャレだ。

「ただいま……。」

明久は一人暮らしなので「ただいま」と誰かが迎えてくれるわけでもない。だが、何となく声にしてみる。

すると、玄関には一人の少女が立っていた。異様に殺気めいた顔で明久を睨んでいた。

「……ッ……！」

明久は急いで家から出て、ドアの扉を強く締めた。

そして、落ち着いて呼吸をし、冷静に思考を巡らす。

(間違いない。アレが不法侵入というヤツだ。)

明久はサツと携帯を取り出し、警察に電話をしようとしたその瞬間――。

ドギヤツ！

ドアが激しい音を立て壊れる。

「……ッ……!?!」

明久は何が起きたんだ!?!と真剣に驚いた表情をする。その余りの突然の出来事に心が飛び出るのではないかと思うほどだった。

「逃げようか思っても、逃げられないわよ。」

少女は上からの視線で言う。その視線だけで、殺されそうなほど息苦しい状況だ。

明久は少女の瞳を直視できなかつた。視線だけで呪い殺されそうなその勢いに息が詰まりそうだった。

しかし、次の瞬間、状況が一変する。

ゴオオオオッ

強い風が吹く。すると、彼女のスカートがフワリと舞う。

「……ッ！」

先ほどまで殺気溢れていた表情がカアアツと赤面した表情へと変わる。

彼女はバツとスカートを押さえつけ、

「み、見た…？」

と小声で明久に聞く。

明久は戸惑ったような表情で、

「あゝ、うん。ピ…ピンクか…。」

と答える。

だが、内心その発言は失言だとも思った。だが、咄嗟に出る言葉はこれくらいしかないというのもまた事実だった。

少女は赤面した表情で目をつり上げ、明久を思いつきり殴る。

「ぐはアツ…！」

明久はグツタリと倒れ、意識を失う。

---

優子に殴られた明久は暫く意識を失っていたが、やがて目を覚ます。

「んで、話というのは？」

明久は顔が腫れた状態で優子に質問する。殴られて大分時間は経ったはずだが、腫れが治る傾向はない。今日はもう時間も遅いので、明日、病院で検査を受けた方が良くかもしれない。

「その前に自己紹介。私は国家第三騎士の木下優子。よろしくね。」

「あ、えーと、僕は……」

続いて明久が自己紹介をしようとする。すると、

「知ってるわよ。フミツキを代表する天才的馬鹿の吉井明久くんよね？よろしくね。」

と、ニコニコした表情で言う。明久は物凄くバカにされた感じがした。実際に自分でもその自覚はあったが、直接的に言われると少し腹立たしくも感じる。

「ちよつと、違うからね!? イヤ、違うくないけど、僕にだってちゃんと取柄はあるからねッ!?!」

明久は少し涙目で言う。言われてばかりでは自分は短所しかない人間と思われてしまふ。

「へえ、どんな？」

「か、肩もみが得意です……。」

すると、何故か沈黙の空気が訪れる。

「あの、吉井君……。私はどうリアクションすればいいのかしら？」

優子は真剣に困った表情をする。

「アレ？そこは褒めるトコじゃないの？」

明久はキョトンとした表情で言う。

「……。」

優子は明久の発言を聞かなかったことにする。そして、「ケホンッ」と可愛らしい咳払いをし、話を切り替えようとする。

「まあ、肩もみはともかく、私がここに居るのは陛下の命令でね。」

「へ？あのババアの？」

明久は呆けたような顔をする。

しかし、すぐに表情が変わり、

（ババアめ、木下さんに一体どんな命令下したんだ!?!ババアのことだ、良くない命令に違いない。）

と、何か良くないことが起こるのだろうと考える。

「その命令は吉井明久の監視よ。」

「……。」

(…え? 何て言ったんだ彼女は…? え…と、k…A…N…S…:…H I。K A N S H I!?  
か…監視?!)

「嫌だアアアアアアアアアアアッ!」

明久は急に人が変わったように声を上げる。

すると、優子も真剣に嫌そうな表情で、

「…私だって、こんなの嫌よ…。そもそもアナタが町で問題さえ起こさなければ、こんなことには…。」

と、ボソボソと言う。

明久も下を向きながら、

(ま、間違いない。あのババアは監視とか言って、僕の個人的な恥ずかしい情報を取り上げて、皆に公開する気だ、クソオオオオッ! 何て汚いマネをツ! それでもフミツキを代表するババアなのかつ!)

しかし、カール二世が優子に命じた任務は確かに『吉井明久の監視』だが、恥ずかしい情報を公開することが任務ではない。明久が問題を起こさない様、『監視』することが彼女の任務。

どうやら、明久は監視任務の内容を誤解してしまったらしい。

「それよりも、私の布団はあるかしら?」

明久は何を言ってるんだ、この娘はという表情で、

「え？何で？」と質問する。

「監視なんだから、アナタの家で生活するのは当たり前でしょ!？」

当然かのように言う。よく見ると彼女の隣には大きな旅行用のカバンが置いてある。

「不幸だああアアアアアアアアッ！」

これからずっと監視されなきゃいけないのか…。明久は今にも泣きだしそうな表情だった。

☆☆☆

翌日——。

今日から優子の明久監視任務が始まる。優子は朝6時にセットした目覚ましで起床する。

「ハア…。」

普段、前髪をピンで分けている彼女だが寝るときはとっぺいしているらしい。ピンをとった

状態もまた一段と可愛らしい。何処か実年齢よりも幼さを感じる。

そして隣には…。

「スピー、スピー」

妙に鼻息がうるさいイビキを掻きながら吉井明久が寝ていた。優子はハアとため息をつく。

そして、明久の睡眠を邪魔するように優子は、

「吉井君、起きなさい」

と、起こそうとするが、

「昨日は豚骨だったから今日は味噌だな…。ハハハ」

どうやらラーメンの夢を見てるらしいが…。

「成程、思ったより手ごわいバカね…」

すると、明久の耳元に近づき、

「吉井君ッ！起きなさいッ」

大声を出して起こしてみる。

「う、うわあああああああああッ!?!」

明久は驚いたせいかわ、勢いよく飛び起きる。

「やっつと、起きたわね…」



明久の監視初日がスタートする。

## 監視初日

「…耳がジンジンする。」

耳元で大声で優子に起こされた明久。

「私に起こされたくないなら、自分で起きるようにしなさいよ！ まったく…」

優子はイライラした態度で明久に言う。

「さあ、今日も訓練所に行かなきゃいけないんでしょ？ 朝食の支度を…」

優子が朝食の準備をしようとする。すると、冷蔵庫から次々と食材を取り出す。

そこで明久は妙な違和感を感じる。

「…アレ…？」

それもその筈。明久はお金をほとんどゲームや趣味に使ってしまい、食費にまわす金など、ほとんどない。そのため、冷蔵庫は何も入っていないハズなのだが、優子は次々と食材を出す光景に不自然さを感じた。

「あの、木下さん。冷蔵庫は空っぽだったハズだけど…。」

明久は恐る恐る優子に話しかける。すると優子は、

「ああ、それなら私が食材を買っておいたわ。何も無いっていうのも流石に可哀そうだし。」

その言葉を聞き、明久はパアアツと目を輝かした。

(木下さんって普段はピリピリしてるけど、ホントは優しい女の子だったんだ)

明久は優子に感動する。…しかし…。

「棚に要らなそうなゲーム、漫画が何冊もあったから全部売り飛ばして食費を手に入れたの」

優子は笑顔で食材をあさる。

「……えっ?!?!」

明久は石化したように固まる。そして暫く固まってから急いでゲームや漫画の置いてある棚を見る。漫画とゲームであふれていた明久の棚は見事に空っぽの状況だった。

「う……そ?！」

明久はガツクリと膝を落とす。明久にとって漫画、ゲームとはお宝同然だったのだ。貧民的な自分でもこのお宝さえあれば富豪くらいの裕福さを持っていると思っていた明久は、その裕福さが一気に消えて、一気に貧民に成り下がった気分だった。

「お金の使い方を考えないからイケないのよね。」

優子は当然でしょ、という口調で朝食用の食器を用意していた。

「……………」

明久はその最もな言葉に何も言い返す言葉がなかった。

ハア…と下を向き、溜め息をつくくと、ボンッと爆発音がする。

「…え…何？」

急にフライパンから煙がモクモクと出始める。

「あの木下さん？」

呼びかけると何故かビクツとしていた。そしてどんどん木下さんの顔が赤面していく。

「……………」

明久はこの爆発音、そして優子が赤面する理由を理解した。

「木下さん、もしかして料理苦手…だったりする。」

本人を傷つけない様、間接的な感じで問いかけるが、優子はますます顔が赤くなり…

「うるさいッ！」

と、照れ隠しに明久を殴ってしまう。

「り…理不尽な…」

すると、優子は白状するように、

「仕方ないじゃない、私、料理苦手だし…。でも、吉井君は多分料理出来ないだろうし…

私なりに頑張ってみたのよ……」

プライドの高い優子が珍しく弱音を吐く。何故か勝手に料理が苦手と判断された明久はムツとする。しかし、

(こういう高い地位に就いている人でも苦手なことはあるんだな……)

明久はそう確信する。そしてフライパンを拾い上げ、今度は明久が料理の準備をする。

「何やっているの?」

キョトンとした表情で優子は明久に何をしているのかと、問う。

「料理の準備だけ……」

当然かのように明久は言う。明久はフライパンに油を引き、そこに二枚のベーコンそして卵を割る。ベーコンエッグを作ろうとしているらしい。

「ここは一応僕の家だからね……。家事は僕がやるから、木下さんは監視任務をそのまま続行してくれればいいよ。」

明久はニコリと微笑む。

優子は未だに赤面のままの状態で、

「う……うん。」

と、素直に返事をする。何故か妙にあっさりしていた。

ベーコンエッグを作りながら明久は、

（早くこの監視任務終わってくれないだろうか）

と、早く解放されたい気持ちでいっぱいだった。昨日までは食糧には困らされたものの、あの一人で過ごす自由な生活。再び戻って来る日を心の底から待ち望んでいる明久だった。

☆☆☆

朝食を終え明久はいつも通り訓練所へ向かう。訓練所は騎士という学校みたいなところだ。

当然監視の為、優子も同行する。

「おはようございます。」

明久は西村教官に挨拶する。それに引き続き優子も

「おはようございます。」

と挨拶する

「おお、木下。陛下から聞いたぞ、随分と大変な任務を任されたようだな。」

「ハイ。」

「申し訳ないが、吉井を頼む。今まで指導するのに、こんなに苦労した訓練兵は初めてだ。」

「いいえ、教官のせいではありません。」

そんな二人のやり取りに不満を持った明久だが、それ以上に不満を持つことがあった。

『おい、見ろ。吉井のヤツ美人連れてきやがったぞ。』

『クソツ、バカの癖に』

『アイツだけは俺達の同類だと思ったのによ……。』

他の訓練兵たちは妙に殺気を放っていた。

「おい、明久。どういうことだ？」

「へ？何が？」

雄二の真剣な質問に明久は戸惑う。

「お前みたいなバカでブサイクなヤツが木下優子のような美人で位の高い騎士と一緒にいるなんて不釣り合いすぎるだろ。」

「雄二、バカでブサイクなのはそのまま返すよ。」

明久は雄二との付き合いは長いが、いつもイラツとさせられるのが、今みたいなサラツと毒舌を言うことだ。

そんな雄二だが昔から策略を練ることに物凄く長けている。だから、問題を起こした時にせよ、明久だけでは犯行がバレテしまうことも、雄二が一緒だと犯行を隠すこと

が出来たりする。雄二に頼らなきや言い逃れが出来ないのが何だか悔しい。

「アキ、どういふことなの!?正直に言いなさい」

雄二の次には美波が明久に迫る。

「イヤ、何かその…。」

必死に説得しようとするが何処から話せばいいのかが分からない。

明久は必死に話す内容を考える。

(参つたな…。雄二はともかく、美波にはそれなりに詳しい説明をしないと納得してくれないんだよな…。バカだから)

明久は「やれやれ」と言わんばかりのため息をつく。

しかし、明久の状況は窮地に立たされている。他の訓練兵達(男の)が明久に向ける殺意が時間が経てば経つほど、強くなつていく。

「…、困った。」

早く説得しないと、ここの訓練兵は嫉妬心が強い。このままでは本気で殺されてしまう。

「静かにしなさい!」

そんな時、優子がざわついた訓練兵達を静める。

「私は陛下から吉井明久の監視任務を任されているだけよ。決してこんなバカと仲が良



いとかじやないから！」  
すると、

『そうだよな、通りでおかしいと思った。』

『任務でもなけりや、こんな美人と一緒になんて有り得ないもんな』

『何だ、吉井、俺達を裏切ったわけじやないのか。』

誤解が解けたのは良かったが、優子のあの言葉で誤解が解けてしまうことに、明久は納得いかずにいた。

☆☆☆

こここの訓練所は勉強はもちろん、戦術も当然学んでいる。

今日は実戦日だった。

訓練兵たちは訓練用のグラウンドに集合する。

「えー、今日は前回の予告通り、実戦訓練を行うー！」

すると、「えー」とやる気のない声上がる。それもその筈。この実戦訓練で相手に負けたら、負けた人物は西村教官の補習が待っているからだ。

そんな地獄の為に「死ぬ気で頑張ります」なんて言う人物はいない。

この実戦訓練の内容は教官が対戦相手呼び出し、呼ばれたモノは前に出て、戦う。『召喚武器』の点数がなくなった、もしくは相手に圧倒された人物は負け…とルールは簡

単なのだが…。

「どんな訓練もイヤだけど、この訓練が一番嫌だよ。」

「みんな、嫌な顔してるのに鉄人は笑顔なんだよな…」

そう、訓練兵全員がこの訓練を嫌がっているのに、西村教官はこの実戦訓練の時間になると、異様に機嫌が良い。

「確かにの。でも、明久と雄二は良いではないか。ワシは召喚武器が全く戦闘向きではないからの。」

「…同感。」

そう、秀吉とムツツリーニは騎士兵であるにも関わらず『召喚武器』があまり戦闘向きではない。

秀吉は治療の召喚武器で医療に関係した武器でムツツリーニは感知タイプの召喚武器である。どちらも戦闘専門の武器ではない。

しかし、明久と雄二も戦闘タイプであるとはいえ、召喚できる武器があまり攻撃力のない武器である。明久は木刀、雄二はメリケンサック。国家騎士レベルになれば魔剣レベルの武器が召喚できるのだが、それに比べたら二人も戦闘タイプと言えるほどの戦力は持っていない。

「よし、吉井明久。前に出る。」

「え〜僕？」

最初に呼び出されたのは明久だった。

「アキ、頑張つてね」

「明久、頑張るのじゃ」

「いや、今まで負けた記憶しかないんだけど…。」

すると、ネガティブになっていた明久に雄二は、

「明久、オレは知っている…。」

「…へ？」

妙に雄二が真剣な表情だった。

「もう力を隠さなくても良いだろ。今こそお前の本当の力を解放する時だ。」

「…雄二…」

しかし…。

（イヤ、今までも結構全力出したはずなんだけど…。）

そんなことを考えていると、

『何!?!吉井は実はスゴイ力を持っているのか!?!』

『どうせ、いつものジョークだろ』

『一体どんな力が…!?まさか、卍解か!?!』

と、一気に明久は注目される。が、それは明久にとってプレッシャーだった。

(雄二め、凶つたな)

雄二の方を向くと、雄二はニヤニヤしていた。

人の不幸を喜ぶとは……と雄二に殺気を向ける。

「僕の対戦相手は誰だろう……？」

すると、西村教官は対戦相手の名前を言う

「土方十四郎……。前へ。」

「……なっ!?!……」

土方十四郎(ひじかた・とうしろ)。彼は点数は高くないが剣術の腕が評価されているせいか戦闘力はそれなりに高い。

ちなみに、一部の女子に人気がある。

「トシー、頑張れよ。」

「土方さん、救急車くらいは呼んであげますぜ。」

土方の親友、近藤君、沖田君は土方を応援する。

「……。」

僕と土方は前に出て対面する。

## 吉井明久 v s 土方十四郎

土方十四郎（ひじかた・とうしろう）…。

勉強は苦手だが、剣術の腕は訓練兵の中でもトップレベル。そのため、少ない点数もその凄まじい剣術で欠点を補っている。

土方にとって訓練兵の中でも最も成績の悪い明久には負けることなどあるはずがない。

「相手は吉井か…。」

（吉井なら、鉄人の補習を受けなくても済む）

「…？」

土方は吉井の表情に普段とは違う違和感を感じた。

普段は間抜けな面しかしていない吉井明久が異様に真剣な顔をしていた。

（な…何だ？）

異様な視圧が土方の体を奮わせる。

「…土方君…。」

顔だけでない、声までも真剣だ。何だ？コイツは何を言うつもりなんだ!?!土方は不安

の色を出す。

「ズボンのファスナー、開いてるんだけど…。」

「…なっ!？」

さつと下を向くと、チャック全開になっていた。

『おい、見ろ。あのクールな土方が社会の窓を開けているぞ!』

『クールだから、なおさらこういう失態は恥ずかしいな…』

『イヤ、もしかしたら吉井を脅かす作戦なのかもしれないぞ!あの土方がズボンのファスナーを閉め忘れるなんてあるはずがない!』

「……………」

戦闘はまだ始まっていないのに精神的に窮地に立たされる土方。

(どうする?このままチャックを閉めるか?いや、このまま閉めたらファスナーを閉め忘れたことになる…。ここは…。)

「フツ。驚いたか?吉井。お前を脅かす一つの作戦だ。」

まるで作戦を仕掛けたように照れ隠しをする土方。

すると、明久は、

「土方君…。どういう心境の変化かな…?」

あまりに最もなことを言われ、土方は言葉を失ってしまふ。そして、

「うるせえええええええええええッ！」

自分の恥を隠すために怒鳴ってしまふ。

「サモンッ！」

土方は日本刀を召喚する。

同時に、明久も

「サモンッ！」

木刀を召喚する。

---

「ウラアアアアアアアッ！」

「うおおおおおおおっ！」

明久と土方の刃と刃がぶつかろうとするが、

「うわぁッ！」

明久は石につまずいて転ぶ。

周りの訓練兵は沈黙。明久に斬りかかろうとした土方も足を止める。

「クソッ、罨が仕掛けられたか…。」

明久はホントに仕掛けられたというような顔をしている。すると、西村教官は、

「何も無いところで転ぶのはお前くらいだぞ、吉井」

と明久を説得しようとするが、

「そういえば、戦術の心得で『戦う前に罫を仕掛ける』ってあったけど、コレがそうか…。」  
明久は西村教官の話を無視し、普段聞きもしない授業の内容を思い出す。

「もういい。戦闘を続ける。」

これ以上は言っても無駄だと判断した西村教官は戦闘続行の許可を出す。

それと同時に土方は加速。気が付くと、明久の目の前に刀を構え、無防備な明久を土方の刀が襲おうとする。

(直撃だっ…！)

そう思った土方。しかし、自分が斬ったハズの相手はそこにはいなかった。

すると、後ろから人影を感じる。サツと後ろを向くと、そこには明久がいた。

「オオ…オオオオツ…！」

明久の木刀が土方の顔面に直撃をする。

「ぐっ…！」

土方は小さな悲鳴を上げる。

---

明久の攻撃が直撃する。

その光景を見ていた優子はすぐ傍にいた雄二に質問する。



「ねえ、坂本君。吉井君つてもしかして戦闘は強かったりする？」

土方の剣術の才能は誰もが知っている。その土方の攻撃を避け、後ろに回り一太刀浴びせる。この攻撃法は剣士としては、かなり高度な技術を備えていなければ出来ない攻撃技だ。

その高度な攻撃を出来る明久が本当に下級騎士になのか？そう優子は疑ったのだ。

「いいや、全く。人のことは言えんが、召喚できる武器が木刀つてことは点数が低い証拠だ。戦闘も素人同然だぞ。」

「そう…なの？」

優子はキョトンとする。あの動きは素人ではない、と自分の心の中で激しく主張してやまないのだ。

すると、雄二に代わり秀吉が、

「しかし、素人同然じゃが、明久は昔から瞬発力と速さはあったの。」

と、説明を補足する。

「瞬発力と速さ？」

「ウム、だいたいこの者は攻撃される瞬間にならないと、脳がその攻撃に反応しないのじゃが、明久の場合、ワントンポ早くその攻撃に反応し、躲すのじゃ。だから、動きには無駄がないのじゃ。」

「まあ、戦闘よりも逃げるのに適した能力だよな…。」

雄二が毒舌っぽく言う。

「でも、アキのヤツ徐々に追いつめられてるわ。」

戦闘の状況を話す美波。優子もそこに目を向ける。

「何か…息上がってない?」

「ああ、そのせいで動きが遅くなっているな…。イヤ、相手が加速し始めてるのか?」

見ると、土方の件を振るう速度はさつきとはまるで違う。ヒュンヒュンと高音を立てている。

「…吉井君…」

「ぐっ…」

(マズイ、躲しきれない)

急に攻撃速度を上げた土方。明久は何とかそれを躲すが、2、3発と徐々に攻撃が掠る。躲すことに精一杯の明久は攻撃なんて出来ない。

「さつきの一撃で終わりか!?! ああッ!?!」

「…!」

すると、一瞬——。ほんの一瞬だったが、土方の攻撃が止まり隙が出来る。明久

はそこを見逃さなかった。

「うおおおおおッ！」

明久は土方に向かい咆哮してく。ほんのわずかな隙を木刀で突いていく。が、土方の素早い攻撃で体力を随分と奪われた明久の攻撃は土方には緩やかに感じ、

「…遅い。」

土方は明久の木刀を掴み、日本刀で傷をつける。

「ぐ…っ！」

土方の攻撃をギリギリで躲す明久だが、攻撃が掠ってしまいわずかに鮮血が噴きあがる。

「なかなか手こずったが、これで終わりだな…。」

気づくと明久は膝をついていた。そして体力が限界に近いのか、意識が少しずつ遠のいていく。

（ヤバい、これで実戦訓練482敗目だ。ヤベ。）

どうやら今まで自分が敗けた回数を脳内に記録していたらしい。普段頭を使わないくせに妙なところで頭を使う。

土方は刀を上に向ける。その上に向けた刃は徐々に明久に迫っていく。

（…。482敗目確定。）

そう確信したときにある少女の声が明久の耳に響く。

「吉井君ッ！」

☆☆☆

まだ僕が幼いときのことだ。

何か勝負ごとに負けて落ち込むと姉さんがよく励ましてくれたっけ…。

「アキ君、また泣いてるんですか？」

泣いている僕のところには姉さんが駆け寄ってくる。

「……………」

しかし、僕はいじけたまま下を向く。姉さんの方を向こうとしない。

この頃は今とは違い何事にも真剣で、だから何かに失敗すると、その悔しさは人一倍だった。

「アキ君、何があったか話してみてください。私が相談に乗りますよ。」

ニコリと微笑む姉さん。その微笑みに甘え僕はゆっくり口を開ける。

「実はサッカーやってたんだけどパスに失敗して皆に責められて、それで…。」

そう、ホントにこれだけのこと。こんな小さな失敗で泣いてるなんて言ったらきつとバカにされるだろう…。

しかし…。

「そうですか…。でも、失敗は誰にでもあります。アキ君だけが経験する訳じゃありません。大事なのはその失敗をどう生かすかですよ、アキ君」

姉さんは優しい表情で言う。

「じゃあ姉さんも失敗ってするの？」

姉さんは僕と違い成績優秀で他の人からの信頼も厚い。僕みたいに何か失敗するような人間には思えない。

でも、姉さんは…

「はい、ありますよ。一見完璧に見える人間も必ず欠点がありますからね。」

…姉さんは何時でも笑っていた。

僕が笑っている時、泣いている時、怒っている時…。全部。

その笑顔に僕はどれだけ助けられたんだろう…？

でも、僕はずっと忘れていたんだ。姉さんは「失敗を次にどう生かすか？」と言ったのに、僕は何故か失敗を認めてしまうようになった。気がつけば、負けるのが当たり前になっていた。

しかし、姉さんのこの言葉を思い出して失敗を繰り返す自分が悔しくてたまらなかつた。

もつと姉さんのいうことを聞いておけば良かったと後悔する…が、過ぎた時間はもう

戻ってこない。

でも、今からでも僕は…。

意識が少しずつ戻っていく。

「……」

遠のいていた意識が少しずつ戻ってきた明久。しかし、既に土方の刀はすぐ目の前まで来ていた。

「……」

明久は夢を見ていた。姉との遠い日の記憶。明久の姉、玲は既にこの世にはいない。そんな玲が常に口にしていた言葉は、

『失敗を次にどう生かすか…?』

今まで失敗を繰り返していた明久。しかし急に玲の言葉を信じてみたくなった。

しかし、土方の刃は明久の体に触れる寸前だった。

…その時…

「吉井君ッ！本気出しなさい！確かにアナタは成績も悪いし、頭も悪いけどやれば出来るはずよ！やれば出来るはずなのに、アナタはただ逃げてるだけよ！今ここでアナタの

本気を皆に証明してやりなさいッ！」

その声の主は優子だった。とても感情的になっていた。

明久はそんな優子の姿を見て、姉、玲と重なって見えた。外見も性格も表情も全然違う。でも、自分に言いたい気持ちはきつと同じなんだと思う。

そんな優子の発言に、

「フン、コイツの成績でオレには勝てない。お前も知ってるだろ？ 召喚武器の強さは点数だけでなく、使用者の覚悟の強さだつてことを…。コイツの覚悟はこの程度だつたつてことだ。」

しかし、次の瞬間…。

ドゴッ！

気づくと、土方は空中にいた。

「……!?!」

その一瞬の出来事に周りにいた訓練兵たちも驚かされる。

「何が起きたんだ!?!」

「おい、土方が浮遊してんぞ」

そして空中で受け身の取れない土方。そこに明久は飛びつき、

「うおおおおおおおおおッ！」

明久は土方をありつたけの力を込めた木刀で打撃していく。

一撃、また一撃と凄まじい速さで木刀を振るう。土方は空中で受け身がとれない上、明久の木刀の速さには追いつけない。

「ぐあああああッ」

「うおおおおおっ」

二人の叫び声が訓練所中に響き渡る。



## 謎の奇襲

「うおおおおおおおおおッ！」

二人の叫びが訓練所中に響く。

明久は止めを刺そうと木刀を勢いよく振るう。

「ぐあああッ！」

空中にいた明久と土方はようやく地面に足を付ける。

周りの訓練兵も最初はダルそうだった表情がいつの間にか真剣な表情に変わっていた。それだけこの二人がいい勝負をしていたということである。

が、明久も土方も体力は限界に近い。『召喚武器』の点数も残り少ない。

明久  
土方

古典 8点 vs 古典 5点

『召喚武器』のエネルギー源はテストの点数だ。その点数が消える、つまり0点になると『召喚武器』は実体化できず消えてしまう。

つまり明久も土方も残り一撃を与えるくらいしか点数が残っていないのである。

…この一撃が最後…

「ウオオオオオオオオオオ」

「オオオオオオオオ」

明久と土方は互いに咆哮し、刃を向ける。そして二人の間隔は零距離になり、土方は刀の刃を瞬速の速さで当てようとする。だが、明久は木刀を構えていない無防備な状態だった。それどころか躲す素振りすらない。

(…もらった!)

土方は勝ち誇った目をする。刃は徐々に振り下ろされ明久に向かってくる。

ガッ

振り下ろされた刃は明久に触れる。

(…終わったな…)

土方の勝ち誇ったような目は一層強くなる。自分が勝ったと確信したのでだろう。周りの訓練兵も戦闘が終わったかのように思わされてしまう。ただ一人を除いて…。

「いいえ、まだ終わってないわ」

声を出したのは優子だった。

その言葉に反応した土方は明久を見る。すると驚くことに明久は素手（左手）で土方の刀を受け止めていた。

当然、素手で受け止めたので明久の右手は血だらけだ。だが、明久はコレを狙ってい

たのだ。確実に最後の一撃を当てるためにわざと土方の攻撃を喰らったのだ。

「ば、バカな…!？」

土方は驚愕の表情を浮かべる。明久に刀を握られ身動きは取れない。攻撃の回避もしようがない。

「行くぞオオオオオオオッ！」

明久の木刀は勢いよく土方の腹部を突く。

腹部を強く突いたせいか、

「オボロシヤアアアアアッ！」

土方は口から液体のようなモノが出る。

(し、しまった！今朝食ったマヨネーズカツ丼が…)

「うわ、ゲロったよ…。しかもマヨネーズ臭い」

明久は正直な感想を述べる。

「テメツ！どんだけ腹部を強く突いて…オボロロロロッ」

もはや会話にならない。

周りの訓練兵は土方の姿を見て逃げ出す者もいた。クサくて。土方に好意を抱いていた女子たちもドン引きしていた。クサくて。

しかし、今のこの状況…。勝ったのは間違いない明久だ。

『臭いクサイッ!』

と文句を言う訓練兵もいれば、

『吉井が土方に勝ったぞ』

『いい試合だった』

と歓声を上げる者たちもいる。

「勝ったんだ…。」

勝った本人も信じられないという表情だった。

そして敗者の土方を哀れそうに見る3人がいた。土方の友人、沖田、近藤、山崎だった。

「近藤さん近藤さん」

「何だ? 総悟…。」

「土方さん、負けちまりましたね…。」

「というより吐いたな」

「でも、これはマヨネーズやめる良い機会ですぜ。」

「山崎はどうした?」

「ミントンしてまずぜ、ミントン。」

「というより、アレは見て見ぬ振りをしてるような…。」

「近藤さん近藤さん」

「何だ？総悟」

「マヨネーズ買って帰りましょう」

「そうだな…。」

☆☆☆

「ま…マジか…。明久が勝ったぞ?!」

明久が勝利し、真つ先に反応したのは雄二だった。

「信じられない…」

ムツツリーニも雄二と同じような反応をしていた。

「明久、お疲れなのじゃ」

「アキ、スゴイじゃない、相手にあんな汚物吐かせるなんて」

「あの、美波。褒めるトコはそこなの？」

誰もが明久と土方の勝負に感心していたのに対し美波は何故か土方に汚物を吐かせたことに対し関心を抱いていた。

(美波は頭のネジが抜けているのだろうか?)

明久はそんな気持ちを抱いてしまう。

「明久…」

「何？雄二……」

妙に真剣な表情の雄二。

「明久、勝利の記念にコレをやる。」

雄二が明久に差し出したのは食べかけのソーセージだった。

「雄二、コレって昨日喧嘩で取り合ったソーセージだね？」

妙に異臭がするソーセージだと思ったら昨日、明久と雄二が必死に取り合っていたソーセージだった。

「お前、昨日コレ欲しがっていただけろ？オレの気持ちがかもったソーセージだ。異臭はするだろうが味は本物だ。」

雄二はニヤニヤとした表情で明久に言う。明久にとっては非常に不愉快である。……ハズだが……。

「雄二、貴様アアアアアッ！ありがとう！」

明久は食べかけのソーセージに飛びつく。

「やはり食ったか。」

雄二は初めからこうなることを予想していたのだ。普段、食料のない明久にとってはこんなソーセージも御馳走である、と。

「普通なら嫌がるハズじゃが……」

「バカ丸出しね…」

秀吉と美波は哀れそうに明久を見る。

すると、明久に迫る人影があった。

「ホラ、さっさと帰るわよ！」

その人影は優子だった。

「はは、じほひははん。(ああ、木下さん)」

ソーセージを食べながら喋る明久。何を言ってるかさっぱり分からない。優子はそんな明久の姿に「ハア…」とため息をつく。が次の瞬間…。

「吉井君、傷が…。」

よく見ると、明久は体中ボロボロだった。特に腕の刀傷はひどい。今なお出血している状態だ。

(何でこんな状態で暢気にソーセージなんて食べれるのよ！)

「秀吉、アンタの召喚武器って回復関係の奴よね？吉井君を治療できる？」

「ム、済まぬ。今、ワシは点数がなくて武器は召喚できんのじゃ。」

優子は苛立った表情をし、

「ああ、もうっ！分かったわよ！吉井君、こっちに来なさい！」

「わあああっ！ちよっ、木下さん、腕痛いよっ！」

優子は明久の腕を引つ張り、去っていく。

「どうも怪しいのよね、アキと木下のヤツ…。」

美波は異様に嫉妬深い表情をする。

「何だ？ 気になるのか？」

雄二はニヤニヤと美波をからかうように言う。

「う、うるさいわねっ！ 何よ、その顔はっ!？」

何故か雄二に自分の気持ちが見透かされたように思えてならない美波。そんな美波の表情を見たムツツリー二と秀吉は、

「正直じゃない…。」

「素直じゃないの…。」

と、ムツツリー二と秀吉にも自分の気持ちが見透かれたように感じてしまう。

「ああっ！ もうっ！」

美波は複雑そうな表情で怒鳴る。

---

訓練所の治療室。ここで明久は優子に傷の手当てをしてもらっていた。

「はい、これで良し。」

「イヤ。ありがとう。木下さん。」



まったく感謝のこもっていないお礼を言う明久。優子はムツとし、

「アナタ、ホント無茶するわね。アナタはちゃんと監視しないとダメということが分かったわ」

優子に注意され「ははは」と苦笑する明久。…そして…

「木下さん、さつきはありがとう。」

「え？」

さつきと違い、明久の礼の言葉には感謝が感じられた。急にそんなお礼をされ優子は不意にドキツとする。

「あの時、木下さんが呼びかけてくれなきゃ僕はきつと負けていたよ。」

「…確かに呼びかけたわ。何かイライラしてたから、つい…ね。でも、アレは吉井くんの実力でしょ」

あの勝負で何とか勝てたのは優子の叫び声でも何でも無い、明久の実力で勝ち取ったものだと優子は感じたのだろう。しかし、明久は首を振り、

「違う。木下さんのあの言葉で僕は思い出したんだ、あの言葉を…。姉さんの言葉を。あの言葉が僕に力を与えた。だから、ありがとう木下さん」

素直に感謝され不意に赤面する優子。

「ま、まあ私はアナタの監視役だし…。その…まあ、何というか…」

優子はぎこちなく喋る。

しかし、その表情はすぐに変わる。直に変わってしまう理由があった。

ドンッ!

優子の体に重たい圧力がかかる。

(…コレは殺気!?)

しかし、明久はそんな殺気を感じてる様子はない。ということは優子に向けられた殺気ということになる。

「吉井君、訓練所から出ないでね!絶対よ!」

そう言い残して優子は去ってしまう。

「あ、ちよつと優子さん!」

明久が声を上げた時には、優子の姿はなかった。

☆☆☆

(あの殺気は一体…)

優子は疾風のごとく王都の街を走り抜け、王都の外れにある森の中へと入る。殺気の発する場所へと駆ける。

既に空が暗くなる前だ。森の中はそんな空を一層暗くしているようにも見える。

すると、森の奥からキラツと光るモノが見える。  
ヒュンツ！

何か金属製のモノが飛んでくる。優子はそれを軽々躲す。

(……これはクナイ?)

すると、そのクナイは数百本単位で飛んでくる。

「……！」

流石にこの数では優子でも簡単には躲せない。

「試験召喚……サモン！」

優子は『召喚武器』を召喚する。

優子が召喚したのは紅い刃を持った日本刀。その日本刀の刃が紅いように優子の瞳も紅くなる。

「妖刀……『鬼切』(おにきり)……！」

優子が召喚した武器は嘗て源満仲(みなもとの・みつなか)が鬼を斬ったという伝説を持つ源氏の宝刀だった。

「……行くわよ……」

優子は紅く輝く刀を構える。そして複数本ものクナイを斬り捨てていく。

## 黒尽くめの男

『鬼切』（おにきり）……。源氏の宝刀『蜘蛛切』（くもきり）と並ぶ鬼殺しの刀である。刃は紅く染まり、それに釣られるかのように優子の瞳も紅く、美しい火眼となっている。

『召喚武器』は下級騎士クラスだと明久みたく、木刀のようなモノしか召喚されないが、優子みたく、国家騎士レベルになると、神話の英雄が使っていたような聖剣、魔剣のような武器の使用も可能である。

「……。」

ヒュンヒュンと高音を立てながら何十本にもわたるクナイが優子を襲おうとしている。しかし、優子はその攻撃を簡単に刀で弾いてしまう。

そしてクナイが飛ぶ高音は止まり、優子の刀もピタと止まる。森の奥から黒い人影が見える。

「ホウ、全て躲したか……。流石は第三国家騎士、木下優子と言うべきか……。優子をバカにするような態度で喋る。」

全身を黒い衣服で包み、顔は仮面で隠され、黒いフードをかぶっている。

「アナタは何者なの？敵の軍兵なの？」

優子は焦りを見せず、冷静な態度で質疑する。

「いいや、違う。オレはこの王都の騎士兵だ。」

「どういうことか、説明してもらおうかしら？」

優子は黒尽くめの男に刃を向ける。この男はどう見ても怪しい、と判断したのだ。

「フ…。オレに刃を向けるか。」

「私に殺気を向けたのはアナタでしょ？」

「国家騎士の力がどんなものなのか知りたくてな…。」

男はそう言い、今度は西洋剣を召喚する。事情さえ話せば見逃そうと思った優子だが、自分に刃を向けてくるのであれば仕方がない…。とため息をつく。

「国家騎士の実力がどんなものかその身で知ることね。」

優子は左足に力を入れ、一気に前へ走り出し、加速していく。しかし、その男は優子の瞬速的速さを見ても動じることなく、静止した状態で立っていた。

（此処よ！）

優子は相手の急所に刃を向ける。『鬼切』の紅い刃は徐々に相手の体に迫っていく。

「――！」

一瞬だった…。優子が狙っていたハズの黒尽くめの男は目の前にいなかった。

「う……そ……？」

国家騎士である優子が相手の気配に感づかないというのはあり得ないことだ。すると、後ろからヒュンという高音が聞こえる。

「……！」

優子は瞬時に後ろを向き、後ろから聞こえたその『高音』のモノを刀で弾く。弾いたものは西洋剣。そこには相手の姿があつた。

「ホウ、今の動きをよく見きつたな。」

黒尽くめの男は優子をからかうように言う。

（ウソでしょ！今の攻撃は速すぎる！）

そんな気持ちを抱きながらも優子は刀を握り素早い太刀で相手を斬り捨てる……が、しかし。

ギイイイイイン

優子の刀に衝撃が走る。

「……コレは……!?!」

優子の攻撃を弾いたのは黒尽くめの男が持つ西洋剣ではなかった。彼がとつさに召喚したのは盾。

それも、普通の盾ではない。

「コレは『アイギス』!?!」

黒尽くめが召喚した盾、『アイギス』。ギリシャ神話ゼウスの盾であり、恐ろしいほどの魔力を蓄えていると言われる。

こんなモノは国家騎士レベルにでもならなければ召喚できない武器である。

「アナタ、一体…!?!」

優子は黒尽くめに正体を問いかけるが、男は「ふっ」と口をならし、

「今日はここまでにしておこう…。だが、お前はいずれ殺す。必ずな…。」

男はそう言い残り暗い森の闇の中へと消える。

「何だったの、一体…。」

優子は男に疑問をもったまま、暗い森を抜けていく。

☆☆☆

既に夜の八時くらい。優子は明久のいる訓練所へと向かう。

(確か保健室にいるはず…。)

保健室のドアを開けると、明久はスヤスヤと寝ていた。

「まったたく、こんなところで寝て…。」

しかし、優子はそう言いつつも明久の寝顔をジッと見つめる。彼は精神的にも幼さを

感じるが、寝顔にまでその特徴が表れていた。

しかし、普段感じる精神的な幼さは優子をイライラするようなものばかりだが、寝顔から感じる幼さは何処か小動物を見ているようだった。

「寝ている時は可愛いのにね…」

優子は小さくクスツと笑う。そのとき…

「あ、木下さん。何だ戻っていたの…」

「ひゃあつ！」

明久がムクツと起き、不意に小さな叫び声を洩らす。

「な、何だ…。起きてるんなら言いなさいよね！」

「い、イヤ。今起きたとこだけど…。」

優子の態度にやや戸惑う明久だが

「さーて、帰ろう。もう夜じゃん。」

「そうね…。」

そう言つて二人は訓練所を抜け、自宅へと帰る。

「そういえばさ、木下さんて秀吉のお姉さんだよね…」

「そうだけど、それが何？」

「普段、家にいるときは秀吉と何か喋ったりするの？」



「しないわよ。そもそも私は家族を離れ、一人暮らしだったからね」  
「……」

「どうしたの？」

明久が難しい表情をする。

（ホントに一人暮らしなんてしてたのだろうか？木下さん料理出来なかったけど、そんなんでどうやって生活を送ってたんだろう……？外食かな）

そんなことを考える明久だが、まともな食事をとっていない明久がどうこう言える立場でもない。

「吉井君も一人暮らしみたいだけど、家族はどうしてるの？」

すると、明久は急に表情を変える。何処か寂しげな表情だ。

「……いないよ……」

「いない？」

優子は明久の言っていることがよく理解できなかったせいか、明久に聞き返す。

「もう、皆死んだよ。父さんも母さんも姉さんも。」

「……え……？」

優子は聞いてはいけないうこと聞いてしまった気がした。普段、能天気な彼が妙に沈んだ態度をするので余計済まなく思ってしまう。

「ごめんなさい、聞いちゃいけないことだったわね」

優子は自分の行動に対して明久に謝罪する。

「いいや、いいんだ。もう過ぎたことだし…。それに父さんと母さんが死んだのは僕が幼い時だからよくは覚えていないんだ。両親が死んでからは姉さんがいろいろしてくれたけど…。まあ、何ていうか姉さんが死んだときのことは確かにいろいろ傷だったけど、それももう過ぎたことだし…。」

「…そっか」

無理やり笑顔を作り、喋る明久に優子はそう答えるしかなかった。

そのとき優子は思った。まだ、彼と出会い、間もないが彼はきつと自分の弱みを人に見せたくないだろうと思った。

彼は自分がどんなに苦しいときであっても、笑顔を絶やささない。それが明久の『強さ』なんだと知る。しかし、それは誰にも自分の弱みを話せないという『弱さ』でもある。

普段はだらしな上に物分りも悪くて、人に迷惑ばかりかける明久だが、そんな彼の傍にいてあげたい…。そう思った瞬間だった。

☆☆☆

優子の『明久監視任務』が始まり約二週間が経つ…。

その頃、王宮では…

「どうだい？この二週間であのバカの世話は慣れたかい？」

カロール二世はカツカレーをガツガツ食べながら優子に質問する。ちなみに七杯目だ。

「はい。まあ…。」

優子は少し引いたような目で答える。カロール二世の行動が不可解だったのだろう。

「んで、今はあのバカは学校か？」

「はい、そうですが…。」

「…監視任務を頼んでるアンタにこんなことを言うのは失礼かもしれないが…。」

カロール二世は少し思い悩んだような表情だ。

「どうかされたんですか？」

「ああ、実は…。」

いつも以上に真剣な表情…。きつと王宮で何かあったに違いない、と優子は判断する。

「娘の…娘の瑞希がいなくなっちゃった…。」

「……ハ？」

優子は呆けたような声を出す。

瑞希とはヒメージ三世のことである。カフォル二世の娘…ということになってるが…。実は姪（めい）である。ヒメージ三世の両親は当然、カフォル二世と同じ皇族なのだ。彼女が幼い時に他界。それからカフォル二世が母親となってるらしいのだが…。

「不覚…。コレが反抗期というヤツか…。」

カフォル二世は再びカレーを食べ始める。ちなみに十杯目だ。

しかし、優子はイマイチ状況が呑み込めていなかった。

「あの、要するに家出ですか？」

「ああ、家出さ。ありや、間違いないよ、反抗期だ。」

「その家出の原因ってなんですか？」

「ん？ああ、マツクのダブルチーズバーガーをアイツの分まで食ったら喧嘩になって、それで家出さ。困るね、最近の若い者は…。年寄りのいうことも聞いた方が得するっていうのに…。」

優子は事情を聞き、

（何で私がわざわざこんな親子関係に巻き込まれなきゃいけないのよ…）

と呆れたような目でカフォル二世を見る。

「既に、瑞希の側近の霧島は探しに行ってる。お前も早く探しに行くんだ。」

「はい…。」

優子はイヤイヤながらも返事する。

## 姫探し

「…どういうことか説明してもらおうか…?」

西村教官は強張った声で二人の訓練兵に問い詰める。すると、

「コイツが悪いんです」

同時に全く同じセリフを吐き、指を指しあう。お互い自分の誤ちを認めない気だ。

「お前らは子供か。何をどうしたらトイレがこんなコーラまみれなのかを教えろ」

西村教官の表情は徐々に険しくなっていく。

「いえ、違うんですよ。僕と雄二がここでゲーム（PSP）やってたんですけど、雄二が自分のPSPが壊れたとかで僕のPSPを無理やり奪おうとしたんですよ。そして最終的にこのバカがコーラをぶっかけてきたんです。あともう少しでイビルジョーを倒せたんですよ、クソツッ!」

すると、隣にいた雄二が明久を否定するように、

「いえ、全くの嘘です。明久は妄想癖の強い男なんで…。確かにオレはPSPが壊れましたがそれはコイツがぶっ壊したのであって、オレはそれに相応しい罰を与えようとしただけです。全くの無実です。」

すると、明久は納得のいかない顔で、

「雄二、貴様、被害者の面して逃げようたってそうはいかないぞ！」

「やかましいッ！テメーがP S P壊さなきやこんなことにはなんなかつたんだよ！」

ギャーギャー言い争う明久と雄二。

ゴスッ！

二人の顔に西村教官は思いつきり正拳突きをする。

「二人とも此処を綺麗にするまでは絶対に出るな。出来なかつたら鼻フックで背負い投げだ。鬼の補習よりも恐ろしいものを見せてやる。それが嫌ならちゃんと綺麗にしておけばカ共！」

鼻フックの背負い投げとは鼻の穴に二本の指を入れ、その指に力を入れた状態で相手投げ飛ばす必殺技だ。多くの生徒は鬼の補習よりも恐ろしいと言われている。

西村教官はそう言い残し明久達の前から去る。

「な…何で…」

「(こんな)とに…」

明久と雄二は無言で清掃用具を取り出し、掃除に専念する。

「そう言えば明久と雄二がいないの？」

「あ、そういうばそうね…。」

今の時間は講習の時間なので講習に出席していない明久と雄二に疑問を持つ秀吉と美波。

「明久達なら鉄人にシバかれている…。」

会話にヌウツと入り込むムツツリーニにびっくりしたのか美波は

「う…うわツ！つ、土屋!?!びっくりしたア〜」

と声を上げる。どうやら影が少し薄いようだ…。

「さつきまで明久達とゲームしてたが、鉄人の気配にいち早く気付いて…」

「二人を置いて逃げてきたのじゃな…」

秀吉の説明の補足にムツツリーニはコクコクと頷く。

「要するに二人を見捨てたのね…。」

さらに美波が説明を補足し、それにも素直に肯定する。

今はちようど休み時間で周りの訓練兵も互いに喋りあってザワザワしている。しかし、急に教室のざわつきが静まる。

「よ…い…しよー!」

窓から姫姿の少女が入り込んでくる。桜色の髪に高価そうなドレス。訓練兵全員その少女に視線を集める。少女は少し戸惑っているようだったが、ニコツと微笑み、



「こんにちは」

と一礼する。

そんな静まった空気の中に、

「ハア、疲れた…。」

「やっと終わったぜ…。」

掃除を終えた明久と雄二が部屋に入り込んでくる。すると、少女はパアツと目を輝かせ、明久に飛びつく。

「明久君ッ！」

「へ…？」

いきなり飛びつかれた明久は何が起きたか分からない、そんな顔をする。

☆☆☆

その頃、優子は王都の街中を回り、カヲール二世の娘、正確には姪のヒメージ三世を探した。

しかし、探してもそれらしき人物は見つからない。派手な髪の色に服装をしているので、探すのにそんな手間はかからないはずなのだが…。

「…いない…。」

優子は王都のざわついた商店街の中を歩く。そんな中、漆黒の長い髪の子を見かける。

(アレって……)

優子は迷わずその少女に話しかける。

「霧島さん。」

優子の声に気付いたのか、その黒髪の子は優子の方を向く。

「…優子…何してるの?」

「霧島さんと同じ。陛下からお姫様を探せって命令されたんだけど、みつかった?」

すると、その少女は首を振る。

優子は「そっか」と頷く。

彼女の名前は霧島翔子。優子と同じ国家騎士で第二国家騎士という実力を持つ。つまり、第三国家騎士の優子よりも実力的に上ということである。さらに彼女は姫の側近を務めている。

「後はどこを探せばいいんだろ?」

真剣に悩む。すると翔子は少し不安そうな顔をする。

「優子、私、妙な男にあって…」

「妙な男?」

優子は何ソレ?と聞く。

「全身黒尽くめで仮面被ってる男だった。」

「…それって…!」

そう、優子はその男を知っている。ソイツは急に襲ってきて国家騎士レベルにならないと召喚できないゼウスの盾『アイギス』を召喚していた。

「結構強かった…。苦戦したくらい。」

「霧島さんが…苦戦…」

翔子も苦戦するほどの強敵。それにあの男はフミツキに住まう者と言っていた。なおさら誰なのか気になる。

そもそも翔子がよりも強い者となると、第一国家騎士もしくは王族の者くらいしかない。

しかし、今は優子も翔子もお互いに姫を探している途中だ。

「霧島さん、その話はあとにしよ?今はヒメージ三世を探さないと」

「うん…。」

「でも、その前に寄りたいたいところあるんだけど、いい?」

「何処に行くの?」

「え…と、訓練所。」

そう、優子は『吉井明久監視任務』がある。いくら姫様を探さなきゃいけない状態とはいえ、そつちも放っておくわけにはいかない。

翔子は「うん、わかった」と言い、二人は訓練所に向かう。

そして、訓練所に着き、中に入ると優子はとんでもない光景を目にする。

「何これ……？」

なんと、優子と翔子が探していたヒメージ三世が訓練所にいた。さらには明久に抱き付いている。

上手く状況がつかめなかった。

☆☆☆

いきなり姫姿のその少女は明久に飛びつく。明久はどうしていいか分からない、戸惑った表情だ。

「ちよ……ちよ、君は誰？」

どうやらまったく見覚えがないらしい。すると、少女は

「覚えてないのも無理ありません。でも、私はアナタのことを覚えています。」

ニコツと微笑みながら言う。

すると……。

『おい、コラー！吉井、貴様は俺達の知らないところで彼女なんて作ってたのか、裏切者！』  
『こんな可愛い女の子と知り合いとはどういうことだ、裏切者ッ！』

『モテない男イコール吉井明久だと思ってたのに、裏切者!!』

男子訓練兵は明久に殺気を向けてく。何故か全員「裏切者」扱いにしている。

「ま、まって！知らない、僕は知らないってば！」

必死に弁解しようとするが既にそんな状況ではない。

「明久、まさかお前に『人生の転換点』（じんせいのターニングポイント）が来るとは……」

「暢気なこと言つてないで、助けてよ、雄二！」

しかし、この男は人の不幸を喜ぶ男だ。助けを求めるだけ無駄である。

「……明久……今なら死刑三回程度で罪は免れる。」

「……ムツツリーニ、人間は一回死んだら終わりだよ……」

雄二、秀吉以外のほとんどの男子が殺気が漲った状態だ。そんな中に何故か一人女子が紛れ込んでいた。

「アキ、今なら足の骨を折るだけで勘弁してあげるわ……」

唯一、女子は美波だけが明久に殺気を向ける。

（ヤバイ……）

しかし、明久はさらに窮地に立たされる。

「吉井君、何してるのかしら」

後ろを振り向くと、優子が今までにないほどの満面の笑みで立っていた。  
「…き、木下さん…!?!」

## ヒメージ三世

「吉井君、何をしているのかしら？」

「き、木下さん!？」

優子は今までにない満面の笑みを浮かべている。しかし、表情とは裏腹に殺気を感じる。

(マズイ、とんでもないところを見られた…。)

監視役である優子に下手な嘘をついて言い逃れは出来ない。そこで明久は考える。

(言い逃れが出来ないということは言葉では逃れることが出来ないということ…なら…!)

明久は自分に抱き付くピンク髪の少女を振り払い、部屋を抜ける。

「あ、ちよつと待ちなさい！」

優子は明久を止めようとするが既に明久の姿はなかった。明久はすでに訓練所の外に出ていた。

(言葉で逃れることが出来ないなら、体使って逃げるしかない…!)

つまり、逃亡である。明久はそのまま家に帰ろうとするが…。

「吉井……」

後ろから野太い声が聞こえる。

「……この声は……」

ゆっくり後ろを向く。そこには鬼のような形相で西村教官が立っていた。

「て……鉄人……ッ！」

「トイレ汚した次は無断で早退か……？」

西村教官はポキポキと指の関節を慣らしている。間違いない。戦闘モードに入りかかっている。こんな状態で「はい、早退します」なんて言える状況ではない。かと言って「いいえ、違います」と言っても否定材料が思いつかない……なら……。

「さらばだ、鉄人。卒業式にまた会おう。」

ちよつとキザっぽく言ってみる。

（さーて、帰って新しく買ったエロ本でも読もうかな……）

と鼻を鳴らしながら歩くと……。

ドドドドドドドドドドドドドドッ！

後ろから物凄い騒音が聞こえる。まるでマシンガンの弾丸がこちらに近づいているような音だ。

「吉井イーーーーーッ！！」



「ぎゃあああああああッ！化け物オオオッ！」

二時間後――。

明久は体中ボロボロの状態で正座をさせられていた。服はビリビリに破け、上半身はほぼ裸に近い状態に、下半身は尻が丸出しの状態である。この恰好は極めて変態に近い――。というより変態だ。

「その、ホントすみませんでした。」

明久は目の前に立つ西村教官と優子に土下座する。

「吉井、貴様にはとっておきのプレゼントを与えなくてはな……。」

「……」

明久は鉄人から目を背ける。こんなことを言うということは間違いなく鬼の補習を受けることになるのだろう……。

すると、明久は優子と目が合う。

「本来ならアナタには罰を受けてもらうところなんだけど……。」

優子は戸惑いの表情を見せる。何か言いにくそうな感じだ。

「あそこにいるピンク髪の子、みえるでしょ？」

「あー、うん。」

「実はあの方はカール二世の娘のヒメージ三世よ。」

「……は？」

明久は呆けたような声を出す。

（ちよつと待てよ、あんな可愛い娘の母親があんな戦国時代に生きてそんな老いぼれだって!?)

明久は何かの間違いだ、と考える。

「とにかく、アナタには私と一緒にヒメージ三世を王宮に返すのを手伝ってほしいのよ。」

「えー……」

（何で僕が……）

しかし、口答えしたら間違いなく肅清されると思い、渋々承諾する。

「雄二……」

「しよ……翔子……な、なんでお前が此処にイイイイ!？」

雄二はいきなり証拠に顔を掴まれる。流石、国家騎士と言うべきか……。握力がとんでもなく強い。

「雄二、しばらく会ってない間に浮気…してない？」

「してないとも言切れない。」

すると、翔子の顔は鬼のようになり、

「何時、何処で、誰と…!？」

「してね…エえええええッ！ちよつと見栄を張っただけだ！」

「それなら良いけど…。」

翔子はパツと雄二の顔を解放する。

「し、死ぬかと思った…。」

雄二が息を荒くさせながら言う。翔子には冗談が通じないと嘆息する。

すると、近くにいた美波が

「坂本って霧島さんと知り合いだったの？」

「ああ、まあな…。」

雄二と翔子は幼い頃から知り合いである。翔子は何でも出来る秀才な上に容姿端麗とこの上ない魅力的な女性なのだが、雄二が他の女子と仲良くすると、嫉妬するせいかな雄二に折檻するというような行為に出る。彼女のそんな行為に雄二は昔から悩まされていた。

「それよりも、この子をどうするんだ？翔子。お前の知り合いか？」

「うん、カヲール二世の娘…姫君のヒメージ三世…。」

すると、その場にいた雄二、美波、ムツツリー二、秀吉は

「ええええええええッ!」

と声を上げる。

「ど、そうするのじゃ?」

「イヤ、そもそも何でこんな所に…。」

「…緊急事態…」

「このまま放っておいたらヤバくない?」

四人は真剣に事態は深刻と判断する。しかし、ヒメージ三世はそんな四人の考えも知らずに、

「何のお話をしているんですか?」

と暢気そうに聞いてくる。本人は今自分が置かれている状況を理解していない。

そんなとき、明久と優子の姿が見える。

「あ、吉井君ツ!」

ヒメージ三世は明久の方へ駆ける。すると、明久の手を取り、何処か他の場へと移動しようとする。

そんな姫君の姿を見た優子は、

「あ、姫様。陛下は姫様を心配してらしてました。早く王宮に戻られ下さい。」

しかし、ヒメージ三世は必死に説得しようとする優子を見無視し、明久を連れて何処かに行ってしまう。

「行っちゃったぞ…?」

「……」

「あ、姉上…?」

優子は怒り抑え込むように拳を握りしめる。

(なんで私が親子喧嘩のためにここまでしなきゃいけないのよ!?)

「あのバカ姫を追うわ…。」

優子の表情があまりにも怖かったのか一同、無言で頷く。すると…

「何してるの…?あなた達も来るのよ。」

「ゆ…優子。」

優子の態度に戸惑いを見せる翔子。それに続き秀吉が、

「姉上、ワシらはまだ次の時間も講習が…」

「問答無用ッ!」

優子の仕事に全員付き合わされることになる。

「ちよつと、君、どこに行く気？王宮に戻らないとババ……じゃない、お母さん悲しむよ……」

明久は自分の手を引つ張る少女、ヒメージ三世に問いかけるが、

「あんなところ帰りたくはありません。」

と素つ気なく答える。

（たしか木下さんが言うにはババアがこの子の分のご飯を勝手に食べて怒った彼女は家出したとか……）

しかし、そんな程度で家出するなんて……と明久はヒメージ三世に疑いの目を向ける。

その視線に気づいたヒメージ三世は、

「どうかしましたか？」

と、少し戸惑いの顔で明久の顔を覗き込む。

「い、イヤ……。その……何で家出したのかな……って……」

明久は「何で家出なんてしたの？」とストレートに聞くのは良くないと思い、敢えて間接的に質問する。

ヒメージ三世は下を俯き、

「私だつてホントはこんなことするのは良くないつて分かつてます」

「そうだね……」

そんなことは小さい子供でも分かりそうなことだね、と明久は頷く。

「でも、どうしても確かめたかったんです。」

「何を……？」

「お母さんがホントに私を大切に思ってくれてるかです……。」

すると、明久は「え？」と声を上げる。

「そ、それは思ってくれてるんじゃないかな？ 母親なんだし……」

明久は彼女の質問にどう答えればいいか分からず曖昧に答える。

「私だってそう思いたいです。でも、あの人はいつも仕事ばかりで……。それは分かっています。フミツキを代表する王女だから、忙しい……っていうのも……。でも、お母様は今まで私に真面に目を傾けてくれませんでした。だから、こうして家を出れば、多少は心配してくれるのかと思っただけです……。そうでもないみたいですね……。」

明久は彼女に何をどう言い返せばいいのか分からなかった。

明久は幼いころに両親を失い、それからは姉が母親代わりとなり明久を育てた。しかし、その姉ももういない。だから、家族というモノが何なのかよく分からない明久には彼女の悩みを解消させる言葉がない。

「……」

明久はただ彼女の横顔をジッと見つめることしかできなかった。

何か言って元気づけたくても、自分にそんな力は……と非力ささえ感じてしまう。

## 王族暗殺集団

「いないわね…。」

優子、翔子、雄二、美波、秀吉、ムッツリーニの六人は王都の城下町にある商店街を歩いてきた…が、明久とヒメージ三世の姿はどこにもない。

「アキのヤツ、見つけたらたっぷりと可愛がらないとね」

美波からは黒いオーラに指の関節を慣らす音。そんな美波を見る男子三人組（秀吉、雄二、ムッツリーニ）は美波から危険な雰囲気を感じるため距離をとる。

「優子…。」

「分かってるわ。霧島さん。ここはもう探しても無理そうね…。」

優子は「ハア…」と大きく溜め息をつく。

（何で、こう毎日毎日、陛下の都合に合わせなきゃいけないのかしら…。）

優子は『明久監視任務』に就いてから、よくカヲール二世に買い物を頼まれたり、暇だから物まねをしてくれと頼まれたり、終いには娘を探してくれと頼まれる。

その前まではもつと国家騎士らしい敵の暗殺部隊の殲滅など大きな任務を任されたりしてたのだが、今はどちらかというところと召使のような扱いをされている。そう思うと異



様に腹が立つ。

「なあ……」

「何よ!?!」

雄二が優子に喋りかける。しかし、優子は機嫌が悪いためつい怒鳴ってしまふ。

「オレが思うにはだが、人の多いところにはアイツらしいんじゃないか……?」

そんな雄二の発言に優子は目を細める。

「何でそう思うの?」

「イヤ、流石にあの天然な姫君でもこんな場所に來たらきつと目立つだろ? だから、もうちよい人がいないところにいるんじゃないかと思うんだが……」

雄二の発言に優子は「あ、そっか」と頷く。

普段の優子ならこんな単純な考えにすぐに気づくハズなのだが、何故自分が親子喧嘩に巻き込まれなければいけないのか? ということに腹が立って、明らかに冷静さを失っていた。

しかし、冷静になつて考えればそうだ。王族の者がこんな人がたくさんいる商店街を歩けば間違いない目立つ。

優子はその前までは人がいるところに姫君が紛れ込んできると思っていたが、それは大きな勘違いだ。仮に紛れこんだとしても、人々に注目を集める。その注目の視線に、あ

の精神面が弱そうな姫君が耐えられるはずもない。そう考えると、人がいない場所にいと考えるのが妥当だ。

それにしても、訓練所を見る限り頭の回らないバカばかりと思っていた優子だが、雄二みたく、少しは頭の回る人物がいるのだと、納得する。

「じゃあ、今度は人気（ひとけ）がないとこ探すわよ！」  
と優子が指揮を執る。

「……」

ヒメージ三世は明久に何か自分を元気づけてくれ、と言わんばかりの表情をする。

「……」

しかし、明久には彼女を元気づけるほど大層な言葉が思いつかない。

家族のいない明久には親子喧嘩の理由なんて分からない。彼女が何に思い悩まされているのかも。会話は止まり、暫くこの沈黙の時間が続く。明久は少しでも和ませようと、

「そ、そうだ…。僕、何か飲み物買ってくるからそこで待ってて。」

「は…は…」

そう言い、明久はその場を去ってしまふ。ヒメージ三世は「ハア…」とため息をつき、ぼんやり空を眺める。空は曇り空で暗い雰囲気を出していた。ヒメージ三世の胸中もそれに近いモノだった。

誰もいない公園で一人ポツンと座るヒメージ三世の姿はどこか寂しげだった。

そんなとき…。

「やっと思つきましたよ、姫君。」

現れたのはカヲール二世の側近、竹原だった。

「王女も心配されています。一緒に帰りましょう。」

竹原はニコと笑い、ヒメージ三世に手を差し出す。

「……？」

何かがおかしかった。竹原は普段無表情でこんな風には笑わない。その上、眼鏡が違う。竹原が普段かけてるメガネはいかにも老人がかけてそうな地味なメガネだが、今の目の前にいる竹原がかけてるメガネは若い世代がかけてそうなメガネである。それに気のせいか、笑顔とは裏腹にヒメージ三世には竹原から殺気らしき鬨気を感じる。

「あ、アナタは誰ですか……？」

すると、竹原の笑みは一層強くなり、

「忘れてしまわれたのですか？ 私は陛下の側近の竹原ですよ？」

すると、竹原は懐からナイフを出す。

「死ねええええええッ！」

その頃、王宮では…。

「…瑞希のヤツ帰って来ないね…」

カヲール二世は暢気そうにバナナを食べている。カヲール二世の周りはバナナの皮で汚い。

「ゴリ…じゃない、陛下。」

「なんだい、お前遅かったな…。てか、お前、私がバナナ食べてるからってゴリラって言うおうとしたら？」

目の前にいたのは竹原だった。

「敵の暗殺集団は殲滅したのか？」

「ええ…まあ…」

竹原はカヲール二世の質問に肯定する。竹原はフミツキ内にいる『王族暗殺集団』の殲滅に当たっていた。

「一人だけ逃がしてしまいました…」

すると、バナナを食べていたカヲール二世の手は止まり、  
「ああつ!?何やってるんだ!?お前!」

カヲール二世は思いつきり竹原に怒鳴る。すると竹原は、  
「うっせ、ハゲ」

竹原は素っ気なく言い返し、横を向く。

「バカ野郎!ハゲでもいい!外には一般人、それに瑞希もいるんだぞ!?お前は、もうダメだ、ホントにダメだわ!」

ダメだしばかりするカヲール二世にキレた竹原は、

「バナナ食ってるヤツに言われたくねーぞ、コラ」

と言い返す。確かに、バナナ食って何もしてないヤツにダメだしされたら誰でも怒る  
…が、今はそんな暢気なこともいつてられない。『王族暗殺集団』は竹原の手でほぼ殲滅  
されたものの、一人はこの王都の中に紛れ込んでいる。それはつまり、今、王宮にいな  
い家出中のヒメージ三世は狙われる可能性は十分にある。

「それと厄介なのは敵のその最後の一人が召喚した武器は『鏡の姿』(ミラー・シェイプ)。  
相手の姿をそっくりそのままの姿に変身する武器です。」

「つまり、敵はお前そっくりの姿をしているわけだ…!」

王宮内は焦りに包まれる。





「明久君……」

急にヒメージ三世が青ざめた顔で明久を呼ぶ。

「な、何？」

「あの服、見てください……。」

見ると、男が来ている黒いパーカーには何かマーク、模様がついていた。王の冠、その上にバツ印がついていた。

「これは、つまりこういうことを表す。」

『王族の者を殺す』

「おそらく、『王族暗殺集団』の一人です」

「王族暗殺集団……」

明久も王を暗殺する集団くらいには名前を聞いていた。

「でも、彼はその中でも最も危険に思われます。」

「な、なんで？」

「彼の頬を見てください」

見てみると、頬には『頭』という文字が刻まれていた。

「頭……？」

「アレは『頭』（かしら）……。つまりは、『王族暗殺集団』の頂点、つまりリーダーを意味





## 親子

「王族暗殺集団の…トップだって!？」

明久は息を飲む。よりによって自分の目の前にいるのが何故暗殺者なんだ!?!と驚愕の行状を出さずにはいられない。

「んで、そこにいる坊主…。」

サングラスをかけた男はジツと明久を見つめる。

「オレはそこにいる王女様を手つ取り早く殺したいんだが、お前が退くというなら特別お前は見逃してやる。だが、お前が抵抗するということなら、お前も殺すがどうする…?」

その言葉に明久は困惑の表情を浮かべる。その表情を見た姫路は、

(明久君を巻き込んではいけない…。ここは…。)

と、明久を巻き込まないためにヒメージ三世は自ら自身の命を敵に差し出すことを決心する。しかし…。

ドギヤあああッ!

明久は男に思いつきり木刀を振るう。

「ブツヒイヒイヒイ」

豚みたいな声を上げて、男は巨体な身体が吹っ飛ぶ。

「悪いけど、僕は誰かを見捨てるなんてことは出来ない。」

明久は逃げるのではなく、戦う…。ヒメージ三世を守る道を選んだということである。

「そうかい、交渉決裂って訳だ。」

男は懐から金属バッドを取り出す。

「『召喚武器』を使わないの？」

「フン、オレの召喚武器は戦闘向きじゃないんだよ。お前みたいなガキにはこれで十分だ！」

男はブンツと勢いよくバッドを振るう。がモーションが大きいせいか、明久にはこんな攻撃屁でもない。以前、戦った相手、土方の方が攻撃の速度は圧倒的に速い。

つまり、王族暗殺集団は威勢が良いのは名前だけで戦闘力的には下級騎士並のモノである。

しかし、それでも彼らの名前は王都中に響き渡っていた。しかし、圧倒的な戦闘力得名を響かせたのではない。彼らの殺人方法は毒殺、寝込みを襲うなどいかにも陰湿なやり方で殺すのである。

しかし、一対一（サシ）の勝負では下級騎士レベルの戦闘力しか持っていない。

「うおおおおおおおッ！」

「あああああああッ！」

明久とサングラスの男は絶叫する。

サングラスの男が金属バッドで明久の急所を狙う。しかし、明久はその金属バッドを素手で受け止める。

「な…ッ」

金属バッドを封じられた男には攻撃手段がない。

「うオオオオオオオッ！」

明久は男の股間に木刀を思いっきり命中させる。

「ぐあああああああッ」

絶叫した後には男は静かに地面に突き、倒れる。

---

もう、随分前のことである。

ある一人の少女が知る世界は常に王宮の中で、外の世界を全く知らない。そんな彼女が母親と初めて城下町を歩いた時のことだ。

彼女はピンク色と目立つ髪に、王女が着るドレスととても目立ち、周りの視線はその

少女に集中していた。

そこで母親は大事な用があるとのこと、ここの公園の子供達と一緒に遊んで待つてなさいと言う。

そうして母親は去ってしまう。しかし、困ったことに少女は外の人間とどう接すればいいか分からない。

子供たちはとても無邪気に遊んでいる。しかし、人との接し方が分からない彼女はただそれを眺めていることしかできない。

『おい、明久。パスいったぞ!』

『え? パス? パスポート?』

『違いよ、ボールのパスだボケ!』

少女は思った。自分もあの中に入れるなら普通の子供として生まれたかったと…。こんな王族という権力とかはいらない。ただあの中に入りたい。

そんなときボールが彼女の下に転がってくる。ボールを追いかけてきた少年は少女と目が合う。少年はあまり見かけない姿なせい、その少女を見て目を丸くさせるが、すぐにその表情は消えて、

「君も一緒に遊ばない?」

と笑顔で話しかけてきた。

少女は心の中がパアアツと晴れた感覚がした。どの子供たちも自分の姿を見て引け目を感じていた者たちが多かったのにこの少年だけが唯一自分に手を差し伸ばしてきた。

「…うん…」

少女はゆっくり返事しする。

これがヒメージ三世が初めて明久と会った話である。

「怪我はない？」

「はい、いろいろ巻き込んですみません。」

「いや、君に怪我がなくて良かったよ」

明久はニコリと微笑む。

その微笑みを見たヒメージ三世は思った。初めて会ったときもこの少年はこんな微笑みを放っていたな…そんな記憶がふと甦る。

「吉井君ッ！」

「き、木下さん!?!」

「ってコレ…。」

優子はたどり着いて一番最初に目にしたのは明久にやられたサングラス男である。

「吉井君が倒したの？」

「う、うん。まあ」

優子が妙に真剣な表情だったので、倒しちやいけなかったのかな…と不安を覚える。

しかし、返ってきたのは意外な言葉だった。

「ありがとう」

「へ？」

あまりに意外な言葉で明久は一瞬ポカンとする。何か悪いモノでも食べたのではな  
いかと疑ってしまう。

「王宮から連絡があつたの。王族暗殺集団が姫君を狙ってるって…。間に合わないと  
思っただけど、アナタのおかげで助かったわ…。」

そう言い、彼女はニコと微笑む。しかし、すぐに態度がいつものような態度に戻り、

「まあ、助かったけど、この程度であんまり調子乗らないでよね…。」

と、ツーンとした態度で視線を明久から逸らす。

「…う、うん」

結局、彼女は褒めたのか褒めてないのかよく分からない。

すると、優子と行動を共にしていた秀吉が、

「姉上、は正直じゃないの…」

秀吉は「やれやれ」とため息をつく。凶星なのか優子は「…なっ!」と声を上げる。「あのまま、褒め言葉で終わってれば男子的にはポイント高いんだが…」

「…同感。」

秀吉に続き雄二とムツツリーニが説明に補足を加える。

「アキ、お姫様と何をしたのかキツチリ教えてもらおうわよ!」

しかし、美波だけは三人とは別のことに對して喋っていた。

三人に指摘された優子は

「うるさいッ!」

と一喝。しかし、その表情には頬に赤みも感じられた。

そんな彼らのやり取りに明久は「何やってんの?」という視線を向ける。

そんなやりとりをしてる時だった。

「瑞希ッ!」

野太い老人の声が聞こえる。その場にいた全員、その声の主に顔を向ける。

そこにいたのはカヨール二世だった。



何年か前のこと…。ある少女は幼くして両親を失う。

カヨール二世はその少女を知っていた。彼女はカヨール二世の妹の娘、つまりは姪である。時々だが、カヨール二世は妹の家にお邪魔すると、必ずと言っていいほど、その幼い少女が小さいからだで一生懸命出迎えてくれる。しかし、少女はそれを楽しんでるようだった。

だが、突然彼女の両親は死ぬ。彼女はただ一人残されてしまう。そのときの彼女の瞳には一転の光もない、闇に近い色を放っていた。カヨール二世を出迎えてくれた時のような明るい表情がなかった。

「……………」

カヨール二世はその少女を放っては置けなかった。というより、一人にさせてはいけないと考えた。そのため、カヨール二世は妹の娘を自分の娘として育てる決意をする。

自分が生きてる間はこの少女を懸命に育てよう。カヨール二世は死んだ妹に誓う。  
ちやんと彼女がまた、笑顔になれるように…。

「瑞希…」

「お…母様」

カロール二世の表情は叱るときみたく険しい表情をしている。

周りは沈黙し、ただ風の音だけが強く聞こえる。

カロール二世はゆっくりヒメージ三世に近づく。そして：

パシーン

カロール二世は自分の娘を力強く打つ。

「お……お母様……」

その光景を見た明久達は驚愕の表情を浮かべる。

カロール二世は厳しい表情のまま。しかし、この表情は少しずつ歪んでいき、

「あまり年寄りに心配かけさせんじやないよ」

そしてカロール二世は、ヒメージ三世を抱く。

「良かったよ、アンタが無事でホントに……」

「お母様……」

カロール二世の目からは溢れるほどの涙が出ていた。普段、こんな表情を見せない彼女だがそこには確かに王としてではない、母親としての愛情が感じられた。

「お母様……ごめんなさい……私、私」

母親の涙につられたのか、ヒメージ三世からも涙が浮かぶ。

二人は本当の親子ではない。しかし、本物の親子以上に愛情が感じられた。

(いいな、親子って…)

明久は自分の親も生きていたらこんな感じだったのかな…と想像する。

## 国家騎士消失編

## 事件

時間はもう真夜中である。昼間の王都は賑わっているが夜には人がいないせいなのだろうが、静けさに包まれている。

そんな中、一人の少女が王都の街を歩いていた。

彼女の名前は小山友香（こやま・ゆうか）。フミツキの第七国家騎士である。

彼女はカール二世の命令で夜、こうして見回りをしているのである。

その理由は、先日、第二国家騎士の翔子、第三国家騎士の優子に妙な報告があったためだ。

二人の報告には『黒尽くめの男』と名を上げられている。その男は突然、二人の前に現れ、二人を襲ったと言う。さらに優子の報告にはその男はゼウスの盾『アイギス』を召喚したらしい。

本来、神話に出てくる、もしくは伝説の武器とは召喚するにはそれだけの实力が必要で国家騎士レベルにでもならねば、召喚できない武器である。しかし、男は国家騎士ではない。そんな者がどうしてそんな武器を召喚出来たのか？ 『試験召喚システム』を

作ったカヲール二世ですら「分からない」と言う。

しかし、それ以前にその黒尽くめの男は仮面で顔を隠してためか正体が分からない。フミツキに住まう者なのか？それとも敵軍の一員なのかも分からない。彼は一体何者なのだろうか？

そんなことを考えながら友香は暗い王都の道を歩いてく。そんなとき、ゴオオオと一際強い風が吹く。

友香は風避けるように目をつむる。そしてその眼をそつと開けてみる。

そこには優子と翔子の言う黒尽くめの男が立っていた。

その姿を見て友香はゴクリと息を飲む。彼の着る黒い服には禍々しさが感じられた。

「フミツキの第七国家騎士の小山友香だな？」

男は低い不気味な声で友香に問い詰める。

「え、ええ。そうよ。」

友香は国家騎士という誇りを忘れずどうか平静を装うが、心には焦りがあつた。

この男が放つ殺気だけで周りの空気はひどく淀んでいる感じがした。

すると、男は西洋剣を召喚する。男は凄まじい速さで友香に斬りかかる。が…。

「…？」

斬った手ごたえはなかった。

「甘いわね……」

彼女は彼の剣を受け止めたのだ。…『白刃取り』…

「…ほう…。オレの剣を受け止めるとは流石は国家騎士というところか」

男は友香を見下すように言う。

「試験召喚、サモン」

友香は剣を召喚する。

男はその剣を見てピクと反応する。その剣の名前は『デュランダル』。

フランスのシャルルマーニュ伝説に出てくる剣である。シャルルマーニュの十二勇

士の一人、ロランの持つ聖剣である。

その姿は鎌とも剣とも言え、その切れ味はどんな防具でもひとたまりもないと言われ

る。さらには決して折れない『不滅の聖剣』とも言われる。

「ほう…。それが『不滅の聖剣』（デュランダル）か…。」

男は興味深そうに言う。まるでその剣に興味があるかのように…。

友香はその男に斬りかかる。それに気づいた男は自分の持つ西洋剣で対抗する。

ガギイイーン！

激しい金属音。二人の剣は激しくぶつかる。しかし…。

男の剣はすぐに塵となった。おそらくデュランダルの剣圧に耐えきれなかったのだろう。

「流石は聖剣といったところか…」

自分の武器が破壊されたにも関わらず、男の余裕そうな態度はそのままだ。一体何処にそんな余裕があるのかと、友香は目を細めた。

「はあああああッ!」

それでも、武器を破壊された男には隙が生じていた。友香はそこを迷わず刃を向けてく。

ガギイイイイツ!

友香の聖剣が何かに弾かれた。鋭い切れ味を持つと言われるその剣が今まで弾かれたことは一度もなかった。

「え…?」

その予想外さに友香も思わず声を上げる。そこには優子の報告にもあった、ゼウスの盾『アイギス』があった。

「どうしてアナタがその盾を…?」

疑問を感じた友香は男に質問する。それとともにアイギスは消えてしまう。

「答える気はない。どうせお前は死ぬ。」

「……………ッ！」

突然、冷気が友香を襲う。シャルルマーニュ十二勇士、大僧正チエルマンの名剣『アルマツス』。

「ローランの歌」では『氷の刃アルマツス』とも言われている。

まだ季節は冬でもないのに、刃から発せられる冷気はそれ以上だった。

「はああああああああっ！」

友香は黒尽くめの男に再び斬りかかる。そして、素早く剣を振るうが、そこには男はいなかった。

(……………に……………?)

上、下、右、左と素早く敵の位置を確認するが敵の姿はない。そのときだった。

グサリ……

体を貫く嫌な音。見ると、友香の腹部から剣が貫いていた。そこには冷たい冷気も感じる。

「……じゃあな。七番目の国家騎士……。」

アルマツスは友香を貫いたまま消える。そして、友香はゆっくり倒れる。

「……これで一人目……。」

そう言い、彼はその場をすぐに去る。



翌朝――。

この日は土曜日。騎士にとつても、土曜、日曜は休日である。そして、優子も普段は六時くらいに起きるのだが、休養日の日は八時に起きる。

「ふアああああ…」

小さく欠伸をし、スツと横を見る。そこには「スピースピー」と鼻息をたてて寝てる明久がいた。

そう、優子は『明久監視任務』により四六時中明久を見張ってなきやいけない。そのためこの任務期間中は明久の家に住まわせてもらってる。

そんな任務も既に一か月が過ぎようとしている。最初は嫌々任務を承諾した優子だが、今、密かに新しい趣味が出来た。

それは明久の寝顔を見ること。

なぜだか明久は精神年齢そのものも低く見えるのだが、寝顔も幼児のように幼く感じられるのであった。

この一か月、優子は明久より早く起き、明久が起きるまでの間、その寝顔を見つめるのが趣味となっている。優子にとってその寝顔は小動物を見るみたく癒されるらしい。すると、パチと明久が目を開ける。

「うわっ!」

優子は驚いて声を上げる。

「アレ? 木下さん、どしたの?」

「な、なんでもない!」

優子はブンブンと首を振る。

「…?」

明久はキョトンとした表情で優子を見つめていた。その時――。

ブーブーと優子の携帯が鳴る。

「こんな休みの日に何かしら?」

と優子は少し不機嫌そうに、携帯をとる。

「ハイ、もしもし。木下ですが…。」

「優子、今から病院に来て…。」

声の主は翔子だった。

「どうしたの代表。こんな朝早くから…。」

すると、翔子は

「小山友香が今朝、何者かに襲撃された。」

「しゅ、襲撃!?!」

優子は声を上げる。無理もない。小山友香は優子と同じ国家騎士。国家騎士の中では一番下の階級だが、それでも国を代表する騎士の一員だ。傷をつけられ倒れるなんて想像もでつかない。

「何とか息はしてたから、急いで病院に運んだんだけど…。今、その手術が行われるところ…。」

「分かった…わ。」

優子は青ざめた表情になる。

狙いは…。

翔子から電話を受け、優子は急いで病院へと向かう。

「霧島さん…」

「優子…」

翔子の顔色が良くない。それも当然だろう。国を代表する国家騎士の内の一人が襲撃されたのだ。この状況下で平気でいられる方がおかしい。

「小山さんは…。」

「うん、今は手術中。」

状況は深刻なものとなった。今まで、国家騎士が襲撃されたなんて例は過去にない。それほどまでの強さを持つ国家騎士の内の一人が生死に関わるような傷を受けている。

そんな状況の中、一人の男性が訪れる。

「やあ…。」

彼の名前は久保利光（くぼ・としみつ）。優子と翔子と同じく国家騎士の人物だ。位は第四国家騎士だ。

「一応、事情は理解したけど信じられないな…。小山さんがやられるなんて…。」

久保は冷静さを何とか保っているが、今回の事態は彼にとつても予想外らしい。

「それで、犯人はまだ分かつてないのかしら？」

「今、警務部隊隊長の清水さんが現場を調べてるよ…。」

「犯人の特徴なら小山さんから聞けるんだろうけど…。彼女に聞くことは出来ないし…。」

国家騎士が一人やられ、犯人は未だに分からない。起きたのは昨夜のことではあるが、この事件は王都中の騎士達を恐怖、不安に包んでいる。当然、国家騎士達もだ。

そして久保はとんでもないことを口に出した。

「今回、真つ先に狙われたのは国家騎士である小山さんだ。犯人の目的は知らないし、まだ、真相は全く分からないが、もしかしたら、犯人は僕ら国家騎士を狙ってるんじゃないかな…?」

「えっ…!?!」

久保の言葉に優子と翔子は驚いてしまう。彼が何故そんなことを言えるのか二人にはまったく分からない。

「イヤ、そんな顔をしないでくれよ。ちよつとそう思つてみただけだよ。」

翔子はその言葉で硬い表情が少しだけ柔らかくなるが、優子は逆に顔色が一層険しくなる。

久保の言ってることが理解できなかった優子だが、国家騎士を襲うモノには心当たりがあった。以前、優子はある男に襲撃を受けた。そう、あの『黒尽くめの男』に…。しかし、今回も彼が関係してるのだろうか？優子は少しづつ黒尽くめの男に疑いを向けてく。

事件現場…。

そこには主に小山友香の血の跡、そしてわずかだが武器の破片が落ちている。その武器の破片は主に二種類だ。

一つは小山友香の召喚武器『不滅の聖剣』（デュランダル）という鑑定が出る。しかし、もう一つは未だに鑑定できていない。おそらく敵の武器だろうという話にはなってるが…。

この事件の現場の責任者は警務部隊隊長の清水美春である。隊員を引き連れ、現場の取り調べを行う。そんな彼女がある一点に目が向いていた。

『N・K』

小山が自分の血で書いたと思われるアルファベットの血痕である。

「N・K…ですか…。」

清水はこのイニシャルが犯行に使われた『召喚武器』なのかもしくは、犯人の名前に関係したものなのか、考えていた。

彼女にはこの一務には責任感があつた。彼女は警務部隊隊長であると共に第五国家騎士の位についている。国を代表する国家騎士として、王都を守る警務部隊としても気を抜くわけにもいかない。

すると後ろから…

「しーみーずさーん」

全くやる気のなさそうな声が聞こえる。

「…沖田…」

沖田総悟（おきた・そうご）。彼は下級騎士だが剣の腕が上級騎士レベルな上に感も鋭いとのことで清水に選ばれた警務部隊副隊長でもある。つまり下級騎士の中でも扱いが他の騎士と違う。

当然、親友の近藤、土方、山崎と共に訓練所にも通つてゐる訓練兵でもある。

「しーみーずさん、特にこれと言って証拠となるモノは見つからないです。」

「アナタの目は節穴ですか？そんなハズはありません。ちゃんと探してください！」

「めんどくさい」

一瞬、沈黙の空気が訪れる。

「よく聞こえませんでしたか…」

清水はとつさに銃を向ける。

「やだなア…。オレさつきまでアソコの屋根で昼寝してたんで。」

「アナタはもう少し副隊長の自覚というものを…」

その瞬間だった。

「アレ？美春？」

200 m先に立っていたのは美波だった。

「お姉様アアアアッ！私に会いに来てくれたのですかー!？」

清水の目は警務部隊隊長である責任感ある目から美波を愛するハートの目に変わっていた。

「ちよっ！美春、や…やめ…!」

清水は美波に思いつきり抱き付く。…その時…。

パシヤツパシヤツ。

カメラのシャッター音が聞こえる。

「はーい、隊長。笑って〜。」

沖田はカメラで美波に抱き付く清水を一枚、二枚と次々撮っていく。

「おーきーたー」



清水の目は沖田に殺意を向けるかのような目に変わる。

「みんな。見てくれ。隊長が仕事さぼってるぞー」

沖田は他の隊員に先程撮った写真を見せびらかす。

「ぎゃあああああつ！沖田、それは…」

そして、沖田はニヤリと笑い、

「隊長、ちゃんと仕事やってくだせえ…」

それは先程清水が沖田に言ったことだった。流石の清水もそれには何も言い返せず、

「…はい…」

そう頷くしかなかった。

沖田はニヤリと笑う。そう彼はDSだった。

事件の真相は当分は解明されそうにない。

---

「来たかい…」

「よう、ババア」

「口には気をつけな、ガキ」

カール二世の王宮にやって来たのは雄二だった。

「今回の事件のことはもう知ってるかい？」

「ああ、まあ…。」

曖昧に返事をする雄二。

「んで、オレを呼び出してどうするつもりだ？」

カヲール二世はニヤと笑い、

「アンタにもこの事件の解決には協力して欲しくてね。『第六国家騎士』…。」

「……。やめてくれ、今のオレには国家騎士と呼ばれる程の力はない。」

坂本雄二。彼は正真正銘の下級騎士である。だが、それは今の話である。

「スマナイね…。アンタをそうさせちまったのは私の責任さ。」

「気にすんな、過ぎたことだ。」

坂本雄二…。まだ、吉井明久という少年と出会う前の話だ。彼は6年前、最年少で国家騎士に就任した。たった10歳で国家騎士に就任した騎士は過去の一度もない。王族の者からもフミ、ツギが出来て以来の天才、もしくは『神童』とも言われた。

就任した1年後、彼はS級犯罪者討伐の任務に当たっていた。しかし、討伐に失敗した彼はその犯罪者に自身の『召喚武器』を奪われた上、敵に呪いをかけられた。その呪いは雄二の身体に激痛を与え、呪いをかけられた雄二の体はとも国家騎士としてやっていける体ではなかった。肉体がまるで老化するみたく、徐々に朽ちつつあったのだ。

この呪いを解くにはその犯罪者を殺す以外に方法はない。

そして、全てを失った彼はもう一度下級騎士からやり直すこととなる。

彼が国家騎士であつた期間は短く、彼が国家騎士であつたことは王族の者しか知らない。

「何も、アンタにその『黒尽くめの男』と戦えつて言つてるんじゃない。犯人をただ探す、推理して欲しい。アンタが『神童』と呼ばれたのは何も最年少で国家騎士に就任しただけじゃないだろ？」

…そう、彼が『神童』と呼ばれる本当の理由は彼の思考力にあつた。

「まあ、討伐任務じゃないなら協力しよう。」

「当然だ、下級騎士の今のお前に討伐なんて無茶なことと言わないさ。」

雄二は犯人捜しに協力することになる。

---

夜——。既に深夜0時を過ぎている。

再び、黒い影が訪れる。

## 次の標的

夜の静寂した街に再び黒い影が訪れる。

…ジャリ、ジャリ…。

不気味な音を立てて男は暗い街の中を歩いていく。——その時——。  
「そこで止まって貰います。」

黒尽くめの男の前に現れたのは清水美春だった。

「…『第五国家騎士』、清水美春だな…。」

「そうですが、何か？」

「オレが此処に来るのをお前は分かっていたのか？」

「いいえ、ただの推測です。アナタは木下さんを襲った時も、小山さんを襲った時も『夜』でしたから…。ここで待ち伏せてました。夜に襲うとは卑劣ですね」

「何故、小山を襲ったのもオレだと分かった？」

「それもただの推測です。霧島さん、木下さんが襲撃された時も必ず『黒尽くめの男』が名前に出てきました。なら、今回の件もアナタが関わっていると考えるのが妥当かと…。」

「…フ…。警務部隊隊長なだけあつて感が鋭いな…。だが、ちようど良い。オレも次の標的（ターゲット）はお前と決めていた。ホントはその前に『第六国家騎士』を消すつもりだが、ソイツの正体はオレも知らないからな…。」

第六国家騎士の正体、つまり雄二のことだが、雄二が国家騎士であつたことは王族しか知らない。黒尽くめの男でもそれは知らないらしい。

「何故、国家騎士を狙うんです？それも位の低い順から消していこうとしてるようですよ…。」

すると、男は「フ…」と笑い、

「…国家騎士といつたら、フミツキを代表する騎士だ。その騎士がいなくなれば、勢力は衰えるハズだ。」

清水は表情を険しくし、

「アナタは敵の軍の者ですか？」

「いいや、このフミツキに住まう人間さ。」

「アナタの話を聞く限り疑問しか生まれません。何故、同じ国に住まう者が国家騎士を狙うんですか？それに、国家騎士でもないアナタがレベルの高い『召喚武器』を扱えることにも疑問を感じます。アナタは何者ですか？」

すると、男は低い声で、

「知る必要はない。ただ、お前たちは無残に消え失せればそれでいい。」

その言葉は鳥肌が立つほど酷く冷たいものだった。

「そう簡単にはいきませんよ」

すると、清水の後ろから警務部隊の隊員達が次々現れる。

「隊長、アレが黒尽くめのヤツですかい。アレはコスプレですか？」

「沖田、今、この場でコスプレの話は重要視することですか？」

場違いなことを言う沖田に清水は睨みつける。

「…ホウ、数で攻めれば何とかなると思っただらうが…。清水、それは失策だったぞ。何人で攻めようとオレの足元にも及ばない。」

黒尽くめの男はまるで敗者を見るかのような目で清水を見る。仮面で顔が隠れどんな顔をしているか分からないが、そこには禍々しい闘気を感じた。

「…悪いけど、僕も参戦するよ」

建物の屋根の上からメガネをかけた男が現れる。

「ホウ、お前まで来たか…。『第四国家騎士』、久保利光…。」

数は約20人、そしてその中には国家騎士が二人…。この勝負は警務部隊が勝利するものと思えた。

しかし、現実はそうならなかった。

「試験召喚（サモン）!!」

20人いる警務部隊隊員は武器を召喚する。それに少し遅れて久保と清水も武器を召喚する。

「試験召喚（サモン）！」

久保は槍、清水は銃を召喚する。

久保の武器は『シユーラ・ヴァラ』。『鋭利な投槍』を意味する。インドの英雄ラーマの武器で聖者ビスバーミトラより授かった神々の武器である。

一方、清水の武器は『ジャツジメント』。『断罪者』を意味する。

「フン…。『鋭利な投槍』（シユーラ・ヴァラ）に『断罪者』（ジャツジメント）か…。少しは楽しめそうだ…。」

すると、男の姿が消える。しかし、これは戦闘を引いたわけではない。

「皆さん、ちゃんと武器を構えてください。何処から攻撃が来るか分からないので…！」

その瞬間――。

「ぐあああああああああッ！」

隊員の叫び声が聞こえる。そして、ポトツと何かが落ちる。叫び声を上げた隊員の腕

だ。

そこにはいつの間にか黒尽くめの男が立っていた。

「てめええええええええええッ！」

沖田は黒尽くめの男に斬りかかる。

ドゴオオオッ!!

攻撃は外れたらしい。しかし、その斬撃は岩を両断するほどの威力だった。

「流石は『神剣の使い手』と言われるだけあるな…。沖田総悟…。」

「黙れ、お前と話す気は一切ない。」

沖田は再び黒尽くめの男に刃を向ける…が、

ザクッ

「お…：沖田副…：隊長…：。す…：すみま…：せん」

男は警務部隊の隊員を盾にし、沖田の攻撃を防ぐ。

「てめえええええええええええッ！」

沖田は絶叫する。

「後ろがから空きだ。沖田」

すると、沖田は背後から斬られる。

「沖田————！」



清水は必死に彼の名を叫ぶ。まだ生きてるようだが、傷は深そうだ。

しかし、男は舞うかのように次々、警務部隊の隊員を西洋剣で切り裂いていく。

「ハアアアアアアアッ」

久保は『鋭利な投槍』（シユーラ・ヴァラ）を投げつける。が、しかし…。

「フ…。良い武器だな。」

男はゼウスの盾『アイギス』を召喚する。恐ろしいほどの魔力を持つ盾だ。

「…そんな、バカな…！」

今の一撃で確実に仕留められると思った久保には予想外の出来事だったらしい。そして…。

「…っー！」

男は素早い動きで久保を西洋剣で突き刺す。

そして、最後に残ったのは清水だけだった…。しかし、あまりの圧倒的と言つていい強さに清水は

体全身が震えていた。既に、戦意消失してしまうほどだった。

「フ…。怖いか…？」

「…、来ないでくださいー！」

清水は震えながら銃を構え、そして放つ。

銃弾は凄まじい速さで男を貫通すると思われたが、男はそれを軽々躲す。

「…甘いな…。」

しかし、銃弾は方向転換をし、そのまま黒尽くめの男を追いかける。

「…追尾型か…!？」

そして、銃弾は男に命中したはずだった。

「…アイギスの盾!？」

銃弾は男に命中したのではなく、『アイギス』に命中する。

他に攻撃の手段がない清水は銃をポロリと落としてしまう…。だが、そんな様子も気にせず男は少しづつ清水に近づく。そして絶叫と共に、鮮血が噴きあがる。

翌朝——。

「バカな…!?! 警務部隊が全滅!?!」

竹原の報告にカヲール二世は啞然としてしまう。

「正確には六人は生存しております。その内三人は警務部隊隊員。その内一人は副隊長の沖田君、もう二人は国家騎士の清水さんと久保君。しかし、生存するとは言え、全員重傷です。」

「つくそツ！ 国家騎士が三人も…！こんなことは今までなかったのに…」

カヲール二世の顔には不安と焦りがある。国を代表する騎士が三人も襲撃され、状況は絶望的である。そして、敵が狙うのは国家騎士、警務部隊と、有力な騎士ばかりを狙う。フミツキ中の騎士たちの不安も昨日に比べ一段と高まっていく。

「…ツクソツ！」

しかし、それはカヲール二世も同じだった。

フミツキは不安に包まれていく。

国家騎士消失と言う件で、訓練所も強制的に休みを取る形となった。

「ふアあああああ…」

大きなあくびをして起きる明久。既に時間は11時30分。いくら休みでも普段なら優子が8時くらいには起こしてくるのだが…。

すると、隣ではまだ優子が布団にもぐっていた。

「アレ…？」

…おかしい…。今までどんなに忙しくても優子は起こしてくれたのに今日に限って

起こしてはくれなかった。

「おーい、木下さーん。朝だよー。てか、あと少しで昼だけど…。」

「……。」

返事がない。  
「きよ…今日は特別に木下さんの好きな料理作っちゃうけど…。」

返事がない。  
「木下さん、布団の上にゴキブリ乗ってるけど…（ウソ）。」

「イヤアアアアアアアアアッ！」

すると、優子のとび蹴りが明久の顔面に直撃する。  
「ぐびやあああああああつっ！」

ようやく明久達の朝が始まる。

## 不安と恐怖

「ご、ごめんなさい。」

「い、イヤ。まあ、大丈夫。」

明久にとび蹴りを喰らわせた優子は素直に明久に謝る。

「でも、どうしたの？木下さん。普段なら木下さんが僕を起こしてくれるのに……。」

「吉井君、まるで私に起こしてもらおうのが当たり前前の口ぶりだけど……もう少し自分で起きれるように努力しなさい」

全くの正論である。

「……はい、すみません」

あまりの最もな言葉に明久はただ謝るしかない。

しかし、どうも優子の様子がおかしかった。普段の優子ならもう少しガミガミと説教を言ってくるのだが……。どうも元気がないみたいだ。

「あの、木下さん？」

どうも話しかけづらいので少し間接的に呼んでみる。

「ねえ、吉井君はさ……。何かに恐怖したり不安になったりしたことってある？」

「…へ？」

いきなりの予想外の質問に明久は声を上げる。

「イヤ、まあそれはあるけど…」

「どんなこと…？」

「イヤ、まあ鉄人の補習とか？」

すると、優子は弱々しく笑う。

「…平和ね」

その表情は何処か悲しそうにも見えた。

「…さつきからおかしいよ、木下さん。体の具合でも悪いんじゃない？」

普段とは違う態度をとる優子が心配になる明久。しかし、優子は首を振り、

「そうじゃないの…」

と答える。

「ただ、不安で怖くてしょうがないの…。」

「…え？」

予想外の言葉だった。普段、あんな強気で負けず嫌いの優子が不安と恐怖を抱いてい  
ると言うのだ。驚かすにはいられない。

「今、国家騎士が襲撃される事件…知ってるよね？」

「うん、まあ。」

当然、明久もこの事件を知ってる。何と言ったって、国を代表する騎士がやられると  
いうのだ。

「今朝、朝早くに電話が掛かってきたの。そしたら、警務部隊は壊滅的狀態で、国家騎士  
も二人ほどやられたの…」

「…えっ?!二人も?!」

国家騎士が二人やられるというのは尋常ではない。

「私…怖い…自分が…次に狙われるのが…自分なんじゃないかって…」

優子の手は確かに震えていた。表情にも恐怖、そして不安が表れていた。そんな優子  
の手を明久はギュツと握る。

「…え…」

いきなり手を握られ、驚く優子。しかし、その温もりに優しく温かく包まれた感触  
だった。

「僕はバカだし、頭も良くないから木下さんが今、どれだけ大きな不安を抱えているかは  
分からない。多分、僕の予想を超えるモノなんだと思う。でもね、木下さん。そういう  
ときは一人で抱えこんじゃダメだ。」

「…吉井君…」

先ほど、優子は明久に「不安はないのか？」と聞いてきた。当然、それは明久にもある。

だが、その不安、恐怖を乗り越えられたのは雄二、秀吉、ムツツリーニ、美波という友人がいたからだ。自分一人だけの力で乗り越えたのではない。自分を支えてくれた人がいたから乗り越えられたのだ。

「僕はずっと木下さんの傍にいる…。だから…。」

「ありがとう、吉井君…。」

優子の目からは一滴の涙が零れ落ちる。

明久の手の温もりが優しく温かく優子の手を包み込む。

その頃、病院では――。

「あの、清水美春さんの病室って何号室ですかっ!？」

美波は病院まで急いで来たのか息が荒い。

「え…と、すみません。清水さんは…って、ちよつとアナター！」

美波は清水の部屋の場所を聞かず、そのまま走り出す。病院のカウンターが清水美春は重傷の為、面会は出来ないと言うのを予想していたのだろう。しかし、それに構わず、



美波は走り出す。

病院中を走り、ようやく「清水美春様」と書かれた札を見つける。

コンコンとノックしゆっくり病室へ入る。

「美春…。」

「お姉様…。」

重傷と聞いていた美波はホッと胸をなでおろす。少し安心したのだ。重傷と聞いていた美波はてつきり包帯グルグル巻きになっていると思っただのだ。

「良かったわ…。思っただよりも元気そうで…。」

すると、清水は弱々しく笑い

「迷惑かけてすみません。」

「いいの、いいの。あ、それよりもコレ、お見舞いのプレゼント」

美波から渡されたのはヘアピンだった。コレは以前から清水が欲しいと思っていたヘアピンだ。

「コレ、つけてみて。」

美波は笑顔で言う。怪我をした清水に少しでも元気を出してもらおうと思っただったのだろう。しかし、清水は…。

「お姉様…。つけてくれませんか？」

「へ？いいけど、どうして…」

すると、美波の視界から見えなかったが清水の左腕なかったのだ。

「み、美春…。腕、どうしたの？」

「敵に…斬られました…。」

「斬られた…って、そんな…！」

清水は下を向いたまま顔を上げない。

「ごめんなさい、お姉様の気持ちは…嬉しいです。でも、もう自分ではつけられないんです。そのヘアピンは…。」

清水から大粒の涙が零れる。しかし、それでも清水は涙を必死にこらえようとすろうにも見えた。

「う…そ…。」

あまりの衝撃的な事実にも美波も胸が痛んだ。

すると、後ろから看護師がやってきて、美波の肩をポンと叩く。

「清水さんの所属の警務部隊ね、大体20人くらいいる部隊なんですけど、生き残ったのはその内の部下三人と彼女だけだったのよ。彼女は自分のせいで部下が死んだと酷く自分を責めてる。だから、今はそつとしておいてあげて…。」

そう言われ、美波はフラフラと病室を出る。そして、下の階に降りるのにエレベー

ターを使わず、非常口用の階段を使う。

そして、力が抜けたようにしやがみこむ。そして、

「…美春…ッ！」

美波の目からは大粒の涙が零れる。

普段、いつでも美波に笑顔で接していた清水。その彼女が初めて美波に辛そうに顔で涙を零した。それが美波にとって酷く辛いことだった。

「姉上がそんなことを…」

「うん、何か辛そうだったよ…」

騒々しい商店街の中を明久と秀吉は歩いていた。

「確かに、今、国家騎士が三人もやられておるからの…」

秀吉は不安そうな顔を浮かべる。それも当然だろう。もしかしたら自分の姉、優子が狙われるかもしれないのだ。

「明久…」

「ん？何、秀吉。」

「姉上の傍に居てやってくれないかの…」

「え……？」

秀吉は苦笑し、

「姉上はお主の監視任務につく前はピリピリしておった。まるで、国家騎士という誇りにとらわれるかのように……」

そんな優子の話を初めて聞く明久は目を丸くする。

「しかし、姉上はお主の監視任務に就いてから表情も柔らかくなって良く笑うようになった。お主のおかげじゃ、明久。」

「そ、そうかな……？」

素直に褒められ明久は少し赤面する。

そして、話を切り替えるかのように秀吉は、

「そういえば、さつき雄二の家に行ったら留守じゃったの。」

「へ？雄二？」

---

……その頃雄二は……。

「コレが、小山がやられた時と警務部隊がやられた件のレポートだ。」

「おう」

カール二世から二つの事件の資料を渡されその資料をペラペラめくる。

「何か、分かったか？」

「……。」

雄二は黙り込んだ。

「小山の事件に採取した武器の破片についてだが、一つは小山の召喚武器の『不滅の聖剣』（デュランダル）。もう一つは敵の召喚武器のモノだと思うんだが……。」

すると、黙り込んでいた雄二が口を開く。

「オレは昔、この武器の破片を見たことがある。」

「デュランダルか？」

「いや、もう片方、敵の武器だ。その武器を持っていた敵は圧倒的な強さで、その武器の名前は『アルマツス』だ。恐ろしいほどの冷気を持つ剣だ。事件現場にわずかではあったが、凍ってる部分があった。」

カール二世は驚愕した表情になる。

「待て、アルマツスだ?!?それじゃあ、まさか……」

「そう、小山が残した血痕『N・K』の人物と一致する。」

…そして、夕方17時ごろ。日は既に堕ちかかっていた。

『第二国家騎士』、霧島翔子だな？』

翔子はコクリと無言で頷く。翔子の目の前には『黒尽くめの男』が立っていた。

翔子は躊躇わず武器を召喚する。

「…『蜘蛛切』（くもきり）…！」

『蜘蛛切』（くもきり）。優子の持つ『鬼切』（おにきり）と同じく源氏の宝刀である。

優子は鬼切を召喚すると瞳、刀の刃が美しい紅色になるのに対し、翔子は瞳、刀の刃が美しい青色を放っている。

「…フン。」

男は余裕そうな態度で翔子に斬りかかる。そのとき後ろから…。

「ハアアアアアアアッ」

もう一人の戦士の姿が見える。優子だ。

「…ムッ!？」

優子の気配に気づかなかった黒尽くめの男は危うく斬られそうになるが上手く攻撃を躲す。

…しかし…。

ピシッ…！

黒尽くめの男の仮面に亀裂が入る。

## 仮面の正体

仮面に亀裂が入る。

「……」

優子と翔子の顔は今まで以上に真剣なモノとなる。

仮面は少しずつ剥がれ、黒尽くめの男の正体が遂に明かされる。

「チッ……」

男は舌打ちをし、優子と翔子を睨みつける。

「……フン、流石は国家騎士の二位、三位というところか……。オレの正体が明かされるとはな……。」

仮面は全て剥がれ落ち男の顔が明らかとなる。しかし、男は焦る様子もない。

「……え……?」

優子と翔子の反応は驚きへと変わる。その正体は優子も翔子も良く知る人物だった。

「根本……恭二……」

根本恭二（ねもと・きょうじ）。ファミツキの国家騎士の頂点に立つ『第一国家騎士』だ。

カール二世の信頼も厚く、他の騎士たちからの人望も厚い。だが、当然そこで二人は



疑問を抱く。フミツキの頂点に立つ騎士が同じフミツキの騎士を襲撃していたことになるからだ。

「何故、アナタがこんなことを…!?!」

すると根本は、

「貴様らに知る理由などない。ただ、何も言わず消えればそれでいい。」

優子の質問には答えず、ただ二人の存在理由を否定する。

その瞬間——。場は根本の殺気で押しつぶされそうな空気となる。

「——っ!?!」

「何、コレ?」

ただの殺気——。ただそれだけである。だが、こんな殺気は今まで感じたことのないような殺気だった。

「さあ、楽しませてくれよ。二位と三位。」

根本はニヤリと笑い、西洋剣を召喚する。

---

その頃、王都の商店街では——。

「た、大変だ!街の外れで黒尽くめと国家騎士が戦りあっているぞ!」

一人の男がその場にいた全員に知らせるように伝える。どうやら現場を見たようだ。

「またか!？」

「今度は誰だ？」

街の人々は再び不安に包まれる。ザワザワと騒がしく落ち着きがない。

「どうやら、木下優子と霧島翔子が黒尽くめとやり合っているらしい!」

街のざわめきは一層強くなる。それもその筈…。この二人がやられれば国家騎士は全滅。フミツキは退化の道をゆくことになる。

そして、偶然街の中にいた秀吉、ムツツリーニ、明久は…

「危険…。」

「このままでは姉上が…。」

秀吉にとって優子はたった一人しかいない姉だ。当然、この事態には不安が高まるばかりだ。そして、秀吉は隣にいる明久の方へ振り返る。

…しかし…。

「明久?」

先ほどまで隣にいたハズの明久の姿はなかった。

「…まさか…!」

根本との戦闘が始まり、約七分…。

「ホウ…。」

優子、翔子と黒くめは互角の戦いを繰り広げていた。

「流石は上位の国家騎士なだけあるな…。この程度では倒れないか…。」

互角…とは言っても優子、翔子は体力的に限界に近かった。根本の攻撃は一瞬でも気を抜いたらあの世に行ってしまうほど速い。呼吸をする時間すら与えてはくれない。そのせいか、二人の息は上がっている。

「だが、そこで終わるのはまだ早いぞ…。」

彼が先程まで使っていた西洋剣の代わりに現れたのは『アルマツス』。以前、小山を刺した氷の剣だ。

翔子はその剣に抵抗するかのように前へ飛び出す。そして凄まじい斬撃が根本を襲う。

だが、根本は顔色一つ変えず『アルマツス』で翔子の『蜘蛛切』を防ぐ。

——そして——。

「…っ!?!」

『アルマツス』の吹雪のような冷気が翔子を襲う。その冷気を避けるように翔子は根

本から距離をとる。

「大丈夫、霧島さん!」

「大丈夫…。けど…。」

翔子は根本の持つアルマツスに目をむける。

「あの剣、真面にくらったら大変…。」

そう、根本はまだアルマツスを振るっていない。ただの冷氣…。それだけで、致命的なダメージを受けると翔子は言っている。

「…なら…!」

優子は刀を向け、走り出す。

「無闇に突っ込んで意味はないぞ」

優子と根本の距離は徐々に近づく。そして近づいたところで…。

「…『紅桜』（べにざくら)…!」

優子の刀、『鬼切』の刀身が消え、代わりに紅色の桜が散る。

「…何だ?」

すると紅色の桜が根本の肌に触れた瞬間、スパッと音を立てわずかに鮮血が噴く。

「チイ…ッ!」

そして後ろから翔子が…

「…『蜘蛛の太刀』（くものたち）…！」

『蜘蛛切』の凄まじい斬撃が根本を襲う。

ガキイイイイイン！

しかし、翔子の斬撃は弾かれる。

「これは…『アイギス』…」

根本はとつさにアルマツスからアイギスを召喚する。そしてまた入れ替えるようにアルマツスを召喚し翔子を斬り捨てる。

「…が…っ」

翔子の右肩から鮮血が噴く。

「霧島さんッ！」

優子は翔子の下へ駆け寄ろうとするが、

「おっと、何処へ行く気だ？」

根本は優子を足止めする。

「…『桜花』（おうか）…！」

『桜花』…。連続20回攻撃。『鬼切』の目に見えないほどの斬撃が根本を襲う。しかし、根本は表情を変えることなく、再びアイギスを召喚。

「グ…ッ」

『鬼切』の斬撃はゼウスの盾により防がれる。

「お前も終わりだ。木下優子。」

すると、素早くアルマツスを召喚し、優子に斬りかかる。優子はかろうじて鬼切で防ぐ。

「よく防いだ…とりたいところだが、アルマツスは氷の剣だ。その刀で防いだところで冷気までは防げない。」

「…ぐ…ツ」

徐々に優子の体は冷気に包まれ氷結していく。鬼切の紅色の闘気がアルマツスに抵抗するが、既に体の半分は氷結していき、意識がその冷気に奪われていく。

「…終わりだ、国家騎士。」

目の前は真つ暗になる。もうコイツには何をしても勝てないんだ、そう心の中で悟る。

「…っ」

しかし、どういふことだろうか…？体全身が冷気に包まれ、感覚がマヒしているのに掌だけまだ感覚が残っていた。それに温かい。

「コレ…は」

そう、明久に手を握られた部分だ。ここの部分だけまだ感覚がある。

次々と国家騎士が襲われていき、優子の心の不安は徐々に高まっていた。いつ自分が襲われるのだろうか？と恐怖していた。

だが、そんな不安と恐怖に包まれた冷たい手を明久は優しく、温かい手で握ってくれた。多少、頼りなさも感じられたが、彼は「大丈夫だよ」と優しく微笑んだ。

それが優子にはたまらなく嬉しかった。あの温かさがなかったらきつとここまで根元には立ち向かうことは出来なかった。

「……吉井君……」

ボソリとその少年の名前を口にする。決してこの場に来るわけでもない少年の名前を……。

——瞬間——。

「木下さんツ!!」

「……え？」

何かの勘違いだろうと優子は思った。しかし、この声は間違いなくあの少年の声だった。

ザシユツ

「グツ……!」

根本の頬に僅かだが傷が入る。そのせいで根本の気が緩んだせいか、アルマツスの冷

気がおさまる。

しかし、優子には分からなかった。彼がここに居る理由を…。彼は下級騎士で相手は国家騎士。天と地の差である。

当然、勝敗の行方何て問うまでもない。子供でも分かる答えだ。

「吉井君…。どうしてアナタがここに…。」

疑問を感じずにはいられない優子。だが、彼はニコリと笑い、

「もちろん、木下さんを助けにきたんだよ。」

あまりの単純すぎる答えに優子は

「バカッ！アナタではアイツには勝てない！」

状況判断を全くできていない明久に優子は思いつきり怒鳴る。しかし、明久は

「僕は負ける気なんて一切ないよ…。」

明久は決してふざけてるわけでもない。彼の目は今までにないほどに真剣だ。そして視線を優子から根本へ向ける。

「…下級騎士のお前に何が出来る？三分で殺してやる。」

すると、明久は『召喚武器』ではなく、背中にさした二本の剣を鞘から抜く。かなり高価そうな剣だが…。

「おい、その剣はどうした？」



根本は召喚武器でなく高価な剣を使おうとする明久に質問する。

「武器店でパクツてきた。」

正々堂々と答える。普通に犯罪である。

しかし、優子の危険を知り、すぐにこの場に来た明久にそんな余裕はなかった。

「フン…。で、二本剣を抜くことは『二刀流』か？」

「もちろん」

根本は「フン」と鼻をならす。

「来い、三下。」

「うおおおおおおおおおッ！」

明久は二本の剣を根本に向け、走り出す。

## 下級騎士 v s 国家騎士

少しずつ辺りは暗くなり始める。外も少し冷え始める。明久達のいる場は禍々しい殺気で包まれている。

「流石に下級騎士にはハンデやらないとな…。」

「ハンデ?」

すると、根本は『アルマッス』からただの西洋剣を召喚する。どうやら明久を対等の敵とは見ていないようだ。

「…ふざけやがって…!」

明久は走り出す。

「フン、三下が…!」

明久の剣に対抗するため、根本も明久に刃を向ける。そして、明久の剣と根本の剣は激しくぶつかりあう。

「ぐ…ッ…!」

激しい金属音がその場に響き渡る。しかし、明久は下級騎士。いくら根本が『アルマッス』を召喚していないとはいえ、剣圧に耐えられるという保証がなかった。根本の

劍圧に徐々に圧されていく。

「あああああああッ！」

すると、明久はもう片方の劍を根元に向ける。

「…ッ！」

すると、明久のもう一本の劍が根本を襲う。

「ぐあああッ！」

根本にとつて予想外の攻撃だった。

というより、明久がもう一本劍を持っていたことを忘れて油断したらしい。明久の劍は根本の右肩に傷をつける。

そして、わずかだが根元に隙が出来る。明久はその隙を見逃さなかった。

「オオオオオオオオッ!!」

すると、明久の右手に持つ劍が根本の隙を突こうとする。次に左、右、また左と両手の劍が交互に根元を襲う。

根本は何とか明久の劍を防ぐが、明久につけられた傷がダメージになったのか反応が少し鈍い。

「クソがあアアアアッ！」

だが、根本も国家騎士だ。明久の不意打ちにやられたものの凄まじい斬撃はそのまま

だ。

しかし、明久の二刀流の剣戟も根本の斬撃に対抗し、勝負は互角…かと思ったが…。  
「…っ…!？」

「おいおい。傷一つ付けて終わりか!？」

徐々に根本の攻撃が速くなる。明久も必死で二刀流で対抗しようとするがその圧倒的なスピードには明久もついてはいけなかった。明久の二本の剣が根本の剣の速さを抜こうとするが、追いつけない。

明久の剣も決して遅いわけではない。下級騎士ながらも素速さに瞬発力ほどの騎士よりも優れている。だが、その剣はまだ目で何とか追える速さである。

しかし、根本の場合、速いという次元が違う。目で追えない…いや、正確には目に見えないほどの剣戟だったのだ。

「うオオオオオオオっ!」

それでも明久は根元に隙がある限り剣を向けてく。だが…。

ビシッ…!

剣に亀裂が入る。一瞬、その亀裂が気になり、剣に目をやるが、その動揺もすぐに消え明久は攻撃をやめない。

だが、そんな剣で立ち向かっても剣は折れるだけ。

「……」

根本は明久を見下すような目で見て亀裂の入った剣を破壊する。二本ともだ。

「これで武器はなくなった」

すると、西洋剣を使わず、ただの蹴りで明久にダメージを与える。

「ぐあッ！」

その衝撃に明久は蹴り飛ばされ、倒れ込む。根本は倒れた明久の腕を足で踏みつける。ミシツと不吉な音を立てている。

「ぐ……ッ……」

「まさかオレに傷つけるのは王族でもなく国家騎士でもなく、三下の下級騎士とは一生の恥だ。お前はただ殺すのではオレの怒りがおさまらない。体の一部一部地獄に落とす上で殺してやる。」

根本は悪魔のようなセリフを言った瞬間――。

「ボキリ……ッ！」

大木が折れたような音がする。

「ぐあああああああああああああッ！」

それと共に明久の絶叫がその場に響き渡る。明久の右腕の手首が折れたのだ。

「まずは右腕だ……」

ニヤリと笑い、今度は左足の太腿に剣を突き立てる。勢いよく突き立てたためか、突き立てた部分からは血が飛び散る。

「ぐ……あつ……アアアアアアアアあああつ!!」

「今度は左足……だ。どうだ？痛いか……？ハハツ！そりや痛いよなア!?手首やられた上に足もやられんだからよオ……!」

根本はヒヤハハハハと甲高い声で笑う。

あるときは低い不気味な声で喋ったり、あるときは甲高い声で笑う、よく分からない男だ。

「ぐ……ツ……」

しかし、腕に足が負傷し、とてもじゃないが、今の明久には根本と戦う力なんて残っていない。

「……フン、次は何処にしようか……？呼吸出来ないよう、肺をやるうか？」

根本は悪魔のような微笑みで明久に剣を向ける。しかし、西洋剣ではない。

「お前には絶望的苦しみを味あわせるためにこの剣で刺してやる。」

明久達のいる場は再び冷気に包まれる。『アルマツス』だ。

「……やめ……ろ……」

明久は必死に抵抗しようとするが、声は弱々しい。

劍は徐々に明久の胸部分に近づいてくる。すると、後ろから：

「やめて————!!」

優子が悲痛に近い叫び声を上げ、根本の劍を弾く。まだ、『アルマツス』の冷気で感覚は鈍つてゐるが、どうにか動けるまでには回復したようだ。

「ホウ、まだ動けたか…。」

しかし、回復したというものの、優子の手は震えている。根本に対する恐怖なのか、もしくはアルマツスのダメージなのか…。

「吉井君には手を出させない。アナタに用があるのは『国家騎士』である私でしょ?」

震えながらも優子は劍の柄をギュッと握る。

「フン、そこまで言うならまずはお前から殺そう。だがな、そいつもその後で殺す。」

根本はまたしても悪魔のような笑みを浮かべる。

「き…き…した…さん」

明久は体の痛みに耐えながらも優子の名前を呼ぶ。

——この人を行かせてはいけない——。

そう心の中で呟いても、体が動かない。足も負傷してるせいか、立つことすら出来ない。しかし、優子は…。

「…大丈夫…。」





振り上げられた剣は徐々に優子に向けられる。

「やめろオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

明久がどんなに叫んでももう根本の剣がとまることはない。

（やめろ、やめてくれ！）

明久の中で根本に対する憎しみが増幅する。

（根本、お前だけは…！）

そのとき――。

フツと場の景色が変わる。何処までも広がる真っ白い世界。そこには優子も根本もいなかった。

「……は……どこだ？」

その白い世界には何もない。ただその世界の中に明久がいるだけだ。

だが、後ろから…。

『この剣はアナタが持つにふさわしい…。』

少女の声が聞こえる。

後ろを振り向くと、金髪の髪を靡かせた150cm前半くらいの小柄な少女が立っていた。

「…君は…?」

明久はその少女に誰なのか問うが、少女はそれには答えず、

『アナタにこの剣を授けます。アナタならこの剣をきつと扱えるはず…。』

すると、彼女は明久に黄金の光を浴びた剣を差し出す。そうして、その少女は消えてしまう。それと共に白い世界は歪み、徐々に明久の視界には元居た場所の景色に戻っていく。

徐々に根本の剣は優子に迫っていく。明久の心の中ではどうしようもないほど憎しみが積もっていた。

国家騎士とはいえ、彼女はこの事件が起きてからいつ自分が襲われるか…? そんな恐怖を抱いていたのだ。なのに、あの男はそんな気持ちも知らずに優子の命を奪おうとしている。

何故、あんな男に国家騎士達が、優子が消されなければならない!?

明久がここまで憎しみが積もるのは『あの時』と重なったからだ。そう、姉の玲が死んだ時と。

その時も自分の目の前で殺されたのだ。それも根本のような卑怯者に殺された。あ

の時の二の舞にだけは絶対になりたくなかった。

「ね……も……と」

明久はうつ伏せになっていた体を無理やり起こす。起こした瞬間に体中に激痛が走る。右足に左手がやられ、とても戦える状態ではない。

それでも、明久は立ち上がる。

「ね……もと……ッ！」

すると、根本が振り下ろそうとした剣がピタと止まる。

「吉井君……。もう、やめて……。」

死にかけてもまだ立ち上がる明久を見て優子は辛そうな表情を浮かべる。

「……おかしいな……。もう立ち上がることなんて出来ないくらい痛めつけたのに、まだ立ち上がるか」

根本は相変わらず余裕そうな表情を浮かべるが次の瞬間、その表情は一変する。

「……!?」

揺らりと明久の体から黒い鬨気が噴き出す。徐々にその鬨気は強くなっていく。

「な、何だ!?アレは……!?」

その鬨気は禍々しい。まるで明久の憎しみの感情を色で表したかのような黒さだった。その上、明久の憎しみに比例し、鬨気は強くなっていく。

「…試験召喚（サモン）…」

明久は武器を召喚する。すると、その武器は黒い闘気に包まれ、現れる。

「なっ…!？」

「…え？」

驚きの声を上げたのは根本と優子だ。

明久が召喚したのは普段明久が召喚する木刀ではなかった。柄も刃も黒く染まった黒い剣だった。

剣の正体は分からないが、明らかに下級騎士が召喚する武器ではなかった。国家騎士クラスの武器だ。明久はその剣を構える。

## 黒い剣

王都では人々の声で騒がしい。とても落ち着きがないと言うのだろうか。

それもその筈。一つは『黒尽くめの男』による国家騎士襲撃。国を代表する騎士が簡単にやられたのだ。そんな相手に自分たちのような一般騎士がかなう筈がないという負の感情を抱いていた。

二つ目の理由として、ある男の知らせによれば、今現在、『黒尽くめの男』と第二国家騎士の霧島翔子と第三国家騎士の木下優子が黒尽くめと交戦中らしい。この二人がやられれば、国家騎士は全滅となる。そうなれば確実にフミツキの勢力は衰える。そうならないよう、人々は二人に賭けるしかなかった。

そんな不安の中、さらに不安の要因を引き出す物が現れる…。

上を見上げると、交戦してる場から黒い光が見える。いや、光と言うには禍々しい光と言うよりは闘気…。その禍々しい黒い闘気が天にまで響いている。

「な、なんだアレ…?」

「黒い…。」

天にまで響くその黒い闘気はその闘気を囲むように雨雲の渦が出来ている。酷く不

気味である。

そして、王宮からもその黒い鬨気ははっきりと映し出していた。

「なんだい、アレは……」

カール二世は眉をひそめる。一体何が起きてるのかが全く理解できない。何が起きてるのかが分かるのはおそらくあの場にいる者だけだ。

あの黒い鬨気中心に空の色が邪悪なものへと変わっているようだった……。しばらく眉をひそめていたカール二世は、

「アレはまさか……!」

何かに気付いたようだった。

「何だよ、その剣は……」

根本の顔に初めて恐怖に近い表情があらわれる。明久の召喚した黒い剣から出る黒い鬨気は見る者からしたらゾツとするものだった。

「よ、吉井君」

優子も同じような気持ちだった。この鬨気を見るとまるで明久じゃない、別人なのではないかと疑ってしまいたくなる。しかし、その気持ちはすぐに消えた。

「…木下さん…」

突然呼びかけられ、優子はビクツと体を震わせる。優子は恐る恐る明久の顔に目を向ける。しかし、彼はいつも通りの優しい表情だった。

その表情を見て優子は少し安心する。

「木下さん、すぐ終わらせるからそこで待つて。必ず終わらせるから。そして一緒に帰ろう。」

明久はニコリ微笑む。

そのとき、優子に何か強い感情が芽生える。どこか恋しいと思えるほど強い思い。そして優しく温かい。それが何故かたまらなく嬉しかった。

しばらくして優子は「うん」と頷いた。そして、明久は根本の方に向き直る。

「決着をつけるぞ、根本…!」

「…三下が…!」

二人の足は同時に動き出す。そして、根本のアルマツスと明久の黒い剣が激しくぶつかる。

二つの剣がぶつかり、周りの地面には少しだが亀裂が入っていた。それほど凄まじい剣圧だったということだ。

その状態から明久は足を蹴り上げ、空中に舞う。そこから黒い剣を根本に叩きつけ

る。当然、根本もそれをアルマツスで防ぐが…。

「ぐ……お……ッ」

明久の一撃は重たかった。先程まで使ってた脆い西洋剣とは違い、太く重みがあった。そして何よりも黒い剣から発せられるこの黒い闘気が一撃をさらに強力にさせている。

そして、黒い剣が徐々に押しつけてき、根本の防御も限界になり、一端、明久から距離をとった。このままでは力負けしてしまうからだ。

恐らく一撃の威力はアルマツスよりも黒い剣の方が重たい。そこで、根本は一撃を特化した攻撃じゃなく速攻性のある攻撃を選ぶ。

「……………き、消えたっ!?!」

一瞬で根本の姿が消える。

(もらった……!?)

既に根本の剣は明久を貫こうとしていた。明久はようやくやく根本の気配に気づくが、もう遅い。明久と根本の剣の距離は零距离に近い状態だった。

「うおおおおおおおおおッ。」

すると、黒い闘気がジェットエンジンかのように炎を噴きだすかのように逆噴射する。そのせいで、根本の剣は虚空を貫いた。剣を貫いたはずの明久は遠くにいた。



「ば、バカな……！」

回避不可能の攻撃を躲され根本は驚かずにはいられない。

そして、また黒い剣から闘気が噴きだす。そして、明久は剣をやや後ろに下げる。そして先ほどの原理を使い、再びジェットエンジンのような炎の逆噴射を扱う。逆噴射により明久の体は凄まじい勢いで前へダツシユする。

「は、速い……！」

そして、黒い剣は根本を切り裂く。

「ぐあああああああああッ……！」

先ほどは明久が悲鳴を上げてたが、今度は根本が悲鳴を上げる。立場は完全に逆転した。

……しかし……。

「ま……だ……だ……！」

しかし、根本は踏ん張る。

すると、アルマツスから恐ろしいほどの冷気が出現する。周りはその冷気で凍り、地面もビキビキと音を立て氷化していく。

そして、あたり一面が氷で覆われ、さらには激しい吹雪まで吹く。明久の体も徐々に氷化されていく。だが、それは明久だけでなかった。根本も同じだった。

「…『絶対氷結』（アイス・ドシエル）…。残り五分もしない内にこの場は…イヤ、フミツキ中が氷結される。貴様らはフミツキの兵士はこれで終わりだ。」

フミツキ中凍ると聞くと大層な技だが、明らかにこの技は根本の体にも負担がかかる捨て身の技だ。明久には分からなかった。何故、彼がそうまでしてフミツキを嫌うのか。それに彼もこの王都の騎士である。

「どうしてそこまでしてこの町を嫌うのか僕には理解できないよ」

明久は正直な感想を述べる。しかし、根本はフツと笑い、

「当たり前だ。オレの両親、親友はフミツキの兵士に殺されたんだからな…。」

「…え…？」

…どういうことだ…!?

明久は困惑の表情を浮かべる。

日本は五十か国の小国に分裂していてその小国が30年前から権力を伸ばすため争い合う。その中でもフミツキは圧倒的なほどの兵力を持っていた。その理由としては

カール二世が開発した『試験召喚システム』だ。仮に兵に身体能力に欠点があったとしてもその欠点は召喚する武器の点数によりカバー出来る。しかし、他の国にはそんな素晴らしいシステムはない。

当時のフミツキは脅威と呼べる存在だった。

そして、7年前には50カ国あつた小国もわずか2か国となる。一つはフミツキ。もう一つはシワス。その2つの国が日本統一の為に争つた。

根本恭二は、シワスの国の出身者だった。

彼はまだ幼かった。敵はフミツキといことは知っていたが、戦争に狩り出される兵士と言うわけでもない。

戦争が起きてはいるというものの、根本のいる街は特に戦争による被害もなく、皆、平和に日々を送っていた。

「なあ、知ってるか？フミツキって国？」

「ああ、知ってる。この国と争ってる国だろ」

「なあ、今戦争だろ？この街も戦場になんのかな？」

「イヤ、ならないだろ」

根本は親友二人とこんな会話を交わしていた。

親友の一人は天野和夫（あまの・かずお）。坊主頭でわんぱくな感じをただ寄せる少年

だ。

そしてもう一人は桐川真子（きりかわまこ）。黒いショートヘアで清楚な感じの少女だ。この少女も普段よく遊ぶ友達である。

「でも、私は不安かな。やっぱり今は戦争だし…。」

この頃は本当に平和だった。しかし、そんな平和もある日を境に終わりを告げた。

---

「何だよ…これ…。」

街は炎に包まれる。周りを見ても生きている人間がない。赤い血を地面にこびりつけ、倒れているだけだ。その光景はまるで地獄だ。

生き残ったのは彼だけ。周りが死んでいる中彼一人だけが生きている。彼はその現実  
実に絶望した。

## 根本恭二

「ほら、恭二、起きなさい！」

「あ、あと20分……」

「ダメー！もうお昼よー！いい加減起きなさい。」

根本恭二はモソツと起き上がる。今日は休みの日だ。特に訓練所に行く必要もないのだが……。恭二はリビングへと向かう。そこには朝食が用意されている。メニューは食パンと目玉焼き。しかし、どうやら朝作ったもので大分時間が経っている。食べるんだったらもつと早く起きればよかったと嘆息する。

そして、朝食を食べ終えた恭二はいつも通り外に出る。

彼には二人の大親友がいた。一人は天野和夫（あまの・かずお）。坊主頭のわんぱくな感じをただ寄せる少年だ。

もう一人は桐川真子（きりかわ・まこ）。黒髪のショートヘアの少女で清楚な雰囲気を持たせ寄せる少女だ。実は恭二は真子に好意を抱いているがそれは本人には気づかれてはいない。

「なあ、知ってるか？」

「何を？」

坊主頭の和夫が話しかける。普段楽しげの表情を浮かべる彼が何故か真剣な顔つきだった。恭二はそんな表情が気になりつい聞き返してしまふ。

「イヤ、実は三つくらい隣の町でさ、敵のフミツキ兵が襲撃したつて噂、知ってるか？」  
「え!? そうなの!?!」

最初に声を上げたのは真子だった。それに続き恭二も顔をしかめる。

この町がいくら戦争には関係ない場とは言えまったく関係ないとは言えない。いつ襲ってくるか分からない。

「でもよ、オレの親はさ、『ああ? そんなもん来るわけない』とか言つてたけどやっぱり不安でさ」

そう言い、和夫は下をうつむく。

「まあ、確かに親とかは俺達よりもこの町に長く住んでるからな。どれだけこの町が平和とかつてのものもよく分かつてんだろ。」

恭二は親の気持ちを推測して言う。当然、子供より親の方が生きている。この町での生活も長い。そのため、親の気持ちというのも分からなくはなかった。

和夫の持ち出した話で三人の表情は暗くなる。しかし、真子は気持ちを切り替えて、  
「ホラ、暗い話は終わりにしよ! 私達遊ぶために集まったんだから楽しまなきゃ!」

真子はニコツと微笑む。

「う、うん」

「あ、ああ。それもそうだな」

和夫と恭二はうんと頷くしかなかった。

「んで、遊ぶつて言つても今日は何をするんだ？」

恭二が言うつと、二人はうーんと考え込み：

「あ、じゃあこれはどうだ？ 『冷山』（れいざん）に行くつてのは？」

和夫が提案した。

『冷山』というのはこの町から少し歩いたところにあるのだが、その山は氷で覆われ、夏でもその氷は溶けないという。そこには伝説の剣があるというのだが…。

「なあ、こんなトコで何するつもりなんだ？」

「そんなの決まつてんだろ。伝説の剣をゲットするんだよ！」

和夫は自信満々に答える。その答えに恭二は「ハア」とため息をつける。なぜならその剣は冷山にあるという噂があるだけで本当にあるという確証があるワケではない。そのため絶対見つかるとは言い切れないのだ。

それにしても山は涼しい。いや、少し寒いくらいだ。今、季節は夏だというのに外とは正反対だ。

山に入り一時間程経過すると、言いだしつぺの和夫は、

「なかなか見つかんねーな、オイ。やっぱ帰らない?」

「お前が言い出したんじゃねーか!」

すると、少し離れたところから真子が、

「ねえ、二人とも!ちよつとこつち来て!」

その声に二人は反応し、真子の下へと行く。

「何だ?」

すると、氷の棺が置かれていた。

「これ、私一人じゃ重たくて開けられないの。手伝ってくれない?」

「イヤ、待て。コレ開けていいのか?」

恭二は少し警戒する。しかし、和夫は

「いいね。開けようぜ。」

多数決で結局開けることになる。そして開けようとするが…。

「お、重い。」

三人でも中々動かない。そして十分くらい経つてようやく棺を開けることが出来た。

「…うわ…」

そこには氷塊から出来たような剣が置かれていた。そして、そこには剣の名前も刻ま



れていた。

「え…と、なんて読むんだ？コレ…。ア…ル…マツ…ス？」

「アルマス…？」

文字がほとんど消えていて読むのが難しかった。

「よし、コレ持って帰ろうぜ！」

「いや、でもこんなモンを俺達みたいのが勝手に持つていいのかわ？」

友人の提案に少し表情を険しくする恭二。

「いいんじゃない。持つて帰ろうよ。」

真子まで和夫の提案に賛成する。恭二は渋々「わかった」と頷く。

そして山を抜ける。抜けると日は落ちかかっていた。

「早く帰んなきゃなく。」

しかし、和夫は…。

「ゴメン、オレちよつウンコしたいから待つてくれない？」

「ちよつ！女子のいる前でそんなこと言わないでよ！」

和夫の言葉に真子は本気で嫌そうな顔をする。それもそうだ。女子の前でこんなことを言う男子は和夫くらいだろう。

「いや、でもこの辺りはトイレないけど…。」

「バカッ！頭使えよ！草叢という自然のトイレがあるじゃねえか！」

和夫はグツと親指を立てる。

しかし、そんな友人の言動に恭二と真子は親指を下に立てたくらいに引いていた。そして、和夫は草叢に走り、恭二と真子は二人きりになる。

普段一緒にいるが、真子は女の子だ。二人きりになると少し緊張する。会話も止まり少し気まづくなる。

すると、真子が、

「ねえ、恭二はさ、将来の夢とかあるの？」

「夢？」

恭二には一応夢があった。立派な騎士になるという。そして自分が騎士になって戦いもない平和な世界にすること。今思えばいかにも子供が抱くような馬鹿げた夢で叶いもしない戯言だ。でも、その頃の彼にはとても眩しいくらいにその夢は輝いていた。

その夢に彼女も「いい夢だね」と微笑む。

「私も恭二が言う平和な世界に住んでみたいな……。」

「……え？」

不意にドキリとする。

「そして私はそんな平和を守る騎士を支える妻。素敵じゃない？」

すると、恭二は赤面する。すると、真子はプツと笑い、  
「もしかして本気にしてた？」

「…え？お前からかかってたのか!？」

すると、恭二の顔はさらに赤くなる。真剣な空気だったので真子は本気だと思つて  
いた。

「恭二赤くなつちやつてかーわいい。」

「う…うるさいな…!」

すると、向こうから和夫がやって来る。

「イヤー、案外時間かかった。待った？」

「いや…。」

そして、三人は町へと戻る。

しかし、その頃町では…。

フミツキ軍が町に侵入しようとしていた。

「た、隊長、ホントに攻めるんですか？」

「当然だ。この町にはシワス兵の武器の倉庫があるんだからな。それにこの町出身の有  
力な兵は何人もいる。ここは潰さねばならん。だが、一般人は攻撃するな。悪魔で倉庫  
の破壊を優先しろ。だが、一般人でも抵抗するようだったら…殺しても構わん。」

しかし、隊長の目は抵抗しようとしなかりと別に殺していい、そんなふうにも見え  
た。

「行くぞ」

三人は町に戻る。だが、いつもと違う町の光景に三人は啞然とする。町は火に包ま  
れ、赤い血を地面にこびりつけ倒れる人が何人もいた。

町には何人もの兵士がいる。兵士の軍服には五芒星が描かれていた。これはフミツ  
キ軍のマークだ。

フミツキ軍は逃げる人を無差別に殺しているように見えた。これはもう虐殺と言っ  
ていい。

「ヤバいぞ、俺達も逃げなきゃ…」

三人は必死に隠れながら逃げる。物音ひとつ立てれば殺される空気。息を殺し、三人  
は音を立てず、ゆっくりその場を離れる。

「か、母さんや父さん、無事かな…?」

和夫は涙目で言う。

「わかんねーよ。でも、今、出れば殺されるぞ。」

「とりあえず、あそこに隠れない？」

真子が指差したのは武器倉庫だった。とりあえず三人はそこに隠れることにする。

「ここならそう簡単には見つからないだろうな……。」

三人ともホッと一安心する。この倉庫には今のところ近づいてくる兵士はほとんどいない。そのため襲われる心配は少ないのだろうが……。妙なのはこの倉庫だけ建物が無事ということだ。それ以外の建物は燃やされているというのにここだけは何ともない。

ドゴオオオオオッ！

倉庫の入り口付近で爆発音がある。見ると、フミツキ兵がこちらに近づいてくる。だいたい十人くらいか。そしてついには三人の姿がばれてしまう。

「オイ、子供がいるぞ！」

すると、兵は迷わず恭二たちに銃口を向ける。……そして……

ドオオオオン！

銃声音。そして次にバタリと倒れる音。見ると、和夫が倒れていた、銃弾が頭を貫通していた。もう死んでる。

心臓の音が激しくなる。そして恭二はワケが分からなくなり兵士に噛みつく。

「デメツ、このガキッ！」

ドオオオオンッ!

再び銃声音。しかし、銃弾が貫通したのは恭二ではない。貫通したのは…

「ま、真子!」

彼女はゆっくり倒れる。

「ぐ…め…ん。きよう…じ。」

真子は苦しそうに喋る。

「きよ…うじ…の妻に…なるって約束…果たせ…なかった。」

「お前、さっきの言葉は本当だったのか!」

先程、真子は恭二をからかうようにその言葉を言った。だが、それは本当だったらしい。

「…だつ…て、私、恭二…のこと…好き…」

すると、彼女の瞳は閉ざされる。その瞳はもう開くことはない。

「…ま…ん…」

不意に彼女との記憶が脳内に過る

『ねえ、恭二はさ、将来夢とかあるの?』

『うーん、立派な騎士になってこの国を戦争のない平和な国にすることかな…。何か変かな?』



## 決着

何故、和夫が死ななければならぬ？

何故、真子が死ななければならぬ？

その現実が許せない。そして二人を殺したコイツ達が許せない…。…殺す…！

「うああああああああああああああああッ！」

恭二は手元にある氷の剣を握る。その剣は恭二の憎しみに反応し、冷気を呼び出す。

「な、何だ!？」

「どこからこんな冷気が…ッ！」

予想外の出来事にフミツキ兵も動揺を隠せない。…すると、

ドシュッ

肉が裂けるような音がする。氷の剣を持った恭二がフミツキ兵の一人を切り殺したのである。

「このガキイツ！」

そこにいたフミツキ兵全員が恭二に銃口を向ける。だが…。

向けた重工は氷の剣より発せられる冷気により氷結される。これでは武器を扱うこ



とはできない。そんなフミツキ兵を恭二は容赦なく斬り捨てていく。

そして、残り一人…。

「ヒイイツ！頼む、見逃してくれ！オレが悪かった！」

最後の一人は命乞いをした。だが、そんなものは当然許されるはずがない。

「……。」

恭二はそのまま最後の一人を斬る。

「……うるせえよ……。」

そして恭二は倉庫の外に出る。外にはまだたくさん兵士がうろついている。恭二はフミツキ兵に端から襲い掛かる。

憎くて仕方がなかった。きつとこの憎しみが癒えることはない。だが、それを敵を斬っていくことで癒えると思った。だが、それは叶わなかった。

燃える炎の中ただ一人、恭二だけが立っていた。他の人々は既に死んでいる。自分だけが生きている…。

「……つ……。」

彼に目から血のように紅い涙が零れる。

「まるで地獄だな……。」

そんな世界に彼一人しかいない。残酷としか言いようがない光景だった。

『私、もし恭二が平和を守る騎士になったら私は恭二の妻になる。そして一生支えてあげる。ずっと傍に居る。約束だよ?』

不意に彼女の言葉が脳内によぎる。

だが、もうそれは叶わない。平和を守る騎士になるところか自分は憎しみにおぼれた殺人者。そして何より彼女はもういない。

「だから、オレは殺す。フミツキ兵を。」

真実を聞かされた明久、優子には衝撃的だった。卑劣な殺人鬼にそんな過去があったなんて誰も思わなかったからだ。

「何故、フミツキ兵だけが戦争の罪の十字架を背負わずのうのうと生きている!?! それだけがどうしてもオレは我慢できない。それに吉井明久、お前なら分かるだろ? この国の卑劣さを。国の為ならこの国は何でも壊す。お前の『姉』と『幼馴染』がいい例だ。」

嘗て明久は大切な人を二人失った。本当に大切な人だった。

「君は僕のことを知っているの!?!」

まるで自分を知っているような口ぶりの根本に明久は問う。



しかし、明久の剣は弾かれる。そして明久は蹴り飛ばされる。

「吉井君ッ！」

優子が呼びかけるが、返事はない。

「終わりだ、吉井ッ！」

根本の剣が明久を襲う。その瞬間——。明久はアルマツスを素手で止める。

「…なっ…!?!」

あり得ないことだった。当然素手で止めたため彼の手は血に染まる。だが、今まで国家騎士レベルの武器を素手で止めるなんていう馬鹿な行為に走つたのは明久が初めてだろう。

「うおおおおおおおッ！」

明久は足を踏ん張り、右の拳をギュッと握る。その拳は根本の顔面を食い込むように入る。

「ぐあああああッ！」

そして、隙だらけになった彼を一発、二発と次々に拳を入れてく。そして、最後に明久は剣を取り、その剣を根元に向ける。根本も明久に剣を向ける。

…お互いにこの一撃が最後…

一撃は根本の方が速かった。明久の剣よりも先に根本の剣が入る。

(これで終わりだ！)

しかし、明久は剣をピタリと止め、代わりに左の拳を根本に入れてく。根本の剣より、明久の拳の方が速かった。

(…しま…っ)

気づいたときは遅かった。明久の拳は根本の急所に入り根本はそのまま倒れる。

「…勝った…！」

そう言った直後明久も立つことに限界を感じ、倒れる。

戦いは終わりを迎えた。

「おい、吉井…」

「…何？」

根本は倒れた状態で明久に呼びかける。明久も倒れた状態で返事をする。

「何故、お前は自分が変わらなと言いつける？何故自分を信じれる？」

根本の質問の意味がよく分からず少し戸惑いの表情を見せる明久。だが、その表情は

すぐに消える。つまり、彼はこう言いたいのだ。大切な人がいなくなり、根本は自分でなくなることを感じていた。平和を望む少年から憎しみにおぼれる殺人鬼へと。しかし、明久は違った。口には表してなかったが、彼の眼差しにはどんなことがあっても自分が変わらない、そう断言していたのだ。

「いいや、信じてなんかないよ。僕は自分を信じるほどの勇氣なんかないよ。ただ自分の周りにいる人たちの存在が吉井明久という存在を支えてくれている。だから強くない。ただそれだけだよ。」

人間一人が強いわけではない。それを取り囲む人間がいるから強くいられる。それは当たり前のように見えて当たり前じゃない。

ずっと忘れていた。あの頃も和夫に真子といった存在があつたから国を平和にした。いという大きくて叶いもしない夢を抱いていられたのだろう。

そう、叶いもしない馬鹿げた夢。しかし、夢でもいい。もう一度だけその馬鹿げた夢を抱いて走っていききたい、そう思えた。

翌日…。

優子は明久の見舞いに来る。

ノックをしそつと病室に入る。明久はいつも通り「スピースピー」と鼻息を立てて眠りについていた。

優子はホツと胸を撫で下ろした。この光景を見るとようやくいつも通りに戻れたんだと思った。

大怪我してるものの、医師たちの医療系の召喚武器で治療すれば、一週間で退院できるといふ話だ。

そつと明久の額に手を当てる。すると、パチツと目が開く。

「ひえっ!？」

甲高い声を上げて驚く優子を明久は何?という目で見る。

「アレ?木下さん?今日は日曜だけど…。」

「吉井君、アナタ寝ぼけてるでしょ?」

どうやら自分の家と病院を勘違いしているらしい。

「そつつか、根本は地下牢に…。」

「うん。『八大地獄』(はちだいじごく)と呼ばれる八つの監獄の内最下層の『無間』(むけん)に配送されたわ。」

これだけの騒ぎを起こしたのだ。当然といえば当然だが…。

それにしても先程から優子がそわそわしている。何か言いたそうに明久をチラチラと見ているのだが…。

「どしたの？木下さん。そわそわしてるけど…。あ、もしかしてトイレ行きたいとか？」  
「…吉井君、ここの手首の骨を折ればその口は閉じるのかしら？」

そわそわした態度から殺気に近い表情に豹変したため、明久は素直に「すみません」と謝る。

「よ、吉井君」

「何？」

「そ、その…ありがとう…。」

優子は頬を赤くさせて言う。

「え…？」

今まで優子が素直にこんな言葉を口にしたことがなかったので明久は正直驚いた。

（…毒キノコでも食べたのだろうか？）

そんな風に推測する明久。根本を倒した後でも馬鹿は変わらないようだ。

「その、吉井君が助けに来る前まで私、根本に殺されるんじゃないかって、ずっと不安だった。でも吉井君が来た時、私、心の底から安心したの。おかしいよね、私は国家騎士だからホントは吉井君を守らなきゃいけない立場なのに…。」



すると明久は、

「ううん。そんなことはないよ。木下さんが無事で良かったよ」

そう答えると優子は小さく「そう」と言い、頬を赤く染め下を俯きながら

「ねえ、吉井君。その、これからもずっと私の傍に居てくれる？」

すこし緊張してようだった。

しかし、明久の答えには迷いはなかった。

「もちろん。ずっと傍に居る。約束する。」

ニコリと笑い、言う。

瞬間、優子は爆発したように顔を赤くする。

優子はこの気持ちがあんなのか後になって知ることになる。

## 日常編Ⅱ

## 二週間後

根本の一戦から一週間——。

明久の傷はすっかり癒え、いつも通りの生活を送っている。

「吉井、もう一度『係り結び』の『係り助詞』を言ってみろ」

吉井明久は訓練所の一時限目の授業を受けていた。一時限目は古典だった。

騎士とはいえ、学力は欠かせない。その証拠に絶対とは言えないが『召喚武器』はテストの点数に比例する場合が多い。

そして、明久が今、古典文法の『係り結びの法則』の『係助詞』を質問されている。答えは「ぞ」、「なむ」、「や」、「か」、「こそ」なのだが…。

「えーと、『z』、『N』、『Y』、『K』、『K』です。」

何故か古典なのにアルファベットが出てくる。それもイニシャルで。

「吉井、貴様は古典をなめてるのか!?!」

すると、明久は…。

「鉄人、僕は古典は舐めてません! 飴は舐めてますけど!」

真顔でキツパリと答える。よく見ると明久の頬が膨らんでいた。

「吉井、貴様には嘗てない地獄を見せてやるべきだな」

鉄人は関節をポキポキと鳴らす。殺意の対象は明久のハズなのに他の訓練兵に向きだされているような感じがまた一段と怖い。

「ゲツ!?嘘っ?」

戦闘モードに入る西村教官を見て明久は外へ逃げようとする。…しかし…。

「吉井君、何処に行く気かしら?」

逃げようとした先には監視役の優子が立っていた。

「き、木下さんッ!」

後ろを振り返ると既に鉄人との距離は零だった。

「ぎゃああああああああああつ!」

そんな明久の叫び声も空しく虚空へと消える。

そして放課後――。

「アキ、アンタたまには真面目に授業受けたらどうなの?怒られてるのはアキのハズなのに私達が怒られてるみたいなんだけどっ!」

美波は本気で嫌そうな顔をする。それもそうだ。明久が問題を起こす度に西村教官は戦闘モードを発動するのだ。他の訓練兵からしたらいい迷惑だ。

「イヤ、なんで僕だけに言うの!?それを言うなら雄二だって寝てるし、ムツツリーニだつてエロ本読んでるし!怒られるべき対象は僕だけじゃないハズだ!」

すると、雄二とムツツリーニはやれやれ…と言い。

「…分かってないな、明久。」

「…分かってない…」

やけにクールそうな二人を見て明久は気味が悪くなる。

「そういうのはばれない様にしてやるんだよ、バカ」

どうやら二人は先輩的なアドバイスをしたつもりなのだろうが、先輩的になれる分野が負の分野ではないことに嘆きたくなる。

それにしても平和だ。二週間前の事件が嘘かのように…。

どうやら、根本を倒したのが明久というのはその場にいた優子と翔子、あと王族、そして国の代表ともいえる国家騎士くらいしか知らされていない。というより極秘扱いとなつている。

階級的に一番下の下級騎士である明久が一番上の階級である国家騎士に就く根本を倒したのだから…。一番強いのが国家騎士…そんな現状が覆された事件でもあった。しかし、そんな現状を町の人々に教えるわけにはいかない。そのため、このことは極秘とされている。

しかし、それ以外に一人だけ根本を明久が倒したという現実を知る人物がいた。

「明久……」

明久を呼んだのは秀吉だった。

「何？秀吉……」

「ありがとう」

秀吉から出た言葉は感謝の言葉だった。明久は「ふえ？」と間拔けな顔をするが……。

「この事件で本来なら姉上は殺されてもおかしくなかった……。でも、今、姉上はこうして生きておる。お主のおかげじゃ、明久。」

ニコリと秀吉は微笑む。その笑顔にドキリとした。

（あとは女の子だったら文句ないんだけどな……。）

素直に感謝され、嬉しい気持ちの反面、少し残念な気持ちもある。こんな可愛い顔をして男？こんなことがあっていいのだろうか？そんな気持ちだった。

「じゃあ、私はそろそろ帰るね。」

「え？もう帰るの、美波？」

「うん、美春のお見舞いに行かないと……。」

少し寂しげな表情だった。そう、美波の友人の清水美春さんもあの事件の被害者だったのだ。そのせいか美波は少し元気がない。

「明久……じゃない馬鹿！俺達も帰ろうぜ。」

「何で馬鹿って言い直した!? コラ」

馬鹿扱いた雄二にキレつつも帰る準備をしたその時だった。

「吉井君ッ！」

ドアをバンツッ！と音を立てて現れたのは優子だった。

「き、木下さん!?!」

「陛下が呼んでるわ。一緒に王宮に来てもらえる?」

「へ? ババアが?」

(何かババアに呼び出される程の問題を起こしただろうか?)

そう思いつつも王宮へ向かうことにする。

「お久しぶりです。明久君。」

王宮に着いて真っ先に声をかけてきたのはヒメージ三世だった。

「あ、ども。」

一応、王族の人間なので軽く一礼する。相変わらずこのお姫様はピンク色のドレスを着ている。このお姫様にはピンク色が何故か似合っていた。

すると、隣にいた優子が明久の足を思いつきり踏む。

「…いッ!？」

いきなり踏まれたので思わず明久は声を上げてしまう。

「な、何すんのさ!?!木下さんッ!？」

「別に。ただ、さつきからそこのお姫様をいやらしい目で見てたから。」

優子は「フン」と頬を膨らませて言う。

明久はただヒメージ三世の服装は城下では中々見られない服装だったので不思議そうに見てただけだったのだが、優子にとってはそれもいやらしい目で見てるのと同じなのだろう。

「んで、お母さんはどこに居るの?？」

明久はヒメージ三世にカロール二世の場所を聞き出す。

「お母様なら向こうの奥の部屋にいますよ。」

ヒメージ三世の指差す方向に明久と優子は歩いていく。そして、部屋の前までたどり着き、ノックをし「失礼します」と言い、静かに入る。

「よく来たね」

カロール二世は鉄板で肉を焼きながら明久達を迎える。明久達は話をしに訪れたのだが、カロール二世の行為は明らかに話をするときの態度ではない。何が「よく来たね」

だ。

「今回はお前に話があるんだよ、吉井明久。」

「へ？僕？」

カール二世の顔は真剣だった。その表情だけで大事な話をするというのが感じ取れたが…。「ジュージュー」と肉を焼く音がうるさい。この音のせいで真剣な雰囲気も台無しだ。

「何となく呼ばれた理由は分かっているんじゃないのかい？お前の『召喚武器』についてだよ。」

「召喚武器…。」

そう、彼の召喚武器は今までは木刀だった。だが、根本の一戦で黒い漆黒の剣を召喚した。

「アンタはあの剣を知ってるのか!？」

「ああ、知ってる。」

カール二世は静かに頷く。

「お前は召喚する前に何か見たんじゃないのか…？」

「…何か…見た…？」

すると記憶は黒い剣を召喚する前へと遡る。



そこは何もない場所だった。何処までも白く広がる世界。そこにいるのは明久しかない。

しかし、後ろからこんな声が聞こえる。

『アナタがこの剣を持つのにふさわしい』

金髪の長い髪を靡かせた小柄な少女がそこにいた。彼女は『黄金の剣』を持っていた。

『アナタにこの剣を授けます。アナタならきつと扱える。』

そう言い、明久にその剣を手渡す。少女はそのままこの白い澄みきった世界から姿を消してしまふ。

「どうだ？心当たりあるだろう…？」

カヲール二世はニヤリと笑う。

「アレは夢…じゃなかったんだ。」

明久は少し呼吸を荒くして言う。

「何を見たのか説明してもらおうか…？」

カヲール二世は明久に問い詰める。もちろん肉を焼きながら。

「黄金の剣を持った少女が…いた。」

すると、カヲール二世は納得したように頷いた。

「成程な……。お前は本当はその黄金の剣を召喚するはずだったんだ。」

「……？ どういう……？」

「お前の持つ黒い剣は不完全ということだよ。本来はそこで黄金の剣を召喚するはずだった。だが、お前は下級騎士だ。武器の点数も足りてない上にあのときお前は根本に對する『憎しみ』も抱いてたんじゃないか？」

「ようするにババアはその二つが原因で本来召喚されるはずの黄金の剣じゃなくて、黒い剣が召喚されたって言いたいのか？」

明久が聞くとカヲール二世は少し難しそうな表情を浮かべる。

「だが、それだけが原因とは言い切れない。」

「……？」

「とりあえず、此処で黒い剣を召喚してみろ。」

「さ、サモン！」

カヲール二世に言われ、明久は渋々黒い剣を召喚する。

「……やはりそうか……。」

カヲール二世は再び納得したような表情を浮かべる。だが、明久は先程からカヲール二世が何を言いたいのかさっぱり分からない。隣にいる優子は疑問が多いせいか、何が

何だか分からないというような表情を浮かべている。

「以前、お前以外にもこの剣を使っていたヤツがいた。それもお前と色違いの『白い剣』だ。」

「…ハ…？」

話がさらにややこしくなっていく。

## 白い剣

「白い剣…?」

カヲール二世は昔明久の黒い剣と全く同じ剣を使っていた人物がいたという。それも色が違うだけで刃の長さ、柄といった形状は全く同じらしい。

「ソイツもお前と同じようなことを言っていたよ。その剣を初めて召喚するとき『黄金の剣を持った少女』が見えた…とね。」

カヲール二世は焼いた肉を口に頬張る。とても美味しそうだ。

「誰ですか?その剣を持つ人間は…?」

すると、カヲール二世は「ハア」とため息をつく。同時に肉を食べるために進んでいった箸がピタリと止まる。

「…嘗て第一国家騎士を務めた騎士…。吉井玲だ。」

明久は聞いた途端、体全身が硬化する感覚に襲われる。硬直したまま動けない。

…その名前は…。

固まったままでも話が進まないのゆっくりと口を開いていく。

「姉さんが…?」

「そうだ。」

吉井玲。その名前は明久の死んだ姉の名前である。

「お前の姉の持っていた武器は本来は『衾々切丸』（ねねきりまる）だった。だが、その刀はあるときに『白い剣』に変化した。」

明久も少しだが、この刀の知識があった。『衾々切丸』（ねねきりまる）室町時代に作られたと言われている。

しかし、今現在、この刀に関する話はどうでも良いのだ。吉井玲が使っていたこの刀が明久の持つ黒い剣と全く同じ白い剣に変化したというのだ。

だが、明久も今、召喚武器に今まで使っていた木刀はない。玲と同じ現象なら明久の木刀も『黒い剣』に変わったといえる。

「いいかい。どんな騎士でも下級騎士の時に使ってた武器、中級騎士、上級騎士と階級ごとに武器は使い分けしてるんだ。例えば、優子の持つ『鬼切』。これも優子が国家騎士に昇格して得た武器であって、優子が下級騎士時代に使っていた日本刀とは違う武器と言える。」

「…なるほど」

明久はカール二世の難しい説明に何とかついてくる。

「だが、お前の姉に関してはいレギュラーな召喚をしていた。下級騎士時代は木刀、中級

騎士に昇格したらその木刀は日本刀に変化し、上級騎士に昇格すると『祢々切丸』、国家騎士になると『白い剣』に変化：イヤ、進化していった。」

「えーと…要するに？」

『召喚武器』は絶対に進化しない。どの騎士も昇格したら新たな武器を召喚出来るんだからな。そのハズがお前の持つ黒い剣と玲の持つ白い剣はその現状を覆してると言ってるんだよ。」

「どうして、こんな…。」

自分でも分からなかった。明久はカヲール二世に呼ばれた時、何となくだが『剣』の話をされるんだらうと分かった。明久も正直、自分の剣の正体ぐらいは知っておきたかったからだ。下級騎士のハズが何故こんな強力な剣を召喚したのか？？少しそれが怖かった。カヲール二世なら何か知ってると思っただが、剣に関する情報を少し持つてるだけで、剣の正体までは把握できていないようだった。

黒い剣を召喚する前、『黄金の剣を持った少女』が何も無い白い異世界の中に現れた。きっとその少女は明久の持つ黒い剣に何か関係してるのは間違いないかった。

だが、その少女は一体何者なんだろう？？そう考えた瞬間だった。

「…ぐ…っ!?!」

急に頭痛が襲う。

「よ、吉井君ッ!？」

倒れ込む明久に駆け付ける優子。再び焼肉を食べ始めたカヲール二世も食べるのをやめ、傍に居た竹原に「医者を呼べ!」と命令する。

「うっせーな、今そうしてもいいかな〜なんて思ったところだボケ!」

こんな時でもカヲール二世に反抗する態度は忘れない。

明久の意識は少しずつ闇に吞まれていく。

そこには一面に花が咲いていた。バラや桜といった目立つ花ではないが、金色の髪を靡かせたその少女にはその花が異様に似合っていた。

「この花の名前、知っている?」

その少女は明久に静かに尋ねる。

「いいや、知らない。何ていうの?」

明久は少し興味があるかのように聞いてみる。

「ワスレナグサ。綺麗でしょ?」

「うん。」

明久は頷く。しかし、その少女がその花を輝かせているようにも見えた。

「この花はねある騎士が死に際に恋人にこんな言葉を残したの。」

「どんな……？」

明久は再び興味があるかのように聞いてみる。すると、少女はニコリと微笑み、こう答える。

「……『私を忘れないでください』……」

それがこの花に込められた思いだと彼女は告げる。

「明久君はもし、私が死んでも、私を覚えててくれる？」

彼女は笑って言う。しかし、その笑顔は何処か悲しさを感じさせる笑顔だった。

ワスレナグサという花に囲まれ立つ少女。靡く金色の髪が一層ワスレナグサを輝かせているようにも見えた。

何処か懐かしい光景。しかし、それは何処か悲しくもあった。それはあの少女が悲しそうに笑うせいだろう。

少しずつ世界は夢から現実へと戻っていく。

「吉井君！」



明久の目の前には優子がいた。

「(い)は？」

気づくと明久はベッドの上にいた。見覚えのない場所に不思議そうな顔をする。

「病院よ。ホント心配させないでよね」

平静を装うとしている優子だったが、顔には本気で心配した表情が浮かんでいる。

「医者も少し休めば大丈夫ってことだそうだ。」

奥から出てきたのは竹原だった。無言で病室に入って来たので明久と優子は同時にビクツとする。

「そ、そうだ。何か飲み物買ってくるね」

そう言い優子はさっさと病室を出る。普段ならこんな気の利くことをしない優子だが、いきなり激しい頭痛で倒れたりでもしたら、気を使いたくなってしまうのも無理は無い。

「んじゃ、失礼」

竹原も低い声で言い、病室を出てしまう。

「……………」

それにしてもあの光景は何だったのだろうか？何故か懐かしく感じる。

しかし、明久はあの少女を知らない。長い金色の髪を靡かせるあの少女を。

知らない。知らない筈なのにどうしてこんなに懐かしく切なく感じてしまうのよく分からない。それほど懐かしい光景だった。

…まるでその少女の記憶を失っているかのような…。

そんな風にも感じられたのだった。

「陛下。」

「何だい？」

カロール二世に話しかけたのは竹原だった。

「この機会に話しても良かったのでは？ 『彼の記憶』 について…。」

しかし、カロール二世は眉間にしわを寄せる。「それはダメだ」というような表情だ。「無理さね。まだ話すわけにもいかないし、話したところで本人を傷つけさせるだけだ。」

しかし、竹原も食いつくように、

「しかし、陛下。先程、彼の部屋に行ったとき彼は斃されていました。彼は『彼女』の名前を呼んでいた。」

すると、カロール二世は驚愕の表情で、

「思い出したのか!? 『記憶』を…!?」

「そこまでは知らねーよ!」

「おい、言動が綻び始めてんぞ!」

竹原の言葉遣いに突っ込みを入れる。

「竹原、このことを知るのはお前以外にいるのか?」

「いいえ、いないぜ。」

「お前、敬語使うか、私語使うかどっちかにしろよ。」

竹原の妙な言葉づかいに溜め息をつくカロール二世。もういろいろと性格（キャラ）が定まっていない感じだ。

「いいか?このことは絶対他言するな。無論、私も他言しない。特にアイツの前ではな…。」

「分かりました。」

竹原は静かに頷く。

今まで封印されていたファミツキの過去という鍵がほんの少し…。ほんの少しだけ開く瞬間だった。



## 鉄人

フミツキを代表する騎士は誰もが知る通り『国家騎士』と呼ばれる選ばれた七人のことを指す。

しかし、フミツキにはもう一人強力な力を持つ騎士がいた。彼の名前は西村宗一（にしむら・そういち）。又の名を「鉄人」。

彼はフミツキ兵で唯一武器を持たない騎士である。だからといって彼を嘗めてはいけない。彼の体はある意味では召喚武器よりも強力な一つの武器のようなものだ。

どんな硬い物も一撃で粉碎する鋼のような拳。皆、空気の抜けたボールでサッカーするのに対し彼は鉄球でリフティングをこなすという並外れた脚力。

彼の噂は王都中に広がっていた。これはそんなアイアンボディを持った男の物語である。

---

西村宗一は普段訓練兵の教官を務める騎士だ。

今日も訓練兵を一人前の騎士にするため訓練所へ向かう。そして、扉を開けた時だっ

た。

「雄二イーーーーー！！」

「明久アーーーーー！！」

何と二人の訓練兵が殴り合ってる。足元には壊れたゲーム機と音楽プレイヤーが転がっていた。

「貴様、僕のPSPを何だと思ってる!?木下さんが監視役だかよく分からない任務に就任して以来、僕のエロ本とかエロ本とか漫画とかPSPが全て売り飛ばされて…そこからどれだけ苦労してお金溜めて買ったPSPを貴様アーーーーー！！」

話を察するに明久は雄二にゲーム機を壊されたらしい。どうやら雄二に対して怒ってるのだから、自分の過去を語ってるようにも感じた。過去というよりは惨劇に近い気もするが…。

「やかましい！オレだってなア、翔子にエロ本見つかってビリビリに破かれて…それで苦労しようやく手に入れたiPodだぞ!?それを明久テメエーーーーー！！」

明久と同じように自分の惨劇を語るように怒る雄二。しかし、言葉から察するに、エロ本見つかって破かれて悔しいならば、iPodではなく、エロ本を買うべきなんじゃないかと突っ込みも入れなくなるが…。

しかし、そんなことは西村にはどうでもいいことだ。訓練兵を一人前にすることが彼

の役目だ。今の二人を見る限りじゃ、立派になるところか崩壊寸前の状態だった。

「貴様ら、ここは訓練する場所であつて喧嘩する場ではないッ！」

怒鳴つて止めようとするが彼達は聞こえていないようだ。そして西村の注意を無視し、そのまま殴りあう明久と雄二の拳が西村に直撃する。

「……ゲツ……」

ここで初めて二人は西村がいたことに気づく。

すると西村は満面の笑みで、

「そうか、そうか。お前たちはそんなにオレの鬼の補習が受けたいか？ そうかそうか。」  
笑っている。だが、何故か関節を慣らしている。明久と雄二にはそれは恐ろしいほどの殺気にしか感じなかった。

「ふんっ！」

西村の拳が二人の顔面に思いつきり直撃する。

「ぎゃあああああああああッ」

二人は泣き叫ぶかのように絶叫する。

これが西村宗一の一日のスタートともいえる仕事である。

一時限目が始まる。授業態度は最悪だ。

一番多いのは寝る、喋る。とところどころ隠れ食い。だが、一人だけ堂々と授業中に食べている訓練兵がいた。いや、そもそも食べてるといふより吸ってるに近い。

「おい、土方。授業中にマヨネーズ吸うのはやめろ。」

「大人には分からないだろ……。この味が……。ジュルルルル。」

勝ち誇ったような顔でマヨネーズを再び吸い始める。べつにこんなところで勝ち誇った表情をされても羨ましくもなんともない。むしろドン引きだ。その証拠に周りの訓練兵は目を覆ったり、鼻をつまんだりしている。

「貴様……。授業中に食べるのは……。」

土方の下まで行って説教をしようとする。だが、そこで西村はとんでもない光景を目にする。それもマヨネーズを吸うよりも酷い。

「何をしている？近藤？」

「ヨガです。」

西村は眉間にしわを寄せた。この世に授業中に素っ裸でヨガをする者がいるだろうか……いや、だがその現実を簡単にぶち壊す馬鹿がそこにはいたのだ。

「先生。いいですか？何もちゃんと机に座ってペン持つてノートに書くことが勉強とは思いません。どんな姿でも、どんな格好でも内容を理解できればいいと思うんです。自



分はこの前まで分詞構文が分かりませんが、ヨガをしながら学ぶことで分からない単元も分かるようになりました。要は分かればいいんです。」

すると、当然訓練兵の中にはドン引きする者がいた。当然西村もドン引きだったが、中には目を潤ませ感激したのか拍手する者もいた。そいつは恐らく馬鹿だろう。

ヨガをしながら勉強できるのはある意味では才能なのだろう。…しかし…。

「近藤…。ヨガをしたいなら家で好きだけすればいいが…。ここは訓練所だ。そんな行為が許されないというのは当然分かってるつもりだが…？」

すると、近藤は全身から冷や汗が出る。一応西村の言いたいことを理解したらしい。「服を着ろっ！」

西村の拳が思いっきり近藤の腹に命中する。

「ぐはアッ！」

澁々服を着ることにする。

次は体育の時間だった。

訓練所では召喚武器を扱えるようにするために実戦訓練もあるが普通に体を動かす

こと、基礎体力をつけることを目的とした体育もあった。

「よし、今日は二十分完走だ。」

ただひたすら走るだけだ。訓練兵の中には「えく」と言う者が多かった。

先ほど問題を起こしていた明久、雄二、近藤、土方も今回はちゃんとやってるようだ。フミツキで一番の問題児の明久が真面目にやつてるなら他の生徒は大丈夫だろう…。ホッと一安心する。

しかし、先程からブンツ、ブンツと空気を擦るような音がする。

「…ん？」

妙だな…と思ひ、西村はその音がする方へ向く。

すると、そこにはよく近藤、土方、沖田とつるんでいる山崎が皆必至で走る中を、必至でバドミンントンの素振りをしていた。

「おい、山崎」

しかし、山崎は聞こえなかったのか素振りをそのまま続ける。

素振りを無理やりやめさせようと本人のいる所まで近づくと…。山崎は誤ってラケットを投げてしまった。そしてそのラケットは西村の頭にコッーンと音を立て綺麗に当たる。

「や・ま・ぎ・ぎ」

「はっ!? て、鉄人!」

そこでようやく鉄人の存在に気づく。だが、もう遅い。彼は既に戦闘モードに入りかかっていた。

山崎は必死に逃げようとするが、十秒も経たない内に鉄人に捕まる。

そして、鉄人は瞬時に山崎の後ろに回りこむ。そして、両手の人差し指に力を集中させる。

「千年殺しッ!」

「ぎゃああああああああっ!」

その人差し指は尻の穴に命中する。その威力は指が尻を貫通するのではないかと思うくらいの威力。その証拠に指が命中すると共にズドンッという音がする。喰らったものは間違いなくと言っていいほど痔になる確率が高い。

山崎は尻を抱えながら涙目になる。

---

午後四時半。訓練兵は授業も終わり、帰宅する時間である。

そこで教官である西村はホッと一息をつく。ようやく一日もほぼ終わったと思える時間だ。

まだ教官としての仕事はまだ少しだけ残っているが、訓練兵の授業に比べれば大したことはない。

一息つくためにコーヒーを飲んでいたそのとき…。

電話が鳴る。普段はこの時間帯は電話などまったく掛かってこないのだが…。「何だ?」と思いながら電話を手にする。すると…。

『た、助けてくれっ!』

「もしもし」と言う前にいきなり助けを求める声が響く。

「どうしたんですか?」

『アンタのところの訓練兵がうちの武器を使い荒らしてんだよっ!』

恐らく電話の主は武器ということから武器店の店員だろうと推測する。電話の説明だけじゃ現状が分からないので現地へ赴くことにする。

そして…。

「バカ野郎ツ! お前このメリケンサックのこの使い心地分からねえかつ!? こう使つててペアアつてなる感じ!」

「雄二! その木刀の素晴らしさ分かんないかな!?! これ、刀よりもスパって斬れんだよ!?! スパって!」

「良いだろう、なら試してみるか!?! 明久。」



## 如月ハイランド

根本恭二の一件から約20日ほど経つ。

私、木下優子は相変わらず彼、吉井明久の監視任務を務めている。何故、こんな任務に就いているか？

理由としては吉井明久は王都中を騒がせる問題児だからだ。例えば、スーパーの試食コーナー。これは知つての通り試食するための場である。だが、彼の場合、それを一食分：いや、一日分の栄養を摂取するかのように食い尽くすのだ。

他にもソーセージの取り合いで坂本雄二と商店街のど真ん中で喧嘩したり、エロ本を買う為に千円札を偽造したり、女子更衣室を除く（これは土屋康太という吉井明久の悪友を含む）など、数々の負の伝説を作り上げた少年である。

そんな彼を危険視したカヨール二世は私を監視役として任命する。正直「え？ウソでしょ？」と言いたい気持ちだった。

しかし、そんな負の伝説を持つ彼だが、自然と周りには彼に寄つて来る者が多い。最初はそれを不思議に思っていた私だったが、根本の一戦で何故いろんな人たちが彼に寄り添いたくなるのかを理解する。

彼は人に迷惑をかけることはよくあるが、人を傷つけるようなことは一切しない。それどころか周りを和ましてくれる。みんなそんな彼に惹かれているんだろうと思う。

私もこの戦いで彼には助けられた。この事件では国家騎士が次々消えていくという事態の中、私はいつ自分が殺されるか不安で仕方なかった。しかし、そんなとき、彼、吉井君は下級騎士にも関わらず私を案じてくれた。そして「ずっと傍に居る」と言ってくれた。それだけじゃない。根本の攻撃で私が殺されそうになった時も彼は私の前に現れた。自分が殺されるかもしれないにも関わらずだ。

だから彼には感謝している。だから私は彼に感謝の気持ちを表したいのだが、私は自分の気持ち素直に表すのが苦手なせいかどうしても攻撃的な言葉を吐いてしまう。

…どうしたものか…

私はレストランである一人の友人と食事をしていた。

「へエ、国家騎士って国の代表って言うくらいだから憧れたりもするけどやっぱり大変なんだ」

「まあね。特に監視役に任命されてからは大変かな…。」

私はため息をつきながら言う。話の相手は工藤愛子。この国の上級騎士に所属する

騎士だ。

「その監視の対象の吉井君ってカッコいいの？」

愛子は悪戯っぽく聞いてくる。顔がニヤニヤしている。それはどうも私には不快に感じたがキツパリと、「イヤ、全く。」と答える。

「え〜…そうなの？」

残念そうに言うがニヤニヤな顔はそのままだ。彼女との付き合いは長いが昔から何を考えているか分からない人物だ。

「…何か企んでるでしょ？」

「別に？たださつきから吉井君の話すると優子楽しそうだったから…。」

「…え…？」

すると自分でもよく分からなかったが、顔が沸騰するように熱くなった。

「…もしかして…？」

「ち、違うってば！」

必死に反論しようとするが悪戯っぽい笑みはそのままだ。そんな彼女に反論するのも難しいと思い、私は店を出てしまう。

「あ、優子。お金は〜？」

「私の分もお願い！あとで返すから！」



愛子には悪いと思ったが昔から彼女は人をからかう様な態度をよくとる。正直私はそれが苦手である。プライドが高いせいなのかそういう冗談を上手く受け流せないのである。

別に愛子は嫌いじゃない。ただそういう態度をとるときだけ正直面倒くさい。

しかし、私も私でも少し自分に正直になつても良かったのである。そうすれば吉井君にももう少し素直になれるんだろうが…。

そう、自分の中では分かっているのだが…。

「ハア…。」

溜め息をついて帰り道を歩く。

優子の分まで代金を払い、店を出る愛子。

「な〜んか怒らせちゃったみたいだなア」

何となく優子を怒らせたことには自覚があるみたいだった。

優子も帰ったから自分も帰ろうかな〜と考えていたが今日は休日なので特に何もすることがない。暇つぶしに商店街を歩くことにする。

そのときフツとある四人組の男子の会話が耳の中に入ってくる。

「あー、テメツ！明久！テメツ！オレの携帯をぶっ壊しやがって」

「見苦しいぞ！雄二！自分だけ僕の携帯を壊した罪を認めない気かつ！」

どうやら二人の男子は携帯を壊したとかで喧嘩をしてるらしい。

「お、落ち着くのじゃ。二人とも。」

「……こはお互い様……」

もう二人の男子は喧嘩している二人を止めようとする。

「雄二、よく考えてみる！コレはある意味 i P h o n e に変える良いチャンスなんだ

ぞツ！」

「そういう問題じゃねえツ！」

本当にそういう問題ではない。明らかに問題を軽くしようとしているのが感じられる。

しかし、愛子は理解する。アレが優子の言う吉井明久なんだと……。明久という名を持つ者はフミツキには「吉井明久」しかいないから間違いないだろう。

「くっそ！覚えてろ雄二！」

そう言い少年はその場から逃げようように言う。

「それはこつちのセリフ……って、オイ！コラ、待て」

しかし、少年は不良品となった携帯だけ置いてそのまま去ってしまう。

しかし、それは愛子にとつても都合のいいことだった。

「ねえ、君たちあの吉井君の友達？」

すると、三人は、

「ああ。」

「そうじゃが…。」

「…（コクリ）…」

愛子はニヤリと笑う。

「実は私、こんなこと考えてるんだけど…。」

愛子は三人の耳元で小声で内緒話をするように何かを提案した。

すると、三人もニヤリと笑う。

「面白そうじゃの。」

「…（コクリ）…」

「ちようど良い。明久には携帯を壊された借りがあるしな…。」

四人は一体何を企んだのだろうか…？

今日も祝日で休みだった。

「ふわぁ」と可愛らしいあくびをし、優子は目覚める。隣ではまだ明久が寝ていた。

いつものように「スピー、スピー」という鼻息を立てて寝ている。やはりいつ見ても彼の寝顔は幼さが感じられる。

「吉井君、そろそろ起きなさい。」

「……」

優子は起こそうとするが明久はそのまま布団にもぐつてしまう。そして、再び「スピースピー」と鼻息を立てて寝てしまう。

「いい加減……起きなさいッ!」

すると、明久の体からメリツと何かねじるような不吉な音がする。

「ぎゃああああああああッ」

優子がどうやら関節技をきめたらしい。

「ちよ、ちよッ!いきなり痛いよッ!」

「ようやく起きたわね」

「あの、もう少し優しく起こしてくれませんか?」

「いつもそうしてるけど、吉井君、いつも起きないじゃない。」

頬を膨らませ怒る優子に明久は素直に「ハイ」と言う。

そこで起き上がろうとしたとき、電話が鳴る。

「はい、もしもし。吉井ですけど」

「ダルそうに電話を取る。」

『おー、明久か?』

「アレ? 雄二」

電話の主は雄二だった。

「何だよ、こんな朝早くから…。」

明久は迷惑そうに言う。しかも電話の主が雄二となると余計気が怠かった。

『あく、明久。今日、空いてるか?』

「イヤ、一応空いてるけど…。」

『そうか…』

雄二は少し嬉しそうに言う。だが、嬉しそうな声を出す雄二は明久にとって正直無気味であった。何を企んでいるか分からないからだ。

『俺とムツツリーニと秀吉は如月ハイランドに行く予定なんだがお前もどうだ?』

「イヤ、雄二…。」

悪い話ではないが、何故か嘆息する明久。

『分かってる。そんなところに行く金がないって話だろ?』

「分かってるなら誘うなよ」

明久は不機嫌そうに言う。それもそうだ。明久はお金を全て自分の趣味に使ってしまつたため生活費は愚か、遊ぶためのお金なんて一切残されていない。しかし、それを知つてて遊びを誘う雄二も正直嫌らしい。

『オレ、一応無料券持つてるからそれを提供してやらんこともないが…。』

「え!?!ウソツ!?!マジで!?!」

『イヤ、流石にここまで言つて嘘は言わねえよ…。』

「それもそうか」と納得しながらも明久は嬉しそつたつた。

『じゃあ、如月ハイランド前のコンビニで待ち合わせな〜』

「了解っ!」

そう言い、明久は電話を切る。明久は実は遊園地に行くのが初めてだった。そのせいか異様に興奮している。

「どうしたの?吉井君。」

優子はキョトンとした表情で聞いてくる。

「ちよつとフィーバーしてくる。」

「…は…?」

「どういうこと?」と聞こうとしたが、既に明久は家から出ていた。監視役の優子は明

久を監視しなければならぬが、明久が何処に行くのかが分からなければ監視の仕様もない。

そこで「ハア」とため息をつく。「ブーブー」と携帯が鳴る。「誰からだろ?」と思い、画面を見ると愛子からだった。

『突然だけど、今日遊園地行かない? 如月ハイランドつてあるでしょ? 霧島さんも来るって言うから優子もどうかかな?』

本当に突然だなど思いつつも愛子には昨日のレストランのお金も返さなきゃいけない上、明久も今、どこに居るか分からない。

優子は『分かった。私も行く』と返信した。

## 如月ハイランドⅡ

「遅い…」

明久は如月ハイランド付近のコンビニで雄二たちが来るのを待っていた。しかし、待ち合わせの時間をとうに過ぎていた。

待ち合わせは10時。しかし、今現在の時刻は10時半過ぎ。いい加減来てもいい時間なのだが誰も来る気配はない。

「…中で待つか…」

仕方ないので如月ハイランドに入り中で待つことにする。

愛子に如月ハイランドに誘われた優子は入り口付近でずっと友人を待っていた。先程愛子は待ち合わせ場所に来たのだが、忘れ物をしたとかで優子に『如月ハイランド男女カップル券』を手渡し急いで家に戻ったきり帰って来ない。

それにしてもこの『如月ハイランド男女カップル券』とは一体何だろうと優子は眉間にしわを寄せる。この券には男女カップル専用と書かれている。つまり、優子と愛子



じゃこの券は使えないハズだ。そもそも何故彼女はこんな物を持っていたのだろうか？

それにしても遅い。先程から携帯でメールを送っても返信は来ないし、電話をかけても出てこない。

「自分で誘つといてコレはどうなのよ!？」

優子は次第にイライラしてくる。誘われた自分がどうしてこんなに待たなければならぬ？ その気持ちあつてのことだろう。

特にすることもないのでブーツとしてると何処かで見たとような少年がそこにいた。

「よ、吉井君…よね…?」

優子は目をしかめながら言う。何故彼がここに居るのが理解できなかった。

「うーむ…。」

明久は迷っていた。中に入って待とうとしたが、彼は今、入園できるほどのお金を持つていなかった。

そんな彼が如月ハイランドに行こうとしたのは雄二が「無料券持つてるからお前も来い」と言われたから来たのだが…。その肝心の彼がいなかったのでは入ろうとするにも入る

ことが出来ない。そこで明久は決心する。

「…帰るか…」

妥当な答えではある。お金がないのでは入ることは当然出来ない。それに雄二たちも待つて来るような感じもしなかった。

帰ろうと決心し、一歩踏み出した時だった…。

「吉井君ッ!?!」

「…え?」

聞き覚えのある声だった。顔を上げて見ると、そこには優子がいた。

暗い部屋。そこには遊園地の状況を把握するためにモニターが各場所を映し出していた。そこには雄二、秀吉、ムツツリーニ、愛子がいた。

四人が目留めていたのはある二人の人物だった。

「どうやら二人とも接触出来たみたいね…」

愛子は嬉しそうにはしゃぐ。ただ人物と人物が接触しただけの話。そこまで喜ぶこともない。だが、このはしやぎようは何か目的があつてのことだろう。

「( )から作戦開始だな」

雄二も何か楽しそうに言う。

そしてムツツリーニがキザつぽくマイクで「作戦を開始する」という。

一体彼達は何を企んでいるのだろうか…？

「き、木下さん!? どうして此処に!？」

明久は驚きのあまり声を上げる。しかし、そこで明久はあることに思い出す。

(ま、まさか…。監視役か!? こんな友人同士の遊びの中でも監視しちゃうのか!?)

木下優子は吉井明久の監視役である。そのため優子がここに居るのも監視役という任務が理由だと思った。しかし、優子は明久の考えたこととは的外れなことを言う。

「何って、私は愛子…友達とここで約束してただけ…。」

「へ?」

(監視役の任務じゃなかったの!?)

いや、でもよく見ると普段見る国家騎士のブレザーの制服ではなく、肩だしニットにミニスカート。明らかに私服だった。

私服のせいか普段感じるピリピリとしたオーラはそんなに感じなかった。そう、何処にでもいる普通の女の子だ。

「吉井君こそ何でここに？」

今度は優子が質問する番だった。当然、優子も明久がここに居ることには疑問があった。

「いや、今朝『フィーバーしてくる』って言ったと思うんだけど……」

そういえば今朝、明久が家を出る前にそんなことを言っていたような気がする。しかし、フィーバーとは言っても何をフィーバーするのかよく分からない。どうやら如月ハイランドで遊ぶことを指してるようだが……

「今朝、雄二達と近くのコンビニで待ち合わせしてたんだけど、中々来なくて……」  
明久は困ったように頭を掻く。

「そうなんだ……」

優子も同じような境遇だった。友人が忘れ物して家に戻り、それきり戻ってこない。

優子は「ハア」とため息をつき何となく友人が残した「如月ハイランド男女カップル券」に目を見やる。

すると、

「あなた、もしかしてこの券の持ち主ですか？」

と近くにいた店員が尋ねてくる。

「ハイ、まあ……」

友人に渡されただけで完全に自分の物とは言えない。優子は曖昧に返事をする。すると、店員は何故か目を輝かせて、

「この券があると今日一日どんなアトラクション、食事なども全部無料です。さあ、どうぞどうぞ。」

すると、明久と優子は無理やり店員に園内に放り込まれる。

「え？何で？」

明久は一体何が起きたのか全く分からないそんな表情を浮かべる。優子も状況が上手くつかめなかったが…。

しかし、優子の頬は少しずつ赤く染まっていく。

なぜなら店員はカップル券を見て明久と優子を園内に勧誘した。それはつまり明久と優子がカップルということになる。ようするに今日一日彼と二人自由に遊べるということだ。

そう分かった途端何故だか心臓の鼓動が止まらなかった。

---

「どうやら作戦の第一段階成功つてところか…」

雄二はフウと安心したかのように息をつく。

「しかし、まだ油断は出来ぬぞ」

秀吉はモニターをジッと見つめる。

「うん、うん。まだこれはほんの序の口ってところだからね。本番はここからだよ。」

愛子は楽しそうに言う。

「じゃあ、まずは『作戦A』を実行しよう。任せたぞムッツリーニ。」

「了解」

ムッツリーニは変装し、カメラを装備する。

明久はうくと頭を悩ませていた。

券を持っていない上、料金も払っていないのに何故園内に入れたのか？明久は優子がカップル券を持っていたのを知らないゆえ、悩まされるのであった。

実はもう一つ悩んでいることがあった。とりあえず中に入れても待ち合わせした雄二たちがまだ来ない。

「……………」

どうしようか…。

そう考えてるとき偶然視線が優子と合う。そこで明久はピンと何かに閃いた。「木下さん、どうせ雄二達来ないし、一緒に回ろうか…」

明久は優子を誘うことにする。

このまま悩んでも仕方ないと思った。このままでも時間が過ぎていくだけだ。

それにこの誘いは優子にも悪い条件ではない。彼女も先程から友人を待っているが来ないという話だ。彼女にとつてもこのまま待つだけなのは時間の無駄だ。

「う、うん。そ、そうだね」

優子は頬を赤めて言う。

普段ツンツンしてる優子にしては、しおらしい感じもしたが明久にとっては一緒に回る人物がいればそれで文句はないのでそこは気にしない。

そして回り始めようとしたとき…。

「…写真はいかが…?」

急に誰かに話しかけられる。見ると、男の店員が立っていた。頭はアフロでサングラスをかけていた…が、どこかで見たような顔でもあった。それに他の店員に比べ幼い感じもある。

その少し怪しい店員はカメラを構えた。

## 如月ハイランドⅢ

「写真はいかが…?」

ボソツと話しかけてくる店員。声に明るさがないせい、ちよつと暗い。それに他の店員に比べ少し背が低い。彼のアフロ、サングラスは何故かコスプレしているようにも見えた。そのため何か不自然さも感じられる。

「…何か何処かで見たような…」

明久は目をしかめてみる。

「…気のせいです。」

店員はブンブンと首を振る。

「吉井君、せつかくだし撮ろうよ。」

優子はニコと微笑む。こんな楽しそうな優子の表情を見るのは初めてだった。そんな表情を見て、明久も「じゃあ撮ろうかな」と心に決める。

「じゃ、じゃあ写真一枚お願いします。ちっこい店員さん」

「ちっこいは余計。」

無意識に「小さい」という本音を口出す明久。彼は自分の失言に気づくが店員はそれ



ほど気にはしていない様だった。

「…じゃあ手、握ってください。」

店員はボソツと言う。

「え!?手を握らないといけないんですか?」

まるで当然のように言う店員に優子は動揺したような態度をとる。

「…だって二人はカップルでしょ?」

ボソツと当然かのように言う店員。そう、優子達は男女のカップル券で入園することが出来た。つまり、店員からしてみれば明久と優子はカップルに見えるわけである。

「へ?何?カップル?」

しかし、明久はカップル券で入園できたのを知らない。その証拠に店員がカップルと言ってるのをよく聞かずにカップと聞き間違えたのだ。

明久はAカップ、Bカップという女性の胸の大きさを表すあのカップが瞬時に思い浮かんだのである。

そのせいか明久は店員が先程言った言葉を「女性の胸の大きさがどれくらいがベストですか?」と勝手に解釈してしまう。

「店員さん、女性の胸は大体Dカップ位がベストだと思います。」

思ったことを正直に述べる明久。隣にいた優子は「ハ?」と思わず声を上げてしまう。

いきなりこんなとんでもないことを言われたら声を上げたくなる気持ちもよく分かる。店員も当然優子のような反応をするかと思っただけだ。

「いいや。甘い。貴様は甘い！」

先ほどまでボソツツとしていた店員の声には妙に鋭さが感じられた。

「オレの中ではA、Bは小さい、だが、Dだともはや巨乳の領域に走ってしまう！大きすぎず小さすぎず。オレはCカップがベストだと思う！」

店員の表情はとて真剣だった。目も光り輝いているような感じもしたが、何故かダラダラと華字が出ている。

「な……なるほど……」

明久はまるで手強い強敵に出くわしたような反応をする。確かに彼の意見も最もだと思っただけだ。

要するに彼は小さすぎだと魅力に少し欠けるものがあるが、大きすぎだと逆に魅力が感じられなくなる、そう言っているのだ。

「だからこそオレはノーマルなCの道を行く。」

彼はグツと親指を立てる。

「……おおおおっ！」

ただただ感動する明久。しかし、内容は本当に下らない。男性の欲望に満ちた内容で

ある。

そこで優子が「吉井君」と呼びかける。

「ああ、何？木下さん」

振り向くと優子は何故かニコニコしながら関節を慣らしていた。笑ってるハズなのに異様に殺気に満ちている。

「Dカップが良いってのは私に対するセクハラかしら？」

「ええッ!?イヤ、ちよ…待っ…」

ただ純粹に胸について語っていただけだったのだが、優子はどうやら明久達の理想の女性と比較された気分で妙に傷ついているようだった。

すると優子は小さな手をギュッと握りそれを明久に思いつきり向けてく。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

明久はその拳圧に耐えられず近くの壁に思いつきりめり込む。

小柄で華奢な感じを思わせる優子だがとてつもなく怪力があるようだ。流石、国家騎士と言うべきか…。

「ハイ、チーズ」

店員はそんな彼らの情景をカメラで撮る。

「ただいま。」

「おお、ご苦労だったな。ムッツリーニ」

暗く狭いモニタールームにいた三人はずっとムッツリーニの帰りを待っていたのだ。

「それにしても明久は何か殴り飛ばされておったの」

「ああ、壁にめり込んでたぞ。」

秀吉と雄二は優子に対し恐怖の表情が顔に表れていた。とくに秀吉は自分の姉の恐ろしさはよく分かつてるはずだ。

「ホント、優子は……」

優子は呆れたような顔をする。しかし、すぐに気持ちを切り替える。

「ムッツリーニ君。写真は？」

「撮ってある。」

「じゃあ、見せてもらおうよ」

そして彼が撮った写真を見ると、それは優子が明久を殴った後の情景だった。優子は鬼のような表情で拳を握りしめてる。それに対し、明久は壁にめり込んでる。

こんなカップルの写真が存在しているのか……？そんな風にも感じる。

愛子、雄二、秀吉は眉を引きつっていた。この光景には正直引くものがある。

「ま、まあ次の作戦を成功させようよ。」

「そ、そうだな」

「そうじゃな」

「…（コクリ）…」

無理やりポジティブになる愛子に続き雄二、秀吉、ムツツリー二も頷く。

「じゃあ、次の作戦は任せたよ、秀吉君。」

「うむ。任せるのじゃ！」

そう言い、秀吉は暗い部屋を出る。

「あの…木下さん…痛いんだけど…」

「悪いのは吉井くんでしょ」

明久はまだ優子に殴られたダメージがまだ抜けきっていない。

どうやら女の子の前ではこういう話は良くないんだな、と悟る。

そして二人は何のアトラクションに乗るか迷う。どれに乗ろうか迷っていると後ろから、「お困りですか？」と言う声が掛かってくる。

振り向くと、黒い長い髪をツインテールにしたメイドがいた。

「え……と、店員さんですか？」

「はい、そうです。」

他の店員に比べやけに華やかな感じがあつたので優子は念のため聞いておく。

「……どこかで見たような……」

「気のせいですよ……」

「イヤ、確かにどこかで見たような」

優子は疑いの視線を向ける。明久も何となく優子の言いたいことを理解する。そのメイドは異様に優子に似ていた。優子に似ているとなると秀吉が思い浮かぶのだが彼はこんな黒い髪をしていない上に少しだけ雰囲気が違うような気もした。

「まあ、いいわ」

優子は詮索しないことにする。店員も少しだけホツとしているようにも見えた。

「カップルのお二人にはあのアトラクションがいいと思います……」

店員が指差したのはアトラクションの内の一つ『スペースマウンテン』だった。

優子は楽しそうに、

「へえ、良いわね乗りましよ？吉井君」

「え？ああ、うん。」

何故か明久は顔を真っ青にして言う。

「何処か体調でも悪いの?」

「ああ、いや別に…。」

「…? まあ、いいわ。行きましょ」

そう言つて二人は後ろに並ぶ。

今日は祝日なので混んでいる。そのため中々乗れない。一時間半くらい経ちようやく乗ることが出来た。

「わあ、楽しみ。」

優子は楽しそうだった。しかし、明久は顔色が悪かった。

そして、ついにアトラクションが動き出す。すると、暗い景色に変わる。まるで宇宙にいるかのように思わせる光景だ。アトラクションがある程度上のところまで行くと…。

「ぎゃああああッ!」

急に凄まじい勢いで走り出す。暗い世界を凄まじい速さでグルグル回っている。

「きゃああああああああああああッ」

優子は悲鳴を出すがとても楽しそうに聞こえる。一方明久は…。

「……………」

何故か固まっていた。

そしてようやく元の地点に戻る。

「ハア〜。楽しかった〜」

優子は満足そうな表情を浮かべる。

「吉井君も楽しかった?」

明久の方を振り向くと…。

「え…吉井君?」

明久は意識を失っていた。目が白目になって少し危険な状態である。

「ちよっ、吉井君——!」

---



## 如月ハイランドⅣ

「どう？少し落ち着いた？」

「うん、まあ……」

明久はスペーススマウンテンを乗り終えて気絶していたため二人は近くのベンチで少し休んでいたところだった。

明久はノリノリで如月ハイランドに来たのだが、どうやらアトラクションが苦手らしい。その証拠に顔が真っ青である。

「私、何か飲み物買ってくるね」

優子はそのまま近くの自販機へと向かう。

「ハア〜」

明久は今まで遊園地に行ったことがなかったので、ジェットコースターの浮遊感がどれほどのものかよく理解してなかった。多少恐怖を感じる程度だと思っていたのだが、実際乗ってみると、その恐怖は想像以上だった。

「ウエツプ……」

まだダメージが抜けきれていない様である。

「何かアレだな…。アイツがアトラクションダメだったなんてな」

「ホントに意外じゃな」

「…（コクリ）…」

暗いモニタールームで雄二は明久がアトラクションが苦手なのを意外そうな目で見る。秀吉、ムツツリーニもそれに頷く。

明久のあの性格にジェットコースターに恐怖する要素なんて一つも感じられないせいなのかもしれない。

「うくん。さっきから何かこう…カップルっぽいこと一つもしてない気がするんだけど…」

愛子は少しつまらなそうに言う。

「じゃあ、此処ならどうだ？」

雄二はマップのある地点に指を指す。雄二が指差したのはお化け屋敷の『最恐戦慄迷宮』（さいきようせんりつめいきゆう）だった。

「成程…お化け屋敷か…」

「なら、次の作戦を開始しよう」

どうやら次はお化け屋敷を舞台とするらしい。

「次はオレが作戦を実行する番だったな」

そう言い、雄二は暗いモニタールームから出る。

「はい、飲み物」

「ああ、うん。ありがとう」

優子は明久に缶ジュースを手渡す。缶ジュースの名前は『ヤシの実サイダー』。名前に少し「飲んでも大丈夫なのか？コレ」という警戒感がある。優子の飲み物も『黒豆サイダー』。見るからに怪しい飲み物だが、優子はそれを気にせず、そのままそれを口に含んでく。

「次、何処に回ろうか…?」

優子はニコリ微笑んで聞いてくる。

それにしても不思議である。普段ピリピリてる優子が普段より柔らかさがある。一体何があつたんだと思いつながら、

「う〜ん。ど、どうしよう」

何処を回るか考える。

考えるとは言っても明久はジェットコースター系は乗れない。そう考えると、乗れるアトラクションは限られてくる。

すると、優子は少し照れくさそうに、

「じゃ、じゃあ、観覧車はどうかな…?」

少し、もじもじとした態度で聞いてくる。

「あ…」

観覧車なら、先程の『スペースマウンテン』みたく異様な浮遊感を感じることもない。明久が顔を青くすることもないだろう。

「じゃあ、そこにしようか」

明久は優子の意見に賛成する。

「うん。」

優子も嬉しそうに頷く。

その時だった――。

「イヤイヤ、君達…。そんな観覧車なんてヌルイ乗り物なんて乗らないでさ、ここはお化け屋敷で楽しんで行こうよ」

やや背のある赤髪のを生やした中年くらいの男性が現れる。恐らく店員だ。彼の

右手に持つてる看板には『最恐戦慄迷宮』（さいきょうせんりつめいきゅう）と書かれて  
いる。

「…何か何処かで見たような…」

確かに中年の男性ではあるのだが、何処か普段見るような顔にも見えた。何処か親し  
げのある感じだ。

「いえいえ、気のせいだつてば」

「そうかな…」

少し気になりはしたが、詮索するのはやめておく。

「優子さん、どうする？お化け屋敷も寄つてく？」

「え…お化け…屋敷…」

優子は何故か表情を固くするが、暫くして、「いいわ。行きましょ。」と言う。

「よし、じゃあご案内しまーす」

店員は明久達をお化け屋敷『最恐戦慄迷宮』（さいきょうせんりつめいきゅう）に案内  
する。

---

深い闇――。

此処では視覚は機能しない。目に映るのはただ闇だけである。

歩行距離は約900m。正直、ホラー系が苦手な人にとつてかなりある距離だ。

それが『最恐戦慄迷宮』……。正確には『最恐戦慄迷宮・暗黒病棟』。つまり、病院が舞台となっている。

「……………」

多少緊張する物はあるが明久はそこまで怯えたような感じではない。

しかし、隣にいた優子はブルブルと震えていた。

「あ、あの、木下さん？」

「ヒッ!？」

優子は恐怖したような声を上げる。

「び、ビククリさせないでよー！」

「ああ、うん。ゴメン」

先程は明久が顔を青くさせてたが、今は優子の方が顔色が悪い。立場が逆転している。

「木下さん、手握ってあげようか？」

明久は優子に手を差し出す。流石にここまで恐怖している女の子を見るとこうした



すると、優子の手を握ってる明久の右手にかすかだが痛みを感じる。

「アレ？」

微かな痛みだと思ったが、その痛みは次第に強くなっていく。

(痛あああああああああああああッ!?)

次第に右手に感覚がなくなっていく。どうやら優子の握力で骨折したらしい。思いつきり叫び声を上げたいが、叫び声を上げると余計右手を握る力が強くなると思ったので、痛みを何とかこらえ、腹の底から叫びたい気持ちを殺す。

ガタンッ！ガタガタガタッ！

今度は壁を叩きつけるような音が聞こえる。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

ボツキンッ！

『bdx;jkふあえghねghれいwgひぼwhrッ!!』

再び激痛が明久を襲う。思いつきり叫び声を上げたいがその気持ちを何とか声にならない叫びに留める。

今度は恐怖におびえた優子が無意識に明久の脛の部分を思いつきり蹴ったのだ。そこでまた骨折。



明久は悟る。このままでは確実に命を取られると…。

店員に勧誘された時に素直に断っていれば良かったのだ。だが、その判断を誤ったせいで今、二か所の骨が折れている。

このお化け屋敷で何とか生き残ること。それが明久の今の目標だ。

(生き残るぞ、絶対に——!!)

その晩——。

明久は入院することになった。原因は数か所の骨折だ。

「だ、大丈夫？ 吉井君」

「ああ、うん。まあ…」

明久は骨折の痛みに堪えながら答える。何とか生きて帰って来られたが、今の明久に歩く力などない。

一番怖いのは優子が自分で骨を折ったという自覚がないことだ。その為、優子はどうして明久がこんなにボロボロなのかを知らない。

普段ピリピリとしたオーラを纏う優子も怖いが、恐怖におびえた優子をもつと怖い。

そんな優子の側面に気づく明久だった。

そんな明久と優子の姿を病室のドアの隙間から眺めている者達がいた。

「おいおい。結局、カップルらしい行為なんて一つもしてないよな、コレ」

「うん、まあそうだね…。」

雄二と愛子は「やれやれ」と言いたそうな表情を浮かべる。

「でも、少し安心した。」

「安心?」

ニコリと微笑む愛子を見て雄二は不思議そうな表情を浮かべる。

「私は優子と付き合いが長いから分かるんだけど…。あの子、いつもいつもピリピリしててこう近づきにくいものがあるのよね。私はすぐに慣れたけど、それが原因で優子から距離を置く人も少なくない。国家騎士になったら一段とそのオーラは強くなってたわ。まるで騎士と言う重荷を背負わされてるような…ね。」

「ウム…。それは分かるの」

弟である秀吉には愛子の言いたいことが何となく分かる。

「でもね、昨日、久々に会ったらそのピリピリしたオーラは少しだけ柔らかくなってた感じがした。何だろうと思ったら、あの子が変えてるんだね、優子を」

「明久じゃな」

「うん。」

普通の人が見ればそんなに大したことはないのだろうが、愛子にはそれが不思議だった。

「吉井君の前では、あの子はこの国を代表する国家騎士ではない。ただの女の子になる。不思議ね……。あんなに楽しそうな優子、初めて見る……。」

愛子は嬉しそうだった。

騎士ではない。優子が普通の女の子として居られるのを心の底から願っているのだ。

（ありがとう、吉井君。）

## 美波と美春

訓練所の帰り。美波は真つ直ぐ家に向かう道は通らず、別の道を歩く。理由は病院に行くためだ。

友人である美春が怪我をしたためである。根本の事件で自分の部下を何人も死なせてしまった。その上、彼女の左腕は根本恭二に切り落とされてしまった。

腕だけでなく、足も麻痺した状態となり、医師からは「もう二度と騎士として戻ることはできない」と断言される。美春の目には少しも希望なんてものは映つてなかった。ただただ絶望しかない。

今まで国家騎士として、警務部隊部長として誇りを持っていた彼女には誇り何て言葉ももうない。あの事件を境にその誇りは消えてしまったのであった。

しかし、それでも美波は彼女に少しでも元気づけるために毎日、見舞いに訪れていた。「こんにちは、美春」

「お姉様……」

美春の表情はやはり暗い。しかし、美波もそんな彼女を見るのはやはり辛い。しかし、それでもそんな気持ちも必死に抑え、笑顔を忘れない。少しでも気を抜けば、一気

に目から涙が零れそうだった。しかし、それだけは避けないといけない。私は彼女を支えたい。その私が彼女に悲しそうな表情を見せてはいけない。それが美波の気持ちだった。

「毎日毎日、ありがとうございます。」

「ううん、いいのいいの。」

美波は精一杯笑顔を作ってみせる。美春もそれに反応し、少しだけ笑っていたような気がした。

「み……ん……な」

気づけば警務部隊の隊員はみんな血まみれになって倒れていた。いや、正確にはほとんど生氣は感じられない。隊員のほとんどが命を落としたのである。唯一生き残っているのは5、6人だろうか？

今、唯一その場で立っているのは美春だけだ。

「フン。王都を守る警務部隊もこの程度か……。」

根本はあざ笑うように言う。警務部隊員の命を勝手に価値づけてるような物言いだった。部下を失った美春にとって根本は憎い仇だ。

そう、憎い仇……。だが、先程から足が動かない。動かなければ殺される。だが、足は言うことを聞かない。見ると、震えている。

「……うそ……？」

今まで戦闘においてこんなことはなかった。敵に対し、一切恐怖の感情なんて持ったことのない美春。ただ任務を遂行する一心で敵と戦いを交えていた。

だが今、体はどうしようもないくらいに震えている。今までこんな現象はなかった。そこで悟る。コレが恐怖なのか……。と。

「うあああああああああああああああああッ!!」

美春は銃型の召喚武器『断罪者』（ジャツジメント）を装填する。そして、その弾丸を根元に向ける。

「フン……」

根本はそれを軽々躲してしまふ。

しかし、『断罪者』（ジャツジメント）の弾丸は方向転換をする。一直線に走っていた弾丸は根本を追いかけけるように走っていく。

「……追尾型か……ッ!?!」

そして、弾丸は根本を直撃する。正確には直撃したように見えた。よく見ると、そこには盾があった。

「…『アイギス』…!？」

ゼウスの盾『アイギス』で弾丸を防いだのである。

美春はかなり正確に根本を狙ったはずだった。しかし、それを防がれては戦いようもない。おそらく根本に同じ手は通用しない。

根本はジリジリと間を詰めてく。そして、アイギスから氷の剣『アルマツス』を召喚する。そこから発する冷気はとても寒く恐ろしかった。

そして気づくと、根本の姿はそこにはなかった。同時に左腕あたりに猛烈な激痛が走る。

上を向くと何かが空中に浮いていた。だが、それはすぐに分かった。それには赤い血が飛び散っていた。

「私の…腕が…」

根本はニヤリと笑う。そして切り落とした腕は氷漬けにされる。

「大丈夫だ、一瞬で楽にしてやる。」

そして気づけば、美春は冷たい地面に倒れていた。根本の姿ももうない。

目に映るのは死んだ部下たちの姿。

そこで気づく。部下を殺したのは自分だ。自分のせいで部下たちは命を落としたの

だ。

だからせめて自分も部下たちと一緒に死にたい。それが彼女の願いだ。だが、その願いは彼女を裏切った…。

「(トト)は…。」

ゆつくりと瞼を開く。自分がいたのは病院のベッドの上だった。

「ウソ…だ」

自分がここに居るはずがない。なぜなら、あの時彼女は部下と一緒に死んだはずなのだ。こんなところに居ていいはずがないのだ。

「どう…して…」

目からは一滴の涙が頬を伝う。

生きて嬉いいのか、それとも死んだはずなのに生きてるのが納得できないせいなのか分からない。でも、このまま生きてても苦しいだけだ。なら、あの時部下と一緒に死んでいた方がどんなに楽だったか…。

「う…っ…ああああ…」

もう左腕もない。足も麻痺してる。とても騎士としてはやっていけない。その上何人も部下を死なせてしまった。



そんな彼女に、もう希望なんてものはなかった。ただ絶望…。それだけだった。

静かな夜だった。病室の窓には綺麗な月が見える。

「…サモン」

美春は『断罪者』（ジャツジメント）を召喚する。

そして美春が銃を向けた先は…。

「美春…?」

「…ツ!?!」

気づくとそこには美波が立っていた。

「お姉…さま…。」

「あ、アンタ何やってんのよ!?!」

美春は銃を自分の頭に突き立てていた。

「随分、タイミングの悪いときに来ましたね…。お姉様」

「アンタ、何バカなことやってんのよ!?!」

美波は息を荒くして怒鳴る。美波にとつてこの現状は許し難いものだった。

「言っておきますけど、止めても無駄ですよ。」

「美春…どうして!？」

すると、今まで無表情だった美春の顔には怒気に近い悲しみの表情が浮かんでいた。「どうして? 私は何人もの部下を死なせたんですよ…? そんな私に生きる価値なんてありますか? 仮に生きてても私は騎士としてはもうやっていけない」  
彼女は全てをなくしてしまったような顔をしていた。自分にはもう何も無い…と。  
しかし…。

「ふざけてるんじゃないわよッ!」

美波は先程よりも強く怒鳴る。病室中…いや、下手したら病院中響き渡るような声量だった。

「ここで死んだら私は本当に許さないからね!」

美波の目には涙が浮かんでいた。どうしてそこまでして自分をひき止めようとするのか美春には分からなかった。

美波はドイツから来た訓練兵だった。来たのは4年前。まだ日本語が上手く喋れない時だった。

ドイツ語を喋っても「何言ってるんだ、お前?」みたいな顔をされてしまう。毎日が不安だった。私はきつとこのまま一人なんだ…。そう思っていた。

そんな時——。

「それ、ドイツ語ですか？」

ある一人の少女がドイツ語で美波に話しかけてくる。日本で初めて真面に交わした会話だった。

そして、コレが美春との出会いであった。

彼女は常に美波の傍に居てくれ、いつしか美春は美波にとって心の拠り所となつていた。

そして一緒に過ごしていくことで二人には全く同じの共通点が生まれる。その共通点とは騎士になることだった。

二人は一緒に立派な騎士になることを心に誓った。そして美波と美春の「約束」でもあった。

結果、美春はどんどん昇格していく。そして今現在、国家騎士の位に立っている。美波は未だに下級騎士のままだが、それでもいつか彼女の隣にいられるように……。そう思い、夢を決して諦めなかった。

…それなのに…。

「こんなところで死んだら、あの時の約束はどうなっちゃうのよ!」

美波は悲痛の叫びを上げる。美春が自ら命を絶とうとするのを黙って見過ごすこと

が出来ないからだ。

「私はずつとアンタの隣に居たくて…。アンタとの『約束』があつたから私は今ここに居るのに…」

「お姉…さま…」

美波の目からはボロボロと雫が落ちる。その雫は目から溢れるように出てくる。

美春は胸から何か込み上げるような物を感じた。自分はたくさんの部下を死なせた…。そんな自分に生きる価値はない。

しかし、そうすれば美波との約束はどうなる？

彼女との約束を…夢をまだ叶えられていない。それなのに今自分が死んだら、その夢はもう永遠に叶うことはない。

「…あ…」

瞬間、その込み上げた思いは一つの想いに定まっていく。

——— 生きたい…。

「美春…？」

美波は美春にそつと呼びかける。

美春はギュツと握っていた銃をポロリと手放す。

「私は…生きたい…生きたいです。お姉様と一緒に…夢を…」

涙が邪魔して最後の「夢をかなえたい」という言葉が声にならなかつた。しかし、美波はその言葉をちやんと察した。

「…夢を叶えよう。美春」

二人は身を抱きしめ合うように泣く。

立派な騎士になる…。それは遠い理想の世界なのかもしれない。

しかし、二人の足は止まることはない。

夢に向かい、また一歩ずつ、一歩ずつ踏み出していく。

## 死霊術士編

## 命日

教会の鐘が鳴り響く。まるでその時間の流れを止めるかのようにゆっくり鳴り響く。少年の腕の中には紅い鮮血を流した少女が眠っている。少女は大きな傷を負って苦しいハズだ。

しかし、彼女は少しも苦しそうな表情を見せない。ただ少年に優しい微笑みを浮かべ、二度と醒めることのない永い眠りにつく。

少年はその現実を受け入れることが出来なかった。ただ心の底からは抑えきれない負の感情が込み上げてくる。

そして少年は悟る。これが憎しみなのだ…。

少年の瞳は血のような紅い光を映す。

---

午前八時。今日は土曜日の為、普段、六時に起きる優子も少し遅めに目覚める。

「ふわあ〜…」

優子はまだ眠たそうな顔で目を擦る。しかし、このまま寝てしまえば隣で寝てる少年はそのまま昼まで眠り続けるだろう。それでは自分が監視役に選ばれた意味がない。

優子は無理やり体を起こす。そして…。

「吉井君、起きなさい！」

優子は無理やり明久の布団をめくる。しかし…。

「アレ？」

明久の姿はそこにはなかった。

これはかなり異常なことかもしれない。何故なら明久は今まで優子が起こさなきや絶対に起きなかった。

絶対何かあるに違いない…。

「ああ、もうッ！」

優子は急いで明久を追うことにする。

---

その頃明久は霊園に居た。墓参りに来るには少し早い。この時間帯で来るのは恐らく明久くらいだろう。

明久はある墓石に立っていた。その墓石には「吉井玲」という名が刻まれていた。そう。今日は明久の姉、玲の命日だった。玲が死んでもう六年が経つ。

「姉さん、僕は今でも元気でやってるよ。食事も木下さんが来てからはまあ、そこそこ食べるようになったよ。成績はダメ。訓練所でも問題ばかり起こしてるけど、信頼できる友達……皆バカばかりです。だから安心して。僕は姉さんが居なくても、もう大丈夫だから……」

こんなことを言われて安心しろと言われても正直不安が増すばかりである。明久は自信満々の表情をしてるが、他界した玲は恐らく心配して明久を見ているだろう。

明久はお供えの花を供えて、手を合わせ黙祷する。

グウウウウウウ

その時、空腹の音が鳴る。明久は朝、何も取らずに家を出たので腹がすいていたのだ。以前の明久は多少の空腹なら耐えられるが、優子が来てからは朝、昼、晩と一日三食を摂取するようになったので多少の空腹が耐えられなかった。

すると、明久はお供えの為に用意した花をジーンと眺める。

「ゴクリ」

明久はそーっとその花に手を伸ばす。

「い、頂きます」



明久はお供えの花を手にし、口の中に入れようとす。その顔は実に幸せそうな顔だったが次の瞬間、その幸せそうな顔が険しいものへと変わってゆく。

理由は背中に思いつき蹴りの衝撃が襲ったからだ。そのまま明久は吹っ飛んでしまう。

「い、痛っ！誰だ!？」

顔を上げるとそこには優子が立っていた。

「何処にもいないと思ったらこんなところに居たのね…。」

優子は呆れたようなため息をつく。

「アレ？何で此処が分かったの?」

明久は不思議そうな顔で聞く。今朝何も言わずに家を出たので、明久の居場所を優子が知っているはずがないからだ。

「ああ、それは昨日の夕飯の時にこっそり超小型の発信機を仕込ませたのよ。相手の居場所を私の脳に直接リンク出来る物なの。」

優子はニコニコしながら事情を話す。しかし、明久にはそれは恐怖でしかなかった。

何故なら明久は監視役の優子の目から一切逃れることが出来ないと思っただからだ。

かといって、こんな発信機を優子自身が持っていたとも思えない。

つまり…。

(あのババア……ッ！何てことしやがるんだ！)

優子を明久の監視役に選んだカフォル二世の仕業だろう。彼女の仕業と知った明久は一層表情を険しくさせた。カフォル二世はどうやら明久の監視を強化させるようだ。

「それより吉井君。」

「何？」

優子は話を切り替えるように明久を呼びかける。

「霊園に何か用でもあったの？」

「いや、用がなきや来ないよ。」

「え？ そうなの？ てつきり此処でも問題を起こすのかと思っただけ……。」

「……………」

どうやら明久はかなり警戒されてるようだ。普段の明久なら普通に店の商品を壊したりする。そのため、此処でも墓石を壊したりとか供え物を荒らすといった行為を優子は明久なら普通にするものだと思っただけからだ。

しかし、いくら明久でもこんな霊園の中では問題を起こそうなどとは思わない。それに問題を起こすといっても大抵それは雄二と一緒にいるときである。優子のあまりの警戒には少し傷つくものもある。

とは言っても先程明久は供えの花を食べようとしていた。そこはやはり問題視する

ところかもしれない。

「今日は姉さんの命日なんだよ。だからこうして霊園に足を運んできてるんだよ。」

「あ、そうだったんだ…」

優子は納得する。

「その…。ゴメン、聞いちゃいけないこと…だったよね？」

優子は自分が失言を吐いたように感じる。しかし、明久は「そんなことはない」と首を振る。

「どんなお姉さんだったの？」

「優しかったよ。姉さんが怒った姿なんて一度も見たことない。『あの時』を除けば…。」

「…『あの時』…?」

急に明久の表情は真剣なものへと変わる。優子も眉間にしわを寄せる。

「…姉さんが死んだときだよ…。」

「…え?」

「木下さんも知ってると思うけど、姉さんは前第一国家騎士だったんだ。姉さんはそこである騎士の討伐任務に当たったんだ」

「…ある騎士…?」

「騎士…というよりは術士かな。その討伐だよ。そいつはSランク犯罪者と認定され、

国家騎士の頂点に立つ姉さんが討伐することになったんだ。」

優子は明久の顔をじっと見つめる。その顔は何処か悲しげにも見えた。

「姉さんはその術士と戦うんだけど、その術士は最終的に王都の人々を襲う形となった。その術士は正直姉さんよりも強かったらしい。その上、姉さんは町の人達を守るようにしながら戦った。しかし、姉さんが戦つてると知った僕はどうしてもそれを黙って見てはいられなかった…。結局その術士を何とか倒すけど、姉さんも命を落とした…」

「そっか…」

それが真実だよ、と明久は告げる。

その過去は今も明久の心の傷そのものだった。その傷はきつと癒えることはないだろう。

町は悲鳴に包まれる。そんな中一人の女騎士と一人の術死が凄まじい戦いを繰り広げていた。町は二人の戦士を色濃く映していた。

「まさか、君のような騎士が居たなんて…。この僕に傷をつけたのは君が初めてですよ。」

「戯言は地獄の底で吐いてください。アナタは此処で終わりです。」

女騎士は白い剣をギュツと握る。怒りに満ちたような目で術士を睨む。

「…此処で終わり…か。確かに君は強い。だが、君は先程から町の住人を守りながら戦ってますね…。それじゃ、僕は殺せない。」

術士は上からモノを見るような態度で言う。その目は酷く冷たい目だった。そして男は建物の影を指さす。

「あそこの建物の影に隠れてる子、君の弟だろ？」

「ア…アキ君！」

すると術士はその子供に禍々しい闘気を纏った矢を放つ。

女騎士は一瞬でその子供の下へ移動する。

「アキ君、大丈夫ですか…？」

「ね、姉さん…？」

女騎士の背中には術士が撃った矢が突き刺さっている。女騎士の実力ならその矢を躲すことも出来た。しかし、弟を守るために彼女は自らを犠牲にした。

「姉さん…矢が…」

「フフ…。大丈夫ですよ。これくらい。」

女騎士はニコリ微笑む。本当は苦しいはずだ。だが、弟のために必死に笑顔を作って

見せる。

「さ、アキ君。逃げてください」

「い、嫌だ！」

しかし、近くにいた騎士が少年の身柄を安全な場へ移そうとする。

少年はそれでも何度も何度も姉の名前を呼ぶ。

「アキ君。アナタは生きてください。」

女騎士の瞳からは一滴の涙が頬を伝う。

そして彼女は剣を再び握る。もう二度と弟と会うことはないだろう。しかし、弟との町を守るならそれでいい…。

…彼女の願いだった…。

フミヅキの町の奥に小さな教会があった。そこは普段人が通らない場所で町の人々も気味悪がついていた。周りには墓地もあり、靈気に包まれていた。

しかし、ここ最近ここから感じる靈気は一層強くなっている。それを一番に感じ取った雄二はその場を歩き回っていた。

今の彼は下級騎士という位の低い身分だが、元は第六国家騎士と高い地位に立っていた男だ。

見た目の雰囲気からは中々感じられないが、雄二はかなり頭のキレる人物である。その為、カヲール二世からも一目置かれている。

「それにしても…」

雄二は頭を掻きながら溜め息をつく。

教会周辺の靈気の強さは尋常でなかった。正直息の詰まるくらい心地の悪さだった。

しかし、もし仮にこの周辺の靈気を誰かが強くしたとしても騎士では考えにくかった。確かに騎士は戦闘といった類では高い能力を持つてるが、靈気を強めるといった特殊能力は持っていない。じゃあ、誰がこんなことをしたのか？という話になるわけだが…。

実はこの国はほとんどが騎士の者が多いのだが、ごくまれに『術士』という魔術、靈術を得意とする者達がいる。

彼らなら『靈術』を扱えば、此処一体の靈気も強めることは恐らく可能だ。この異様なほどの心地の悪さも納得出来るのだが、しかし、『術士』というのは本当に少ない。いるかないかくらいの数で、嘗てフミツキにもたった一人しかいなかった。本当にそれ

くらしいの数でしかない。

「チツ……」

流石に術士の仕業と断定するのは考えすぎか……と少しイライラした態度で舌打ちする。

このまま考えても何か分かるわけでもないので帰ろうとする。

——その瞬間——

先程まで吹いていた暖かな風は急に冷たい風に激変する。

「……?!」

雄二はその風の方向に顔を向ける。

「僕のことを覚えていますか？坂本雄二……」

雄二の前には長身の男が立っていた。雄二はその男を知っていた。

「……高城雅春（たかしろ・まさはる）……」

「ホウ、覚えててくれましたか……」

男は感心そうに言う。顔の表情は笑顔に近い表情ではあったが、全身から感じるオーラは殺気に近い。

「馬鹿な……！お前は死んだハズ……だろ?!あの時……前任の第一国家騎士に殺されたはずだ……！」



雄二の顔からは焦りの表情が隠せなかった。

雄二の話を推測するに、高城雅春と呼ばれるこの男は六年前に殺されたはずだった。

「何故、僕が生きているのか？ そう言いたげの顔ですね？」

「当たり前だ……お前は確かに心臓を貫かれて……」

「こんなことがあつてはいけない。コイツがここに居ては間違いなくフミツキは終わる……。そう雄二の頭が認識していた。」

「確かにあの時吉井玲に心臓を貫かれ、僕は死にました……。誰もがそう思ったはずです。」

「ああ……。」

「しかし、肉体が減んでも魂は生きている」

「……何が言いたい？」

高城の理解不能の言葉に雄二は眉を潜める。

「……覚えていますか？ 僕は術士……。その中でも『死霊術』を得意としています。僕は魂さえ生きていけばいくらでも復活できるんですよ……。」

「……バカな……ッ！」

あまりの予想外の言葉に雄二は啞然とする。つまり何回も殺したところで彼の魂そのものを壊さない限りいくらでも復活できるのだ。

「だが、肉体は滅んでる。いくら死霊術とはいえ、代わりの肉体がなきゃ転生は出来ないはずだ」

「理解できていないようですね。代わりの肉体なんてものがなくても、僕の墓周辺にある土…墓土さえあればいくらでも入れ物の体は作れるんですよ。」

もう言っていることの全てが夢のような話だ。現実では考えられないような話だ。

「試験召喚（サモン）…」

高城は電光を帯びた刀を召喚する。名は『雷切』（らいきり）。またの名を『千鳥』（ちどり）。

戦国時代の武将、立花道雪（たちばな・どうせつ）が雷を切ったことで知られる刀である。

「懐かしいでしょう…？昔の自分の武器を見るのは…」

高城は『雷切』を構える。

## 奪われた武器

『雷切』（らいきり）…。又の名を『千鳥』（ちどり）。

今現在、高城雅春がこの刀を所有しているが元々は彼の武器ではない。なら、元々の武器の所有者は誰なのか…？

答えは元第六国家騎士の坂本雄二の武器である。

この武器と頭回転を生かした雄二の先方は負けなしかった。そんな雄二は皇族からは『神童』とまで呼ばれていた。

ただ、その負けなしの雄二もある戦いで初めての負けを経験することとなった。

そう、六年前の高城雅春との戦いだ。

高城雅春は嘗て若いながらもカヲール二世の側近に勤め、たくさんの人々から信頼を得ていた。また、フミヅキ唯一の術士でもあり、彼の存在は大きかった。

幼かった雄二も彼を信頼していた。

しかし、ある時だった…。

彼は王族の側近から犯罪者という汚名を被ることになる。

理由は彼の死霊術が原因していた。

ちやうどその頃、王都の街中では町人が行方不明になるといふ事件が多発していた。原因はその時はよく分かかってはいなかったが、後にそれは高城の仕業と判明する。

彼は死霊術を使い、『人造人間』（ホムンクルス）を造ろうとしていた。何故そんなものを造ろうとしていたのかは分からない。しかし、そのためには、何人もの人間の魂が必要不可欠だった。

そのため、彼は町の人々を襲い、その魂を人造人間（ホムンクルス）を造るために使ったのだ。

しかし、こんなことが当然許されるはずもない。

カヲール二世は七人の国家騎士に彼の討伐を命じた。

そして七人は散らばって町中を探し回って彼を探した。

そこで彼を一番最初に見つけたのが雄二だった。雄二は迷いなく彼に斬りかかった。

しかし、雄二と高城の戦力差は圧倒的なものだった。雄二は一瞬でやられてしまう。雄二は何が起きたか分からずただ茫然と倒れるしかなかった。

彼の攻撃が全く見えなかった。そして、何が起きたかさえも分からぬまま倒れる。

そして、高城は雄二の所有していた『雷切』（らいきり）を奪い、自分の物へと変換した。

そこで受けた傷と武器をを奪われたことで彼は国家騎士から下級騎士へと降格する。

『神童』が経験した初めての負けだった——。

「懐かしいですね……。あのときの君はまだ小さかったのに、よくまあ成長しましたね」  
「うるせえ……」

雄二はメリケンサックを召喚する。当然こんな武器が高城に通用するとも思っていない。だが、この状況下は逃げられるものでもない。

「どうやら、僕に武器を奪われてからは随分と非力な生活を送ってたようですな……」  
「フン……。安心しろ。オレはこの生活も気に入ってる。武器が奪われて何もかもが悪かったわけじゃない」

そう、雄二は降格して再び下級騎士となつてから明久という悪友を得たのである。彼とはよく意見の食い違いが生じるが、彼は雄二にとって一番の親友でもある。

「けど、やっぱり自分の武器が奪われたままってのは腑に落ちねえ……。雷切は返させてもらうぜ……」

「面白い……。今の君に何が出来るのか見せてもらいましようか？」

そう言い、高城は姿を消す。そして、既に高城の刃は雄二の心臓を貫こうとしていた。

しかし、雄二は素早く背中を後ろに曲げその攻撃を躲す。柔軟を生かした回避技だった。

「よく躲しましたね…。昔の君なら今の一撃で確実に死んでました。」

「昔とは違うんだよッ!」

すると雄二のメリケンサックから閃光が生じる。嘗ての武器『雷切』のように電撃を纏う。

「ウオラアアアアアアアッ!」

雄二は電撃を纏った拳で高城に殴り掛かる。

「やはり…成長してますね…。僕はどうかやら君を嘗めていたようだ。」

雄二の攻撃を喰らった高城だが、何処か余裕そうな表情を浮かべる。

すると、彼は雷切を再び構える。

「…『千鳥鋭槍』(ちどりえいそう)…!」

雷切の刃の纏った電撃が槍状に伸びる。槍上に伸びた電撃は雄二の腹部を貫通する。

「ガハッ…!」

雄二は力が抜けたように膝をガクンと落とす…。

「終わりだよ、坂本雄二…」

高城は刀を振るい上げる。そしてその刃は真っ直ぐ雄二に向かって振り落される。

「オオオオオオオオオッ！」

雄二は高城の腹部に拳を入れる。

「……」

瞬間、高城は雷切を手放してしまふ。そして手放された雷切は雄二の手元に渡る。雄二は何の迷いなく雷切を握る。

久々に握る愛刀の感覚に嘗ての『神童』という名前が甦ってくるようだった。

「……行くぞ……『雷切』……ッ！」

雄二の手に渡った雷切は雷雲すらも呼び出しそうなオーラを放っていた。

「……成程……。これでようやく君と全力で戦えそうですね」

「ああ、そうだな……『千鳥流し』ッ！」

雷切から流れるような電撃がバチバチと音を立て高城を襲う。しかし、高城は顔色一つ変えず、その電撃を素手で払い除ける。

「……な……ッ……!?!」

その予想外の行為に驚く雄二だが驚いてる暇はない。気を抜けば自分が殺されてしまふ。雄二は刃の先を高城に向けてく。

しかし、高城は躲そうとする素振りを見せず、その刃を指先で止める。

「何だ……こんなものですか……」

高城は呆れたように言う。雄二はまたもその予想外の行為にただただ驚いていた。「終わらせましょう……」

高城は新たな剣を召喚する。黄金の輝きを放つ剣である。しかし、その輝きは何処か禍々しさも感じる剣だった。

「……『竜殺しの剣』（バルムンク）……ッ！」

『ニーベルングンの歌』に登場してくる大英雄ジークフリートの剣である。バルムンクと雷切が刃を交える瞬間だった。

霊園に居た明久と優子。明久の過去を聞き、優子は明久に何て言葉を返せばいいか分からなかった。

どんな言葉をかければ一番彼を元気づけられるのか……？しかし、それが分からない。何か言葉を返したいと思うものの、いざ口を開いても言葉とならない。

きつと明久に言葉を返せるのは実際に明久と同じ立場に立った人間こそが明久の気持ちをつかちあげられる……。そう思った。

そんな沈黙の時間がしばらく経った頃、優子の服のポケットから携帯の着信音が鳴



る。霧島翔子からの電話だった。

「はい、もしもし。」

『優子、今すぐ王宮に来て…。』

「え？どうしたの、急に…。」

『説明は王宮の中です…。だからすぐに来て。緊急事態…。』

「う、うん。分かった」

そう言い、優子は電話を切る。

緊急事態ということは何かが起こったのだろうか…。

「ゴメン、吉井君。私、王宮で召集をかけられてるから、行くね」

「あ、うん。いつてらっしゃい」

そう言い、優子はすぐに姿を消す。明久は手を振り、見送る。

グギユウウウウ

再び空腹の音が鳴る。明久はふと、すぐ傍に生えていた雑草に目をつける。先程はお供えの花を口にしたが、流石に自分が供えた花を自分で食べるのは何処か凶々しい気がした。

しかし、自然に生えている雑草ならば、凶々しいなんてことはあるまい。そう思い、明久は雑草をむしり、それを口にする。

「…うん。意外にイケる?」

どうやら彼の味覚は破壊されてるらしい。その証拠に彼は親指を立てながらその雑草を噛んで飲みこんでいる。

(よし、今までは食料が無くなったら塩と水の食生活だったけど、これからはおかずに雑草だ。)

既に考え方がホームレス並になっている。彼の将来が心配だ。

その時、ズン…ツと重たい振動がかかる。そのせいか、霊園から見て東の方角からは、煙のようなものが見える。

「…何だ?」

明久は何が起きたか分からないような顔をする。

「失礼します」

優子はノックし、カヲール二世の部屋に入る。

「来たか…。優子」

部屋に入るとカヲール二世はカロリーメイトをやけ食いしていた。しかし、顔の表情

はいつも以上に真剣である。

「おい、竹原。モニターを用意しろ。」

「指図すんな、ボケ」

そう言いながらもせつせとモニターの準備をする竹原。

「コレを見てくれ。」

モニターに写ったのは長身の男だった。

「この人は……？」

「高城雅春……。昔、私の側近を勤めていた男だが、コイツは禁忌を犯した為、前任の第一国家騎士、吉井玲の手により殺されたはずだった。」

「ハズ……？」

妙な言葉遣いをするカヨール二世に怪訝そうな表情を浮かべる優子。いまいち状況を掴めないようだった。

「優子、死霊術って聞いたことあるかい？」

「……まさか……っ」

ようやくカヨール二世の言いたいことを理解した優子。そして同時に顔を青くする。

「そのまさかだ。コイツは死霊術で転生したのさ。そこで先程まで坂本雄二が高城と一戦交えていたが、どうやら敗北したらしい……。」

「…は？敗北も何も彼は下級騎士のハズです」

そう、優子は雄二が元々国家騎士だったという事実を知らない。そのため、混乱したような表情を浮かべる。

「いいや、アイツは下級騎士に降格したのさ。元々はこの国を代表する騎士さ…。『神童』って言葉くらい聞いたことはあるだろ？」

「は…はい」

優子もその名前には聞き覚えがあつた。頭腦的な戦闘をすることで王都中を騒がせていた。しかし、『神童』が雄二を指す名だとは思わなかつた。

いや、そんなことよりも優子が驚いたのは『神童』と呼ばれる雄二がやられたという事実であつた。

「いいかい、そこで大体状況は把握しただろう…。そこで任務を言い伝える。霧島と二人で坂本を救出しろ。ただし、高城とは戦うな…。」

「は…？…どういうことですか？私達が戦わなきゃ王都を攻められる可能性が…」

可能性があると云おうとする優子だが、その言葉はカヲール二世の言葉でかき消される。

「分かつてるさ！だが、六年前、前任の国家騎士がほぼ全員係で刃向つてもヤツとの力の差は歴然だつた。唯一、吉井玲だけがアイツと真面に戦り合えたが、その玲さえも命を

落とした…。もう六年前の二の舞にするのは御免だよ！」

カヲール二世のカロリーメイトを握る手は震えていた。これ以上、自分の力の無さで騎士達を死なせたたくないというカヲール二世の思いでもあった。

「…陛下…」

その気持ちは優子も何となくだが心に沁み込んで来る。だが、それは国のトップの判断としてはペケだ。力の差が何であろうとこちら側が迎え討たねば、王都の崩壊をただ待つだけになってしまう。

そんな迷いと不安の中、感知能力を発動していた竹原が新たな報告を告げる。

「陛下、今、敵のいるフミヅキ教会から高城と坂本とはまた別の人物の気配を感じ取りました。」

「誰だい?」

竹原は感知能力を最大に発動する。そこにいた人物は意外な人物だった。

「吉井明久です…。」

「よ、吉井君が…!?!」

優子は心臓の鼓動が早まるのを感じた。それは不安と焦りによるものだった。

先ほどの振動……。明らかに地震によって起きた揺れではなかった。何か力と力のぶつかり合いによって起きた振動……。そんな風にも感じられた。

明久はその振動の理由が気になり、揺れが起きたと思われる場へと足を運んでく。

すると、そこには教会が立っていた。その周辺は爆発でも起きたかのように地面はえぐれ、近くの木には刀でつけられたような傷、そして地面にはところどころ血痕が残っていた。その血痕は教会へと続いていた。

あそこに一体何があるのか……？明久は教会の中へ入ることにする。

ギイイイ……。

古びたドアはゆっくり開く。

教会の中は思っていたよりも広く、天井も高く、そして中央には十字架が張られていた。

「おや、いらつしやい」

奥から現れたのは身長の高い男だった。そして男の隣には誰か倒れていた。いや、誰かという表現はおかしい。何故ならその人物は明久のよく知る人物なのだから……。

「ゆ、雄……？」

明久は大きく目を見開く。驚きを隠せない表情だった。

「明久……。逃げろ」

雄二は体中の痛みを必死にこらえ喋る。

「明久？」

しかし、反応したのは明久でなく、雄二の隣にいた長身の男だった。

「もしかして、君は吉井玲の弟、吉井明久君ですか……？」

明久はその質問には答えず、雄二の隣に立つ長身の男の顔をよく見る。それは、何処か見たことのある顔だったからだ……。

そして明久の脳内は六年前に巻き戻される。玲はある一人の術士と戦っていた。その術士は今、雄二の隣に立っている長身の男と姿が重なる。

「お前、まさか……。」

長身の男はニヤリと微笑む。

「二応、初めまして……。と言っておきましょう、吉井明久君。僕は高城雅春。六年前、君の姉を殺した男です。」

それを聞いた瞬間、明久の心の中で沸々と煮えあがるような感情が込み上げてくる。そう、怒り——。

目の前に立つ男は姉の憎い仇である。

「お前が……姉さんを……」

明久の周囲から黒い闘気が発せられる。その闘気は明久を囲むように取り巻いてい

く。

「試験召喚（サモン）……！」

明久は黒い剣を召喚する。黒い剣は禍々しい殺気を放っている。明久はその剣をギュツと握り締める。

「ホウ……」

高城は興味深そうな声を上げる。今にも明久が襲い掛かりそうな状況にもかかわらず、その剣から発せられる闘気に感動していた。

「うあああああああああああああああああッ!!」

明久は強く握り締めたその剣を高城に向ける。

因縁の戦いが幕を開ける瞬間だった——。



## 因縁

「うおおおおおおおおおおおおおおッ!」

(コイツだ。コイツのせいで姉さんは……)

明久の心の中に熱い煮えあがるようなモノがあつた。

そう、それは怒りと憎しみだった——。

この男を殺して、その怒りや憎しみが消えるとも思つてはいない。しかし、この感情を自分の心の中で留めることは出来なかつた。

黒い剣は真つ直ぐ高城に向かつていく。しかし、高城は表情を変えることなく……。

「この程度ですか?」

高城は明久の黒い剣を人差し指の指先で止める。

「……ぐ……?」

刃を押し通そうとしても刃は動かない。高城の指先の力がどれほどのものなのか……。想像を超える。普通の人間では有り得ない。

「……クソッ!」

これ以上は刃を押し通そうとしても無駄と思つた明久は一端、高城から距離をとる。

そして凄まじい速度で高城の後ろへと回りこむ。

(ここだ……ここを全力で斬る！)

「……オオオオオオッ！」

黒い刃は禍々しい鬨気を纏い、高城に凄まじい斬撃を浴びせる。

「今のは良い斬撃でしたね……。僕の後ろに回りこむときの動きも中々でしたよ。」

高城はまたも表情を変え、手の中甲で明久の斬撃を受け止める。しかし、先程よりも斬撃が強かったせい、指先で止めることは出来なかったようだ。

そして、明久は黒い剣から発せられる鬨気を足に纏い、強い蹴りを浴びせる。

「おっと……」

高城はヒョイとジャンプをして躲す。しかし、躲したところでわずかに隙が出来る。明久はその一瞬のすきを見逃さなかった。容赦なく、黒い剣で斬りかかる。

当然、ジャンプをして躲した為、高城は空中にいる。しかし、足が地面に突く前に明久の斬撃が先に来る。高城はその状態では受け身をとれない。

しかし、高城はニヤリと不気味な微笑みを浮かべる。

すると、彼の体から金色の光が発せられる。

「なっ……！」

金色の光を足に纏わせ明久に蹴りを喰らわせる。明久はそれ躲すために、後退する。

地面についた高城は「試験召喚（サモン）」と静かな声で武器を召喚した。

その武器は金色の光を帯びていた。しかし、それは何処か明久の黒い剣と似て禍々しさを放っていた。

「…竜殺しの剣（バルムンク）…！」

その武器の正体は『ニーベルングンの歌』の主人公、ジークフリートの名剣だった。

「終わりですよ…。」

黄金の剣は高城の冷酷な声と共に振り落される。その斬撃は真つ直ぐ明久に向かつてくる。

「ぐあああああああああああああああああつ！」

教会中に明久の叫び声が響き渡る。

---

「陛下、このままでは吉井明久がやられるのも時間の問題です。どうするんだ、この野郎！」

敬語と私語が混ざった独特な喋り方をする竹原。その顔には焦りを募らせていた。

「…ツツツ！」

カヲール二世は先程以上に表情を険しくさせた。

その場にいた翔子と優子も不安なのは同じだった。明久がやられれば、間違いなく高城は王都に向かって来るだろう…。そうなったら、王都の人々は全員殺される。王都は終わりを迎える。

しかし、優子の不安はそれだけではない。

「…吉井君…」

そう明久の無事を何よりも心配していた。

高城は明久の姉を殺した相手だ。明久にとっては憎い仇である。しかし、いくら明久でも高城との位からの差は歴然である。

そんな中、ふと脳内に記憶が甦る。以前の根本の事件で優子が不安を募らせていた時だった。

『木下さんは僕が守るよ』

そう言い、明久は優子の手をギュツと握った。それは、とても優しく温かいものだった。

そして、彼は本当に優子を守ってくれた。

あの言葉は明久から優子への誓いだったのかもしれない。

しかし、今は明久が窮地に陥っている。優子は無意識にはあったが、心の中でこう

思った。

(今度は私がアナタを守る番…。)

優子は小さな拳をギュツと握る。彼女なりの覚悟であった。

昔の自分だったら、きつと、こんな考えは浮かばなかった。それくらいに明久が大切になつていた。

「…陛下…」

優子はゆつくり口を開ける。カロール二世は険しい表情のまま優子を見る。

「…何だい?」

「私、教会に行つてきます」

すると、カロール二世は大きく目を見開く。

「何をバカなことを言つている!」

優子に怒鳴りつける。カロール二世はどうしても六年前の二の舞は起こしたくはなかった。いくら優子でも高城には叶わないと分かつていたから…。

「でも、私はそれでも行きます。このまま王都が無くなるよりはいいから…。」

そう言い残し、優子は王宮を立ち去つた。

彼女の意見は確かに正しかった。いくらカロール二世が六年前の二の舞を起こしたくないからと言つて、何もしないまま王都が滅びるよりはきつとマシなのだろう。

しかし、優子が行けば…。

カヲール二世はそれ以上は考えなかった。

「クソオツ!!」

カヲール二世は机を強く叩く。その机にはわずかに輝が入る。

「どうしてこうなっちゃまった…!」

国を代表する王だからこそ、この出来事が余計に許せなかった。

---

「おや、もう終わりですか?」

高城は倒れて動けない明久を見て言う。

明久は先程のバルムンクの斬撃でかなりのダメージを受けている。特に右腕は全体的に出血がひどく、剣を握るのも困難である。

「ツ…ガハッ!」

明久は咳き込む。喘息患者がするような咳で、かなり苦しそうである。

「…!」

咳をするために口を覆った左手には血がべっとり付いていた。これを見るに、先程の

斬撃で内臓部分もダメージを負っているようだ。

それでも、何とか生きているのは、バルムンクの斬撃の際に、明久は黒の剣から発せられる闘気で身を守った。その防御で命だけは助かったものの、体のあらゆる部分は重傷である。

つまり、黒い剣よりもバルムンクの方が一段階上手に立っているということだ。それだけではない。持ち主の高城も術士とはいえ、剣士としての力も圧倒的だ。

しかし、それでも明久の心が自分自身に訴えていた。「ここで負けてはいけない」と。その心の訴えのせいだろう、限界で動けないはずの体を無理やり起こす。

「おや、まだ戦えるのですか……」

高城は「ホウ……」と感心したように言う。

「僕はお前を殺す……!」

明久の目には殺意が籠っていた。体が悲鳴を上げている。しかし、彼の瞳は復讐に満ちていた。

明久は再び黒い剣を握る。しかし、その剣を握る力は弱々しく、今にも地面に落ちそうな状態だった。それだけではない。足も体をズルズルと引きずらせながら歩いていた。とても戦える状況とは思えない。

「そんな剣で、何を斬れるというのです？ 不愉快です。死んでください。」

高城の剣は真っ直ぐ明久を狙う。もう、明久には躲す力も残っていない。

「明久……ッ！」

その場に倒れていた雄二も危険を感じ、叫ぶが、体が動かない。それにもう間に合わない。

そしてザシユツと肉を避けるような音だけが残る。



## 死

高城の持つ黄金の剣、バルムンクは徐々に明久との距離を詰めてく。

明久はその剣の動きを目で追うことが出来ても、体中が悲鳴を上げている為、躲すことは出来ない。

「…明久ッ！」

その場に倒れていた雄二も必死になって叫ぶが、もう間に合わない。

しかし、その瞬間――。

明久のと剣の隙間に人影が過る。

(…え…?)

その人影…いや、その人物は明久のよく知る人物だった。

明久はその人影が自分の知人と分かった途端口を大きく開けた。「危ないッ！」という為。

しかし、既に遅かった。黄金の剣は明久の前に現れた『彼女』に向けられていく。明久は『彼女』に手を伸ばそうとするが、その時には既に『彼女』と黄金の剣の距離は零に等しかった。

そして、ただザシユツと肉を裂くような音だけが残る。

「嘘……だろ……!」

明久は絶句する。

本来、斬られるはずだったのは間違ひなく明久だった。しかし、明久の体にはその斬られた痕跡となるものが残っていない。

その痕跡となるものは明久の代わりに『彼女』に残っていた。

そう、その『彼女』とは…。

「……木下さん……」

明久は『彼女』の名前を呼ぶ。

本当に一瞬の出来事だった。バルムンクにの刃が向けた先には明久が居たはずだった。しかし、明久が斬られる瞬間、明久の前には優子が現れた。

この教会は広い。そのため、入り口からこの場まで来るには全力で走り来たとしてみても10秒はかかるはずだ。

しかし、優子はほんの一瞬でその場にたどり着いた。その行為には高城でさえ、驚愕の表情を出していた。

しかし、明久がそれよりも驚いたのは彼女が自分の代わりに斬られたことだ。

「……木下さん、どうして……ッ!?!」

明久は悲痛の叫びを上げる。この現実をどうしても受け入れることが出来なかった。しかし、優子はただ優しい微笑みを浮かべるだけだった。そして、彼女は最後にこう告げる。

「ありがとう」

優子は高城に斬られ、その場に倒れ込む。そして、ほんの数秒だけ気を失う。

そして気づくと、優子の傍に駆け寄った明久は涙を浮かべていた。

(そっか…。私、斬られたんだ…。)

自分の胸元を見てそう悟る。そして、横で泣いてる明久に向かい、何か言おうとする声が出なかった。代わりにその気持ちを心の中で呟くことにした。

\*\*\*\*\*

私は今まで騎士としてこの国に尽くしてきた。

騎士になると決めた日から私は少女としての心も欲望も捨てた。あるのはただ騎士

としての誇り…。

騎士にとつてその心はきつと邪魔なものでしかない。だから、捨てるのが一番良い。…。そう思った。騎士に必要なのは陛下の為に尽くしていく、忠誠心。それだけでいいのだ。

今思えば、そういう欲を捨てたから国家騎士に上りつめることが出来たのかもしれない。下らない欲や気持ちを斬り捨てた私は皆が遊び呆けている時も必死に勉強、そして剣を極めていたから…。

そして十歳を超えると同年代の少女たちの中で恋愛感情を抱き始める者が出始める。年を重ねれば重ねるほどその数は増えていった。全て捨てた私はそれを下らないという目で見た。そんな余計なものに囚われているからいつまでも並以下の力しか発揮できない。

そんな考え方をしたためだろう。私はいつの間にか一人になっていた。しかし、私はその孤独には何も不安を感じなかった。私は周りの人達とは違う。そう心で訴えていたからだ。

しかし、その心の中の訴えも日に日に虚しくなっていくだけだった。何故なら、一人であることを他人のせいにし始めたから…。

そう分かった途端、私は初めて自分の孤独さに寂しさを覚えた。しかし、私は周りを

遠ざけ続けてきた。その私に温もりをくれる人はいないだろう…。

そしてちょうどその時だった。陛下からある任務を一任される。

「吉井明久の…監視!？」

「ああ、お前が適任と思つてな。任せた」

正直、冗談じゃないと思つた。

彼の存在は知っていた。何故なら彼は王都中を騒がせていた天才的なバカで、その存在は陛下も頭を悩ませていたくらいだからだ。

しかし、よりによつてそんな人間を何故私が監視しなければいけないのか…？きつと最悪な監視生活が始まるだろう。

結果、それは本当に最悪だった。

まず、初対面で顔を合わせた時は私のパンツを見てきたし（風でスカートがめくれたため）、訓練所では授業をサボつてトイレでゲーム機器をいじつてるし、いぎ、テストとなると最低の成績結果。

本当に最悪だった…。

しかし、その最悪の中に私は何処か温もりを感じていた。彼は本当に馬鹿だ。しかし、彼の中には私にはない何かがあつた。

そして、一緒に過ごし、何日か経つたある日、国家騎士が次々やられていく事件が相

次いでいた。

次はいつ自分が殺されるのだろう……？毎日が不安でしかなかった。

当然、こんな不安、下級騎士な上に鈍感な彼にはこの気持ちは分からない、そう思っていた。

けど、実際には違っていた。

彼は他人事とはいえ、私を案じてくれた。手を握り、「大丈夫」と言ってくれた。そして「君は僕が守る」と言った。明らかに私よりも実力が下の彼が私を守るわけがない。でも、嬉しかった。その手の温もりも、私を案じてくれた優しさも。

それは決して、成績や剣の腕を磨いても手に入れることのできない、掛け替えのないものだった。

そして、彼は本当に私を守ってくれた。ボロボロになりながらも彼は逃げようなどと後ろめいた考えは一切しなかった。

その時から私は思った。この「最高の騎士生活」よりも「最悪の監視生活」の方が良いと思えた。

確かに「最高の騎士生活」では私は誰よりも騎士として存在できるし、こんな面倒な監視に巻き込まれることもない。でも、この「最悪の監視生活」には「最高の騎士生活」にはない温かさがあった。

その時から私は彼と一緒にいられることに幸福を感じた。最初はあれほど嫌がっていたのにもかかわらずだ。

私は誰よりも騎士として存在していたはずだった。それなのに、彼と一緒にいるときは騎士ではなく、ただの一人の少女でしかなかった。

昔の私なら少女であることにきつと反対していた。でも今の私にその反対する気持ちはない。むしろ、騎士という重い鎧を外すことに何処か清々しさすら感じるほどだ。

そして、気づけば心の底から湧き上がる熱い鼓動を感じた。それが今までは何に對して此処まで熱くさせられるのか分からなかった…。

でも、今、ようやくその気持ちに気が付いた気がする。

恋しているんだ…って。

いや、本当は気づいていた。でも、私は気づかない振りをしていた。

私は吉井君を愛していたんだ…。どうしようもないくらいに…。ようやく自分に素直になれたのに、声が出ない。

この気持ちをどうしても伝えたいのに。それどころか私はもう二度と彼と会うことが出来ない。意識が少しずつ遠くなっていく。

「…あ…」

せめて、死ぬ前にこれだけは言わせて…。「ありがとう」の一言を…。

アナタのおかげで私は幸せでいられた。だから、この言葉だけは…!

そして、その言葉は自然に私の口から吐き出された。

「ありがとう」

言えた。言うことが出来た。これで安心して逝ける…。

本当はもつと一緒にいたい。自分の気持ちもちやんと伝えたい。でも、もうそれは出来ない。

伝えたくても、もう吉井君の顔が見えない。私の目に映るのは暗い闇しかないから。

それでも、「ありがとう」の一言を言えただけで十分だ…。

ありがとう、吉井君…。

愛しています…。他の誰よりも…。

---

「ありがとう」

そう言い残し、彼女はゆっくり目をつぶる。

その時、偶然なのか分からないが、教会の鐘が鳴る。その音は外にまで響き渡るような音だった。



優子は二度と醒めることのない眠りにつく。もう二度と目を開けることはないだろう……。

「……っ……ぐ……う」

こんな現実、誰が受け入れられる!?

明久の心には自分では抑えきれないほどの何かが進み上げてくるのを感じる。

何故、彼女が死ななければならぬ!?

「う……おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!」

明久の瞳は真紅に輝きだす。紅い鮮血のように……。

明久の脳裏には優子の笑顔が浮かび上がる。

優子を思えば思うほどその現実が辛く、悲しく、憎かった。

## 怒り

明久は知っていた。この感情を…。

姉が殺された時と同じだ。抑えきれないほどの憎しみが、悲しみが明久を襲う。

「…グ…う…ツ」

明久の目からは涙が溢れ出ていた。その瞳は血に塗れたように紅い。

何故、彼女はあんなにも苦しそうに笑って逝ったのか明久には理解できなかった。そして、何よりもこの現実が許せない。

「う…おとおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

明久の叫び声が教会中に響き渡る。その叫びは何かを失い、飢えた獣の叫びにも似ていた。

「フフフ…。君は不幸ですね。大切な人を二人も僕に殺されるなんて…。」

高城はあざ笑うように言う。その声色からは人を殺したという罪が一切感じられなかった。この出来事は偶然起きた悲劇に過ぎない…そう言われてるようにも感じた。

「…ふざけるな…」

明久な低い声で呟く。

そして明久はボロボロの体を無理やり起こし、再び剣を握った。

「僕とまだ戦う気ですか？言つときますけどアナタじや僕に勝てませんよ……。それは先程の一撃で十分理解してもらつたハズなんですけどね……。」

しかし、明久にとつてそれは関係なかつた。相手がどれほどの強敵であつてもこの男は明久の大切な人を二人も殺した男だ。

そんな男を目の前にして剣を握らずには居られない。また、剣を握らなかつたことを、きつと明日の自分は後悔するだろう……。

「……木下さん」

明久は知っていた。

彼女はこの国を代表する騎士だ。誰よりも騎士で誰よりも誇つていた。しかし、彼女は誰よりも臆病だつた。

明久は知っていた。

彼女は誰よりもプライドが高くて、誰よりも強かつた。しかし、彼女は誰よりも寂しがり屋だつた。

そして『特別』なんかじゃない、『普通』を望んでいることも……。

まるで、彼女は『騎士』という重荷を背負わされているようにも思えた。全部全部分かつていた。

しかし、彼女は望んでいた『普通』にもなれず、死んでいった。

「さて、目障りです。死んでください。」

高城は再び『竜殺しの剣』（バルムンク）を構える。その黄金の剣を振り上げようとしたその時だった——。

明久の体から黒い鬨気が発せられる。その鬨気は黒い竜のように形を描く。

今までの黒い剣に起きたことのない現象が起きていた。そして、その鬨気を発する明久本人にも異変が起きていた。

紅い瞳に、獣のように鋭い牙……。その姿はまるで鬼のようだった。殺気も人間が発する殺気ではなかった。

「な……何だ!? これは……!」

その力に高城も驚かずにはいられなかった。鬨気だけで足が竦むほどの重たい空気だった。

「おおおおおおおおおおおおおおおおッ!」

明久は剣を握り、その剣を真っ直ぐ高城に向けてく。それに反応し、高城も明久へ剣を向ける。

二つの影が触れ合おうとした瞬間——。鮮血が飛び散る。そして、鮮血と共に落ちたのは『片腕』だった。

「ぐ……あああああああああああああああああああああッ！僕の……う、腕があああああああああッ」

声を上げたのは高城だった。そう、鮮血と共に散った『片腕』とは高城の右腕だった。明久は彼の右腕を丸ごと斬ったのである。

「……お前は、此処で殺す！」

明久の真紅の瞳が高城の苦痛にゆがんだ表情を睨みつける。

何故、明久がこんな鬼のような姿になったのかは分からない。しかし、姉の玲や、優子が死んで生まれたこの感情……憎しみ、怒りや悲しみは彼を鬼へと変えた。

そう、彼のこの感情の形は『鬼』だったのだ。

「うオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

明久は咆哮する。叫んでも二人の命が戻ってくることはない。それでも叫ばずして、どうやって胸の渴きを癒せばいい!?

叫んで叫び続けた。そして、彼の意識は少しずつ闇に堕ちていく……。

「……………」

明久は病院のベッドの上で目を覚ます。体中が包帯で巻かれ、指を動かしたただけで全身に痛みが生じるほどの重傷だった。

しばらく頭の中がボーンとしていたが少しずつ意識が戻ってくる。

そう、いつも自分の隣に居てくれた彼女はもうこの世界の何処にもいない。そう思うと不意に涙がこみ上げてくる。

「よう、明久……」

病室に入ってきたのは雄二だった。

雄二は松葉杖をついている。雄二の怪我も重傷だが、まだ体を動かせるという面では明久よりも傷が軽いようだ。

「……スマナイな……。お前を巻き込んで……。あと木下のことも……」

「雄二のせいじゃないよ。」

雄二は顔をゆがめて明久に頭を下げる。今の雄二には少しも彼らしさを感じなかった。

いつもどんなに悪いことをしても謝らない雄二が素直に頭を下げている。優子を亡くしただけにそんな彼を見るのは余計辛い。

「だから顔を上げてよ。」

そう、誰のせいでもない。

優子はきつと自分を守るために自ら前に出たのだ。あれはきつと誰のせいでもないのだ。

しかし、誰のせいでもないと分かってても、自分を酷く責めたがる気持ちが抑えられない。

「明久、お前に伝えなきゃいけないことがある。」

「……?……何?」

すると雄二は一瞬明久から視線を逸らす。余程言いにくいことなのだろうか……。しかし、その視線は再び明久に向けられる。

「オレとお前が病院に運ばれた時、木下優子の遺体がなかったそうだ……」

「……は……?」

明久の目は驚いたように見開く。

「ど……どういうこと……!?!」

「スマナイ……。オレも途中で意識を失ったから……。だが、考えられるのは二つだな。一つは高城が木下の遺体を跡形もなく消した……。だ。」

「……え!?!」

「高城程の実力なら……。それもあのバルムンクの剣なら、物を跡形もなく消すのは恐らく可能な筈だ。だが、もしバルムンクで跡形もなく消したなら、木下だけでなく俺達も

消された筈なんだ……」

「な……成程」

雄二の小難しい説明に何とかついてくる明久。

「そして、二つ目は木下の遺体を持ち帰った……だ」

「持ち帰る……!?何で!?それこそ、可能性は低い筈だよ!」

明久は必死に訴える。明久の言う通り死体となった彼女を持ち帰る理由が分からない。それなら、バルムンクで跡形もなく消されたという方が話の流れとしては、しつくりくる筈だ。

「確かにな……。お前の言うように、木下が唯の少女であるならそれは別だ。さっきオレが言ったように跡形もなく消された……という方が自然だろう。だが、木下は唯の騎士じゃない。」

「……え……?」

雄二の言葉が分からず戸惑う明久。しかし、次の言葉でその言葉の意味を理解する。

「木下は巫女の力を持っている。」

「巫女……?」

「木下の持つ刀、『鬼切』はあの刀で斬られた鬼の怨念が込められている。常人があの手を持って、正気を保てなくなり、自らを破壊していくだろう。でも、そんな自滅するよ



うな刀を木下が扱えるのは木下が巫女の力で、鬼の怨念を浄化してるからだ。」

「じゃ……じゃあ……！」

「ああ。高城は昔、死霊術で人造人間（ホムンクルス）を造ろうとしていた。しかし、それは失敗に終わった。だが木下程の霊力を持った巫女なら、その霊力を使い、人造人間（ホムンクルス）を造ることも難しくはない筈だ……。」

「そ、そんな……！」

衝撃の真実に明久は病院で寝てなどいられなかった。そして動かない体を無理やり動かそうとする。

「バカ野郎！お前、何やってんだ！」

「決まってるじゃないか、あの下衆野郎から木下さんの遺体を……取り戻すんだ！」

明久は高城の良いように扱われていることが悔しくてたまらなかった。姉を殺され、優子も殺され、優子に至っては、死んでも尚、利用としているその下劣な心に怒りが込み上げる。

「バカ野郎ツ!!!」

すると雄二は病院中響き渡るような音量で明久を怒鳴りつける。

「今のお前に何が出来る。指を動かすことすら困難で、足で一步も歩くことのできない今のこの状態で、何が守れるんだよ！」

「……、コレは……!」

自分の体を見ると、体を無理やり起こそうとしただけで血がにじみ出ていた。

「それに高城の行方は捜索班が探し回ってるが、見つかりそうもない。」

「…そんな」

悔しそうに手を握る明久。そんな彼を見て雄二はこう言う。

「明久、この事件に關してお前らを巻き込んだのはオレの責任だ。だけど、お前も今回の件で自分のことを酷く責めてんなら、強くなれ!」

「…っ!」

「お前は確かに高城に大事な人間を二人も殺された。でも、お前の周りには他にも大切な人間がいるだろ?」

明久の脳裏に浮かんできたのは普段一緒にいる秀吉、ムツツリー二、雄二、美波…。それ以外にもたくさんさんの王都の町人。皆、大切だ。

「いつまでも悔やんでねーで、次にソイツ達が生殺されぬ様に、守るためにも強くなれ。オレもお前と一緒に強くなるからよ…。」

その言葉は雄二なりの覚悟でもあった。その言葉は明久の心の芯にまで響いた。

「分かったよ…。」

まだまだ周りには大切な人がいる。失ったものも明久にとっては大きい。しかし、今

在る大切なものも、たくさんある。

前を向くしかないのだ…。

少しだけ、普段の自分に戻れたような気がした。

そこは闇のように暗い世界だった。そしてその暗い世界には少しだけ光が灯っていた。

何かの術式の魔法陣…というべきか。

その術式の真ん中には一人の少女が眠っていた。…木下優子である。

「くそ…腕が…！」

そしてそこには高城も居た。彼の右腕は明久に斬られ、今も痛みが続いている。

しかし、彼の表情には、傷の痛みにも耐える苦痛の表情のほかに、何かを得たような嬉しそうな笑みも浮かんでいた。

「…まさか、木下優子が『彼女』の転生体だとは思いませんでした…」

すると魔法陣で組み立てられた術式の中央に眠る優子の体から微かだが、金色の光が灯る。

「ツハハハ……。ようやくお出ましですか……」

すると眠る少女は瞳をゆっくりと開く。

しかし、その少女は優子の筈なのに、霧囲気から優子の気配が少しも感じられない。

「……お早うございます、『アリス』……」

優子はゆっくり体を起こす。そして、彼女はこう告げる。

「……私は『二年前』のあの日、永遠の眠りについたはずなのに……どうして……」

彼女は今にも泣きだしそうな顔をする。

もう、この世で目醒める筈はなかったのに……。そう告げようとしていた。

しかし、その霧囲気からは優子らしさが一つもない。

「さあ、『アリス』……。これから僕の為に働いてもらいますよ。」

この出来事が何を意味指すか……？

それは後々のフミツキにも大きく関わることだった。

## 過去編

## アリス

時間は二年前へと巻き戻されていく。

これは明久とある少女の物語である――。

「吉井イ――ツ!!」

「ギャアアアアアアアアアアアツ！」

吉井明久15歳。

彼は今、鬼のように疾走してくる西村教官から逃走しているとこだった。

彼は今日で今年百回目の遅刻だった。その為、明久は日ごろの行いが悪いため、西村教官と二者面談を行う予定だった。いや、行っていたのだが、行っている最中に一本の電話が入ってきた。西村はその電話を無視するわけにもいかず、電話を取るのだが、明

久はその隙を見て、密かにその場から逃れた。

しかし、そんなことをしたら、余計西村教官を怒らせることは彼自身が一番よく知っている。そして、逃れることが出来ず、結果このような状態となる。

「…ゲツ…!」

彼が行きついた先は、人気のない行き止まりの場だった。

「…う…嘘…!?!」

明久の表情は今にも泣きだしたそうな表情だった。そして彼が足を止めると共に、同時に足を止めた教官の表情をうかがう為に恐る恐る教官の方に顔を向ける。

「ハッハッハッハッハッ」

実に心地の良い笑顔だった。

「ハッハッハッハッハッ」

その心地の良い笑顔に明久も笑顔を浮かべる。

「……ハッ!」

しかし、同時に教官の背中からは表情とは裏腹に恐ろしいほどの殺気が込み上げていた。

「吉井、ここは人があまり通らない場所のようだな。」

「そ、そうですね」



となる。そう、この状態は間違いなく戦闘隊形に入ってる証だ。

「……フンッ！」

すると、西村教官はさらに筋肉をむき出しの状態にする。その反動で、彼が来ていたスーツはパンツと破裂し、素肌が顕わになる。

「行くぞ……。吉井」

「ぎゃ……ぎゃあああああああああああああああああッ！」

明久の無残な悲鳴だけが響き渡る。

---

翌朝——。

HR（ホーム・ルーム）が始まるまでまだあと十分はある。

そんな中、雄二、秀吉、ムツツリーニはその時間を会話で潰していた。そしてそんな会話の盛り上がりつつある最中、いつものメンバーにある人物がいないことに気づく。

「そーいや明久いないな……。」

「ウム、忘れておった。」

「……………」



雄二の言葉に秀吉は「そういうえば」という反応を浮かべる。ムツツリーニはエロ本を読んでいるので、雄二の話は聞いていない。かなり集中してるようなので、邪魔しない方が良いみたいだ。

「そういや、アイツ二者面談どうだったんだろな？」

「ウム。遅刻百回目とか言っておったの」

雄二と秀吉は明久と西村教官の二者面談を頭の中で想像してみる。浮かぶのは鬼のような形相で明久を怒鳴りつける西村教官。それは恐ろしくもあるが目に浮かぶ光景である。

「アイツ…。生きてるかな…？」

「さあ…？」

「まあ、今度ちゃんと墓参りには行こうぜ。」

「そうじゃな。」

話は進み、遂には明久が死んだと仮定する。二人は墓参りに行く気満々である。  
ちようどその時――。

「おはよう」

挨拶をかけてくる声がある。振り返ると、そこには明久本人がいた。彼の顔には殴られたような傷が残っているが、雄二たちが想像したほどの怪我ではなかった。

「おう、まだ生きてたか…。」

「何、殴られたいの？」

昨日殴られたストレスのせいかな、明久は雄二のその冗談半分の発言に怪訝そうな表情を浮かべる。

「おい、席につけ！HR（ホームルーム）を始めるぞ！席につけ！」

明久より少し遅れて入ってきたのは西村教官だった。

「よし、まずはこの前の日本史のテストを返すぞ！呼ばれたヤツから前に来い！」

テストという言葉が出た瞬間、訓練兵達の顔は「うわあ」と嫌々な表情へと変わる。

その最もな理由としては西村教官は点数が悪い順にテストを返してくからだ。

「まずは…。お決まりの吉井！貴様だ」

「ハイ」

点数は0点。ここまでやる気のない点数は他にはないだろう。しかし、明久は「これはおかしい！」という顔をする。

「先生、この問題は当たってるはずなんですけど！」

「ん？そうか。採点をつけ間違えたか…。」

そう言い、西村教官は明久のテストを見る。しかし、西村教官はすぐに「ハア」と呆れたように溜め息をつく。

「おまえ、969年に起きた他氏排斥事件を何て覚えたんだ？」

「え？『アンコの変』です。」

すると、ドツと周囲から笑いを浴びせられる。明久はそれに気づかず、「え、何？」という表情を浮かべる。

「アンコの変じゃなくて『安和の変』（あんなのへん）だ！ボケ！」

「早く言えよ……。」

「授業聞いてなかったのは誰だ？ん？」

西村教官はギョロと鋭い眼で睨みつける。その睨みには明久も何も言い返せず、ただ「ハイ」と言うしかない。

「よし次……。土方」

「ハツ!?ちよつと待て！オレはそこまで点数悪くないはずだぞ!」

土方はどうやらこの日本史テストには自信があったらしい。それなのに明久の次に呼ばれるのはどう考えてもおかしかった。

「……この名前欄……。どういうことだ？」

「あア？名前？」

西村教官の言いたいことがイマイチ理解できない土方。しかし、反抗的だった土方の態度はすぐに焦りへと変わる。

名前欄には「土方十四郎」ではなく、「ちんかす」の四文字になっていた。

「ハアアアアアアアアアアアツ!?ちよつ…待ツ…?」

土方はちゃんと「土方十四郎」と書いたはずだった。それだけにこの現状が理解できない。

つまり、他の生徒の誰かの仕業となるわけだが…。

「クソツ!」

土方はバツと後ろを振り返る。一体誰がこんな「ちんかす」という下品な四文字を入れたのか…?

すると、シンとした教室に一人だけニヤリと不気味な笑みを浮かべている男がいた。その男と土方は目が合う。それに気づいた男はグツと親指を立てる。

「総悟オオオオオオオオオツ!」

土方の名前欄に「ちんかす」と書いた張本人は沖田だった。こんな名前を書かれています。いい気持ちではない。しかし…。

「土方は後でオレと二者面談だ。」

「は?イヤ、待て」

何故、そうなる!?!と抗議しようとする土方だったが…。

「うるさい、席につけ」

「クソツ」

無理やり席に戻される。

「よし、次。近藤。」

「はい…。」

「お前コレどういうことだ？」

「いや、ゴリラです。」

「イヤ、そーじゃなくて」

解答用紙の裏には本物そっくりのゴリラが描かれていた。

「お前は日本史を営めてるのか？」

「イヤ…。それはアレです。自分を動物に例えたらこんな感じかな…みたいな…。」

すると、沈黙が訪れる。訓練兵全員は西村がどんな反応をするか予想できた。しかし、近藤に関しては、自分の絵がどのように評価されるかウキウキしてる様子だ。

「近藤…」

「はい…」

すると、近藤の股間に西村の拳がクリーンヒットする。

「ゴフツ！」

そして、再び西村はテストを返却し始める。

そして順番は最後になり…。

「アリス・セイラー」

「はい」

呼ばれたのは金色の華やかな髪に淡いブルーの瞳をした小柄な少女である。成績は優秀で男女共に慕われている存在だった。

「よくやった。満点だ。」

「ありがとうございます。」

アリスはニコリと微笑む。西村教官も感心したような表情を浮かべる。しかし、明久に目を向けた瞬間、西村の目は鋭くなり、

「吉井、お前もアリスを見習って精進しろ！」

「ハイ…」

何で自分だけ…。明久はそう思いながら渋々返事をする。

---

そして、今日の一時限は実戦訓練。武器を召喚した実際の戦闘訓練である。

西村が二人ずつ呼び出し、その二人は戦い合う…一対一の戦闘をモデルとした訓練だ。

最初に呼び出されたのは…。

「吉井明久、アリス・セイラー。前に出ろ」

「はい」

「えっ？ちよっ！ウソでしょ！」

名前を呼ばれ堂々返事をするアリスに対し、名前を呼ばれ「嘘でしょ？」と嫌そうな表情を浮かべる明久。それもその筈。アリスの成績は上から数えて一番目。それに対し、明久は下から数えて一番である。

「いいから、さっさと出てこい、ボケ！」

「…はい」

成績トップの少女と最も悪い成績を誇る少年の戦闘が始まる瞬間だった――。

## 優秀な少女と落ちこぼれの少年

「よし、戦闘開始ッ！」

西村教官は戦闘開始の合図を出す。

「試験召喚（サモン）！」

明久とアリスは武器を召喚する。明久の武器は木刀、アリスの武器は西洋剣である。

「うおおおおおおおっ！」

明久は全力で前方にダッシュする。アリスはそれを平然と眺める。明久の走る速度はアリスにとって、見切れる速度だったのだろう。

しかし、明久は途中、足を止める。すると何か苦痛そうな表情を浮かべる。

「す、すみません。トイレ行っていいですか…。まだ、今日のお通じまだで…。」

すると、沈黙の空気が漂う。その場にいた全員が「コイツ、バカだ」と思った瞬間だった。

「吉井、後ろ」

西村教官は明久に後ろを向くよう指示する。

「ハ？後ろ？」



明久は「何のことだ？」と難しそうな顔で渋々トイレに行きたい気持ちで我慢して後ろを振り返る。すると、後ろには既にアリスが明久の背後をとっていた。

アリスは容赦なく剣を振るおうとする。

「……………え？」

その瞬間、明久は何かを発見したように目を見開く。その原因となるものはアリスの剣にあった。

アリスは成績優秀とはいえ、まだ下級騎士。国家騎士みたく、レベルの高い武器は召喚できない。

しかし、剣を振るう瞬間、刃の色が『金色』に輝いた。それはほんの一瞬の出来事だった。そのため、見てる訓練兵、西村教官ですらそれには気づいてないようだった。

明久はその剣戟を見切り、ギリギリのタイミングで躲す。

「……………！」

アリスは予想もしていなかった明久の動きに少し驚いたような顔をする。  
しかし…。

「ぐへっ！」

明久は上手く躲したものの自分の足元にあった石に躓き転ぶ。

「や、ヤベ！コレ痛ッ！」

明久は倒れ込んで膝を抑え込み悶え始める。割にダメージを受けたようだ。

「…コレはアリスの勝ちだな…。」

西村教官は少し困ったように頭を掻くが、この現状だと明久を負けと見るほかない。

「イヤ、鉄人！こんなひ弱そうな女子には負けませんよ！もう一回お願いします！」

明久はここ最近、優秀な彼女とよく比較され、コンプレックスを抱いている。いくら、明久でも、ここまで比較されれば、プライドというものも出てくる。

西村教官はハアと呆れたようなため息をつく。しかし、いくら明久が成績が悪くても、石につまずいて、負けにするのも流石に可哀そうと思っただのか、「そうだな、じゃあ…」と喋り始める。

明久はその言葉に嬉しそうな反応をするが、西村の喋りを遮る女子訓練兵がいた。

「いいえ、不要です。先生。」

その声の主はアリスだった。

「そこにいるバカは私に勝てなくてももう一度挑みかかろうとしてるのでしょーけど、自分で転んだのは自分の責任です。彼はその自己責任を否定してるだけ。よって私はもう一回戦うのは必要ないと思います。」

アリスはキリツとした口調で答える。

西村は「うゝむ」と難しそうな顔をする。

「ちよつ！何もそこまで言わなくても…」

明久は必死に反論しようとするが、反論するだけの言葉が出てこない。

「じゃあ言いますけど、今のが本当の戦争だとします。そこでアナタは石につまずいて転んだからと言つてもう一回相手に戦いを挑みますか？」

「そ…それは…！」

明久は口ごもる。確かにアリスの言うことは正しかった。戦争で負けた敗者が勝者にもう一度挑みかかる。それは恐らく不可能だ。

「でも、これは訓練だ！本当の実戦にいるわけじゃない！」

明久はどうにかしてアリスを説得しようとする。

「確かに…。これは訓練です。」

アリスもこの実戦が訓練であることは認める。

「でも、私達はその戦場に赴くためにこうして訓練をしている。アナタは此処を遊びの場か何かと間違えているんじゃないですか？」

「……………」

「私に勝ちたいなら、もう少し真剣にやったらどうなんです？」

「……………ッ！」

明久は何か反論しようとする。しかし、言い詰められ何から言い返せばいいか分から

ない。

「よし、ここまで。次の対戦相手を呼ぶから、お前らはさっさとあっち行け！」

西村はこれ以上争ってはキリがないと判断し、言い争いを無理やりやめさせる。

「おい、明久。あまり気にすんな。」

「ウム。成績が全てではないしの。」

「思春期にはエロも必要……」

雄二、秀吉、ムツツリーニは言い詰められた明久を慰める。そんな三人に明久は「ありがとう」と微笑む。約一名、ムツツリーニに関してはフォローしてるのかしてないのかがイマイチだが……。しかし、明久の微笑みにはいつものような元気はなかった。

アリスは普段、放課後になると一人教室に残り今日ならった授業などを復習している。

彼女にとってそれは習慣であり、他の人がそんな彼女を不思議そうに眺めても、彼女はそれを気にしなかった。

「……フウ……」

アリスは開いていた参考書をパタンと閉じる。手首をグツと伸ばし、一息をつく。そんな時――。

微かにだが、外からブン、ブンと素振りの音が聞こえる。素振りと共に「ハツ、ハツ」と掛け声らしき声も聞こえる。

「何……？」

アリスは少し気になり、外に出ることにする。

そこには放課後の誰もいないグラウンドで一人素振りをしている少年がいた。

その少年は、今朝アリスと言い争った少年、吉井明久だった。

「……え……？」

アリスは不思議そうな表情を浮かべる。そんな彼女の横に西村が現れる。

「何してるんだ？」

「いえ、彼は何をしてるんですか？」

アリスは不思議そうな表情で明久を指さし西村に質問する。

「ああ、いつもアイツは放課後ああやって素振りをしてるんだよ。」

「いつも……？」

「お前は気づいてないだろうが、アイツはああ見えて努力家なんだ……。人がいる所じゃバカなことばかりしてるが……。それでも、人のいないところじゃああやってひたすら素

振りや勉強に取り掛かってるんだ。」

アリスは西村の言葉を聞き、無意識に明久の方に目を見やる。

確かに明久の表情は真剣なものだった。西村の言う通り、明久は努力家なのかもしれない。

しかし、やっぱりアリスは彼を認めたくない気持ちがあった。明久はいつも何か物事に失敗しても、負けてもヘラヘラしている。真面目なアリスにはそれが気に食わなかった。

しかし、そんなアリスの気持ちを察したのか、西村は口を開いた。

「明久は……アイツは家族を亡くしてる」

「……え？」

その衝撃の言葉に思わずアリスは声を上げる。そう思うのも無理は無いのかもしれない。

アリスは明久のヘラヘラっ振りには何も不安のない成績の悪い少年と受け止めていたからだ。

「アイツは物心ついた時から親の顔を知らない。その頃から姉が親代わりになって育てた。アイツの姉は誰もが知る国家騎士で吉井にとっても自慢の姉だった。だが、その姉も四年前殺された。アイツはそれまで騎士になることなんてまったく考えてなかつ

た。だが、姉の死を通して、姉が死にかけてまで守ろうとしたのは何なのか、それを見つげるためにここに来た。アイツなりの覚悟だ」

「…明久君が…。」

先ほどまで彼を認めようとしないう気持ちが溜まっていたが、いつの間にか同情に近い気持ちが入り込んできた。

「お前なら分かるんじゃないか…。同じ家族を亡くしてるお前だからこそな…。」

西村の言葉にアリスは必死に素振りを擦る明久に同情の眼差しを送る。

翌日――。

授業を終え、放課後を迎えようとしていた。そんな中校庭で一人だけ不審な行動をしていた。何か辺りを見回し、キョロキョロしてる様子だ。

「おい、明久。何してんだ？お前。不審者か？」

正直に気持ちを述べたのは雄二だった。

「イヤイヤ、違うよ。見張ってるのさ！」

「あ？誰を？」

「アイツだよ。」

明久が指差したのはアリスだった。

「あ。アイツはいつも皆帰った後も勉強してるぞ。」

「え？マジでか。」

「ああ。優等生はやっぱ考えること違うのかねえ…。」

明久はムムムと表情を固くする。そんな友人の姿に雄二は怪訝そうな表情を浮かべる。

「お前…。何をしようとしてんだ…？」

「いや、ちよつとストーキングをしようかなって思ったんだけど…って、あー！」

明久は思わず自分が喋った失言に気づく。雄二はそんな明久をニヤニヤと見つめる。

「そういうことなら、オレは先に帰るぞー。じゃあなく変態。」

「……グ……ッ」

明久は普段ならこの悪友に何か言い返すところだが、確かに今の行動は不審者という名がしつくりくる。

「…くそ、バカ雄二め…」

そう言いつつ、明久は再びアリスを監視する。

そもそも明久がこんな不審な行動をしているのは昨日、実戦訓練で敗けて、それを彼



女にいろいろ言い負かされたのをまだ気にしていたのだ。

そこで明久は彼女が普段放課後をどのように過ごしてるのか、チェックしようとしたのだが…。

よくよく考えればこれは普通に犯罪だ。しかし、ここまできたなら最後までやり遂げよう、そんな気持ちも湧き上がってくる。

しかし、いくら待ち続けても彼女は一向に席から立ち上がろうとはしない。よく、あそこまで勉強に熱心になれるなあ…と感心そうに見ていた。

しかし、季節は冬。夕方は少し冷え込む時間だ。明久も手首が冷えてきたのでそろそろストーカー行為を諦め帰ろうか…。そんなことを考えた時、アリスは静かに立ち上がる。

それに反応し、明久は草陰に隠れてアリスが校門を出るのを見送る。そしてそつと明久はその後を追っていく。

実は明久はストーカーには自信があった。彼は尾行の得意なムツツリーニからストーリーキングの極意を学んだ。そして、家ではその学んだ極意をイメージトレーニングし、実力を身に着けている。

その為、妙に自信があった。正直、いらぬ自信なのだが…。

しかし、尾行していき、明久はあることに気づく。それは彼女の歩く道は住宅街から

外れていた。また、人の多い、王都の商店街に行くわけでもなさそうだ。

そして行き着いた場所は…。

「フミツキ霊園…？…何で？」

何故、家ではなく霊園に来たのか分からない。墓参りにでも来たのだろうか…？

明久はそのまま後を追けてく。そして彼女はある墓石前でピタと足を止める。

そして、それと同時に彼女の長い金色の髪が冷たい風と共に靡く。そして気のせいだろうか？何か雫のような物が零れ落ちていた。

「…え…」

明久は一瞬それは気のせいだと思った。しかし、気のせいでも何でもない。

彼女の瞳には涙が溢れていた。

「お父さん、お母さん…」

彼女は小さい声で呟く。

普段の気の強い彼女はそこにはいなかった。

彼女が何を抱え、涙を零しているのか、明久には理解できなかった。

## 似た境遇

「……お父さん……お母さん。」

彼女の瞳からは涙が零れていた。

彼女が一体何を抱えているのか——？ 明久はアリスが涙を零す理由が分からなかった。

しかし、そんな悲しそうな顔をする彼女だが表情を抑え、彼女はいつも通りの気の強そうな顔に戻る。

「そこに誰かいるんですか？」

アリスは明久が隠れている草むらに視線を送り言う。

（ま、まさかバレてるのか？）

明久の胸中は焦りの色に包まれる。ムツツリーニから教わったストーキングがこうもあつさり気づかれるとは思っていなかった。何よりも彼女の勘の鋭さには驚かされる。

「……………」

明久はしばらくどうしようか考えていたが、このまま隠れ続けても、かえって状況を

悪くするだけに感じた。明久は仕方なく草むらから出ることにした。

「……………えくと……………」

明久は少し気まずそうに姿を現す。そんな明久を見てアリスは「ハア」とため息をつき、「やはりアナタでしたか」と呟く。

「まったく、私が泣いてるところを影で見るとかなんて良い身分ですね…。」

アリスは怒りに近いような声色で喋る。明久は「…ぐっ…」と、言い詰められたように表情をかためる。

「まさか、私の後を追けてたんですか？」

「うん、まあ…。」

何か言い訳しようかとも思ったが上手い言葉が見つからない。それにアリスほどの相手だと説得するのも難しい。

「まさか馬鹿な上に変態だったなんて…。人間として最低ですね」

アリスは軽蔑の視線を送る。明久は心に釘が刺さったような気分襲われる。

「いや、人間性までは否定されたくはないけど…。」

明久はふてくされたように言い、アリスから視線を逸らす。アリスは「まったく…。」  
そう言い、アリスも視線を下に落とす。

そのまましばらく沈黙の空気が流れる。ただ、冬の冷たい風の音だけが二人の間を過

るように吹いていた。

そして、しばらくして…。

「…これはご両親のお墓…かな？」

明久は距離を置くようにして聞く。こういうことは直接的に言うのはまずい…。脳がそう判断していた。

「……………」

アリスは口を閉じたまま何も言わない。明久は自分が失言をしたか…と自責の念にかられる。

しかし、その直後、アリスはゆっくりだが、口を開く。

「…明久君の目には私がどんな人間に映ってますか…？」

その時の彼女の表情はいつもの強気な感じは消えていた。何処か弱々しい…。そんな風にも見える。

「どんな？…うん。普通に成績が優秀で、少し気が強い女の子…つてとこかな」

明久は素直な気持ち述べた。そんな明久の返答にアリスは弱々しく笑う。

「やっぱり…そう見えますよね…」

視線を下に落としていたアリスは顔を上げ、霊園を照らす夕日を目を細めて見る。

「でも、本当の私はそんなに強くはない…。三年前、両親が亡くなり私はずっと泣いてい

た。そのときから私は孤立していた。そして、自分の弱みを見られたくないから、成績優秀で、気が強い女の子を演じていました…。」

「…アリス…」

「でも、違う。本当の私は酷く臆病で自分が一人なのを他人のせいにした。それが嫌で私は『もう一つの自分』をいつの間にか作り上げていました。可笑しいでしょ？ 気が強い優等生が本当は臆病だったってオチは…。」

アリスは皮肉っぽく言う。おそらくアリスはそんな自分を嫌い、そんな自分を心の中で受け入れたくなかったのだ。

そんな自分を明久はきつと馬鹿にするだろう…そう思っていた。しかし…。

「そんなことないよ…。」

「…え…」

明久の意外な言葉にアリスは目を見開く。しかし、明久はふざけて言ってるようでもなかった。彼の瞳は何かを伝えようとする真剣そのものだった。

「僕も四年前、唯一の家族だった姉さんが殺された。だから妙な孤独感にも襲われたし、自分を攻めたくなくなるような気持ちもあった。だから君の気持ちはよく分かるよ。」

「…明久君…」

いままで気の強い自分を演じ続けてきたアリスにとって明久の言葉は初めて自分を

受け入れてくれた言葉だった。

何となくだがその言葉が嬉しかった。

「それに、僕は気の強い君でも、弱みを見せる君……。両方あっても全然構わないと思うよ。」

「……ど、どうしてですか？」

アリスは不思議そうな顔をする。本当の自分を隠し続けてきた自分は罪だ、そう思っていたアリスには明久の言葉が理解できなかった。

「だって、どんな君でも君は君だ。僕はどんな君でも好きだよ。」

明久はニコリ微笑んで言う。

「…………え……」

すると、アリスの頬は爆発したように赤くなる。きっと明久本人はその言葉がどういう意味を指しているのか自覚はないのだろうが……。

「アレ？どしたの？顔赤いけど、風邪？」

「い、いえ。何でもありません！」

アリスは顔を赤くして明久から視線を逸らす。どうやら彼自身、本当に自覚はないみたいだ。

しかし、目を逸らしたアリスは少ししてから顔を上げる。そしてニコリ頬笑み、「あり

がとう」と言う。

明久は彼女の笑顔を初めて見たような気がした。

翌日――。

明久は眠そうな顔で通学路を歩く。

そんな中、一人の少女が明久に呼びかける。

「明久くん」

「ふあ?」

明久は欠伸をしながら振り向く。そこにはアリスがいた。

「アレ?アリスっていつもこの時間帯に登校してるの?」

「アナタじゃないんだし、こんな時間には登校しませんよ。」

話を察するにアリスは普段はもっと早く家を出てるようだ。確かに真面目な性格なので、明久みたく平然と遅刻するようにも見えない。

「ま、まあ…その…。今日はちよつと寝坊しちゃったといいますか…。け、決して目覚ましをセットしていなかったわけじゃないんですよ!?!」



「あー…。うん、そうなの？」

アリスは必死に寝坊した理由を隠そうとしているのだろうが、無意識に暴露してしまつてる。

悪戯つぼく「へへ。目覚まし壊れてねぼうしたんだ」と言つてみても良かったが、それは敢えてしないことにする。

彼女は真面目なので少しでも自分が怠け者ときつと思われたくないはずだ。

すると、アリスは何かを言いたげな表情をする。

「ねえ、明久君。一昨日の実戦訓練の時のことなんですけど…その、ごめんなさい」

「……………え？」

明久はキョトンとした目でアリスを見る。

彼女がこんなにも素直に謝っているのを今まで見たことがなかったからだ。きつとプライドの高さのせいなのだろうが…。

「いや、別にそこまで気にしてないから大丈夫だよ。それにあれは僕もちよつと悪かったと思うし…。」

そんな素直に謝る彼女を見て明久も少し戸惑いながらも、「悪かったのは自分もだ」と思い、謝る。

「…やっぱり正直に謝るって大切ですね…。」

アリスは悟ったように言う。いままで気づかなかったものによく気付けた…。そんな感情が彼女の顔に表れていた。

「そうかもね…」

明久はアリスの言葉に同情するよう頷く。

「私はプライド高いので昔から素直に謝ることをしませんでした。どんなに悪いと思っても、自分を正当化していたから…」

アリスは今までの自分を振り返るように言う。明久はそんな彼女の瞳を見つめていた。

「でも、そんな自分に正当化すればするほど虚しくなる…。そう気づいたんです。」

「…そっか…。」

明久はニコツと笑う。そんな明久につられ、アリスもニコリと微笑む。

「明久君、今日の放課後、空いてますか？」

「え、今日？ いや、まあ大丈夫だけど…」

「じゃあ、放課後空けといてください。」

そう言いながら二人は訓練所へ向かう。

放課後——。

訓練兵はそろそろと教室を出始める。

「おい、明久帰ろうぜ。」

いつも通り雄二が帰りを誘ってくる。しかし、明久は少し戸惑ったように、

「あー、いや。今日は無理なんだ……」

明久はポリポリと頭を掻きながら言う。

「なんだ？またストーキングか？」

「あの、雄二。僕がストーカーみたいなの言い振りやめてくれない？」

「やめてくれないって言われても昨日ストーキングしてたじゃねえか……」

雄二は「何を今更……」と言う様な表情で言う。

すると、明久は背後から息が詰まるくらいの冷たい殺気を感じた。明久は首を機械のようになぎこちなく動かし、殺気を向けてくる人物に顔を向ける。

「アキ……。昨日、ウチと何か約束したハズなんだけど覚えてるかしら？」

「えーと、何のことでしょう？美波様……」

明久は美波から出る異様なオーラに怯えながら「何のことだ？」と訊く。

「昨日、映画見るって約束……」

「……あ……。」

呆けたような声を出す明久。どうやら美波との約束を思い出したらしい。

話の内容を察するに、明久は昨日、美波との約束を忘れ、ストーカーに専念していたことが分かる。

美波はポキポキと関節を鳴らす。指を一本ごとに関節を鳴らす音が異様に耳に響く。ある意味、鉄人が殴りかかってくる時よりも恐ろしさを感じるほどだ。

「じゃあね、雄二。また明日学校で！」

「ああ。会えると良いな。」

明久は雄二に別れを告げ、そのまま猛ダッシュして走る。雄二に関しては、何処か目が「永遠にさようなら」とでも言うような目をしている。

「待ちなさい、コラーアー……！」

美波は獣を狩るライオンのように駆けていく。それほどまでに彼女の表情は恐ろしい。

そんな彼女を見て雄二は、「ホント、あいつバカだな」と哀れそうな目で言う。

「明久君、遅いですよ」

「いや、ゴメン。ちよつと邪魔が入つて遅くなつた」

明久は申し訳なさそうに詫びる。そんな彼を見てアリスは「もう、いいですけど」と呆れたように溜め息をつく。

だが、確かに今は季節は冬。寒い中、彼女を待たせたことに明久は反省する。

「さ、行きましょ」

明久は明久の前を歩く。

「えくと、そういうえぼどこに行くの？」

明久はまだアリスに何処に行くのか聞いてなかった。しかし、アリスは悪戯っぽく微笑んで「内緒です」という。「何処に行くんだ？」と疑問を抱えたまま明久は彼女についていく。

## ワスレナグサ

「…あの、ホントにどこ行く気なの？」

「着いてからのお楽しみって言ったハズですよ」

明久達は今、暗い森の中を歩いてきた。まだ日は落ちてないが、森の中を歩いていると、外は夜なのか、と思ってしまうほどである。

「つて、ぎゃああああっ！蛇だア!？」

明久は先程から手首に何か巻きついている…そんな感触をしていたのだが、見てみるとそれは蛇だった。

「まったく蛇ぐらいで情けなですね…」

アリスはつまらなそうに息を吐く。

「え？いや、だつてコレ蛇…ぎゃああああああああっ!？」

明久は再び叫び声を上げる。もう一回叫び声を上げたのは、蛇が手首から徐々に肩のあたりまで上り詰めてきたからである。

森の中だから蛇がいるのは当然と言えば当然なのだが、実際巻きついてくると、気持ち悪い。

しかし、アリスはそんな明久を見て呆れている上に、他人事のように「そんな怖くありませんよ」と言う。「じゃあ、この蛇どうにかしてくれ」と明久は情けない声を出す。すると、アリスは明久に巻きついていて、蛇にそつと触れる。そして、その蛇の瞳をジツと見つめる。蛇も思わずアリスの瞳を見つめる。

アリスの淡いブルーの瞳が蛇に何かを伝えようとしていた。

そして、しばらくすると、蛇は明久の腕から離れ、元の草むらへと戻っていく。

「これで大丈夫ですか？」

「う、うん……」

明久は少し戸惑ったように頷く。

それもそうだろう。今の光景は何処か不思議だった。アリスと蛇が互いに心が通じ合っているような、そんな光景だった。

「あの……。どうやって蛇を僕から引き離したの？」

明久はその光景の真実を知るためにアリスに恐る恐る質問してみる。

「何って、目で蛇と会話してたんです」

アリスは当然のように答える。明久は「はい？」と疑問の表情を浮かべる。

「まあ、確かに普通の人からすれば、不思議……なんででしょうね。でも、私、昔から人間じゃない動物たちの声も聞こえるんです」

「それって、動物の言葉が分かるってこと？」

「…はい」

アリスはニコリと微笑む。

「まだ、言葉も喋れない赤子の時からまだ何も喋れないはずなのに、動物と触れると、動物の気持ち…例えば喜び、悲しみ、苦しみ…。そういった感情が読み取れるんです。…変ですよ」

「…いや、そんなことないよ」

明久は感じた。彼女はいつもは気が強くてプライドも高い。しかし、彼女は本当は優しいのだと悟る。それは人間だけでない、動物に対しても。そんな彼女から器の大きさを感じる。そして、そんな彼女の笑顔からは太陽の光のような温かさを感じる。器と言ふ心の広さも太陽のような温かさも明久にとつて心を癒すような心地よさがあった。

「あ、着きましたよ」

アリスが到着の合図を出す。すると、暗い森に光が照らしていた。

明久達はその光に向かい、一步踏み出す。

「(トト)は…。」

するとそこは一面に広がる花畑だ。様々な種類の花が咲いていて、沈みかけの夕日とその花畑を明るく照らしていた。



季節は冬だ。なのにこの光景はそんな季節という縛りに囚われていないようだった

「すいい…」

「でしよ？」

明久はこれ程綺麗な景色を生まれて一度も見たことがない。まるでそこは天国にでもいるのではないか…？そんな感覚すら感じてしまうほどに。

そして、アリスは明久より一歩前へ出る。すると、夕日とアリスの影が重なる。夕日はアリスの白い肌、青い瞳、金色の髪、彼女の全てを照らしていた。

そんな彼女がいるだけで花畑は一層強い美しさを放っていた。

「明久君はどんな花が好きなんですか？」

「え？いや…。僕、花の名前とかよく分からないんだけど…。」

「まあ、明久君らしいですね」

アリスは「フフ」と笑う。明久は少し馬鹿にされたような気になるが、この光景を再び目にする、その気持ちは自然と消える。

「私はこの花が好きです」

彼女が指差した花は小さい花だった。

バラや桜といった目立つ花でもない。どこか儂いようにも見えるが、どこか力強さも感じる不思議な花だ。

「この花の名前は『ワスレナグサ』っていうんです」

「…ワスレナグサ…?」

「はい。この花はアラスカとかの寒い地域でも力強く咲いています。」

「へえ…。」

明久は彼女が好む花、ワスレナグサに目をやる。

「この花はある騎士が死ぬ直前に恋人の為にある言葉を残した…そんな伝説が残っています」

「へえ、どんな言葉なの?」

明久は興味深そうに訊く。すると、アリスは…

「…『私を忘れないでください』…」

その瞬間、冬の冷たい風が明久とアリスの間を過る。

そう、この花言葉は騎士のルドルフという人物が恋人ベルタに残した最後の言葉である。ワスレナグサにはそんな悲恋の伝説が残っていた。

「明久君はもし私が死んでも覚えてくれますか?」

アリスが何故こんなことを言ったのかは分からない。しかし、彼女が悲しそうに笑っていたのは確かだ。

どうしてそんな顔するのか、明久にはよく分からなかった。

その頃王宮ではカール二世が夕食を食べようとしているところだった。

「よし。今日は焼肉だよ！食うぞ〜」

カール二世は鉄板に肉を敷き始める。敷かれた肉は「ジュ〜」と美味しそうな音を放つ。

「陛下、毎日のように肉を食べるのはどうかと思いま…ブツ〜」

肉を焼くカール二世に口出したのは側近の竹原だった。しかし、途中で何故か下を嘔んでしまったらしい。

「あ？何ていった？」

「だから、毎日のように肉食うと豚みたいになるぞボケ！って言おうとしたんだよ、クソババアツ！」

「おい、言動が綻んでんぞ。何がババアだ、コラ。それにいいだろ？肉食うくらい。生い先短いんだから、好きな物食って死なせる、馬鹿」

二人とも、荒い言葉遣いで言い争う。本当に皇族の人間か？と目を疑いたくなる。

そんな言い争いをする中――。

「……ッ!!」

「……!?!」

凍えるような寒気が二人を襲う。恐らくこれは殺気だ。

「何だい? 一体何処からこんな……!」

しかし、その殺気の源と云うべき人物はすぐそこにいた。

「お久しぶりです。陛下。そして竹原さん。」

言葉遣いからして、竹原とカヲール二世の知人らしい。

「誰だい?」

しかし、黒いフードを被っているせいで顔が隠れ、知人とはいえ誰かは認識できない。

「……忘れたはずはないでしょう? この顔を……」

すると、その男は黒いフードを外す。カヲール二世も竹原も驚愕の表情を浮かべる。

それは有り得ない人物で、この世に居てはいけない存在だった。何故なら彼は四年前に死んだ人間なのだから。

「……高城……!」

彼の名前は高城雅春（たかしろ・まさはる）。四年前に第一国家騎士の吉井玲に殺された筈の人物だった。当然生きているはずがない。

「何故、お前が生きて……!?!」

「意外な反応ですね…。僕は死霊術士です。肉体が壊れたぐらいでは死にませんよ。」  
高城は嘲るように笑う。

彼は死霊術士だ。肉体という入れ物が滅んでも魂が無事なら彼は再び復活できるのだ。

「またフミツキを襲うつもりか？」

「いえいえ。肉体を取り戻したとはいえ、まだ吉井玲に受けた傷が痛みましてねえ。そうしたいのは山々ですけどね。」

「ふふ」と不気味な笑みを浮かべた。

「ですが、一応気を付けた方が良く…。とだけ言っておきましょうかねえ。」

「…どういうことだ？」

カール二世はギロリと高城に睨みつける。四年前のような出来事が再び起きてはいけない、彼女なりの覚悟だ。

しかし、高城はそんなカール二世の瞳を見ても表情を変えようとはなかった。

「この王都に『アリス・セイラー』という少女がいるでしょう？」

「ああ。訓練兵の中で最も優秀な成績を持つ騎士だ。」

カール二世は王都の騎士全ての顔と名前を認知している。今更、そんなことを聞いてどうする？ そんな表情を浮かべる。

「四年前、僕が死霊術を使い、人造人間（ホムンクルス）を造ろうとしたのは知ってますよね？」

「ああ。そのために何人もの民間人が犠牲になったな……」

カフォル二世は怒がましく言う。高城は「ええ、まあ」という。だが彼には自分が罪を犯したという意識はほとんどない。

彼にとつて民間人が犠牲になったのは人造人間を造る過程に過ぎなかった。

「……だが、アレは失敗したはずだ。」

「……失敗……？」

カフォル二世の言葉に高城は「一体何をいつてるんですか？」という表情をする。

「……確かに失敗例の方が多いですけどね……。でも、『成功例』が一つもないとも言ってますんよ？」

「……何だと……!？」

カフォル二世は高城の意外な言葉に思わず声を上げる。一緒にいた竹原も驚きの表情を隠せないようだった。

「ああ。実際、このフミツキに住んでますよ。『成功例』は。」

「……馬鹿な……!」

一体何がどうなっている？とドンと机を叩き、カフォル二世は焼いていた肉をやけ食

いする。竹原もそんな事実を聞いて落ち着いてられないのか急に筋トレをし始める。目の前に敵とも言える人間がいるにも関わらずだ。

「ああ。ちなみに、『アリス・セイラー』。それが『成功例』の名前です」  
するとやけ食い、筋トレしていた二人の動きがピタリと止まる。

「…何を言ってるんだい？あの娘は生まれた時からずつとこの町で暮らしている！お前が『成功例』とやらを完成したとしてもそれはたった四年前だ！」

すると、高城は混乱した二人を面白そうに見ながら「フフ」と笑う。

「同情しますよ。混乱するのも無理は無い。でなければ、僕の『計画』は成功とは言えない。ちゃんと記憶を狂わせるための結界を張ってんですよ。まるでアリスが生まれた時からこの町にいた、という認識を作るために」

「…結界…？」

「ええ、まあ。まあ全部理由あつてのことです。実は以前からある剣が欲しくてねえ…」  
「剣…だと？」

「アナタが創つたこの『試験召喚システム』…。このシステムが完成したことでもいろんな聖剣、魔剣などが召喚されるようになった。だが、一つ。一つだけ召喚されていない『聖剣』がある。」

カール二世は眉をピクと動かす。彼女にも心当たりがあるようだ。

「ま……まさか……！」

「そう……。『騎士王の聖剣』（エクスカリバー）。」

誰もが知るこの剣。実はまだフミツキでは召喚されたことのない剣だった。どんなに優秀な騎士でもこの剣は召喚された経歴がない。

「しかし、例え世界中の誰もその剣を召喚できないとしても、『本人』だったらどうでしょう？」

「お前……まさか……！」

「そう、『アリス・セイラー』はエクスカリバーの担い手『アーサー王』の魂を植え付けた『転生体』と言ってもいい。いや、まさかアーサー王が女性だとは思いませんでしたが……。ああ、勿論アリス自身も自分の前世の記憶なんてものは存在しません。だが、彼女の魂は間違いなくアーサー王そのもの。ただの人造人間（ホムンクルス）と思わない方がいいですね。」

「その為だけに造られた人造人間（ホムンクルス）ってわけか？」

ええ、と高城は頷く。そして、その剣はいずれ僕の物となる……そう言い残し彼の姿はスーと影のように消えていく。

「陛下……今の話は本当なのでしょうか……。」

竹原は不安そうに訊く。



「本当と断言できないが……。嫌な胸騒ぎはするね……」  
カロール二世は眉間にしわを寄せて再び肉を焼き始める。

## 血のクリスマス・イブ

12月24日。時刻は17時46分。

この時期の王都ファミツキはクリスマスのイルミネーションで光輝いている。そのたぬイルミネーションを見る為に集まってくる人々が多い。

その上今日は雪も降っているためクリスマスらしい雰囲気は漂っている

「…ハア…」

アリスはそんな商店街を一人で歩いてきた。本当は明久を誘おうとしたのだが、今日は成績の悪い者は訓練所で居残りさせられている。

アリスはふと足を止める。商店街の中央に立つ巨大クリスマスツリーに目がいったからだ。

「…キレイ…」

毎年この時期に見てるハズの景色だが、いつも新鮮な感じになる。

そんなツリーをぼんやり見ている時だった。肩を叩かれてたような気がした。

「…はい？」

アリスは叩かれた方へと振り向く。すると、黒いコートを着た長身の男が立ってい

た。小柄なアリスと立つと、大人と子供くらいの身長差だ。

その男はフードをかぶっているせいで顔が見えない。とはいえ、アリスの知人というわけでもなさそうだ。

「…あの…。誰ですか？」

アリスはその男に問う。その男は正直不気味だった。見た目的に普通の人間には見えなかった。

「…知る必要はありません。君はただ僕に従えばいい」

「？…何を…」

男の言葉に怪訝そうな表情を浮かべるアリス。「何を言ってるんですか？」と言おうとしたのだが…。なぜか口が麻痺したように動かない。

いや、口だけではなかった。両腕、両足も次第に動かなくなる。脳は自分の意志で動いているはずなのに、体はその脳の命令に無視しているようだった。

「君は僕の人造人間（ホムンクルス）です。君は僕には逆らえない。そういう風に出来る」

「何を言っている!？」と怒鳴りたい気持ちでいっぱいだった。だが、既に体の支配権は奪われているように感じた。

町の人々はどうかやらこの異常事態には気づいていないらしい。これでは助けを求め

ることすら出来ない。

それに気のせいかな。少しずつ意識は闇に持って行かれる。

「シア…。アリス。解放しなさい…アナタの力を。」

「何をふざけたことを言っている!？」そう言いたいはずが、アリスが口にしたのはその男を貶すための言葉でも何でもない。

彼女が言葉にしたのは「試験召喚(サモン)」という武器を召喚するための言葉だった。そして、その時金色の光が町を包み込む。イルミネーションの光よりも強い光だった。

町が金色の光に包まれる。

(…ついに来ましたか、この時が!)

高城は今まで見せたことのないような喜びの表情を浮かべる。

「ねえねえ、ママ。アレもクリスマスのヤツなの?」

「さあ? 何でしょうね?」



「あああああああああああああああああああああああッ」

「……なに？」

アリスは苦しそうな叫び声を上げ、高城の腕を斬りおとす。

「アリス…貴様…」

高城は苦痛そうに顔を歪める。そして、周りにいた人々はそれを見て「キャアアア」「うわあああ」などの悲鳴を上げ逃げ出す。

「あああああああああああああああああああああッッッ！」

アリスは雄叫びのような声を上げる。

どうやら召喚は成功したようだ。だが、この雄叫びを見る限りアリスは理性を失ってしまったらしい。

「チッ…。」

高城は舌打ちをし、その場を離れる。

そしてアリスは獣のような雄叫びを上げ、人々を無差別に襲う。

『強制召喚』…。

これは下級騎士などの位の低い騎士が強力な武器を無理矢理召喚することを言う。

普通、武器を召喚する際は下級騎士だろうと上級騎士だろうと試験の点数を召喚するエネルギー源として召喚する。騎士の位が上がれば当然点数が高い訳なので、召喚する武器もレベルの高い武器となる。

しかし、『強制召喚』は試験の点数を源とした召喚ではない。この召喚は召喚者の精神力、生気を主体としたエネルギーで召喚される。この召喚方法は7年前に禁じられた召喚である。

何故ならこの召喚は召喚者の寿命を奪い、下手すれば死ぬこともある。仮に寿命を奪わなかったとしても、理性、または心を失うこともある。

いくら下級騎士で優秀なアリスだとしても、この召喚に堪えられる保証はない。

「フ…。エクスカリバーを手に入れるのは失敗…というわけですか…」

高城は悔しそうに唇をかむ。

今までずっと求め続けた剣がようやく召喚されたと思ったら、その持ち主は高城を襲ってきたのだ。高城にとってそれは悔しくてたまらない。

彼にとつても彼女に無理やり聖剣を召喚させることで、理性を失い、暴走するなんて思ってもみなかったことだ。

しかし、先程まで悔しそうにしていた高城だったが、次第にその表情は笑みに変わる。「ですが、これはこれで良いかもしれませんね。あのフミツキがたった一人の少女に崩

壊される。それはそれで僕にとっては喜劇だ。」

高城の悪意に満ちた笑みが何処に向けられているのか、それは彼だけしか知り得ないことだった。

\*\*\*\*\*

「あああああああああああああああああああああああああああッ!!」

アリスは声を上げる。

彼女は逃げる子供、妊娠している女性、老人、命乞いをする人までも手にかける。彼女から逃げきれた者もいるが、死者の数も相当なものだった。

今の彼女には心がない。ただ無差別に人を殺す殺人者だ。

町は血に染まり、たくさんの命が消えている。

握る金色の剣にも赤い鮮血がこびり付いている。

そのとき――。

「動くな!」

約五十人もの騎士がアリスの目の前に現れる。王族に仕える上級騎士だ。

しかし「動くな」と呼びかけたところで、理性を失ったアリスには言葉は通じない。アリスはそのままその騎士たちに襲いかかる。



騎士達も剣や槍、弓、銃などを構える。前列の方に居た騎士たちは自分たちが襲われるかもしれないと緊張して居ようだった。

しかし、意外なことに悲鳴が上がったのは前列よりもずっと後ろの列からだった。そして、気付けばアリスは目の前には居なかった。

「…バカな…！瞬間移動か…!？」

ある騎士が叫ぶ。こんな動きを普通の人間が出来る筈がない。先程まで騎士達の前の方にいたアリスが一瞬で後方に移動した。

しかし、何処かおかしい。瞬間移動と呼ぶには妙だった。

地面を見ると、アリスの靴裏に付いた血がしっかりと付いている。

つまり、移動の形跡がしっかりと地面に表れていた。つまり、正確には瞬間移動ではなく…。

「これは超高速移動…!？」

ある一人の騎士が叫ぶ。

そして、一斉に大人数の人間がアリスに襲いかかる。剣、刀、弓矢、槍、銃弾…。様々な武器が彼女を貫こうとしたが、アリスはそんな攻撃をヒョイヒョイと躲してしまう。

そして、アリスは金色の聖剣で、彼らを次々と切り裂いていく。

そして、最後には彼女しか残っていなかった。

「はあくあ。ようやく終わったあく。」

明久は情けない声を出す。彼は今日、成績が悪いために西村教官の補習を受けていた。

ちなみに彼以外に雄二、土方、近藤、沖田が居た。

そんなわけでクリスマスという誰もが楽しむこの一日を彼達は補習で終わってしまった。

「こんな日くらい休ませろよ。クソが……」

雄二は不機嫌そうに怒鳴る。

「流石にこんな日まで鉄人と付き合うつてのはね……」

明久は苦笑いをしていた。疲労のせいか目が虚ろになっている。

ちなみにこんな時でも帰りのHRがある。正直いらないだろ、というのがこの五人の意見だが、反抗するとまた補習の時間が増えそうなので敢えてそれはしない。

そんなとき、電話の為、外に出ていた西村教官が戻ってくる。

「先生、帰りましょう。もうアンタの顔を見るのは懲り懲りだ。」

明久はつい本音を口にしてしまう。普段の西村ならここで「お前は明日も補習」とか

言うのだが、表情を見るにそれどころではないような…そんな感じがした。「お前ら。今日は此処に泊まれ」

西村は静かにそう言った。

「ええ〜！何でですか？」

「…少しは休みくれよ…」

五人からそんな声が漏れる。彼らにとって大事な冬休みの時間が消えるのは大きなダメージなのだ。それをまだ残される…それどころか泊まれというのは正直どうなんだ？そんな気持ちがある。

「悪いとは思っている。だが、今外は危険だ。」

「…どういふことだ？」

珍しく謝る西村教官に真っ先に質問したのは雄二だった。他の四人とは違い、何か危険を感じ取った風だった。

「…お前らに言葉で説得するのは難しいだろうな。今、送られてきた画像を開くから少し待ってろ」

すると、西村は送られた画像を拡大して明久達にその光景を見せる。それは息がつまりそうなくらいに悍ましい光景だった。

「…おい、何があつたんだよ！」

衝撃的な表情で土方は西村に向かい怒鳴る。

無理もない。それは血に染められた王都の姿だったから。普段の華やかな王都の姿なんてどこにもない。

「…スマン、オレもよくは分からん。だが、分かっただろう？今、危険だということは…」  
明久は目をしかめる。拡大された画像の中央に黄金の剣を持った少女が立っていた。その少女は腰まで届く金色の髪で小柄だった。

「鉄人、この少女は…？」

明久は西村に問い詰める。すると鉄人は眉をわずかに動かす。そして、「さあな」と言う。

しかし、今の西村の反応は今まで見たことのない反応だった。どうやら西村も明久と同じことを考えていたのかもしれない。

「……………」

それだけで十分だった。明久は部屋から飛び出す。

「待て！吉井！」

「おい、明久!?!」

そうだ。あの黄金の剣を持った少女は間違いなくアリスだ。あんな派手な髪の色をしているのはアリスくらいしかない。

西村も恐らくそれに気づいて、知ってて黙っていたのだ。

恐らく、今王都で起きていることはアリスが何か関係しているに違いない。

今、明久に出来ることなんてきつとない。しかし、ここでジツと待っても居られなかった。心の中で「止まるな!」と叫び続けていた。

(…アリス…)

明久が訓練所から抜け、西村は急いでカヲール二世に電話をかける。

『何!?あのバカが訓練所を抜けた!?!』

「ええ、抜けたというか飛び抜けたというか…」

『くっそ!とにかくアンタはそこに残りな!』

「私はでなくていいんですか?」

『アンタはそこにいるガキ共を守りな、バカの方は王族の方で探しておく』

「…了解です」

ピツと電話を切る。明久のみによくないことが起こらなければいいのだが…。西村の心には不安が募る。

\*\*\*\*\*

明久は商店街にたどり着く。その光景は酷いとしか言いようのないものだった。

店は荒らされ、下を向けば命を落とし、倒れている人々が大勢いた。そして、そんな中一人金色の剣を握った少女が居た。

「…アリス…」

明久は金色の髪を靡かせる少女の名を呼ぶ。

「…どうして…」

明久はギリと音をたたせ、唇をかむ。

ようやく彼女とお互いを分かち合えた…。そう思っていた。普段プライドが高いからよく分からないだけで、彼女が誰よりも優しいことに気付けた。

そんな彼女がどうして人を殺している？どうして、あんなに苦しそうに血の涙を流している!?

「う…おとおおとおおとおおとおおっ!」

明久は絶叫する。真っ直ぐアリスの方に向かいながら。

そして、地面に落ちていた王族の騎士の剣を二本とる。そして、それぞれ左右に一本ずつ持ち合わせる。

「アリスウーーーーー！！」

明久の持つ二本の剣が真つ直ぐアリスの方に向かっていく。

(君が人を殺せるハズがないんだ！優しい君がこんな…)

その証拠に彼女からは真つ赤な涙が頬を伝っていた。

だから、この剣は彼女を殺すためではない。彼女を止めるために…。

## 過去の記憶

「アリス……アリス……」

明久は悲痛な声で暴走する彼女の名を呼ぶ。

そして、血にまみれた町の中を駆けてゆく。そして、二本の剣をギュッと握る。

何故、彼は二本の剣を握るのか……？普通の騎士は二刀流の剣技を上手く扱うことはほぼ不可能だ。

しかし、明久は一刀の時よりも二刀の時の方が相手を上手く怯ませることが出来た。

左右の剣を上手く命中させ、剣の速さも一刀の時よりも速い。また、相手がどんなに強くても一刀なら防戦一方になるものを、二刀なら、攻撃、防御と上手く使い分けることが出来た。

しかし、それでもアリスの力に勝てるわけではない。なぜなら彼女の手に握る黄金の剣は『騎士王の聖剣』（エクスカリバー）。この剣により出陣した50人の王族の騎士達も全滅。

今の彼女は人間と呼ぶにはかなりの抵抗があった。



それでも、明久はどんなに手を汚して理性を失った彼女でも、あのときの優しいアリスがそこにいるんだ、と信じていた。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

明久の右手に握った剣が彼女の頭上を襲おうとしている。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!」

アリスは飢えた獣のような雄叫びを上げ、明久の剣を黄金の剣で弾く。そして、劍の柄で、彼の腹部を強く突く。

「……がっ……」

そして、アリスはそのまま何の迷いもなく明久を斬り捨てようとする。

「……………」

明久はそれに何とか反応し、二本の剣でその斬撃を防ぐ。だが、まだ彼女の斬撃は続いている。彼女はそのまま明久の剣ごと押し切ろうとしている。

「……ウ……オオッ!」

アリスの剣は強い重力場が出来たように重かった。剣を必死に支える両手首もそろそろ痺れて限界を迎えようとしている。だが、この状況下では、少しでも気を抜けば殺される。

「くっそオオオオオオオオオオオオ」

明久はアリスの黄金の剣には敵わないと思いい両手の剣を盾にし、そのまま後退する。二本の剣は、パキインと音を立て、破片となる。

そして、またすぐ傍に落ちていた二本の剣を拾い、構える。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

アリスは再び雄叫びを上げ、明久に襲いかかる。そして明久はそれに反応して躲そうとするが…。

明久はその攻撃は躲せない：そう脳が教えてくれた。

アリスの剣の輝きがこの商店街中広がついていた。それは明久が逃げ切れる範囲ではなかった。

アリスはその剣をゆっくり上げ、そして振り落す。

そこから発せられた黄金の斬撃が真っ直ぐ明久を襲う。そして、最後に残ったのはドオオオオオンという破壊の音のみだった。

---

アリスは夢を見ていた。遠い遠い昔の記憶だ。

その記憶はアリスがまだ『アリス』である前の記憶。その時の彼女は一国を束ねる王

だった。

そして、今なら分かることだった。

あの時の自分は酷く愚かだった、と。

自分は女として生まれたのにも関わらず、後継ぎがないために王となった。

気がつけば、騎士の名誉なんてものに溺れ、最後は結局破滅の道を行く。何人もの部

下が死んだ。

この騎士の名誉というものは決して名譽でも何でもない。少女にとっては呪いの類でしかない。

今、やっと自分の愚かさに少女は気づいた。

そして、王であった時、普通の少女で居られる町娘が羨ましいと何処かで思っていたのかもしれない。

そこには力と財産では得られないような「何か」があった。少女はそれを欲しいと思つた。

だが結局それは得られず生涯を終えることとなる。

そして再び目醒めた時、彼女は人造人間（ホムンクルス）として目醒める。それは深い男が自分の持つ聖剣を奪おうとしていたからだった。

しかし、それでも構わなかった。そこで自分はようやく普通でいられる…普通の少女

として日々を過ごせると思ったから……。

でも、実際少女は一人だった。今まで王として生きてきた自分はどう人と交わればいいか分からなかった。ようやく手に入れた普通の生活が思うようにいかなかった。周りと自分の間には何か大きな壁があった。

だが、彼だけは違った。彼はそんな壁を簡単に壊してくれた。

そして、少女の中に今までなかったような感情が芽生え始める。

だが、今少女はそんな彼さえも壊そうとする。だが、体は脳はもう思うようには動いてはくれなかった。

……さようなら、愛しい人よ……。

そう飢えた心の中で、紅い涙を流し、呟く。

もうこれで良い。自分は数えきれないほどの人間を殺し、苦しめた。

だから、彼を殺したら自分も死のう。そう決めた。決めたはずだったのに……。

「ふざけるなア……」

少年は悲痛にも近い叫びで声を上げる。

「何でこんな風になったんだ!?!アリスは優しい娘なんだ!なのに、誰なんだよ!?!こんな風にさせたのは!?!彼女が平然と人を殺せるハズないだろ!」

彼はそう言い剣を向ける。彼の瞳には抑えきれないほどの涙が溢れていた。

あの瞳は、こんな殺人鬼に落ちた少女を信じきっている瞳だった。  
…どうして…

自分はまだ救われるべき存在ではない。同情される価値もない。

それなのに、何故彼はそれでも自分に手を差し伸べてくれるのか、少女は分からなかった。

「…よ…し…く…ん」

少女は自分の胸の苦痛に耐えながらも彼の名を呼ぶ。

「アリス………ツツツ!!」

彼も彼女の名を呼ぶ。その叫びは心の奥にまで響く叫びだった。

何故、こんな化け物に成り下がった自分を助けようとするのか…?

しかし、そんなことにも構わず地獄の底にいる少女に彼は温かい掌で迎えてくれる。

何故…? そんな気持ちが込み上げてくる。それでも少女は今はそのようなことは後で考えればいいと思った。今は彼の手に触れたい。その感情が彼女の心の呪縛を破った。

決して簡単に破れるようなものではない。しかし、少年はそんな現実をこんなにも容易くひっくり返してしまった。

そして少女の苦しく悲しい、紅い涙が彼の手の温もりに縋る優しい感激の涙へと変わる。

「…吉井君…」

「…おかえり、アリス」

明久はいつもと変わらない笑顔で彼女を迎える。

「…ただいま」

アリスも一緒に笑顔を浮かべた。

町は血に塗れている。辺りを見渡せば何人もの人々が地面に這いつくばるようにして倒れている。

「…明久君。どうするんですか？これから…」

「…え？」

明久の笑顔に明るい表情を浮かべていたアリスだったが、再びアリスは暗い表情に戻る。

何故なら周りに倒れている人々は彼女の手により殺された。アリスは自分の手を震えながら見る。紅い血に染まった掌を。

「…私は…もう…ここでは生きれない。」

アリスは悲しそうな表情で言う。それはこういう意味を指していた。「アナタとはもう一緒にいられない…」と。

明久は酷く困惑した表情を浮かべる。いくら頭の回転が悪い明久でもこの鮮血に染められた風景を見れば彼女が此処に居られないことくらいは分かる。だが、暫くして、ギユッと彼女の手を握った。その瞳は全てを覚悟した瞳だった。

「…逃げよう…」

「…え…?」

アリスは驚いたように目を見開く。その言葉は彼女にとってかなり予想外の言葉だった。

「もう君を一人にはさせない。君は僕が護る。」

明久はそう言う。

「…何…カッコつけてるんですか…」

アリスは何の冗談だ?という風に言う。

「私よりも成績悪いのに、どう私を護ってくんですか?」

それでも彼女は涙を零しながらも笑みを浮かべていた。ずっと自分以外の者を退けてきた彼女にとって彼の護るという言葉には何処か支えられるような嬉しさがあった。

「僕は君が好きだ。だから、君にはこんなところで終わって欲しくないんだ」

「…明久君…」

彼の目は少しも心が揺れるような弱い目ではなかった。自分を思ってくれる強い眼差しだ。

「私も…」

私も好きです…。そう、口を開こうとした時だった。

ズドツ！

何かを貫いたような鈍い音がした。

時がゆっくり動いているように感じた。紅い鮮血が噴きあがる。

「…う…そだ」

アリスの胸には銀色の矢が刺さっていた。それもちょうど心臓あたりを貫いている。

「…あき…ひさ…く…ん」

彼女は長い金色の髪を揺らしながらその場に倒れる。

明久は背後の方に振り向く。そこには20人ほどの騎士が立っていた。鎧の胸部分に五芒星が描かれている。五芒星は王族騎士の象徴とされるもの。故に彼らは王族の



騎士……ということになる。

「君、怪我はないか……？」

騎士の内の一人が明久に駆け寄る。だが、明久はそんな騎士の呼びかけを無視する。

「アリス……アリス……！」

明久は必死に彼女の体を揺らしながら叫ぶ。

「……明久君……」

アリスは枯れそうな声で明久の名を呼ぶ。

すると、彼女は手に握り締めていたものを明久に差し出そうとする。

「……これは……」

差し出された物は小さな花だった。儂げにも見えるが何処か力強くも見える不思議な花。

明久はこの花を見たことがあった。

「これは……ワスレナグサ……。」

そう、これはアリスが花畑で明久に紹介した花だ。この花は彼女が最も愛する花だ。

「明久君、この花の合言葉……覚えてますか？」

アリスは今にも消えてしまいそうな声で言う。

「……もちろんだよ……」

その合言葉は『私を忘れないください』。以前、彼女はあの花畑で悲しそうに笑い、言った言葉だった。

「…約束ですよ…？」

そう言い、彼女は瞼を閉じる。

もう、この瞳が開くことはないだろう…。

「う…ア…アアアアアアアアッ！」

明久は普段は見せない子供のよう<sup>(1)</sup>に声を上げ泣く。

(忘れない…。君のことを。例え忘れようときつとまた思い出して見せる。)

「…だから…さよなら…。アリス。」

明久の涙はボタボタとアリスの頬に零れ落ちる。

月の光がそんな二人を色濃く映していた。

そしてまだ明久は知らなかった。この悲劇は終わりではなく、全ての始まりだということ。

## 完結編

## 二年後

高城との戦いを経て二年が経つ。

明久や雄二が必死に対抗しても彼の力には到底及ばなかった。

そして、明久は自分の力が足りなかつたせいで常に自分の監視役として傍に居た優子が命を落としてしまった。

あのとき、もし自分に力があれば、誰も死なずに済んだ……。

その思いは二年経つた今でも続いている。

そして、この二年で彼もフミツキも大きく変わった。

根本の一件や高城との戦いで国家騎士は多大なダメージを受けた。

そして、当然、国家騎士は人数が不足していた。

今現在、国家騎士の頂点に立っているのは吉井明久だった。彼はフミツキの問題児からこのたつた二年でフミツキを代表する騎士に上りつめたのだ。

それは、もう誰も失いたくない彼の一途な思い、そして覚悟によるものだった。

そして、二番目には霧島翔子。第三国家騎士には一度下級騎士に降格した坂本雄二が

再び昇格したことで再び彼は『神童』の名を取り戻す。そして第四国家騎士は今まで通り久保利光。第五は清水美春。第六には小山友香。第七には土方十四郎がその座にく。

再び国家騎士達は勢力を取り戻す。

しかし、国家騎士にはそれぞれ『従者』と呼ばれる剣士がつくことになっている。

これは新しい方針で、今まで国家騎士は幾度となく命を狙われ続けてきた。その対策として、カヲール二世が一人一人に優秀な剣士を配属されることとなった。

明久にも優秀な剣士が配属される。

彼女の名前は木下優衣（きのした・ゆい）。亡くなった優子と秀吉の妹だった。階級は上級騎士だ。

年は明久よりも三つ下で16歳だ。小柄で顔も優子や秀吉と全く変わらない。性格も優子そっくりで唯一違うところがあるとすれば、彼女の髪型がポニーテールという部分だけだろう。

普段、国家騎士は王宮で寝泊まりしている。カヲール二世が彼らに部屋を貸し与えるのだ。

国の重要な騎士ともなると王のそばに置いとくのが安心……というのが考えだろう

当然、国家騎士の従者も王宮で部屋を貸し与えられている。それだけ王宮は広い建物

ということだ。

従者の優衣はいつも朝の六時過ぎには目を覚ましている。そして七時に明久を叩き起こすのが彼女の一日のスタートだ。

「あの、明久さん。起きてください。」

「……フガッ……」

しかし、豚みたいな声を出すだけだった。そこで体を揺すり起こしてみるのが効果はほとんどない。

「いい加減起きてください」

最終的に踵落として叩き起こすことになる。

「ぎゃあああああああああああアツツ!!」

明久は悲鳴の叫びを上げる。

「おはようございませす」

優衣は気真面目な声であいさつをする。

明久も痛みを堪えながら「あ……お……おはよ」と言う。一日がスタートする。

---

明久は夢を見ていた。その夢は決して初めて見るものではなかった。

その夢は根本との戦いであの黒い剣を召喚する際に見た夢だった。

その少女は金色の髪を靡かせ、自分に黄金の剣を差し出そうとしていた。

「アナタならこの剣を扱うにふさわしい。アナタならきつと扱える。」

そう告げ、その少女の姿は消えていったのだが、その少女は今、また此処にいる。

「…君は誰…？」

明久は少女に聞く。しかし、少女は何も答えない。

ただ、優しい微笑みを浮かべるだけ。そして少女はこう言った。

「いずれ近い内に会えるでしょう…その時まで…」

そう言い彼女は明久から去っていく。

「ま、待って…」

明久は必死に追いかけようとすが、もう彼女の姿は消えている。

代わりに足元には小さな花が咲いていた。

「この花は…」

見たことのある花だった。何処か懐かしい…。そんなことを考えている時だった。

「ぎゃあああああああああああああッッッ！」

明久は咄嗟に叫び声を上げる。何故か顔がとても痛い。明久はゆっくり瞼を開ける。

「おはようございます」

気真面目そうな声だった。彼女は木下優衣（きのした・ゆい）。優子と秀吉の妹である。

そのため、優子と秀吉と顔もそっくりで、見た目の違いなどほとんど分からないほどだ。唯一ポニーテールであることが区別する鍵だ。

「ああ、おはよ」

明久は気怠そうに返事をする。顔がとてつもなく痛いのは彼女の踵落としてのせいだろう。

彼女の起こし方は特殊で何故か叩き起こすという方法しか知らないらしい。そのため、明久は苦痛に耐える朝を毎日のように送っている。

「あの…。優衣ちゃん。もう少し優しく起こしてほしいんだけど…。」

「そう思うなら自力で起きるようにしてください」

キツパリと言われてしまう。それに、彼女の言うことは正論だ。一つも狂ったところなどない。

だが、やはり踵落としてはどうなのか…？そう思わずにはいられない明久だった。

「は。じゃあ朝食にしようか…。」

「…そうですね」

そう言い、明久は朝食の支度をする。今日も忙しいんだろうなと考え込みながら材料を用意する。

忙しい：とは言ってもこの二年間は特に何が起きたわけでもない。特に町の人々が襲われるようなこともなく、異国から攻撃を受けると言ったこともなく実に平和な二年だった。

この二年で変わったことはやはり明久自身が下級騎士から国家騎士と急速的な成長を遂げたことである。

実は毎年毎年、国家騎士昇格試験というものがある。その試験の出場条件は上級騎士であることが条件となる。

しかし、二年前、明久は雄二と共にその試験に参加できるようカヨール二世に嘆願した。

\*\*\*\*\*

「お願いします。この試験に参加させてください！」

明久と雄二は二人して土下座する。そんな二人を見たカヨール二世は

「何、寝言言ってるんだい。国家騎士？馬鹿言うな。お前たちは何で自分が下級騎士やってるか分かっているはずだよな……？」



カロール二世は今まで出したことのないような怖い表情で言う。

「…はい…それは…」

明久は息を飲んで言う。

「そうだ。力がないから下つ端やつてる。そうだろう？」

カロール二世は低い声で二人を睨みつけるようにして言う。

「確かに、お前たちは下級騎士の中じゃ戦闘力はある。戦闘力だけに關しては国家騎士にも対抗できる力を持っているかもしれない…」

「…はい」

「だが、それじゃ足りない。なんだ？大事な者亡くした？だから下つ端のお前らが一番上を狙う？ふざけるな！どんなことがあっても順序は絶対だ。下級騎士はまずは中級騎士になれるよう努力しろ。お前らのやろうとしていることは無謀って言うんだよ。」

カロール二世はそう言い後ろを向く。そして、「分かったら帰れ」と言う。  
しかし…。

「力が足りない…？そんなこと十分承知でお願いしてんだよ！」

雄二は怒気にも近いような声で言った。

「自分の力の無さには十分嘆いた。」

続いて明久も言う。

「…だから何だ…？」

カヲール二世は蔑むように言う。彼女もこの国の王。二人の騎士の為に国の規律を破ることは出来ない。

しかし、二人も頭を上げようとしな。意地でも試験に参加しようとする。それだけの思いがあつた。

「…こんな馬鹿な騎士は初めてだね…。」

カヲール二世はハアとため息をつく。

「そこまで言うなら見せてもらおうか…。お前たちの実力を…。」

カヲール二世は言う。

「だが、お前たちは他の上級騎士にはない特別試験と言うのも行つてもらおう」

「…特別試験…？」

明久と雄二は声をそろえて言う。何だそれは？と混乱したような表情を浮かべた。

「簡単だ。私と戦い、私の片膝つかせたらお前たちに国家資格を与える。」

カヲール二世はフツと笑う。明久と雄二も「やった」という笑みを浮かべたが…。

「だが、もう一度聞く。お前から本当にこの試験に参加するか…？」

カヲール二世は禍々しい殺気を帯びた武器を召喚する。その武器の名は『天叢雲劍』（あまのむらくものつるぎ）。スサノオがヤマタノオロチの尾を斬つたことで知られる

刀だ。

カヲール二世は他にも『八坂勾玉』（やさかにのまがたま）、『八鏡』（やたのかがみ）などの計三つの武器を持つ。これらすべてを『三種の神器』と言う

カヲール二世は警告しているのだ。碌な覚悟がないのならこの試験を下りろ。死ぬぞ…と。

しかし、彼らの瞳には何の迷いもなかった。

「そうか…。なら頑張りな」

明久と雄二は「はい」と返事をする。これが彼らが国家騎士になる第一歩だった。

\*\*\*\*\*

「まさか、あのガキ共があんなこと言うなんてね…。」

カヲール二世は豚丼を食べながら言う。既に12杯目を迎えようとしている。

「しかし、よかつたんですか？ババア」

竹原が恐る恐る聞く。恐る恐る聞いている割にはババアと言う。

しかし、今までこんな事例はなかったため、やはり不安なものはある。

「ああ。どうせ今回も上級騎士の中に合格者は現れない。だが、アイツらなら…」

「合格できると…？」

「まあね……」

そんな出来事から二年経とうとしている。

「明久さん。食べ物が入り入り零れてますけど……」

「……え？」

明久はボーとしてるところを優衣に言われ明久はビクツと驚いたように反応する。見ると自分の足元に朝食が零れていた。

「いや、ゴメン。ボーツとしてて」

「それは見れば分かります」

「……あ、いや。考え事だよ。」

ジーツと見つめてくる優衣に慌てるように言う。

「……そういうえば、一昨日ベットの下の掃除してた時こんな物を見つけたんですけど」

コーヒーを飲もうとした明久はブツと嘔きだしてしまう。

「……ちよ……え？嘘」

それは真正正銘、一般世間では「エロ本」という名で知られる書物だった。しかし、表



優衣は顔を真っ赤にして言う。話を持ち出したのはそっちじゃないか…とふてくされたような表情をするが、失言したのは確かだ。

そんな中、優衣の携帯が鳴る。優衣はそれに出る

「はい。もしもし」

明久は誰だろうと気にした目で彼女を見る。そして電話を終えた彼女は、

「明久さん、陛下がお呼びです。」

「え、ババアが？」

きつと任務だろう、そう思いながら明久は準備を始める

## 脱獄

王宮には七人の騎士がいた。国家騎士と言われる騎士の中でも上位の位に立つ騎士達だ。

今、ここに居るのはカヲール二世から急な召集がかかったからである。

「いや、急な呼び出しで悪かったね。」

カヲール二世はそう言うものの、美味しそうにカツ丼を食べている。二年経つてもこういうところはまったく変わっていない。と言うより、一生この性格は直らないのかもしれない。

「あの、私達を呼んだ理由はなんですか陛下？」

国家騎士達の中でも一番真面目そうな小山友香が自分たちを呼び出した理由を問う。

「ああ。ちよつと面倒なことが起きてね……」

カヲール二世はハア溜め息をつく。その場にいる七人全員が何だ？と顔を見合わせている。

「前任の第一国家騎士、根本恭二って居ただろ？」

すると、全員がコクリと頷く。全員がその名を知っていた。

何故なら彼は以前国家騎士であるにも関わらず同じ仲間である国家騎士達を襲撃していた。

今、第一国家騎士に立つ明久でさえ根本との戦いにはかなり苦戦を強いられた。だが、黒い剣を召喚したことで状況は明久が有利になり、彼はギリギリではあったが根元に勝つことが出来た。

そして、根本は当然重罪人。彼は最下層の牢獄、『無間』に入れられる。

「んで、そのクソヤローがどうしたんだよ?」

土方は毒舌っぽく聞く。

「ああ。脱走した」

すると、その場の空気が沈黙に包まれる。

「は…?」

「いや…ちよ…今、何て言った?」

「あん? 脱走した。」

カヲール二世はカツ丼をガツガツと頬張りながら言う。ちなみにもう19杯目だ。

「いや、ちよつと待っててください。かなり緊急事態じゃないですか、それ…。」

清水美春はかなり焦った様子で言う。

「陛下、暢気にカツ丼を食べている場合でないのでは…?」



久保も少し困ったように言う。

「雄二……」

「あん？」

「王つてもつと頭良いのかと思つたよ」

「気にするな。明久。この国はちよつとイレギュラーなだけだ。」

確かにこの王都はイレギュラーであつた。下級騎士の明久がこの二年間で国家騎士に上りつめたくらいだ。相当イレギュラーなかもしれないが、その点に関しては明久は何も言えないハズなのだが、本人はそれに気付いていないらしい。

「まあ、そんなわけで。根本追跡の任務は土方、お前に任せる。」

「は？オレだけ？」

「大事な国家騎士を全員追跡させてどうする？ここはお前に任せたまよ」

「しょうがねえな」

土方はため息交じりに言う。何と言うかかなり態度が悪い気がする。

「んで、俺達はどうすりゃいい？」

雄二はカール二世に聞く。当然、こんなことが起きては残された六人も何もしないという訳にはいかない。

「お前たちはいつも通り町の巡回を。ただいつも以上に念入りに巡回しろ。」

特にこれと言った特別な任務ではなかったが、確かに町の安全を考えれば、重要な任務である。

全員、「はい」と返事をし、それぞれの任務に赴く。

「あ。明久さん」

扉を開けたすぐそこには優衣が居た。

「ああ。優衣ちゃん。待たせたね。」

「いえ。これも従者の務めなので。」

真面目そうな口調で優衣は言う。こういうところは本当に姉の優子と似てるなあと思わせられる部分だった。

「優衣ちゃん。こんなのに従うって大変だろ?」

からかうように口を挟んできたのは雄二だった。この友人は何年経とうが自分の悪口を減らす努力は一切しない。何か言い返しても、この友人は頭が良いので結局、明久が切羽詰る状況となる。

「ええ。慣れましたけど」

優衣はキツパリと言う。明久は二人から視線を逸らし、ふてくされたような表情を浮かべる。

「ホント、お前の面倒見れるのは優衣ちゃんだけなんじゃねえの?」

「え…いや。そんなこと…」

優衣は少しだけ頬を染める。しかし、明久は、

「何をバカなこと言ってるのさ。僕は自分のことくらい自分で…いッツ?!」

「いつも世話になっておいていい身分ですわね…」

優衣は明久の足を思いつき踏みつける。小さい足の割に踏みつける力は尋常じゃない。

「吉井君、君の世話なら僕が喜んでしよう」

目をキラキラと輝かせ、話に割り込んできたのは第四国家騎士の久保だった。太陽のように眩しい眼差し。しかし、それは何処か寒気を感じる怪しい視線でもあった。

「え…と、久保君」

「な、何だろう? 吉井君」

久保の息遣いは荒い。運動したみたく「ハア、ハア」と、もうとにかく危険なオーラを出していた。明らかに変態だ。

「ちよつと気持ち悪い。」

「ええっ!？」

久保はかなり衝撃を受けたようだった。そして下を向いたまましがみこんでしま  
う。

「ありや、言い過ぎたかな」

明久は少し申し訳なさそうに言う。

「いえ、でも事実ですし。」

「ああ、顔面の一発くらいは殴っても罪にはならないと思うぞ。」

しかし、二人もどうやら同じことを考えていたらしい。雄二に関しては明久以上に傷  
つけるようなことを考えていたらしい。いくらなんでも顔面を殴るのは行きすぎな気  
もする。

すると、優衣は話を切り替えるようにして、

「それよりも明久さん、陛下に何て言われたんですか？」

「ああ、そうだったね。実はとんでもないことが起きたらしくてね。」

「は?とんでもないこと?」

「うん。根本恭二の脱走。」

「え…!？」

優衣の表情は驚愕に包まれる。それも当然だ。根本は数ある牢獄の中でも最下層に

あると言われる『無間』という脱獄不可の牢獄に入れられていた。

「あの牢獄を抜けるなんて……」

優衣は眉間にしわを寄せる。ひと時も気を抜けない、そんな表情だ。

「で、任務の方は？」

「ん、いつも通り町の巡回。」

明久は少し気の抜けたように言う。

「え？こんな時に暢気に巡回ですか？」

「いや、こんな時だからこそだよ」

口を挟んだのは雄二だった。雄二も明久と同じでそこまで真剣そうな表情ではなかった。ただ、自分に来る務めを果たすだけ、そう言いたげな表情だった。

「それに根本の追跡に関しては土方君に言い渡されてるしね……」

そう、第七国家騎士の土方だけ追跡任務が言い渡され、他は普段通りの巡回。こんなことなら、他の上級騎士あたりにでも任務を言い渡した方が良いような気もするが、相手は元国家騎士で、その中でも頂点に立っていた男。そう考えれば、国家騎士の一人と他の上級騎士二人くらいは必要となる。

かといって、国家騎士全員で出れば、王都の守りが手薄となり、襲撃を受けた際に堪えることが出来ない。

「ま、じゃあいつも通り巡回してくか」

明久は手首を伸ばしながら言う。

「そうですね…。」

優衣もそれに同意する。

土方は解散した後、すぐに追跡任務を開始するために従者である近藤、あと従者ではないのだが、沖田、山崎も商店街に呼ぶ。

「トシ。任務ってのは？」

「ああ。根本恭二の追跡だ。」

近藤の質問に土方はタバコを吸いながら答える。たまたま通りかかった中年女性が「まあクサイ」と言ってくるが、聞かなかったことにする。今は任務の説明をするのが優先だ。

「ありや、あのクソヤローは脱獄したんですかい？」

「ああ。それで俺らは今回ババアから追跡の命令を出された。場合によっては殺す許可も出されている。」

それを聞いた沖田は服のポケットから何かを出そうとする。そこから出てきたのは、「土方さん。どうです？このパンツをはいてみては？」

そのパンツには『必勝』という文字が描かれていた。

「おい、コラ。お前任務を何だと思ってるんだ？てか、何に必勝する気だ？」

すると、沖田はがっかりした表情で、「ありや、ノリが悪いな。土方さん。」などと言う。

何がどうノリが悪い？と突っ込もうとしたとき、急に三人はその場でズボンを脱ぎ始める。

「ちよ、おい。お前ら何をやって…!？」

「すごいでしょ？この必勝の文字。三人ともお揃いのパンツなんですよ。土方さんもどうです？」

「どうです？じゃねえッ！ズボンはけよッ！」

土方は怒声を放つ。この三人のする行動はいつも異常なため、突っ込まざるを得ない。そのため、身体的疲労よりも精神的疲労の方が大きい。

「ねえねえ、何であの人たち裸なの？」

「見ちゃいけません。アレは露出狂という変態魔の一種です。」

後ろからはそんな親子の会話が聞こえてくる。土方は疲れたように掌を頭に当て、

「ハア」と溜め息つく。

もう少し変態呼ばわりにされるこつちに身にもなつてくれ…それが彼の心の中の声だった。

商店街はとにかく騒がしかった。一つはいきなりズボンを下ろし、必勝パンツを見せる四人組。

そして、そこから少し離れたところでは…。

「お姉様————ツ！」

「え…ちよ、み、美春!？」

第五国家騎士の清水美春は従者である島田美波のまな板に近いような胸に飛び込んでくる。

「ちよ…こんな人前で…とにかく離れなさい！」

「いいえ、影でこつそりお姉様のペツタンコを堪能するなんて我慢出来ませんツ！そのためなら私は羞恥心を捨て…」

「捨てるな————！」



羞恥心を捨てると言おうとした美春の言葉を美波は途中遮る。

「ねえ、お母さん。なんであの人たち女同士で抱き合ってるの？」

「見ちゃいけません。あれは同性愛というヤツです。」

後ろからはそんな親子の会話が聞こえる。

羞恥心を捨てた美春は何ともないのだろうが、美波にとつてこの状況はかなり堪えがたい。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

そんな悲鳴が商店街中に響き渡る。

\*\*\*\*\*

「で？ 私達はいつも通り巡回をしてればいい訳ね？」

美波は美春に質問する。

美春の頬は赤くはれ上がっていた。その理由は美波に打たれたからだ。自業自得ではあるが……。

「あう……。はい」

「じゃあ、さっさと行くわよ。」

「あ、ちよつとお待ちください、お姉様」  
ようやく二人の巡回任務が始まる。

## 死霊兵

土方、近藤、沖田、山崎はフミツキよりも西の方角に位置する『ミナツキ』という町に居た。

カヲール二世からは根本恭二を見たという目撃情報が多く、ミナツキよりも少し離れた『キサラギ』という町を調べるよう言われたのだが、近藤、沖田、山崎が土方の言うことを無視し、勝手な方向を歩いたため、変なところに来てしまった。

「…コイツら、後で絶対シメてやる」

そう呟くものの、土方の精神的疲労は限界を迎えようとしていた。

これほど物分かりが悪く、言葉が通用しない人間はコイツくらいしかいないだろうと土方は嘆息する。

「……ッ」

しかし、ある意味ではこの『ミナツキ』という町に来て良かったのかもしれない、と土方は思った。

確かに根本に関する情報は得られなかったが、この町はカヲール二世に報告するだけの異常性が表れていた。

「…妙だな…」

土方は目をしかめる。しかし、いくら土方が真剣でも他の三人はサボっている。

近藤は裸でヨガ、沖田はアイマスクを被り寝ている。山崎に関してはバドミントンの素振りをしていた。

しかし、この町は本当に異常だった。

何故なら人が誰一人いないのだ。土方は他の三人を放って、遺体がないかの確認もしたがそれすらもない。

(この町で一体何が起きた…?)

仮に町人全員が死んだとしても遺骨、血筋が一切残らないとは明らかに変だ。

町は荒廃している。

土方はそんな劣環境で何が起きたのか、また手がかりになるもの必死に探した。

…しかし…

「どうなつてんだよ、コレ。」

土方は混乱したような表情を浮かべる。

そんなとき何もない殺風景の町に殺気らしきものが通りかかったような気がした。

「…!」

それは一人二人だけではない。総計しても200人くらいはいる。



\*\*\*\*\*

200人ほどの骸骨が一齐に襲い掛かる。そんな中、影でそんな出来事を見ている男がいた。

「…フ。第七国家騎士、土方十四郎…。まんまと罠にはまりましたね…。」

男は歓喜に近いような笑みを浮かべる。

「土方十四郎。アナタの命は此処で終わります。200人の『死霊兵』に殺されるがいい」

「そう言い、男は闇に姿を消す。」

---

明久と従者の優衣は町の巡回任務に当たっていた。特にこれといって町の中では異常はなく、いつも通り、平和に賑わっていた。

「あ、明久だ！」

「あ、ホントだ。バカの明久だ。」

明久を見るなり町の子供たちが明久のところが集まってくる。

明久はこう見えて町の子供たちには好かれている。実際、公園などに行ってみると一緒に遊んでいる光景が見られる。

「なあ、明久。遊ぼうよ〜」

子供たちは明久のズボンの裾を掴んで言う。子供たちの目は今にも遊びたくて遊びたくてうずうずしている様子だ。

「い、いや〜。そうしたいのは山々……なんだけど……」

そう言いながら、明久は横にいる優衣を見る。優衣は少し険しい表情を浮かべていた。

それもその筈で、明久は国家騎士の頂点に立つ有力な騎士なのだが、彼は巡回任務に当たっていると、毎日と言つていいほど子供たちに絡まれる。そして、「今、任務中だからゴメンね」と言えば済む物を彼もそれに釣られ、ついつい遊んでしまうのである。

そのため、従者である優衣をよく困らせている。優衣は明久の友人である雄二にこの事を相談してみたりするのだが、雄二は「明久は町のガキ共と精神年齢があまり変わらねえし、仕方ない」と言う。優衣にとっては全く役に立たないアドバイスである。

「今日は遊んじゃダメですからね。絶対ですよ」

優衣はキツと睨んで言う。

「いや、分かつてる。分かつてます。」

明久はビクビクと震えながら言う。

優衣を怒らせると必ず病院に行つてレントゲンをとる破目となる。それだけ彼女はキレやすい。そのため出来るだけそういった事態を避けなければならない。

「あれ、冷たっ！」

子供たちの内の一人が言う。

先程まで青空が見えて居たはずなのだが、気付けば青空は消えていた。黒い雨雲が出ていた。

「うわっ、雨か。」

「帰ろうぜ〜」

「じゃあな、明久」

などと言つて子供たちはそれぞれ家へと帰る。

それと共に明久も、

「どうする？僕達も一回王宮に戻る？」

「そうですね、そうしましょう」

二人も巡回任務を一端ここで止め、王宮に戻ることにする。

町に異常性があれば、もう少し巡回をつづけた方が良いのだろうが、今は特に王都が



危険に陥るほどの危険性はない。

雨の道を歩く中、明久の脳内では記憶が甦っていた。それは、少女が明久に残した最後の言葉だった。

\*\*\*\*\*

それは二年前の高城との戦いだった。

そこで明久はある事実を知った。それは死んだ姉が高城に殺されたという事実。

それを聞いた瞬間、明久の心の中では今までにないほどの沸々と込み上げてくるものを感じた。

そう、憎しみだ。その負の感情が抑えきれないほど胸が痛みを訴えていた。

明久は刃を振るった。それは、姉を殺したこの男を殺す。それだけを考え、剣を握った。それ以外の感情はその時の明久にとって余計なものでしかなかった。

「高城オオオオオオオオオオオッ！」

明久は吠える。

殺意を込めた一撃。しかし、その一撃は高城に届かず終わる。

「……竜殺しの剣（バルムンク）……！」

高城の黄金の剣が凄まじい光と共に斬撃を放ってくる。光の斬撃はそのまま明久を襲う。

「ぐ……あ……っ」

鮮血が噴きあがる。意識は朦朧とし、片足、片腕が思うようには動かなかつた。

「ゴホ……っ！」

そして吐血。この一撃で内臓部分にも相当なダメージを受けた。

体中が痛い。

もう、このまま剣を捨ててしまおうか……？体中がそう悲鳴を上げていた。死んでしまつては何もないと、そんな風にも感じた。

しかし、心は違う。心は剣を捨てることを許してはくれなかつた。こいつは姉を殺した憎い仇だ、剣を捨ててはいけない、そう告げていた。

「っ……」

明久は苦痛に耐えながらも立ち上がる。

体は何故立ち上がる？もう立ち上がらなくていいのに、と言う。

それに対し、心はまだ倒れてはいけない。倒れていいのはコイツを殺してから……それからだ、そう言う。

「うオオオオオオオオオッ！」

明久は高城に剣を向け、駆けてゆく。それと同時に高城も剣を振るう。

しかし、高城の剣を振るう方が圧倒的に速かった。明久は「これは避けなきや死ぬ」とすぐに脳が反応する。

しかし、躲すことはできない。明久には躲すほどの力が残っていない。今の彼は立っているのもやつとの状態。

終わりだ……。

そう、思った。

誰が見てもそう考えるはずだ。

そのはずだった。

しかし……。

「……え？」

明久は瞬間、目を丸くする。目を丸くするだけの出来事が目の前に起きていたからだった。

目の前には薄い茶色の髪をした少女が立っていた。

そして高城の刃はそのまま少女へと向けられる。

そして、高城の黄金の剣が少女に触れた瞬間、紅い血が噴き出る。そして、高城が剣を振り切ったと共に少女はそのまま横に倒れる。

「木下……さん……」

その出来事はほんの一瞬。明久はその出来事をただ茫然と眺めていた。眺める以外他がなかった。

同時に教会の鐘が鳴る。まるで、この出来事を待っていたかのように鳴り続ける。

「木下さん、どうして……」

しかし、彼女は何も言わない。そのままニコリと微笑み「ありがとう」と告げる。すると彼女はゆっくり瞼を閉じる。

\*\*\*\*\*

……「ありがとう」……

あの言葉は何に対しての感謝なのか、明久はこの二年間ずっと考えていた。

きっと分かる日が来ると信じているものの、未だにこの感謝の意味が分からない。

自分は彼女を護れなかった。そんな自分に何故そんな言葉を告げたのか分からないかった。

「あの、明久さん？明久さんってば！」

「……え、何？」

隣ではムスツとした表情で優衣が明久を呼んでいた。



明久はそこまで把握されてるのか…と驚いたように目を丸くする。

そんな明久に優衣は「はい」と言い、薄く微笑む。

「別に構いませんよ。姉が死んで辛い思いをしたのは私だけじゃないって分かっていますから。」

「うん。いや、そのゴメン」

明久は特に謝る状況ではないのかもしれないが、この話題を持ち出したことに責任を感じた。彼女にとって辛い記憶を…。

「謝らなくていいんですよ。むしろ、明久さんには感謝してるんです。」

「感謝?」

何故、そんな言葉を自分に向けてのか明久には分からなかった。そもそも、あの時、高城との戦いで負けるようなことがなければ、優子は死なずに済んだ。死なせてしまったのは自分、感謝されるどころか自分に対して憎しみを覚えるのが妥当ではないのか?

…しかし…

「姉は本当に優秀でした。誰よりも努力家で誰よりも強くて…私はそんな姉の後ろ姿を見るのが好きでした。いつか、あんな風になりたい…。そう思ったんです」

そして優衣はそのまま言い続ける。

「でも、姉はいつも一人でした。誰もそんな姉を見てくれなくて…でも、姉は私には優し

かった。本当は辛い物を抱えてる筈なのに家族に対しては笑顔で、でも何処か寂しそうで……」

「……」

明久は優衣の話を真剣な眼差しで聞いていた。

優衣の言うことはよく分かる。彼女は強気でそして、優秀で。しかし、強気のように見えるが、優しく、何処か寂しそうで……。

「でも、そんな姉を変えてくれたのはアナタですよ、明久さん。」

「え？・僕？」

明久は何故？と言いたくなる。

「姉がアナタの監視役に選ばれてからはよくアナタの話をしました。その時の姉の表情は今までにならないような楽しい表情で話しました。アナタは分からないかもしれませんが姉は本当に変わりました。アナタと出会ったことで。だから、ありがとうございます。います。明久さん。」

優衣はニコリと微笑む。

そして、その微笑みは何処か優子と重なって見えた。まるで優子が「ありがとう」と言っているようで……。

「うん。どういたしまして……」

明久は頷いた。実際のところ自分では優子を変えたとかそんな実感はなかった。ただ、もし、自分が彼女たちの力になれたのなら、それは嬉しいことである。雨が止んだ：そんな気がした。

美波と美春は巡回任務を続けていた。

彼女たちが今、いる場所はフミヅキの中でも奥地にある教会だ。その教会は二年前明久と高城が戦った場所だ。今でもその戦った形跡が残っていた。

それにしても、此処は気味悪い場所であった。何処か邪気に包まれたような：体が重力で押しつぶされそうな感覚である。

「お姉様、一番怪しいと思った此処も特に問題はなさそうですね」  
「そ、そうですね。」

美春の言葉に美波は頷く。

とはいえ、もし異常事態があると仮定したとしたら、やはりこの邪気が怪しい物と言えるが、ここ周辺が不気味なのは今に始まった話ではない。

ここは遙か昔に寺が建っていたそうなのだが、この地が襲撃された時に町人全員がこ







しかし…。

「ハアアアアアアアアアアアッ！」

美波は五本程の矢を用意し、それを一気に放つ。すると、矢の数が倍増し、十体の兵を貫いていく。

美春も飛びあがり、空中で銃弾を放っていく。死霊兵の数は凄まじい勢いで減っていく。

そして、美春はさらに断罪者（ジャッジメント）を變形させる。形は銃から弓矢へと変わる。

「…『原罪の矢』…ッ！」

放たれた矢は二十体ほどの兵を消していく。

これで半分ほど数は減った。そこで少し安心の表情を浮かべる美春。しかし、その表情はすぐに不安とへと変わる。

実は美春は二年前の根本との戦いで左腕を失っていた。そして、彼女はそれ以降、義手で訓練を受け、再び国家騎士としての道を歩み始めた。

この二年間どんなに腕を動かしても義手が動かなくなる心配はなかったのだが…。今、その義手がまるで石化したように動かない。

「…ぐ…ウ…ッ」



「あ、アナタは…」

そこに立っていたのは久保利光。第四国家騎士だ。

「これはどういう状況下は分からないが、取りあえずこの髑髏は殺さなきゃいけないみたいだね」

久保はそう言い、次々と骸骨の兵士たちを薙ぎ払っていく。

その助けを借り、美波と美春も痛みを堪え、再び迎撃していく。

そして…。

「何とか、片付いたね。」

久保は「ふう」と息をつき、言う。

「ありがとうございます。助かりました」

美春は素直に礼を言う。久保が来なければ間違ひなく殺されていた。

「いいや、それはいいけど…。これは一体…」

久保は形の崩れた骸骨兵達を見て言う。

「ウチにもそれは…」

美波も困惑したように言う。この骸骨たちは一体何なのか。後ろで誰か操っている

のか…？

そのときジャリ…と砂場を踏みにじったような音が耳に入る。

三人はすぐにその音がする方へと振り向く。

「な……っ!？」

三人とも驚愕する表情を浮かべた。それだけの者がそこにいたから…。

腰まで届く薄い薄い茶色い長い髪に紅い刀身を持った刀。そして、瞳も刀身と同じ真紅。そして、白いドレスを着ている。そんな少女。

「…さようなら…」

少女は紅色の斬撃を放つ。その斬撃は三人を一斉に襲う。

雄二は従者であるムツツリーニ、そして秀吉と共に巡回任務をしていた。

「ハア…。 ったく。 全然異常なんてないな。」

「同感。」

雄二の言葉にムツツリーニは頷く。

「しかし、根本は何故あの脱獄不能と言われた『無間』を脱獄出来たのじやろう？」

「ああ、それか。」

秀吉の質問に雄二は答える。

「実はオレ、その根本が脱獄したって言う『無間』を調べてきたんだよ」  
「で、どうだったのじゃ？」

「いや、何もなかった。」

「…？ どういうことじゃ？」

雄二の意味不明な言葉に秀吉は戸惑う。

「ああ、つまりだな。脱走したとされる痕跡が一つも残ってなかったんだよ。」

「ム…？」

「何と!？」

二人は雄二の言葉に驚いたように目を丸くする。

「まあ、あの牢獄は脱獄不可。牢獄を破るのは不可能だが、その痕跡もない。脱走に使われただろう道具も一切使われていない、どう考えてもおかしいだろう。」

雄二は疲れたように息を吐く。

神童と言われるほどの頭を活かし、色々と考えてはいたのだが結局それは分からなかった。

「ま、今は巡回任務に集中するしかねえな。」

「…同感」

「そうじゃな」

三人は巡回を続ける。そして、気付けば、フミツキの中でも一切人が通らないような場所に三人は居た。この場所はフミツキの中でも廃墟となつている部分で人など一切いない。華やかな賑わいを持つフミツキにしては珍しい光景である。

「アレ？何か変なところに来ちゃったな。帰るか」  
「うむ。」

そう言い、王都の商店街へ戻ろうとする。

だが、一歩足を踏み出した途端、冷たいほどの寒気が押し寄せてきた。

いや、寒気というのは相応しくない。殺気と言う方が正確だろう。

「…少し、此処で話なんてどうでしょう…？」

男の声だった。

蔑んだ声。全てを見下すように冷めた声。

「久しぶりですね。坂本雄二」

その声の主は高城雅春。彼の姿は二年前と何一つ変わらない姿。ただ少しだけ顔色が悪いように感じるが…。

「何しに来た？外道」

「ハハッ。その言われ用は心外ですね。」

高城は雄二の言葉に笑う。言葉で心外と言うものの、自分でもそれは認識しているの



だろう。

「簡単に言えば宣戦布告……とだけ言っておきましょう。」

「宣戦布告？」

雄二は聞き返す。そして、高城は告げる。最悪の予告だ。

「一週間以内でフミツキは滅びます。」

「なっ……？」

声を上げたのは雄二だけでない従者であるムツツリーニ、そして秀吉もだ。

確かに、高城の強さは知っている。国家騎士を数人相手にしても顔色一つ変えない化け物だ。だが、この王都全て敵に回して勝てる保証はない。

「おい、何の冗談だ？」

「冗談？そんなものを口にするほど馬鹿じゃないですよ」

高城は断言する。

だが、フミツキを滅ぼすとは言え、それをするための証拠がない。

いくら何でも彼一人の力では不可能。対個人で馬鹿強くても複数人相手ではどうにもならない。

「ああ、もちろん、僕だけの力じゃ滅ぼすことは出来ない。そこで『死霊兵』（しりょうへい）を使います。彼らなら僕の足りない力も補える。」

「…死霊兵?」

聞きなれない言葉に雄二は眉を顰める。

「僕が死霊術士なのは知ってますよね? 死霊の魂に再び命を与えた兵士。分かりやすく言えば、死んだ人間を生き返らせるって言った方が分かりやすいですかねえ…。それが死霊兵。とは言っても100%の完全な形に復活させるのは不可能だったので、外見は骸骨なのですが…。」

高城は楽しそうに言う。つまり、彼らさえ居れば戦力を補える、そういうことなのだろう。

「だが、そんなもの作ってもせいぜい…」

すると高城は雄二の言葉を遮るように、

「せいぜい一万人…くらいですかね」

「…は…っ!?!」

驚くべき数だった。せいぜい作っても三桁を超えることはない判断していた雄二。だが、その予想はかなり大きく上回っていた。

「…終わりですよ。フミツキは…」

高城はあざ笑う。

「…嘘だろ…!」

そう思いたい雄二だが、正直そうも思えない。この男なら本当にやりかねない。だとすれば、これは本当に最悪の予告となる。

空が再び雨雲に包まれる。今にも雨が降り出しそうな、そんな予感をさせる。

「…何か…」

明久がポツリ呟く。そんな明久を見て優衣は、

「どうかしましたか？明久さん」

「いや、何か良くないことが起きそうな…」

そう言いながら商店街を歩いていく。だが、明久の言葉は間違つてはいなかった。それはその後すぐに分かった。

「グ…アアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

叫び声上がる。声からして男性の叫びだろう。その叫び声が町を沈黙させる。

だが、特に体に異変はない。そう明久、いや、その場にいた全員も思った筈。だが、その異変はすぐに起きる。

男の首はポトツと地面に転げ落ちる。そして、首の根本からは鮮血が噴きあがる。

「きゃあああああああああああああああッッ！」

「うわあああああああああああああッッ！」

悲鳴が上がる。そしてそこに居た全員が血相を変えて逃げる。

「優衣ちゃん、王族兵と協力して町の人を安全なところに。」

「分かりました。でも、明久さんは…」

「僕は犯人を捜す」

優衣はそれを聞き、少し不安げに見る。しかし…。

「ではお気をつけて」

優衣はそう言い、去る。

そこで明久の耳には足音が入ってくる。その足音は町の人々の逃げ足から生まれた音ではない。その足音には少しの不安も焦りもない。

それも建物の上から聞こえる音。明久はその音の方に振り向く。

「…な…っ…!?!」

それは驚くべき光景だった。白いドレス、薄い茶色の腰まで届く長い髪。そして、見覚えのある紅色の妖刀。

その少女を明久は知っている。それは二年前明久に「ありがとう」と告げ、逝ってしまった彼女。

その少女はもうこの世にいないはずだった。だが、今こうしてここに存在している。

「…木下さん…」

その少女は薄く微笑む。

## 再会、そして…。

明久は上を向く。

そして目に映るのは薄い茶色の腰まで届く髪、そして、見覚えのある紅い刀身を持つ刀。

心臓の鼓動が強く鳴り響く。周りはざわついているが、そんな音は一切入って来ない。ただ心臓の鼓動の響きしか今の明久にはない。

「…木下さん…」

明久の口から出た名。それはもうこの世に存在しない筈の彼女の名前。脳は伝える。有り得ない。今、この世界に居るのはおかしいと。

しかし、心は違う。心は再び会えた歓喜のようなそんな感情が浮かび上がる。

明久の中でそんな二つの思いの闘ぎ合いがあった。

「…久しぶりですね…明久君」

優子は薄い微笑みを浮かべて言う。

しかし、それは優子が今まで見せたことのないような笑みだった。妖艶…と言うべきか…。そこで明久は何処か違和感を感じた。

それは単純に口調だった。本当にどうでもいいことなのかもしれないが耳の中には不慣れた響きであったのだ。

まず、優子は目上の人以外には敬語は使わない。当然、明久に対してもだ。そして、彼女は「明久君」ではなく「吉井君」と呼んでいる。

何よりもあの妖艶のような笑みは優子には今までなかったものだ。

「君は……誰だ……？」

明久は言う。明久の脳が彼女は木下優子ではない、そう告げていた。

「……誰？心外ですね。もしかして、私を忘れたのですか？」

少女は少しだけ悲しそうに言う。

「ああ、もしかして記憶を失っているのですか？でも、大丈夫です。思い出せますよ。」

優子の姿をした少女は今度はまるで明久を応援するかのように言う。

途端、明久の頭に痛みが走る。酷く痛い。明久は痛みを堪えようと目を瞑る。そこで脳に映像が浮かび上がってくる。

それは懐かしく悲しい記憶——。

脳に浮かび上がった記憶。それは以前も見たことのあるものだった。

「明久君、この花の名前、知ってますか？」

夕日に照らされた金色の髪を靡かしながら少女は言った。

「いや、知らない。何ていうの？」

「ワスレナグサ。私の一番好きな花です。」

「へえ…。」

明久は感心したように頷く。

「この花はある騎士が死ぬ寸前に恋人にこんな言葉を残したんです。」

「へえ、どんな言葉？」

瞬間、冷たい風が通り抜ける。そして、少女は言う。

「…『私を忘れないでください』…。」

その時だけ時間が緩やかに過ぎていくのを感じた。

「明久君はもし私が死んでも私を覚えてくれますか？」

少女は悲しそうに笑った。

そして、その年の12月24日。血のクリスマス・イブと言われた日に少女は眠った。

永遠に醒めることのない眠り。

大事な記憶だった。なのに彼女と居た記憶だけ何故失っていたのか分からない。

だが、今、ようやく思い出した。あの金色に染まった髪。そして、あの花言葉。

彼女の名前は――。



「アリス——」。

優子の姿をした少女は再び妖艶のような笑みを浮かべる。その名を呼んでほしいと待ち望んでいたような笑みだった。

一方、その頃雄二たちの方は——。

「では宣戦布告はしましたよ。坂本君。」

高城はそのまま背を向け、去ろうとしている。

「待てよ。」

しかし、雄二は止める。

「…何ですか？まだ質問でも？」

高城は少し不機嫌そうに言う。何か先を急いでいるような態度だ。

「お前をこのまま見逃すと思うのか？」

雄二は武器を召喚する。それに続き従者であるムツツリーニ、そして秀吉も武器を召喚する。

「成程。確かに。このまま去るのも心寂しい物がありますね。ご希望通り消してあげま

しよう。」

そして高城も武器を召喚する。禍々しいほどの魔力を放った剣。それは以前召喚していた『竜殺しの剣』（バルムンク）ではない。また他の剣だ。

「…お前、その剣は…」

高城はニヤリと笑み、

「そうです。この剣は『魔剣グラム』。これであなた方を葬ってあげましょう。」

「舐めやがって…ッ！」

雄二は吐き捨てるように言う。そして、『雷切』（らいきり）を握り、そのまま前方へと進む。

右、上、左、右斜め上、左下と様々な方角からの斬撃のぶつかり合いが始まる。

「…以前よりも強くなりましたね…」

「この二年間、何もしてねえと思ったか!？」

そして、そのまま刀と剣がぶつかり合う。

すると、高城が加速する。

「…なっ…?」

雄二の目が見開く。高城はどうやら手加減して雄二と戦っていたらしい。

「終わりですよ…」

高城の刃先が恐ろしいほどの速さで雄二を襲おうとしている。

「…『千鳥流し』…!」

しかし、雄二も抵抗する。刀の刃からチリチリと高音を立てた雷撃が高城を襲おうとする。

「…おつと…。」

高城は雄二から距離をとる。

「ハハ。まあ、今日はこれくらいにしときますかねえ。宣戦布告もしたし。どうせ、この

一週間以内でフミツキも滅びるわけだし」

「させると思つか?」

「いやいや。君程度じゃ僕を止められませんよ。」

「…チツ」

「では、さようなら。」

そう言い、高城は姿を消す。

雄二はそのまま座り込み、「胸クソ悪いな、クソツ」など言いながら胡坐をかく。

一週間。この一週間という短い期間で自分には何が出来るのだろうか? ついつい考えてしまう。

「…アリス…」

明久は少女の名を呼ぶ。四年前のクリスマス・イブに死んだあの少女の名前を呼ぶ。

「思い出してくれましたか…」

優子の姿をした少女は嬉しそうに微笑む。

だが、明久はそこで困惑したような表情を見せた。

「いや、でも何で君が木下さんの姿をしているの…?」

明久は聞く。それが最も重要で一番の疑問でもあった。

「そうですね…。まず何処から話しましょうか…。」

優子の姿をした少女——アリスは少し考え込むようにして言う。

「四年前、私は確かに死にました。肉体も失い、魂もあの世に持って逝かれるものだと、そう思っていました。」

アリスは死んで魂だけとなった過去を言う。明久は先程から硬直したように動かない。今、ここに居る少女は優子なのかアリスなのか?それが気になる。

「しかし、あの男は私の魂があの人に持って逝かれるのを良しとはしなかった。」

「あの男?」

明久は怪訝そうに眉を顰める。そして、少女の口から開いたその男の名前。それは明久も知る名前だった。

「高城雅春です。」

「…え!？」

そう、姉と優子を殺した憎い仇だった。

「そもそも私はあの男の人造人間（ホムンクルス）として誕生しました。誕生した理由も魂がこの世に在り続ける理由も、あの男は私の中にある聖剣が目的なんですよ。」

「聖剣…?」

「…騎士王の聖剣（エクスカリバー）ですよ…。」

「な…っ…!？」

明久は思わず声を上げる。その剣は誰もが知る名剣。

しかし、そこでさらに疑問が生まれる。何故、アリスがその剣を所持しているのか？

明久はそこで少し考えてみる。まず、エクスカリバーとは誰の剣だったか…?そこから考える。それは当然誰もがアーサー王と答える。

ならば何故、今、彼女がその剣を所持しているのか? いや、そもそも何故彼女は高城の人造人間（ホムンクルス）として誕生したのか…?

「…まさか…!」

明久の頭の中でバラバラになったパズルのピースが繋がる。

「君は…アーサー王…そのものだったのか…?」

明久は信じられない…と言う様な口調で言う。

「まあ、一応、人造人間（ホムンクルス）として生まれ変わったので、生まれ変わり…と言う方が世間的には分かり易いかと。でも、前世の記憶もちゃんと残ってますし、その言い方も間違いではないでしょう。」

アリスは薄く微笑みながら言った。

とても信じられないと言うのが正直な気持ちではあるが、そういえば、カール二世はこの『試験召喚システム』内では大体の魔剣、聖剣は召喚されたと言っていた。その中でもまだ召喚されずに、異次元の世界で眠っている剣があると言っていた。それが『騎士王の聖剣』（エクスカリバー)。

だが、まだ召喚もされていないのに所持されているということは持ち主本人しか有り得ない。

それにしても、アーサー王が少女だったなんて誰も思わなかっただろう。

「アリス、じゃあもう一つ質問するけど、君は四年前死んだ筈なのにこの世界に留まっているということは、あの時、肉体は失ってしまったけど、魂はこの世の中で生き続けて

いたつてことになるけど、君はその後どうなったの？魂だけの状態で何をしていたの？」

明久はさらに問い詰めていく。しかし、少女は話を逸らすように、

「明久君。昔と違つて随分頭が回るようになりましたね。私の為ですか？それともこの娘の為ですか？でも、肉体が壊れるということは世間的な意味じゃ死ですよ。」

「質問だけに答えろ。」

明久は少し声を低くして言う。普段見ない表情だった。

「まあ、死んだ後、私は高城の呪縛でこの世から解放されることは出来なかつた。しかし、魂だけの姿ではいずれ私という存在自体が消えてしまう。そこで、私は生きている人間に憑依することにしたんです。」

「え？いや、そんなこと出来るわけが……」

「出来ますよ。」

少女は明久の言葉を遮つて言う。

「ただし、条件があります。それは自分と似た魂を持つ人間のみしか憑依出来ない。それもかなり霊力を持った人間。でなければ、憑依した際に、その器となる人間の魂が壊れてしまいますから。」

少女は言う。それだけアリスは魂だけの存在でも強力なものらしい。

「とは言っても、そんな都合よく見つかるわけでもない…と最初は思ったんですけどね。」

「最初は…?」

「ええ。最初は」

少女はそのまま続けて言う。

「でも、一人だけいたんですよ。このフミツキの中で酷く私と似た境遇が。少女なのに騎士という重たい鎧を背負い、またそんな騎士の道によって人生を狂わせている少女が。」

少女は少しだけ悲しそうに言った。そしてそれが…。

「木下さん…」

「そうです。私は木下優子に憑依し、そして二年前の彼女の死を切っ掛けに、私は彼女の中で再び復活できた…のですが…。」

そこで少女は不満そうに唇を歪ませる。

「…どうやら木下優子は死んでいないようですね…」

「え…?」

明久は驚きに目を見開く。それはほんの僅かではあったが希望が生まれたような感触だ。



「要するに、今この体の中には二つの精神がある、と言えば良いのですかね。私と木下優子。一つの体に二つの心がある。」

だが、そこで明久は理解した。過去に失った少女達はこうして自分の目の前に存在している。

それは嬉しかった。何故、四年前のクリスマスにしろ、二年前の教会での戦いにしろ、あんなに身を引きちぎるような悲しい思いをしなきゃいけないのか？そう思っていたから。

でも、違う。嬉しいのは確かだが、素直に喜んでいいかと問われれば、素直には喜べない。

その決定的な理由が今のこの状況。

彼女は今、フミツキの敵として此処に存在している。そして明久はこのフミツキを代表する国家騎士。当然、彼女をこのまま放つては置けない。

「アリス。君と再び会えたのは嬉しい。」

アリスも「私もです」と言わんばかりの顔をしている。

「でも、このフミツキの敵としてこの場に立つのなら僕は君を斬る。」

明久は黒い剣を召喚する。そして強く握り、前へと飛び出す。

「無理ですよ。明久君。アナタじゃ私には勝てない。」

優子の姿をした少女——アリスも前へと飛び出す。  
優子の紅い刀『鬼切』と明久の黒い剣がぶつかり合う。

\*\*\*\*\*

今、木下優子には二つの心が存在している。

一つは優子自身の心。

もう一つはアリスという少女の心。

「アリス。アナタ、吉井君をどうするつもり？」

優子は長い腰まで伸ばした髪を揺らして言う。怒気のも近い表情だ。

「木下優子。アナタはただそこで見てれば、それでいいです」

アリスは優子を突き放すように言う。

「まあ、簡単に言えば殺します。」

アリスは容易くそんなことを言う。すると優子は、

「何…言ってるの？アナタは吉井君のこと…」

「好きですよ…」

アリスは目を細めて言う。

「好きだからこそ……ですよ。それに、高城の呪縛がある限り私は彼を殺す他ない。」  
「何でそんなことに……」

優子は悲しそうに言う。だが、アリスは優子に背を向け、そのまま去ってしまう。  
優子はただそれを眺めるしかなかった。

## 二重召喚

紅い刀と黒い剣がぶつかり合う。

その瞬間、空間が歪んだように激しく振動する。

「フフ。その剣…。」

優子の姿をした少女——アリスは明久の黒い剣を見て笑みを浮かべる。明久は構わず剣を振るう。一瞬の間も見せない斬撃。しかし、アリスは容易くそれを躲す。

「明久君。その剣、良い剣ですね。」

アリスは微笑しながら言う。だが、明久は無視してそのまま刃を向ける。

「でも、その剣、まだ不完全な紛い物の剣よね」

そこで明久は反応する。

「…どういう意味だ？」

だが、アリスは答えない。そして明久の速攻の斬撃を刀で弾き、そのまま距離をとる。

「やっぱり、その剣の正体…。気になりますか？」

「別に。」

明久は構わずアリスの下へと走る。先程よりも加速し、一瞬で後ろへと回る。そし

て、間違いなく攻撃が当たる：そう思った。その筈だったのだが。

一瞬でアリスは消える。気がつけば、明久の背後を襲おうとしていた。

明久は地面を蹴りその攻撃を何とか回避する。

「…っ。」

明久は眉を顰める。

アリスの攻撃は正直目で追うのがやつとで、体で回避するまでには及ばない。

明久も常人には見えない程の速度で動いている筈だったが、アリスはその一段階上に立っていた。

「…なら…。」

明久の剣から黒い闘気が発する。禍々しいほどの殺気を帯びている。

その闘気を利用し、明久はさらに加速する。

「…ッ?」

あまりの速さにアリスも驚きを隠せなかった。

明久はそのまま黒い闘気を纏い、斬撃を放つ。その斬撃は建物を一瞬で崩壊へと導いた。

だが…。

「…嘘…だろ!」

アリスは『鬼切』の刃でその斬撃を受け止めた。

「明久君。前より強くなりましたね。」

そんなことを言い、アリスは明久に掌打を放つ。

正直、少女のものとは思えない力だった。明久は二百メートル先まで吹っ飛ばされる。

これで解る。彼女は明久の斬撃を躲そうと思えば躲せたのだ。でも、攻撃を受け止めた。それは何故か？どちらにしても力の差は圧倒的なほどのものだったからだ。

「…チィ…」

明久は舌打ちして立ち上がる。しかし、そこで痛みが走り吐血する。

「ぐ…ッは…」

今の掌打で内臓に酷くダメージを受けたらしい。だが、それに構わず明久は立ち上がる。

「アレ？まだ戦うんですか？」

力の差を知ったのにまだやるんですか？と言わんばかりの表情でアリスは言う。

「…力の差…ね。」

明久は少しだけ笑みを浮かべる。

だが、今までも圧倒的なまでに力の差がある者と戦い続けてきた。今更それがなんだ

?それが明久の正直な気持ちだった。

しかし、いくら戦わなきゃいけないとは言ってもやはりアリスを：優子に刃を向けるのはやはり辛い。

それでもやらなければフミツキの人々は犠牲になる。その事実は変わらない。

「なら、やるしかないな。」

明久はポケットから腕輪を出す。そして、そのまま腕につける。

その腕輪の名は『白金の腕輪』。明久が第一国家騎士に上りつめたことで得た力。

「二重召喚（ダブル）ッ！」

そこで黒い剣とは別にもう一つ白い剣が召喚される。形状は黒い剣と全く同じだ。

「アレ？試験召喚システムにそんな同時召喚なんて機能は確かない筈でしたけど……」

不思議そうな表情でアリスは聞いてくる。

「当然だ。これはババアが僕だけに与えた力。能力は今、君が言った通り同時召喚だよ。」

明久は二本の剣を強く握る。

明久の持つ白い剣は嘗て明久の姉、玲が所有していた剣だった。明久が『白金の腕輪』を発動させることで召喚出来る剣だ。

「行くぞ……」

明久は前へと飛出し、そして、黒い剣がアリスの頭上を襲おうとしている。

「……………」

アリスはその斬撃に反応し、攻撃を受け止める。

しかし、明久の持つ剣は二本。アリスは黒い剣に目が向き、明久の持つ白い剣の存在に気づかない。

「ア…アアアアアアアアアアッ！」

明久は白い剣をアリスの首筋に目がけて振るう。

「……………そっ」

アリスの顔に焦りが生まれる。そこでアリスがとった行動は地面に転がることだった。

綺麗な躲し方ではないのかもしれないが、おかげで白い剣の斬撃を真面に喰らわずに済んだ。

「……………」

アリスの頬から紅い雫が零れ落ちる。明久がアリスにつけた傷だ。

今の斬撃を完璧には防ぎきれなかった…ということになる。

明久は二本の剣を構えて再び前方に飛び出す。しかし、どういふことか、明久の姿が途中見えなくなる。



「……！」

気づけば、明久はアリスの右横に居た。そして、白い剣で突こうとする。

間一髪、その攻撃を躲すアリス。しかし、次の攻撃が既に後方に迫っていた。黒い剣がアリスの腹部に目がけて直進する。

「…『紅千本』（べにせんぼん）ッ！」

アリスは咄嗟に紅い鬨気を纏った鋭利な千本を放つ。しかし、明久は怯むことなく、二本の剣で全て躲す。

そして、明久は止まらず二本の剣を同時にアリスに向けて振るう。

「……っ……うー！」

アリスは『鬼切』の刃で止めるが、流石に一本の刀で二本の剣の斬撃を止めるのはやはり辛い。

証拠に苦痛にゆがんだ表情が見える。

「ウ……オオオオオオオオッ！」

明久はさらに強い力で押してく。

「う……ぐ……っ！」

このままではアリスは押し切られる。

アリスにとっても予想外のことだった。明久が二本の剣を同時召喚することで、こ

まで素早い攻撃を浴びせてくるなんて想像もつかなかった。

攻撃を喰らうアリスからすれば、明久が一撃重ねる度にスピードが上がっていくように見える。

異様な加速度だった。反応するのでやっとだ。このまま加速していけば、反応すら出来なくなるかもしれない。

「…成程」

アリスは苦痛にも耐えながらも、笑みを浮かべた。何かに納得したようだった。

「明久君。アナタがこの四年間で此処まで強くなったのは正直驚きました。ここまでは私に圧倒する騎士も少ない。」

「ですが」とアリスはそのまま喋り続ける。

「いくらアナタでもこの剣の存在には勝てない。この剣の存在で前世の私は多くの世界に語り継がれてきた。」

そこで『鬼切』の刀身が紅色から金色に変わるのが見えた。

「…ッ？」

明久は一回アリスから距離をとることにする。

そして、『鬼切』の召喚を解き、代わりに新たな剣が召喚される。

黄金の光が彼女を包み込む。そして現れた剣。

「…『騎士王の聖剣』（エクスカリバー）。」

これが彼女の前世の証。この剣こそが前世の彼女を英雄とした剣。

明久は息を飲む。この町中を輝かせるような光には圧倒されたようなものを感じてしまう。

だが、前に出なければいけない。彼女を今止められる人間は自分しかないのだから…。

明久から黒い漆黒の闘気と白い純白の闘気が包み込む。

「オオオオオオオオオオオオオツツ！」

明久は疾風のような速さで駆けてゆく。

明久の二本の剣から出る闘気が黒と白の龍を描いていく。禍々しいほどの殺気が出てくるのを感じる。

明久は二本の剣を凄まじい勢いで振るう。常人には決して受け止めることなど出来ない防衛不可の一撃。

いや、どんな達人級の剣士であつたとしてもこの斬撃からは逃れることは出来ない。

しかし…。

「無理ですよ。明久さん。」

アリスは軽々とその斬撃を止める。決して止められるような斬撃ではなかった筈な

のだが、この少女はそんな一撃を何もなかったように容易く防ぐ。

「…そんな…」

明久は感じた。この剣は次元が違う、と。この黒と白の剣もかなり高度な剣なのだが、そんなレベルではなかった。

天と地。それほどまでに大きな差を感じた。

「所詮、その剣では無理なんです。不完全な剣ですからね。」

アリスは言う。だが、そこで明久はそこで疑問を抱く。

「不完全…?」

「ええ。」

そこでアリスは明久の疑問を解くように言った。

「その明久君の持つ黒と白の剣は、この『騎士王の聖剣』（エクスカリバー）を二分割にした不完全な剣です。つまり、黒と白の剣の原型がこの『騎士王の聖剣』（エクスカリバー）。その二本の剣は二分割されてる為に力そのものも上手く引き出せない。結局のところ、原型に勝つのは無理ですよ。」

と、アリスは言う。

衝撃的な事実だった。明久の持つ黒と白の剣は『騎士王の聖剣』（エクスカリバー）を分散した力。そのために本来持つ力を最大限に活かすことは不可能と言う。

そこで明久はもう一つ疑問を抱く。

それは、二年前の根本恭二との戦いで初めてこの黒い剣を召喚したときのことだ。

そのとき、ある光景を見た。金色の髪を靡かせ、明久に金色の剣を差し出そうとした少女。あれがきつかけで黒い剣は召喚された。

ならば、あの少女は――。

「この黒い剣を僕に与えたのは君…なのか？」

明久は恐る恐る尋ねる。

あの金色の剣は間違いなく騎士王の剣（エクスカリバー）。そんな剣を持つのはアーサー王を除いて生まれ変わりのアリスだけ。

つまり明久の言う通りになる。それに、アリスは答える。

「はい。アナタなら私の力を扱えると思っただけです。その手始めとして、分割した力ではありますが、黒い剣を与えました。アナタならあの男の呪縛を破ってくれると思っただけから。」

「あの男…高城か。」

恐らくアリスを縛る者は彼女を転生した高城雅春しか考えられない。

「でも、足りません。武器の同時召喚というのには驚かされましたが、その程度の力であの男に敵う筈もない。」

すると、アリスの姿は明久の視界から消える。

そして、ザクツと突き刺すような音が聞こえる。

見ると、腹部が聖剣によって貫かれていた。背後には悲しそうな笑みを浮かべるアリスが立っていた。

明久は驚愕の表情を浮かべた。一体何が起きたのか——？それほどまでに彼女は速かった。

「残念ですけど、今のアナタじゃ足りない。私の方が悲しいくらいに強い。」

アリスは言う。明久は酷く悔しく思った。だが、彼女の言うことは正しかった。

自分は今まで大切な人を何人も失った。失ったから、悲しくて悔しいから強くなった。こんな思いは二度としたくなかったから。

けど、今のこの現状を見ると、自分は本当に強くなったのだろうか…？そんな思いに呑みこまれる。

「さようなら…」

アリスはそう告げ、剣を引き抜く。

そして、明久はゆっくりその場に倒れる。

(ああ、死ぬのか…。)

そして少しずつ意識は闇に呑まれていく。

\*\*\*\*\*

深い闇の中に明久は居た。暗い漆黒の世界に明久だけがその場に立っていた。

「…僕は死んだのか…？」

だがそれよりも疑問に思っていたことがあった。

「……ん……て」

声が聞こえた。聞き覚えのある声だ。そして虚ろな姿が見える。

そして、少しずつ、声も姿もはつきりしてくる。

「吉井君……助けて」

それは木下優子だった。優子の姿をしたアリスと見て取れなくもないが、何となくではあったが、今の優子にはアリスの精神が見えなかった。

「お願い……」

悲痛に歪んだ表情で彼女は言う。

明久は心を貫かれたような気持ちになった。どうして、自分はいつも大切な人を護れない？

何故——？

「木下さんッ！」

明久は彼女に必死に手を差し伸ばすが、差し伸ばした手は届かない。全力で走ってもどんどん離れていく。

「どうして届かないんだよッ!？」

明久は漆黒の世界で一人叫び続けた。

だが、その叫びは何処にも響かない。何処にも届かない。

そして再び意識は消えていく。



## 危機

深く閉じていた瞼がゆっくり開く。深い暗黒の世界に目が慣れていたせいか、蛍光灯の光がとても眩しい。

「……は」

明久はゆっくり起き上がった。そこで手が温もりに包まれているのが分かった。

従者の木下優衣の掌だ。どうやらずっと看病していて疲れが出たのか寝ているらしい。

「つてことは、此処は病院か……」

腹部にさされたような傷の痛みも少しだが治まっている。

「……ん……」

握っていた明久の手首が動くのに反応し、優衣の眉が僅かに動いた。そして瞼を半分だけ開け、目を擦る。

しかし、そこで優衣は驚いたように目を見開いた。

「あ、明久さん!? 傷の方はもう良いんですかッ!?」

「あ、うん。まだ少し痛むけど。」

そう言うのと優衣は力が抜けたようにその場にしゃがみ込み、

「良かった。二日経つても目を覚まさないからどうなるかと…」

優衣の目には涙が浮かび上がっていた。心配させてしまったな…と少し反省する。

その時、割り込むように明久の病室に入り込む人影が見えた。——坂本雄二だ。

「よう、明久。体の具合はどうだ？」

「うん。まあ問題ないよ。心配かけたね。」

「誰がお前の心配なんかするか、ボケ。」

すると雄二の発言にイラツときた明久は雄二の股間を蹴る。病み上がりなので軽く蹴った。

しかし、股間というのは男性にとって急所でもある。どんな軽い攻撃でも軽減されることはない。

「ぐ…ッ！テメエ、何しやがる」

雄二は股間を手で押さえながら苦悶した表情を見せる。目元には涙が浮かび上がっている。

「何だ、雄二、股間を手で押さええて泣きたくなるくらいに僕を心配していたんだね。もう正直じゃないなあ。」

明久は爽やかな表情で言った。雄二の頬辺りに怒りマークみたいなのが見えたが気

にしない。

「明久、テメエ後で殺す」と目が訴えていたが、そんな視線だけの語りかけなど痛くも痒くもない。

(まあ、良い運動にはなつたかな)

そう明久は心の中で納得する。痛みを堪えるように股間を押さえる雄二は明久の病み上がりの運動に扱われただけである。

「くそッ！こんなことしてる場合じゃねえッ！明久、王宮に来い。」

雄二は声を荒々しく張り上げ言う。冷静な思考判断を持つ雄二だが妙に焦っているらしい。

「あの、坂本さん。でも、明久さんはまだ病み上がりですし…。」

優衣は雄二を止めるように言う。しかし…。

「普通ならそう言うんだけどな。今は緊急事態だ。人手も少ない。動けるヤツは欲しい。それにコイツはこう見えて第一国家騎士だ。」

「んで、どう言つた緊急事態なの？」

明久は雄二に聞く。

「それは王宮に着いてから話す。とにかく来い。」

明久は取りあえず、雄二の言う通り王宮へ向かうことにする。

「…来たか」

王宮に七人中四人の国家騎士が集まり、「よし」と言う。話を始めようとする雰囲気だ。

しかし、残りの三人が足りない。

「まあ、お前から大体状況は聞いた。今、フミツキがどういう状況に陥っているのかも…。」

そこで明久は首を傾げて、

「フミツキの状況…？そこまで状況は危ういのか？」

明久はカール二世に問う。

「ああ。アンタは二日間寝てたから知らないんだったね。」

カール二世の言葉がピタリと止まった。とても言い難そうな表情をする。

しかし、その重たい口が開かれる。

「…フミツキがこの一週間で崩壊する。」

瞬間、空気が冷たく変わるのを感じた。

「…崩…壊…?」

明久は間拔けたような声を出す。心臓の鼓動が強く鳴り響く。そして、不安げに拳を握りしめた。

そして息を呑んで、ゆっくり息を吸って吐く。そして、動揺を隠し、平静を装い、  
「そんなもの、信じられるか…ッ!」

明久はカヲール二世を睨みつけて言う。そんなバッドニュースを聞いて普通に納得など出来ない。

「だが、事実だ。」

雄二はカヲール二世をフォローするように言う。

だが、明久も全く思い当る節がないという訳ではなかった。数百人…いや、それどころか数千、数万をも超える騎士を平然と敵に回す様な男。

姉、優子の命を奪い、アリスの魂まで利用するあの男。

「…高城か…?」

「ああ。」

雄二は頷いた。

しかし、いくら高城でもフミツキを敵に回すだけの力があるということになる。

「じゃあ、高城はフミツキ全てを敵に回すだけの力があるってことか…」

「死霊兵よ」

そこで口を挟んだのは第六国家騎士の小山友香だ。

「死霊兵？」

「人間は死んでも魂は消えることはない。その魂を生きた形に転生させることを『死霊転生』って言うんだけど、それを武装させた死霊を死霊兵って言うらしいわ。ま、死霊術士お得意の術ではあるらしいけど。」

『死霊兵』。確かに兵力とするには有効なのだろうが…。

「でも、そんな死霊兵だけでフミツキを一週間で滅ぼすっていうのもどうかと思うけど。」

明久は死霊兵がいくら兵力として扱うにしても、たった数体だけでは不可能と考えた。

しかし、死霊兵は数体という次元を超えていた。

「死霊兵の数は数万。フミツキに十分すぎるくらいの数だ。」

「は…？」

明久は唖然とする。高城が一週間でフミツキが崩壊すると言うわけだ。

「そして、吉井。お前は何故やられた？お前の話だけまだ聞いていない。」

カヲール二世は明久に言う。そこで明久は真実を言う。

「そうか……。木下優子は生きていたか……。アリスも。」

カヲール二世は下を俯いて言う。

「ババア。僕はアリスと会うまで彼女との記憶を失っていた。アンタが何かしたのか？」

明久は怒気にも近い表情で言う。

「いいや、違う。高城はアリスを転生させる際にフミツキ全体にアリスとの記憶だけを操作させる結界を張っていたのさ。だから、四年前のアリスの死を境に記憶が消えるような設定を作っていたんだろう。実際、ほとんどの人間がアリスとの記憶を忘れている。」

「……それで……」

明久は納得する。それなら、アリスと居た時間を覚えていないのも頷ける。

しかし明久は最後、アリスと約束したのだ。「私を忘れないでください」というワスレナグサに秘められた言葉をずっと……ずっと忘れないつもりだった。

高城の結界に記憶が左右されていたとは言え、彼女を忘れてしまった自分が腹立たしい。

「しかし、優子とアリス……。アイツ達が高城のところにいるってのは相当フミツキを不

利にさせているな……。」

カヲール二世は舌打ちをする。

しかし、カヲール二世はすぐに表情を変える。何かまだ伝えなければならぬことがあるそうだ。

「そして、あともう一つお前らに言わなきやいけないことがある。」

カヲール二世の拳はプルプルと震えていた。

「久保、島田、清水の三人は今、病院で治療を受けている。だが……」

カヲール二世の言葉が止まる。

「何だ？ どうしたんだよ」

雄二は少し苛立つようにして聞く。

「先ほど、生き残った山崎と沖田から報告があつた。」

「……何の？」

それは衝撃的な事実だった。

「第七国家騎士の土方十四郎は戦死した。」

「……は……？」

全員が恐怖、または不安のようなものに包まれたように固まる。

フミツキ崩壊の危機はすでにそこまで迫っていたのだ。



時間は二日前に遡る。

土方達はミナツキという町で任務を行っていた。それは脱獄した根本を追うための追跡任務。

ミナツキは驚くことに人が誰も居ないという事態で、荒廃していた。

しかし、そこで予想外のことが起きたのだ。

二百体の死霊兵が土方達を襲い、彼らは何とか迎撃で来たものの死霊兵の数は後ろから押し寄せるように増え、斬っても斬っても、また出てくる始末。

国家騎士である土方でも体力はほぼ限界に近い。そこで、一端死霊兵達との距離をとり隠れることにする。この数では流石に逃げきれぬことは出来そうにないのでほんの僅かの休戦だ。

土方達は洞窟のような場所を見つけ、結界を張り、何とか死霊兵から退けた。

そして、その時には既に辺りは暗くなっていた。死霊兵が土方達の居場所に気づくほんの僅かな時間ではあるが、体力を回復させる必要があった。

「土方さん。いくら此処で体力が回復してもコイツ等はどんどん数を増やしていく。

さつきよりも苦戦すると思いませんぜ。」

「ああ、そんなことは分かっているよ。」

沖田の言葉に土方は頷く。だが、どうしようもなかった。あの数の死霊兵を前に逃げられるという確信はなかった。

戦うか、殺されるか……？ 当にそんな状況に追い込まれているのである。

「まあ、フミツキにいるババアにでも電話が繋がれば救援を呼びたいところだが、この町には電波が届かぬえ。それも無理となると……ま、こうなるよな」

土方は吐き捨てるように言う。

「だが、どうする？ トシ」

近藤は真剣な眼差しで聞く。

「そうですね。これじゃ、オレのミントンのラケットが……」

「テメ……ッ！ まだ持ってたのかよ、ソレ。」

土方はこの状況下でもバドミントンのラケットを大切そうに持つ山崎に軽く苛立つが、コイツに構っている場合ではないな、と判断する。

「しかし、結界も長くは持たねえ。どうするか……」

そんなことを考えていた時——。

「——ッ!?!」

劍が結界の防御を貫いた。

「随分、見つかつちまうのが早かつたな……」

見ると、そこには死霊兵がいた。数百体の死霊兵が押し迫ってくる。

「……チイ」

土方は呪力を込めた刀で一気に十体ほどの死霊兵を薙ぎ払っていく。

取りあえず洞窟の外に出る、そう考えたのだ。そうしなければ囲まれて殺されるだけである。

結果、ギリギリではあったが、洞窟の外に出られた。

「あくあ。どうするんですか？ 土方さん。」

沖田は口調とは裏腹に不安と焦りを顕わにした表情で聞く。

「……。」

土方は必死に考える。自分たちが生き残れる最善の方法を。しかし……。

(このままじゃ確実に死ぬ……)

それが今の状況。いくら斬つても、囲まれているこの状況ではいずれ殺される。

「くそッ！ 闘るしかねえッ！」

土方は力強く劍を振るっていく。

数百体の兵と数人の騎士の壮絶な戦いが始まろうとしていた。

## 羅刹

斬る、斬る、斬る。ただ只管に斬っていく。

ただ斬るだけと言われれば、単純な作業と思うかもしれない。

しかし、目の前の敵の数は数百という一目では数えきれない数。どんどん数が増えてくを見ると数千に達しているのかもしれない。これを全て斬らなければいけないと思うと、気が遠くなる。

もうどれくらい斬ったのだろうか……？相当斬った筈だ。もう敵の数は零になってもいい頃だ。

だが、たった四人では数百の敵の敵の前では、いくら個人が強くて脆いものだ。

「ハア……ハア……」

体力は限界を迎えようとしている。息づかいも荒い。倒れてもおかしくないかもしれない。

なのに、敵は腐るほどいる。

「うオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

斬る、斬る。そして、枯れそうな声で叫び続けていく。

「土方さん、俺達……このままじゃ……」

山崎が言う。彼の瞳にはもう限界だ、今にも逃げたいという感情が出ていた。気持ちは痛いほど分かる。……しかし……。

「馬鹿野郎ッ！今、此処で諦めるってことは此処で死ぬって意味だぞー！」

土方は目の前の死霊兵を斬り捨てながら言う。だが、山崎は握っていた刀をポロリと落とす。

「……ッ？」

土方は目を見開く。何故そうなる……？とでも言いたげな顔だ。

いや、山崎もきつと分かってる筈なのだ。土方の言ってることも全て頭では分かっている。

しかし、もう身体も心も悲鳴を上げているのだ。どうしようもないほどに。

そんな山崎の背後を死霊兵は容赦なく襲う。刃が首筋を狙って。

「避けるオオオオオオオオオオオオッ！！」

土方は叫ぶ。

しかし、山崎は動かない。既に戦意喪失している。

刃が容赦なく山崎を貫いた。いや……。

山崎を貫いたように思えた。実際に貫かれたのは……。

「い、近藤さん……」

山崎、沖田、土方の三人が言う。

刺されたのは近藤だ。戦意喪失した山崎を庇つたのだ。

「こ、近藤さん……何で、オレを……庇って」

山崎は目を潤ませて言う。自分のせいで他人が犠牲になった。そう思えて仕方ない。

「ハハ。何……で……だろうなア。でも、気付いたら体が動いちまってよ……」

近藤は吐血しながら言う。

「でもよ、自分がいくら傷ついてもオレは他人が傷つくのは耐えられない。自分……勝手

……かもしれないね……エが、お前達はこんな……死に方……すんな……よ。」

苦痛にも耐えながら近藤は言った。そして、目を閉じた。

苦境に立たされてる筈なのにとても安らかな顔をしている。

「近藤さん！近藤さん！」

沖田は悲痛そうに叫ぶ。

「近……藤……さん」

土方は茫然と近藤の顔を見た。

「どうして……なんだよッ……！俺達は今まで騎士になって高みを目指して此処までやって来た筈だろうがッ！近藤さんッ!!」

こんな現実、誰が認められるか…。

認めない、絶対にこんな認めない。

そんな気持ちが届き上げてくる。

「ぐあアツ！」

「ぐ…つオオオオツ！」

山崎と沖田の悲鳴が聞こえる。まだ死霊兵は死んでいない。

状況の焦りと近藤への思い…。そんな心の葛藤が土方を苦しめた。

近藤の死すら悲しむ余裕がない。

そのとき、肩をポンと叩く音がした。不意に肩に温もりを感じた

『後は頼んだぞ、トシ』

温もりはそう告げ、消えていく。

「…近藤さん…」

土方は思った。恐らく今の温もりは近藤が土方達に、お前たちは生きろと言っていたのかもしれない。

しかし…。

「…フ。」





これを飲めば、通常の何倍以上というほどの身体能力が上がる。この力を得た人間を『羅刹』（らせつ）という。

別名を速疾鬼、インドではラークシャサとも言う。常人離れた力がその証だろう。だが、『変若水』にはリスクもあつた。

一つは理性を失うこと。あと、力は増幅するものの、この力は人間が『未来』に使う力を『今』使うこと。

つまり、未来に使っていく力を現在という時制で借りていくこと。そのため『羅刹』なんて大層な名を掲げても未来の力を使っていくということは、寿命を縮めるということになる。

「お前らは逃げろ。」

土方は言う。

「何を言つて……」

山崎は戸惑つたように言う。そして沖田は、

「ふざけんなッ！近藤が死ぬまで戦つたんなら、オレも死ぬまで戦う！それに、いくらその力でもコイツ等全員殺せるとは限らねえだろうがッ！」

沖田は普段見せない、怒気に近い表情で怒鳴る。

そんな沖田を土方は力強く殴る。

「…何すんだ、テメエ」

沖田は土方を睨みつける。しかし、土方はそれを無視して言う。

「此処で全員死んだら意味ねえだろうがッ！今此処で全員死んだら誰がフミツキ護んだよッ!?道は作ってやるから、さっさと行け！」

土方は怒鳴る。それでも山崎と沖田は、

「けど…」

「いいから行けっ！」

土方は二人の言葉を遮って怒鳴る。

そして…。

「行くぞ、山崎」

「いや、でも」

「いいから行くぞ」

そう言い、二人はその場を離れていく。

そんな二人を見送り土方は少しだけ安心したような顔をする。

(…これが正しいことなのかどうか分からない。俺一人だけ残るのはもしかしたら間違っているのかもしれない。)

土方はそんなことを心の中で呟いた。そして、死霊兵に向き直り、再び刀を振るう。

(けど、オレはそれを後悔しない。突き進むだけだ)  
土方は死霊兵達を斬って斬って斬り裂いていった。

\*\*\*\*\*

山崎と沖田は夜の野原を駆けて行った。

「沖田さん、俺達はこれでよかったんでしょか…？オレは…オレは…」

しかし、沖田はそんな山崎の言葉を遮るようにして言った。

「言うな。何も。アイツがそう選んだんだ。なら、俺達は俺達の道を進むだけだ…進む…だ…け」

沖田の声が震える。口元が歪んでいく。

「うあああああああああああああああああああああああ」

沖田は目元から大量の涙を浮かべ、叫びながら走り続けた。

後ろを振り向きたいという感情が込み上げてくるが耐えて耐えて只管に走り続けた。

月の光がそんな二人を照らした。

\*\*\*\*\*

空は少しずつ明るくなる。朝を迎え、そして闇夜を照らした月は消え、明るい日差しが荒廃した町を照らす。

溢れるほど居た骸骨の兵士——死霊兵は数百体全てが骨の破片となって消えていく。

そんな戦場のど真ん中に一人だけ立っていた男が居た。髪は白く、瞳は赤い。そして、体中に刀や槍、弓矢、剣などが突き刺さっていた。

普通だったら死んでもおかしくはない。だが、その男は立っていた。

男の手には血にまみれている上にへし折れた刀を手に持っていた。その刀をスルリと落とすように手放す。

「近藤さん……。約……。束……。守れなかった……。けどよ。アイツら……。は守ったぜ」

そう言い、土方はその場にゆっくり倒れた。

明るい日差しが彼を抱擁した。彼は安らかな顔で瞼を閉じた。

\*\*\*\*\*

そして二日後――。

沖田と山崎は病院で療養していた。二人は怪我の割には特に体調が悪いということはないが、心の傷だけがどうしても癒えなかった。

普段、嫌だと思ってくらいの腐れ縁というべき二人が自分たちの前から消えたのだ。

「沖田さん。オレ達はこれで良かったんでしようか…？オレはどうしても後悔の気持ちが入り上げてくるんです。土方さん、近藤さんを置いて逃げた自分がどうしても許せません。」

山崎は言う。どうしてもその気持ちをやまない。

「…もう…忘れろ…」

沖田はそう言い、ベッドに寝そべる。

そして、シーツをギュツと掴み…。

(本当はオレだって…！)

心の中で叫んだ。涙を滲ませ悔しそうに唇を噛んだ。

木下優子には今、二つの心がある。

一つは木下優子本人の心、もう一つはアリスという少女の心だった。

しかし、今は表向きの精神は優子ではなくアリスの精神が顕わになっている。

「何で吉井君を殺したの!?!」

優子はアリスに怒声を放つ。

しかし、アリスは冷静な表情で、

「言つたでしょう? 高城の呪縛がある限り私は高城の為に尽くさなきゃいけない。その為だつたらどんな敵も殺さなきゃいけない。それがどんなに愛しい人であつたとしても…ね。」

すると優子は悲しそうに眉を動かさず、

「そんなの…違う…。間違つてるよ」

と言う。しかし、アリスは小さな拳を握り、

「…知つてますよ。こんなことしても虚しいだけ…。そんなことは自分が一番知つてますよ!!」

アリスは目元に涙を滲ませ、優子に言い放つ。

「誰が好き好んで好きな人を傷つけたりしますか?!? どんな思いで明久君に刃を向けて

るか、アナタなんかに分かりますかッ!」

アリスは決して自ら望んで明久を傷つけているわけではなかった。本当はこんな互いに刃を向けるような再開などしたくはなかった。

しかし、高城がアリスを転生させ、高城がアリスの生き死にを握っていた。

そして、彼に逆らえば「アリス」という少女の存在そのものが消えてしまう。それだけは耐えられなかった。

優子は分からなかった。どうすればこの状況を脱することが出来るのか？何が彼女にとつて一番幸せなのか？

しかし、そんな都合の良さそうな答えは何処にもない。

このまま明久とアリスが刃を向け合うしか方法はないのだろうか——？

## 根本恭二と小山友香

「あゝ、クソツッ！」

カヲール二世は苛立つように溜め息をついた。

一つは高城と死霊兵について。もう一つは脱獄した根本恭二についてだった。

正直、高城との戦いに向けて何かと準備しなければならぬものがたくさんあるのだが、根本の脱獄の件も放っておくわけには行かなかった。

騎士達の意識も根本よりも高城の方に向いているが、根本を放っておけない理由があった。

それはある上級騎士から根本恭二らしき人物が違う町にて目撃したという情報だった。

本来、その目撃が確かなら直に捕縛すべきなのだろう。

しかし、根本ほどの相手を捕縛するとなると上級騎士以上の騎士が必要となるわけなのだ、力のある騎士を今、このフミツキから外したくないというのがカヲール二世の考えだ。

高城との戦いに向けて上級騎士は一人、二人でも戦力は必要となってくる。



なら、どうするのが一番なのか——？

「…分からん」

カヲール二世は鼻を穿りながらボソツと呟く。

今、根本恭二は何処で何をしているのだろうか——？

まだ、日本という国がフミツキとシワスという二つに分裂して争っていた頃だ。

ヤヨイという町は根本恭二の住む町だった。

この町は昔、フミツキ兵に次々と虐殺されるなどで甚大な被害を及ぼした。

そのとき根本恭二もその襲撃から友人二人と共に逃れたが、友人二人は殺され、生き残ったのは恭二だけだった。

それから約10年くらい経とうとしているが、町はそんな痕跡を一つも残さず、パレードなどで賑わっている。

根本恭二は町の中でも比較的人の通らない場所に居た。

そこには慰霊碑が立っていた。それは10年前の虐殺の被害者の魂を癒すために、そう思いを込めて造られた。

慰霊碑には犠牲者の一人一人の名が刻まれていた。そこには根本の嘗ての友人たちの名も刻まれていた。

もう10年——。しかし、あの惨劇は今も根本恭二の記憶から消えることはない。それどころか昨日のことにように甦ってくる。

「…真子、和夫…。」

嘗ての友人の名を呼ぶ。

あの時から根本恭二はフミツキが憎くて仕方なかった。そのフミツキに復讐を計画する為に彼はわざとフミツキの騎士となり、最終的には第一国家騎士と上りつめた。

だが、二年前彼はフミツキの国家騎士を次々と襲い、最終的にはカール二世をも殺そうと考えていた。

しかし、吉井明久との戦いでその計画は破綻され、フミツキの最下層にある牢獄『無間』へと入れられる。彼はそこで終身刑という刑を科せられる。

しかし、どういうことか彼は今、このヤヨイという町にいる訳なのだが…。

「……ッ！」

そこで後ろから人の気配を感じた。

「やっぱり此処に居た。」

後ろを向くとそこには一人の少女が立っていた。

「…友香か…」

彼女は第六国家騎士の小山友香。

二年前の国家騎士が次々襲われるという事件で彼女も国家騎士の為、根本により剣で刺され、倒れたが、今はその傷もすっかり癒え、再び国家騎士として責務を果たしている。

「何故、お前が此処に居る？」

根本は不思議そうな表情で訊く。すると小山は、

「何故、じゃないわよ。アナタが脱獄なんてするからフミツキ中大騒ぎしてるわ。」

と小山は言う。

「大騒ぎ…か。だがフミツキは今、高城の襲撃で問題視すべき視点がそっちに向いてい  
るハズだと思ったんだけどな。」

と根本は言う。

「アナタ、そのことを知ってたの？」

「知ってるも何も、オレを牢獄から出したのは高城だしな。」

「…え!？」

小山は驚きを隠せず声を上げてしまう。

つまり彼の脱獄は、根本自身の力で脱獄をしたのではなく、高城が根本の脱獄に協力

したということになる。

しかし、そこで納得できる点もあつた。

根本が入っていた牢獄は脱獄したと思われる痕跡が一切残されていなかった。

しかし、高城程の相手なら痕跡を一切残さず脱獄するというのも可能である。それに高城がまだカヨール二世の側近を勤めていた頃、彼は時空間を操る術を扱えたという。

痕跡を残さず脱獄するには十分な理由になる。

「アイツはオレに協力するよう迫ってきた。フミツキを崩壊させるにはオレの力が必要だ。まだ返答はしてないが、オレと組んでアイツにあるメリットと言えば強力な戦力を得られるつてのと、フミツキを憎んでいる、潰したいという心情。互いの利害が一致しているから行動しやすい。そう思っただらうな。」

「それで、アナタはどうするつもりなの？」

小山は訊く。

もし、このまま根本が高城と協力関係になるというのなら友香は国家騎士として、これを黙って見過ごすことは出来ない。

しかし、根本は…。

「いや、アイツとは組まない。今の俺にとってフミツキはいつでも良いしな。」  
と吐き捨てたように言う。

「そう。」

すると小山は少しだけ安心したような表情を見せた。

根本は少し疑う様な表情で、「オレを殺さないのか?」と聞いてくる。

さらに、

「オレはお前を殺そうとした。オレとしちゃ、殺されても文句は言えないはずだが。」

と言ってくる。

すると、小山は何も迷うことなく「殺さないわよ」と言う。

「ハッ。いいのか? オレを信じて。オレは嘘ついてるかもしれないぞ?」

と嫌らしく言ってくる。

しかし、小山は表情を変えずに、

「昔から恭二の嘘ついてるときの顔は知ってるから。嘘かホントかぐらい直ぐ分かる

わ。」

と少し微笑みながら言う。

根本は少し戸惑ったようにして目を逸らした。

「ただ、恭二は不器用だから…。辛いことも辛いつて…。言ってくれば良いのに言わな

いから。言えば、二年前みたいないな事件にならなかつたんじゃない?」

小山は言う。

「…チツ。」

根本は何を知った風なことを…でも言いたげな表情で舌打ちをする。

小山友香は実際、仕事をしてるときはピリピリとした雰囲気を出すのだが、個人として話す場合は和みがあった。

しかし、その和みは根本の心の中で罪悪感のようなものが生まれ始める。

何故、そんな彼女を自分は殺そうとしたのか？初めて、自分に対して憎しみを覚える。

「…交渉決裂…ですか。」

急に殺気のようなものが向けられる。

殺気を発していると思われる方は後方。根本、そして小山は後方へと振り向く。

「君の返答には期待していたのですが…。」

不気味な笑みを浮かべ現れたのは高城雅春だった。

「ハッ。勝手に期待すんなよ。初めからお前は殺すつもりだったしな。」

根本は苛立つようになして言う。

「でも、僕の力なら君の大切な人を生き返らせること…。出来たんですけどね。」

高城は自分に協力しなかった根本を後悔させるような口調で言う。すると根本の眉

がピクリと動く。

実際、友人を生き返らせたくないとさえ、それは嘘になる。今でも会いたくて会いたくて……。そんな思いが込み上げてくる。あんな残酷な死を何故受け入れなければならぬのか、まるで分からない。

それでも根本は高城の言葉に承諾し、首を縦に振ろうとはしなかった。

「確かに……。オレは今でもフミツキが憎い。アイツらのせいでオレの失ったものは多すぎる。だから、もう一回、真子や和夫に会ったらそれは幸福……なんだろうな」

それが根本の本音だった。しかし、根本は「けどな」と言葉を続ける。

「死んだ相手と再会するなんて不可能だ。二度と会えないのが死。死んだヤツにもう一回会えるなんていう都合のいい世界は何処にもねえよ。」

根本はそう告げる。

「ハハッ。僕ならその不可能を可能に出来るのに……。」

高城はからかうように言ってくる。

「可能、不可能なんてもんだいじゃねえ。分かったら、お前は……」

根本の言葉が途切れる。

そして同時に彼の姿は消え、空気中がとてつもない冷気に包まれていく。

「分かったらお前はとっとと死ねよ。」

根本は高城の背後に回りこみ、冷気に包まれた剣『氷の剣アルマツス』を召喚する。そして高城の首筋を目がけて剣を振るう。

「…っ?」

しかし、根本の攻撃は弾かれた。

「狙う場所は良かったですけど、背後とは最大の死角です。そんなところに何も防御を施さないでも?」

高城の背後には藍色の鬨気を帯びた盾が高城を攻撃から護った。

「今のは確実に殺せると思ったんだけどな…」

根本は舌打ちをする。

「本当に死角を狙うとはこういうことを言うんですよ。」

高城は一瞬で根本の背後に回りこみ、そして、素早く『魔剣グラム』を召喚して首を落とそうとするが…。

「…おや。」

高城の斬撃は防がれる。

「恭二に手は出させない。」

小山は『不滅の聖剣』（デュランダル）を召喚し、ギリギリのタイミングではあったが、高城の攻撃を防いだ。



「ホウ……。デュランダル……。良い剣を持ってますね。」

高城は関心そうに言う。

「おい、友香。お前、オレを助けて良いのかよ?」

根本は少し鬱陶しげに言う。

「勘違いしないで。恭二には言いたいことがいっぱいあるから死んでもらっちゃ困るのよ。」

友香は鬱陶しげな恭二を気にせず言う。

「チツ、しょうがねえな」

根本はそう言い、地面を蹴って跳躍する。そして、友香は真っ直ぐ高城に目がけて剣を振るう。

「ハッ。そんな一方的な攻撃で……。」

高城は何だ、それは?とでも言いたげな顔で二人を見る。

しかし、友香は真っ直ぐ突き攻撃をすると見せかけて、手首を動かし、突き攻撃から斜め斬りへと攻撃方法を変える。

それは、ほぼ一瞬の出来事で常人にはそんな出来事は見えないうだろう。いわゆるフェイントだ。

高城はそのフェイントに少し驚き、回避が少し遅れる。

そして、その上に上方から根本の強烈な斬撃が加わってくる。が、それもギリギリで止める。

「やりにくいですね…。」

そう高城は呟いた。

そして、一回距離をとり、彼は懐から腕輪を取り出す。

そして、その腕輪をはめて「二重召喚（ダブル）」と発動キーを口にする。

高城の手にはもう一つの剣、『竜殺しの剣』（バルムンク）が召喚される。

## 馬鹿

「二重召喚（ダブル）」

高城の手にはもう一つの剣が召喚される。『竜殺しの剣』（バルムンク）だ。

右手には『魔剣グラム』、左手には『竜殺しの剣』（バルムンク）。

「馬鹿な…ッ！同時召喚型の武器だと…!？」

根本は唾然とした表情で言う。根本も『氷の剣アルマツス』以外にもゼウスの盾『アイギス』という武器を持っているが、同時に召喚など出来ない。

それどころか根本の持つ知識じゃ『試験召喚システム』に同時召喚なんていう機能はなかった筈だ。

すると、小山が何か思い至った表情で言う。

「アレは『白金の腕輪』…。」

よく見ると、高城の腕には銀色の腕輪がついていた。

「…『白金の腕輪』？」

根本は怪訝そうな表情で訊いた。

「あの腕輪は武器を同時に召喚できる物よ。」

「成程……。あのクソババアはこっそりあんなものを作ってたわけだ。」

根本は余計なことしやがってとでも言いたげな表情で言う。

「でも、おかしいわ」

「何が？」

根本は小山に訊く。すると、

「あの腕輪は吉井君にしか与えられてないはずよ。それもあの腕輪が二つも存在するなんて……。」

「……。」

白金の腕輪は吉井明久ただ一人に与えられた力で、腕輪は吉井明久が持つ腕輪以外は、この世に存在しない筈だった。

しかし、どういうことか腕輪は目の前にもう一つ存在している。

「何処で手に入れたの？その腕輪……」

小山は高城に訊く。すると、高城は微笑し、

「僕は昔、陛下の側近をしていました。側近ということは当然『試験召喚システム』の作成にも加わっていました。そのため、システムの構造も理解してます。武器を同時に召喚するためのシステム構造も理解している……ということは吉井明久にしか与えられていない『白金の腕輪』も複製できる。そう思いませんか？」

高城の説明に今度は根本が微笑し、

「ハッ。関係ねえな。お前がどんな力持ってても殺せば、その力はあってもなくても変わんねえものだしな」

「ハハ。成程。君は面白い。君の力を借りれないのは残念ですが、そういうことなら殺しましょう。」

すると、一気に高城から殺気と思われる鬨気が込み上げてくる。

魔剣と竜殺しの剣の力。そして、その力が高城の手にあるというのは驚異的としか言いようがない。

だが、そこで高城は何か異変に気付いた。

「……？」

まだ季節は冬でない筈なのに異様に寒気が増してくる。

さらに、先程まで晴れ模様だった空は雲に包まれて雪が降り始めていた。

「…どういふことだ？」

高城は眉間にしわを寄せる。

そして雪は段々強い吹雪となり…。

「ば、馬鹿な…ッ！」

そして、少しずつ寒さのせいで手足の間隔が消えていく。吹雪は高城の体を包み、皮



高城は『氷の剣アルマツス』を振るうが振り終える前に剣は弾かれ、肺近くに魔剣が突き刺さる。

「……っがつー！」

鮮血が噴き出る。

そして高城の凍っていた体はみるみる生氣を取り戻していた。

「お……前……」

「ハハ。良い攻撃でしたけど、あの攻撃で僕が死ぬことはまずありません。」

高城は余裕そうな表情で言う。

天候さえも操る根本の攻撃はいわゆる自然の力を借りた攻撃である。人間がどうこう出来る力では無い筈なのだ。

しかし、この男は数秒で根本の攻撃を破り、形勢逆転という状況下に追い込む。

「流石は元第一国家騎士。天候を操るとは驚かされましたが、殺しちやえば結局そんなものは関係ありません。」

高城はそのまま根本に背中を向ける。

「待て……。何処へ行く……?」

「何処って帰るんですよ。もう決着はつきました。」

高城は蔑んだ目つきで言う。

「此処で君たちに止めを刺すというのもアリですが、どうせ君達は時間が経てば命が尽きる。」

すると、小山は悔しそうに唇を噛んで負傷して動けない筈の体を無理矢理起こし、飛び出していく。

しかし、そんな小山を見て高城は呆れたように溜め息をついて、小山を斬り捨てる。

そして、それを見た根本も傷を抑えながら立ち上がり、無意味だとは思いつつも高城に剣を振るう。

だが、結果は同じ。高城に斬り捨てられるだけだった。

「全く、僕に何度も剣を振るわせないで下さいよ。ゴミの分際で。」

高城は二人をまるで人として扱っていないような口ぶりと言う。

そして、高城はそのまま背を向け、根本達から姿を消していく。

根本は傷を抑えながら苦しげに息を吸い、言う。

「おい、友香。無事か？」

「無事……な訳ないでしょ……。」

根本の言葉に小山は答える。それを聞き根本は「だよな」と言う。

「悪いな、巻き込んで……。」

「……え？」



根本の意外な言葉に小山は少し驚いたような表情を見せる。根本が素直に謝るところを初めて見たからだ。

そんな根本に小山は「気にしないで」と言う。

「だって私がアナタの傍に居ることを望んだんだもの。」

そして小山の脳には記憶が甦ってくる。

根本恭二との記憶が…。

---

私が彼と出会ったのはまだお互いに訓練所に通う下級騎士だったころだ。

私達はまだお互い年齢的にも大して差は無い筈で子供同士の筈なのに、その少年の目は子供と呼ぶには、あまりに世間に対する憎しみを知ったような目で、そして時々悲しそうに何かを見つめているところが印象的だった。

他の訓練兵は彼に近づこうとはしない。私も最初は遠くから彼を見ているだけだった。

しかし、暫くそんな彼を見てると何処か放っておけなくて、ある日彼に初めて声をかけた。

きつと余計なお世話なのかもしれないが私は声をかけた。

「アナタも一緒に遊ばないの?」

周りはソフトボールやバスケットなどで休み時間を楽しんでいた。

すると、少年は「ハア」と深いため息をつき、

「オレに話しかけるな、ブス。」

などと言ってくる。

私はムツとなり、彼に「何よその態度はツ!?!」と言う。すると彼は、

「余計なお世話なんだよ。それにあんな風に遊び呆けてつから、何時までも凡俗な下級騎士に留まってるんだろーが」

と言ってくる。

確かに彼は下級騎士の中では成績も上位で、西村教官からも高く評価されていたが「凡俗の下級騎士」などと言うのは少し違う気がした。何故なら彼も同じ下級騎士だからだ。

そして何より彼の態度が気に入らなかった。同じ子供のくせに自分だけ大人ぶってるその態度は何処か許せなかった。

私は無理やり彼の手を引っ張り無理やり皆のところ連れてく。「何すんだよツ」と言ってくるが気にしない。

そしてそれを明日、明後日、明々後日も続け、それが一か月、二か月と度重なっていく。

最初は彼と遊ぶのを嫌がっていた皆だったが、後に受け入れるようになっていった。理由は彼に少しずつ笑顔のようなものが出てきたからだ。

そして、ある日彼は私に「ありがとう」と言ってきた。「殻に閉じこもってるだけの自分を解放してくれてありがとう」と。そのときの彼はとても照れ臭そうだった。

私もそれを「うん」と微笑んで返した。

それから少しずつ彼の傍に居るようになった。そして一緒に居るうちに彼を好きになつてしまった。

---

オレはフミツキに来てからは復讐のことしか考えていなかった。

まだ体も、年齢的にも幼かったが、フミツキ兵がオレの家族に、友人にした仕打ちを考えれば、これくらいの気持ちも湧いても当然な筈だ。

当然、こんなこととして家族と友人が戻ってくるわけではないが、「やめろ」と言われて

やめられるようなものでもなかった。

フミツキの全ての人間が悪だと思いつながら生活し続けた。

だが、そんなオレを見てたのか、アイツはオレに手を差し伸ばして無理やりオレの手を引つ張り、導いた。

最初は余計なお世話だと思っていたが、段々それが嬉しくなってしまった。心の中が安らぐ感覚を覚えた。

そしてアイツと一緒に居る時間も増えて、一年、二年と時を過ごし、そして訓練兵だったオレは何時しか国家騎士の頂点にまで上りつめた。

アイツと一緒に居られるのは実際嬉しかった。素直に気持ちを出すことは不器用なせいで出来なかったが、只々一緒に居られることが幸福だった。

しかし、オレはだからと言ってフミツキに対する憎しみが消えたわけじゃなかった。やはり家族を、友人を殺したフミツキが許せない。

フミツキを地獄の底に陥れるのなら、やはりフミツキの主力となる騎士、国家騎士を潰していくのが妥当だろう。

国家騎士の一位にまで昇格したオレなら国家騎士全員を一気に相手にするのは無理でも、一人一人潰していくのは容易い。

だが、そこで気づく。「アイツ」も国家騎士であったということ。

オレに微笑んでくれたアイツもオレが潰そうとしてる国家騎士の一員だった。  
…どうする…？

オレは悩んだ。やはりこんな復讐なんてものはやめた方が良いのだろうか…？  
フミツキは憎いが、アイツには生きてて欲しい…そんな感情が込み上げてくる。

だが、そうしたら今までのオレの憎しみは何処に持ってけばいい——？

オレは迷いに迷った末、剣を握ることにした。

そして、アイツを何の躊躇なく刺殺した。

だが、何故だろう——？オレは心の迷いも全て押し殺して覚悟して刺殺したのに生まれてくる情は復讐を達成した快感でも何でもない。

それは間違いなく「後悔」だった。

その情の正体を知った途端オレは自分の愚かさに初めて気付く。

憎しみに溺れ、憎しみに振り回されていた自分の、どうしようもないくらいの愚かしさにオレは泣き叫び続けた。

---

二人は高城から受けた傷を抑えながら会話をする。

「悪いな。オレはあの時お前に剣を向けたことを今でも後悔している。フミヅキは憎くて仕方なかったが、お前のことは嫌いじゃなかった」

と根本は苦しそうに言った。

「良いのよ。あの時、剣を向けたのは私も…同じだっ…」

すると小山の声は止まり、吐血する。

「ホントに、後悔ばかりだよ。オレはお前と一緒に居られることが幸福だったのに…」

根本は悔しそうに言う。

それを聞いた小山は自分を必要としていると言ってくれた根元に少しだけ笑みを浮かべた。

そして暫く沈黙が訪れた。

二人とも意識が遠のき、限界が訪れようとしていたのだ。

そこで小山は「ねえ」と呼びかける。根本は鬱陶しげに「何だよ」と聞いてくる。

小山が言った言葉は意外なものだった。

「私ね…。恭二のこと…好きだよ」

小山はそう言い、静かに目を閉じた。

それを聞いた根本は少しだけ驚いたように目を丸くし、そして…。

「お前、本当に馬鹿だなア……」

そう言い、根本は目元から涙を浮かべた。

そして涙が零れると共に根本も瞼を閉じた。

## 軍勢

フミツキ軍は状況的には劣勢だった。

高城率いる死霊兵軍は日ごとに数を増やしていく。それに対しフミツキ兵の国家騎士は二人も戦死し、もう二人は重傷を負い、とても戦場に送り出せる状況ではなかった。フミツキ兵の最も有力な戦力となる国家騎士がたったの三人しかないというのは痛手だった。

「…これからどうなるんだろうか…?」

そんなことを呟きながら明久は夜の景色をペランダから眺めていた。

「…どうなるんでしょうね?」

と横から声が聞こえた。咄嗟に右を向くと明久の従者である優衣が隣に居た。

「…わつ、何だ、優衣ちゃん居たのか!」

彼女の存在に気付かなかった明久は「うわあッ!」と驚いた表情になる。

そんな明久を見て優衣は溜め息をつき、優衣は夜の空に浮かび上がる月を眺めた。

「…これからどうするんです?」

優衣は不安を募らせた声で言う。



「…いや、それを僕に言われても」

明久は疲れたような表情で言う。

実際、高城を、死霊兵を簡単に始末出来れば、それが一番良いのかもしれない。

しかし、現実が違う。死霊兵の数はフミツキ兵の数を何万と上回り、高城の実力は国家騎士の頂点に立つ明久でもまるで齒が立たない。

実力の差は二年前の戦いで経験していた。たとえば、二年前よりも強くなっていたとしても殺されるのは間違いない。

それでも明久はこの先の戦いでこの王都を町の人々を護ると心に誓っている。

何故なら今まで大切な人が消えていく姿は何度も目にしてきた。たとえば、それが護りきれないと分かっているとしても、やめてはいけない、やり遂げるのだと心が自分に訴えている。

理論理屈は関係ない――。

そう言いたいのが、やはり戦力的な面での差はやはり大きい。

「うん…」

明久は思い悩むように下を俯く。

そんな明久を見て優衣は、

「明久さんは姉さんをどうするつもりなんですか？」

と聞いてくる。明久は思わず「え？」と言う。

「姉さんは今、敵側に属している。明久さんは姉さんを殺すつもりですか？」と優衣は訊いてくる。

明久は心臓に矢でも突き刺さったように何か重たい不安のような恐怖のようものが込み上げてくる。

明久は優衣に言われるまでずっと今後どうなるか？そればかりを考えていた。

いや、もしくはその不安をずっと心の奥底に放置していたのかもしれない。彼女を殺すことに不安、恐怖、迷いが生まれてしまうから。

「……………」

明久は何て言えば良いのか分からなかった。

優子の妹である優衣に何を言えば納得してもらえるのだろうか？きつと答えは「ノー」だろう。

だが、優衣の目は明久に訴えていた。「明久さんはどう思っているんですか？」と。

「……………」

明久は口を開いた。だが、何を言えば良い？

「明久さんが本当に思っていることを言ってください。」

優衣は明久に言う。

彼女が高城に属し、フミ、ヅキを襲う敵であるならやはり殺さなければいけない。しかし、優衣の言うように、ただ純粹に、明久の望みを言うのであれば……。

「木下さんを助けたい。」

それが明久の本当に思っていること、そして望みだった。

しかし、その望みは現実を現実的な局面から目を背けた都合の良い理想だった。

それはきつと優衣にも分かっているはずだ。

しかし、優衣はクスツと微笑み、

「やっぱり私は明久さんの従者で良かったです」

と言う。そんな予想もしない優衣の言葉に明久は思わず「え？」と声を上げる。

「姉さんを助けることが不可能でも、それでもそんな嘘を言ってくれるのは嬉しいです。」

「優衣ちゃん……」

明久は少し自分が悔しかった。本当なら堂々「助けたい」と言いたかった。

しかし、町の人々も優子も全て助け出す大きな力はなかった。

それでも優衣はそんな明久を信じてくれた。

「明久さん、私、明久さんが好きです。」

優衣は明久に自分の素直な気持ちを告げる。



\*\*\*\*\*

そのとき高城は陰で死霊兵の軍勢がフミツキに侵入してくのを愉快そうに見ていた。「フフフ。終わりにしましょう。フミツキを。」

そう言い、彼は姿を消していった。

その頃王宮に居たカヨール二世は王都に死霊兵の軍勢が侵入してきたという情報を聞き、不安と焦りを抱く。

「クソツ、高城のヤツ、もう攻めに来たか！」

しかし、この状況はほぼ絶望的であった。

何しろ、フミツキ兵と死霊兵の人数の差は圧倒的な上にさらには高城やアリスと言った強敵もいる。

そんなカヨール二世を見て竹原は「私も参戦します」と言う。

「今、この状況では側近とはいえ、私だけ王宮に残るわけにもいかない。ここは私も参戦させてください。」

竹原は頭を下げ言う。

カヲール二世は少し迷った表情になる。しかし、すぐに返答する。

「分かった。なら、お前に戦闘の許可を出す。元側近の高城と戦えるのは同じ側近のお前くらいだろうしな。」

そう、数年前まではカヲール二世の側近は高城と竹原だった。しかし、彼が反逆者となつてからは竹原一人でカヲール二世を支えていったのだ。

「…お任せください、クソババア」

深々とお辞儀をする。しかし、態度とは裏腹に言葉は毒舌だ。

「ああ、任せた。けど、死ぬなよ」

カヲール二世は言う。それを聞いた竹原は「じゃあな、ウンコババア。」と言い、そのまま部屋を出る。

そんな竹原を見てカヲール二世は、「本当に死ぬなよ、クソ野郎」と呟く。

壮絶な戦いが始まるうとしていた。

第七国家騎士の土方、第六国家騎士の小山は戦死。そして第五、第四国家騎士の清水と久保は重傷を負い、まだ目を覚ましていない。

現に戦える国家騎士は三人。国の有力な騎士が三人しかいないというのは実に劣勢の状況だった。

しかし、此処で厄介な問題が生まれる。

死霊兵の数が多く、フミツキ兵の数が少ないというのもそうなのだが、死霊兵に斬られ、命を落とした人間は死霊兵となることだった。

一般人は全員避難場へと逃げるのだが、その逃げる途中で死霊兵に襲われ命を落とす人間が現れる。

当然フミツキ兵も尽力を尽くすが、当然命を落とす兵も出てくる。

死霊兵の数はそんな戦いの最中でも増えていくのだ。つまり、フミツキ兵が全滅すれば、この王都は全ての人間が死霊兵となってしまう。

何故、命を落としたものが死霊兵となるのか分からない。

しかし、予想は出来る。それは死霊術士である高城による『死霊転生』という術による力なのかもしれない。

その術が発動している状態であるのなら、命を落とし死者となった人はその術に抗えず、すぐに死霊兵と化してしまうのかもしれない。

フミツキ兵はそんな恐怖を抱きながら、死霊兵に立ち向かう。

斬る、斬られる、斬る、斬られる……。そんな繰り返しが続いている。

「……『蜘蛛切』（くもきり）……！」

死霊兵が一気に20体ほど斬られる。

「……あ、アナタは第二国家騎士の……ッ！」

フミツキ兵の一人が言う。今の斬撃は第二国家騎士の霧島翔子の斬撃だ。

「……『雷切』（らいきり)……！」

一直線に走る閃光が死霊兵達を襲う。

第三国家騎士、坂本雄二の斬撃だ。

「……オオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ」

続いて第一国家騎士の吉井明久が黒い刃で死霊兵を次々と斬り捨てていく。

三人の攻撃で大分死霊兵の数が減ったように見えたが、まだまだ死霊兵の数は数えられないほどだ。

「おい、明久。お前は先行け。お前は自分の仕事をしろ。」

雄二は明久に言う。

それを聞いた明久は雄二が自分に何を言いたいのか直感で理解した。

明久は頷いて「分かった」と言う。



「でも、雄二。死ぬなよ」

そう言い、明久は前へと進む。

「ハッ。死ぬかよ。俺達は生きる、絶対にだ」

そう言い、雄二は再び刀を振るう。

普段、フミツキ内では人が通らない道。しかし、この非常事態の中、この通りを使う人々は多数いた。

しかし、その通りには生きた人間は存在しない。皆、生首だけの状態で死んでしまってる。

いや、正確には皆死んだわけではない。そこには生首に囲まれ立ち尽くす成人男性がいた。服装は平安時代の正装の束帯を身に纏っていた。

そして草むらに隠れて、その男性を恐怖する幼い兄妹。

「…そこに隠れているのは分かっているぞ。」

男は静かに言う。

その声は殺気に満ちていると兄妹は幼いながらも理解した。この男は危険だと。

「まあ、良い。殺す」

男は静かに言い、式神を出す。そして式神を発動するための祝詞を唱え始める。

しかし、その詠唱は遮られた。唱える途中、男性の頬が太い拳に襲われたからだ。

「…何だ…?」

男はその一撃を受けながらも何気ない表情で言う。

「ハハハ。悪いが、此処からはオレが相手だ。」

出てきたのは大柄でガツチリとした体つきの男だ。その男の名は西村宗一（にしむら・そういち）。訓練所の教官であり、訓練兵からは鉄人と呼ばれる男だ。

「君達は早く逃げなさい。」

西村は幼い兄妹に言い、二人はそのまま逃げるようにその場から離れる。

それを無事見送った西村は平安時代の装束を着た成人男性の方へ向き直る。そこで西村は疑問を抱く。

それは、その男性から生気を感じられないことだった。そして死霊兵もまた生気が感じられないという情報は耳にしていた。それもその筈で名前の通り死霊なのだから。

しかし、この男は死霊兵みたく骸骨という姿ではない。生存している人間と見た感じは何処も変わらない。

だが、何かが違う。そこで西村はその成人男性に訊く。

「お前は死霊兵なのか？」

すると男はニヤツと笑い、「ああ」と単調に答えた。

「まあ、他の死霊兵と見た目が違うのも無理もないだろう。それは霊力の差から生まれるものだしな。」

男はそう言う。

すると西村は「霊力の差？」と訊き返す。

「ああ。死霊兵は霊力が大きければ大きいほど生前に近い形で転生される。」

と、男は答える。

「お前も名前くらいは訊いたことがあるだろう……。オレの名前は『安倍晴明』（あべの・せいめい）だ。」

男は冷ややかな笑みを浮かべた。

「な……に？」

西村の目が見開く。それは驚きの感情から生まれるものだった。

## 安倍晴明

高城の死霊術により転生された死霊兵…。

ほとんどの死霊兵が骸骨という粗末な姿で武装している。

しかし、死霊兵の姿は霊力によって生前に近い形で転生されていく。

例えば陰陽師、巫女、教会における聖職者などといった人々は肉体を持たない骸骨兵でなく、転生する際に肉体が与えられる。

そして今、西村宗一の目の前にいる男も高い霊力を宿し、転生する際に肉体が与えられている。

その男の名は安倍晴明（あべの・せいめい）。平安時代に陰陽師として活躍し、後世にまで名を語られた人物である。

「オレが生きていたあの時代から約千年程の時間が過ぎたが、どうやら現代人にもオレの名は通用するらしい。」

晴明は満足げに笑む。自分の生涯が後世にまで伝えられたことに歓喜を感じているらしい。

しかし、その表情はすぐに歪んだものになる。

「しかし、あの高城という男の死霊術による呪縛にはオレの陰陽術でも解呪することが出来ない。忌々しいことだ。」

晴明は苛立ったように言う。

「フン。構わん。お前が王都に害をなす者ならオレはお前が誰だろうと叩き潰すまでだ。」

西村はポキポキと指の関節を鳴らして言う。

そんな彼を見た晴明は少し興味深そうに、

「潰す…か。今までそう言つてオレに挑んできた者は皆、無残に死んでいった。命知らずも良いところだ。だが、その挑発に乗るのも悪くはない。」

と晴明は薄く微笑んだ。

西村も笑みを浮かべ、

「ちようど良い。久々の戦場だ。準備運動にはなる」と言う。

それを聞いた晴明は「ホウ」と又もや感心したように頷いた。

「面白い。その自信が何処から湧いて出てくるものか見せてもらおうか。」

晴明は式神を取り出し、それを西村に向けて放つ。

「…『式神・水龍』（しきがみ・すいりゆう）…！」

すると、式紙が発動し、水の龍が出現する。

空を見上げるほど巨大で禍々しいほどの殺気を放っていた。

しかし、西村は気にせず前へと突っ走る。

「馬鹿が…ッ！死ぬ気か？」

あまりにも無謀と思える西村のその行為に晴明は蔑むような目で西村を見た。

そして西村はそんな晴明を気にせず、拳を水龍に向けてく。西村の剛腕な拳も水龍の前では体の一部分にも達しない程小さい。

晴明は終わったなどとも言いたげに目を細めた瞬間――。

水龍は西村の拳に触れると共に破裂したように弾け、水飛沫となる。

「…何だと…？」

あまりにも衝撃的な出来事に晴明も驚きを隠せなかった。

さらに驚くのは水龍に触れた西村の拳には傷は一つもついていない。

「お前…何者だ…？」

晴明は西村に問う。

ただの素手で式神に勝てるはずがないと晴明の心が訴えていた。

しかし、西村は言う。

「オレはただの訓練所の教官だ。子供たちを正しい方向へと導く教師だ。それ以外は何

者でもない。」  
そう告げる。

しかし、晴明は先程よりも強い疑いの眼差しを向けた。「それは嘘だ」と。  
小細工は要らない。本気でこの男を殺そう——。晴明はそう心に思い、別の式神を取り出した。

雄二と翔子、そしてフミツキ兵の兵士たちは数万を超える死霊兵と刃を交えていた。  
「…『千鳥鋭槍』（ちどりえいそう）…ツ！」

雄二の持つ刀『雷切』（らいきり）の刀身が伸び、その刀身の長さを利用し、一気に数十体斬り裂いていく。

しかし、まだ死霊兵の数はたった数十体斬られたところで何の意味もなさない。彼らの数は数万。その内の数十体などほんの一部分に過ぎない。

「チツ…。何だよ、コレ…。」

雄二は吐き捨てるように言う。いくら神童と呼ばれる頭脳を持っていても今、この軍勢に囲まれた状況では頭脳を使った戦い方は出来ない。

ただ目の前の敵を只管斬っていただけだった。

「雄二、下がって……」

翔子が雄二に言った。雄二は言う通りに後ろへと下がった。

「何だ？何か策でもあるのかよ？」

「策はない。ただ、私自身の力を強化することは出来る。」

「？……どういうことだ？」

すると、翔子は自身の刀『蜘蛛切』（くもきり）を強く握った。

「……憑依しろ『土蜘蛛』（つちぐも）……」

すると黒い蜘蛛のような影が翔子の背後から現れ、翔子を包み込んだ。

『土蜘蛛』……。それは平安時代に存在していたと言われる大妖怪。そして、その土蜘蛛を斬ったとされる刀こそ翔子のもつ『蜘蛛切』とされている。

『土蜘蛛』を斬ってからは『蜘蛛切』には『土蜘蛛』の力を吸収し、より強い妖刀となった。そしてその力を引き出すための力。それが憑依だった。

そして翔子は刀を振るった。

すると、その斬撃で数百体の死霊兵が消滅する。

そしてまた一振り、また一振り。死霊兵の数は急激に減っていった。

「何だ、お前そんな力を残していたのかよ」



雄二は早くそれ使えよという表情で翔子に言った。

「それは無理。憑依を使えば、それだけ『土蜘蛛』に理性を奪われやすくもなる。簡単には使えない。」

そう翔子は言う。

つまり憑依は強力な力ではあるが、強力になる分、リスクも存在するということがあつた。

「まあ、そうか……」

雄二もそれを聞き、それなら仕方がないと嘆息した。

そのときだった。ビルの上からこんな声を漏らした。

「へえ。もつと苦戦するかと思つたけど国家騎士つて言うだけあつて結構実力あるみたいね……」

と、感心したように言う。

その声が出ると共に数万を超える死霊兵は、その声の主に向けて恭しく跪いた。

数万の死霊兵が全員こんな敬意を持つかのような態度は初めて見る。

そして崇められているその先には一人の少女が居た。長い金髪をリボンで結んだ輝くほどに美しい少女だった。

そして雄二が言う。

「お前、アリスか…?」

一応、四年前、アリスと同じ訓練所に通っていた雄二はアリスとの面識があった。そのためどんな姿でどんな性格なのかも知っていた。

しかし、高城の記憶を混乱させる結界のせいで大半の町人達はアリスの記憶を失っていた。よくアリスと一緒に居た明久でさえ先日まで忘れていた程だ。

しかし、雄二はその記憶が残っていた。記憶が残る唯一の人間と言って良いのかもしれない。

「…アリス?」

その少女は可愛らしく首を傾げた。

「ああ、そっか。私とアリスは見た目そっくりだもんね。そう言うのも無理はないか。」  
少女は自分で納得したように言う。

だが、雄二は混乱したような表情になる。

「その口ぶりからすると、お前はアリスじゃないのか…?」

「アリス…。アーサー王のことでしょ? 女性だって知った時はビックリしたけど。彼女なら今頃愛人にでも会ってるんじゃない?」

雄二の質問に少女は投遣りに答えた。

つまり、この発言からして彼女はアリスじゃないらしい。愛人なのかどうかは知らない。

いが、どうやら明久と会おうとしている。

なら、目の前の少女は一体何者だ——？

そんな疑問が生まれてくる。

「私の名はジャンヌ。…私はジャンヌ・ダルク」

そう彼女は名を告げた。

---

晴明は新たに式神を取り出した。

「…『式神・閻魔』（しきがみ・えんま）…！」

すると炎を纏う大男が現れる。そして、手には巨大な炎剣が掲げられていた。

その式神は迷うことなく西村に炎剣を振るう。

そして、地面を簡単に抉ってしまうほどの破壊に西村は襲われるのだが——。

「うオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

西村は無傷のまま拳を振るっていく。

そして、またもや先程の水龍と同じく拳に触れた瞬間に閻魔は弾けた。

「…チィ…ッ」

そして、さらに晴明は新たに式神を取り出す。

「…『式神・鋼牙』（しきがみ・こうが）…！」

すると鋼に覆われた虎が牙をむき出しにした状態で西村の方へと駆けていくが、結果は同じ。素手で弾かれ、鋼の虎は破片となる。

だが、晴明はそれでも攻撃をやめなかった。

「…『式神・鎌鼬』（しきがみ・かまいたち）、『式神・雷神』（しきがみ・らいじん）…ッ！」

すると、風を纏った獅子が西村を襲う。そして、さらには上空からは雷撃を纏った麒麟が襲う。

だが、結果は同じ。西村は拳で相殺していく。

「…何故、効かない——!?」

晴明は苛立つ表情で言う。自分の式神がまるで意味を成していないことを思うと腹が立つ。

「…これで終わりか——？ 陰陽師…。」

西村は訊く。しかし、晴明は答えない。

すると、西村は拳を上げる。そしてその拳は勢いよく晴明の腹部に放たれる。

そして晴明は約一キロメートルほど吹っ飛んだ。とんでもないほどの怪力だった。

「ぐ……っ……がハッ！」

腹部を強く打たれ吐血する。だが、これだけの攻撃を受けて死なないのは清明にも彼に対抗すだけの力があるからだ。

「どうなっている——!? アイツは人間なのか——!?」

清明はそう言う。この腕力が人間な筈がない。あの体の頑丈さが人間の筈がない。

すると、気付けば清明の目の前には西村が立っていた。

「フン。普通の人間なら生きてはいられない。よく生きていたな」

西村は笑う。

清明はゾツとした。彼は生前、自分の陰陽術が他者に敗れる、もしくは自分が傷を負うなど一度もなかった。それもただの腕力による攻撃で傷をつけられるなんていうのは彼にとつては恥だった。

「いくらお前が凄腕の陰陽師でもそれはオレに届くことはない。所詮は人でしかないからな。」

そう西村は言った。

「馬鹿が。お前も人間だろう——?」

そんな清明の言葉を西村は否定した。

「いいや。違う。オレは人間を超える新たな人種だ。」

そう言った。

だが、晴明にはその言葉の意味が分からない。いや、晴明だけではない。誰もが西村の言葉を聞いて納得するはずがない。誰もが人間であるから。

そして人間である限りその言葉は、彼の存在は理解できない。

———なら、彼は……。西村宗一とは何者だ———？

そんな疑問が込み上げてくる。

## 西村宗一

もう三百年も前のことかもしれない。

各国で戦争が起る動乱の時代。決して平和な世の中ではなかった。

そして多くの国々が新しい兵器を開発する為に実験を繰り返し、そしてその開発された兵器を何の迷いなく放っていった。

しかし、それは『物』だけではない。『人』も同じだった。

身体能力、反射神経、語学。全てを常人以上の力を引き出す人間を超える新たな人種『超人』という人種を造ろうとしていた。

だが、それはほとんどが失敗し、実験体にされた人間は死んでいった。

若い西村宗一もその実験体の一人だった。

毎日のようにきつい訓練、肉体労働、勉強を強いられ、毎日のように体を弄られる毎日。

その繰り返しでせいで異形の姿と成り果てた者もいた。

——いつ戦争が終わる——？

そんなことばかり考えていた。ひよつとしたら生きている間には終わらないのかも

しれない。

それでも仲間が毎日のように変わり果てそして死んでゆく姿は耐えられなかった。自分たちは何も悪いことはしていない。死ぬ理由が分からない。

しかし、それでも人間を超える存在『超人』に至る者はいなかった。そしてある時研究員が言った。

「今から殺し合え。そして生き残った者だけ此処から出してやろう」

そして実験体の一万人の目がギラリと変わった。

今まで痛みを共有する仲間だったが、『生き残る』という言葉の前では酷く脆かった。殺した。何人も。イヤ、そんな単位ではない。何十人も何百人も。

だが、そこで西村は気づく。一人一人殺していく度に自分の力が増大していくことを。それは研究員達の術によるものだった。

『蠱毒』――。

西村は殺していく度にその殺した人間の力を吸収し、そして力を得ていく。

西村だけではない、他の実験体の者達もだ。

そして、最終的に残り二人となる。そして、その残り一人となる。

生き残ったのは西村だった。

それはこうも言えた。一万人を殺した…。



そして一万人殺し、『蠱毒』により相手の力を奪ったことで人間以上の身体能力、反射神経、そして寿命を得た。

そして研究員は言った。

「いや、おめでとう。君は生き残りだ。自由だ。」

だが、そう言った後で西村は研究員を殺した。

こいつ等さえ居なければ自分はこんな思いはしなかった。自分は人を殺さずに済んだ。

そして研究員も全員殺した。

これで自分を陥れた人間はもう居ない。本来なら喜ぶべきなのだ。

だが、どうしようもないほどの後悔が込み上げてくる。

---

「ハッ！それが本当ならお前は化け物だな」

晴明は吐血しながら言う。西村から受けたダメージは抜け切れていなかった。

「ああ、そうだ。オレは化け物だ。人間をやめた化け物だ。」

晴明の言葉に西村は否定しなかった。それは事実であり変えようのない現実だから

…。

「それでもオレが化け物でも人間としてあろうしたのは陛下と出会ってからだ。」

「陛下？カヲール二世か。」

西村は頷く。

「あの方が化け物であるオレを拾ってくれなければ今頃オレの心は死んでいた。だが、彼女はオレに力の使い方を教えてくれた。本当に力を使うべき場所も時も。」

カヲール二世は西村に化け物でない自分を教えてくれた人物だった。その彼女の為に西村は尽くすことにした。

「そして、オレは教官…教師となった。元々人に何か教えられるような資格など持っていなかったが、ただ生徒達に教え、生徒達といることが幸福となった」

そして西村は思う。自分の心奥底に眠る地獄を決して忘れたわけではない。

ただ、教官としていられることに幸福を感じた。

「ハハッ。ならその幸福は此処までだなッ」

晴明は新たに式神を取り出す。

「…『式神・死滅呪』（しめつじゆ）」

すると、急に西村は鮮血を噴きだした。さらには吐血——。

「…なにが…？」

何が起きたのか分からない。『超人』となつてから西村は怪我や病気は一切しなかつた。

だが、今——。

「この式神だけはお前でも回避できない。どんなものにも死はある。この式神は対象を急速的に死に至らせる式神だ。」

血が止まらない。

だが、それでも西村は動いた。そして拳を握つた。

「な……に？」

拳が清明の心臓部分を貫通した。

「な……んで」

清明は何が起きたか分からなそうに言つた。実際分からなかつた。

式神で死に至る筈が至つていない。それが疑問だつた。

「いや……。」

そこで自分の思考を改めるように遮つた。それは疑問ではないと。それこそが西村宗一であると。

「はは。オレの負けかよ」

清明はそう言い消えていった。

「ああ、お前の負けだ。」

西村もそう言った。

そして疲れたように座り込んだ。

しかし、戦いはまだ続いている。恐らく高城が生き続ける限りこの戦いは終わらない。

「ジャンヌ・ダルク…だと!？」

雄二は啞然としたように言う。

彼女はフランスの王位継承戦『百年戦争』に活躍したカトリックの聖女である。

そこでの活躍は誰もが英雄と見做し、誰もが彼女を信頼し、着いてきた。

だが、彼女の最後は異端の不服従ということで19歳で火刑された。

しかし、目の前にいる彼女はジャンヌダルクと言う。

「ええ。私がジャンヌ。今じゃ私を『オルレアンの少女』とも呼ぶらしいけど。」

ジャンヌと呼ばれる少女は薄く微笑んだ。



「…『雷斬月破』（らいざんげつぱ）…ツツ！」

巨大な三日月の形をした雷の斬撃が真っ直ぐジャンヌに向かっていく。

だが、ジャンヌは表情を変えない。まるで避ける必要がない。そう言う様な目をしていた。

「…『神の加護』（グレイス・オブ・ゴット）」

ジャンヌの体は炎に包まれ、雄二の一撃を軽々防いだ。

「マジかよ…」

雄二は舌打ちをした。

実のところ『雷斬月破』は雄二の持つ技の中でも最も威力のある斬撃であり、この技以外はジャンヌの炎を打ち破る技がないということになる。

そんな窮地に立たされる雄二にジャンヌは質問した。

「アナタは神を信じてる？」

「ああ？」

雄二はジャンヌの訳の分からない質問に鬱陶しげに声を上げる。

「ああ、別にただの興味本位で聞いているだけよ。ただ信じているのか、そうでないか。」

雄二にとつてはそんなことはどうでも良い質問だったが彼女の表情が異様に真剣さを放っていたので渋々答えることにする。

「…信じてねえ」

雄二はそう答えた。

その理由としては雄二は疑問に感じていたからだ。神とは決して絶対的な存在ではない。

雄二にとつては神が何故、人々にあそこまで崇められるのか、そして信仰されるのか、まるで分からない。

絶対的な存在でもし、自分の願いが叶うのであれば辛い、苦しい思いなど不要なのだ。

「…そう」

ジャンヌは静かに頷く。そして彼女は巨大な十字架を再び剣のように振るう。

「……『十字架の墓』…（クロス・グレイブ）」

すると天から雄二に向かい十字架が降り注ぐ。

あまりの一瞬の出来事で雄二はそれを躲すことが出来ず直撃してしまう。

「…っがあッ」

十字架が右肩を貫通した。

「ゆ…雄二ッ！」

それを見た翔子は雄二に駆け寄る。

そして駆け寄ろうとしたときに翔子の方にも十字架が降り注いだ。いや、翔子だけで

はない、周りにいたフミツキ兵達にも十字架が襲う。

雨のようにする十字架によりフミツキ兵は次々倒れていく。

「…神を信じない外道どもめ…」

ジャンヌは怨みを込めて言った。

彼女にとって神とはそれほど偉大な存在である。それ故に神と絶対的な存在。

しかし、何がそこまで彼女に『信仰心』という執着心を起こしているのかはまるで分からない。

「…憑依しろ…『土蜘蛛』…ッ!」

瞬間、大きな黒い蜘蛛の影が現れる。それと共にジャンヌに真っ直ぐ刃が向かう。

ジャンヌはその一撃を十字架の『神の加護』により防ぐ。

「…無理よ。あなた達じゃ私を倒せない。」

ジャンヌは笑う。それは妖艶の様に美しい笑み。

「あなた達じゃ私と背負っているものが違いすぎる。」

そう言い、翔子に向けて炎を放っていく。

「なら、ジャンヌ・ダルク。アナタは一体何を背負っているの?」

翔子が訊く。

彼女は一体何を背負い、何の為に神を信じるのか…?



「…それは…」

深い闇の中。月の光が暗い夜空を照らしていた。

「今日は満月ですか……」

高城は呟く。その後ろで…

「敵の前で悠長に月見とはずいぶん余裕そうだな、高城。」

高城の後ろにはカヲール二世の側近、竹原が立っていた。

「やあ、竹原君。」

高城はフレンドリーに竹原の名を呼んだ。そんな高城に竹原は怪訝そうに眉を顰めた。

高城は元々カヲール二世の側近だったため、竹原とは当然長い付き合いであり、親しくもあつたが、八年前、彼は裏切った。

まだ『試験召喚システム』上、召喚されていない『騎士王の聖剣』（エクスカリバー）。その剣を召喚する為に彼は町の人々を何人も殺し、そしてその犠牲の上でアーサー王の魂を内蔵させた人造人間（ホムンクルス）を完成させた。

「…何故、八年前あんなことをした？」

竹原は静かに訊く。

その犯罪に気づくまでは彼は町の人々にも慕われ、カヲール二世にも信頼されていた優秀な騎士だった。誰もが尊敬する騎士だった。

それ故に、八年前のあの出来事が突然すぎて理解できなかった。

「何故…ですか。」

すると高城がつまらなそうに溜め息をついた。

「じゃあ、逆に訊きましょう。何時から僕が誰もが憧れる『高城雅春』だと錯覚したのですか？」

瞬間、竹原の表情が凍りついた。

「何時から君は犯罪を犯す前の僕が『善良な人間』と錯覚したのですか？」

竹原は理解した。

高城雅春とは元々自分が思うほど尊敬、慕う、憧れるべき人間ではないことに。

だが、それは同時に裏切られた気持ちだった。長年ずっと一緒に側近として仕えていたため、その気持ちはより強かった。

「…同情しましょう。この世には本当に信じられる『真実』とは何処にも存在しない。『真実』のように思われてもそれは実は『嘘』だったり、一見『嘘』のように思われるも

のでも意外に『真実』であつたり。本当に醜い世の中ですよね。」

まるで他人事のように話す高城。だが、フミツキに一番混乱を招いている人間はこの男である。この男が元凶だ。

竹原にもう迷いはなかった。

それまでの竹原は高城のことは共に歩んだ仲間、八年前のこともきつと何か原因があつた…そう信じたかつた。

しかし、そうではない。ただ自信の欲の為に悪事を働くのであれば、それはフミツキの敵…即ち竹原の敵だ。

「…試験召喚（サモン）」

竹原は武器を召喚する。

全身が結晶のように光り輝く剣。

その剣の名は『ガラチン』。ブリテンの王、アーサー王に仕えた騎士、ガウエインの剣である。

「高城、死ぬ覚悟は出来てるだろうな…？」

「いいえ。そんな覚悟を持ち合せた覚えはありませんねえ」

高城は笑う。

そして、彼も『魔剣グラム』、『竜殺しの剣』（バルムンク）を同時召喚（二重召喚）す



## 聖女の祈り

「それは…」

ジャンヌは口を開いた。自分は何を背負い、何の為に神を信じるのか…。

そして、そのとき下方から雷撃が攻めてくる——。雄二だ。

「何度やっても私の十字架は貫けない」

「うるせえな。分かっているよ。」

雄二は吐き捨てるように言った。しかし、これ以外彼女を攻める方法はない。

彼女の十字架から発動する『神の加護』（グレイス・オブ・ゴット）は恐らく絶対防御と言っても過言ではない。

「雄二、怪我大丈夫？」

「大丈夫なわけあるか」

彼の右肩はジャンヌの天から降り下る十字架、『十字架の墓』（クロス・グレイヴ）によって貫かれてしまっている。そのため、意識が朦朧とする。肺近くというせいもあり、呼吸がきつい。

「フ…。神からの天罰よ。」

ジャンヌは微笑んだ。

「チツ…。ヤバいな、コレ」

先ほどの十字架攻撃でフミツキ兵は何百人という単位で倒れた。

もう一度あの攻撃を受けて、生きている自信がない。

「…なら…」

雄二の雷切の刃が青白い閃光から白銀へと色を変える。

「…『雷切』…最大解放…ッ！」

先程よりも強い殺気を放っていた。

同時に翔子も再び『蜘蛛切』を強化した。

「憑依しろ『土蜘蛛』」

翔子の背中から黒い蜘蛛の影が浮かび上がる。

「やはり国家騎士はそう簡単には罰することは出来ないみたいね。」

とジャンヌは呑気そうに言う。

瞬間、左右から白銀の刃と黒い蜘蛛の影を纏った刃が攻めてくる。

「…ッ？」

先ほどと同じくジャンヌは『神の加護』（グレイス・オブ・ゴット）の炎で剣戟を防いだ。

しかし、刃から伝わる振動が明らかに強くなっている。気を抜けば、ジャンヌの十字架の炎が破られる可能性もあった。

「…なら…ッ」

すると、巨大な十字架が刃へと形を変える。

「…『火刑王』…ッ」

ジャンヌは凄まじい炎の斬撃を放つ。

だが、雄二と翔子は何とかその攻撃を耐え、前方へと進む。

「…『十字架の墓』（クロスグレイヴ)」

そして再び十字架の雨が天から降り下る。しかし、数本もの十字架は無残にも銃弾で撃破される。

「な…に…?」

ジャンヌは素直に驚きが隠せなかった。

「起きてみて何かと思ったらとんでもないことが起きてるようですね。」

「そうみたいだね」

出てきたのは眼鏡をかけた男と銃を持ったツインテールの少女。第四国家騎士の久保利光と清水美春だった。

「お前ら重傷の筈じゃ…」

雄二は何してるんだ、コイツ等と言いたげな表情で言う。

そう、この二人は死霊兵の軍勢により重傷を追っていた。それなのに彼らは包帯やテープを付けたまま病院から抜け出してきたようだ。

「こんな五月蠅い音が響いていたら気になるに決まってるじゃないですか」と美春は言う。そんな美春の意見を同感だ、と言わんばかりに久保が頷く。

「…成程…。国家騎士が四人…かあ。」

少し分が悪いな…と顔を顰めるジャンヌ。しかし、その表情はすぐに消えた。

「ホントは使いたくなかったけど仕方ないわね…。」

すると、死霊兵達がジャンヌの下へと集まってくる。まるでジャンヌに引き寄せられるかのような勢いだった。

「憑依しろ『死霊兵』…。」

すると、数万近い死霊兵の魂はジャンヌの中で一つとなり、融合する。

それはジャンヌの魂が数万近い人間と同等の魂の大きさを放つことを意味する。

顔、美しい金色の髪はそのままだ。

そして彼女の背中からは天使のような羽。頭の上にも天使のような輪。しかし瞳の方は悪魔のように赤く、そして悪魔のように鋭い爪を持っていた。

天使と呼ぶにも少し抵抗があり、悪魔と呼ぶにも何処か抵抗あるそんな異形な姿。



「…何だ、アレは」

久保が思わず呟く。

「分からない」

それに翔子は正直な気持ちを述べる。

「ヤバい…ぞ。あれは」

「そうですね」

雄二の言葉に清水も頷く。

とにかく目の前にいる彼女は既に人が持つていい力の許容範囲を超えていた。

もう、彼女はフランスの聖女でも何でも無い。数万人の死霊兵の魂を纏った化け物だ。

「おい、一般兵どもは下がってろ」

「は…? いや、しかし…」

「いいから下がれ」

雄二は一般兵を下がらせる。彼らは目の前にいる化け物の次元の違いさに戦意喪失していた。

しかし、それは国家騎士である雄二達もそうだった。

四人一斉に掛かってあ、あの化け物からすれば雄二たちなど蟻を潰す様なものだ。

しかし、四人一斉に攻撃する…それ以外に方法はなかった。  
「行くぞ…。一斉にアイツを攻撃するぞ。」

雄二は他の三人に呼びかける。そして三人は頷いた。

まず、雄二が飛び出す。雷切から凄まじい雷撃を解放する。

「…『雷斬月破』（らいざんげつぱ）」

雄二が凄まじい斬撃を放つと共に翔子も『蜘蛛切』の青い刀身に黒い蜘蛛の影を纏い、

「…『蜘蛛の太刀』ッ」

斬撃を放つ。そして、久保も槍を勢いよく投げる。

「『鋭利な投槍』（シユウラ・ヴァラ）」

そして美春も『断罪者』（ジャツジメント）を銃から弓矢へと形を変え、

「…『原罪の矢』…」

勢いよく射る。

そして四つの攻撃は化け物とも呼べる少女、ジャンヌに命中する。

しかし…。

「これが攻撃…？」

傷跡一つない。全部攻撃は当たった。しかし、無傷のまま。まるで今の攻撃が攻撃ではないと思わせてしまうほどに彼女の力は圧倒的だ。

すると彼女は悪魔のように鋭い爪を天に掲げた。そして…。

「…『破壊咆哮』（デス・ボール）」

爪から発生する破壊が雄二たちを襲う。それも回避することは不可能だ。それほど破壊は早く迫ってくる。

だが、次の瞬間——。ジャンヌの攻撃は斬り裂かれる。

いや、そもそも斬り裂くなんてことは不可能だ。しかし、彼女はそれを斬り裂いた。

「あく。ホント情けないねえ。こんな老人に守ってもらうなんて、ホント情けない。まだまだケツの青いガキ共だねえ」

目の前に居たのはカヲール二世だった。

「おい、ババア。てめつ、何してやがる?」

「何っってお前ら死にそうだから助けてんじやないか」

と、さも当たり前のように鼻を穿りながら言う。そして穿った鼻糞をピンと飛ばす。鼻糞は真っ直ぐジャンヌの背中から生える羽にくつつく。

「…汚らわしい」

ジャンヌは正直な感想を述べる。

イヤ、そんなことをされたら誰でもそう思う筈である。

「あー。元々清潔に一切気は使っていないからね」



ジャンヌダルクの最後。それは火の中だった。

彼女は最後まで戦い抜いた。周りから支持を得られなくてもそれでも戦い抜いた。

しかし、イギリス軍に捕えられ、火刑を宣言される。理由はお告げの神が彼女の所属するカトリック教、即ちキリスト教でないこと、そして男装したためであった。それを異端とし、イギリス軍は死刑を宣言。

一度は取り下げられた火刑だが、ドレスを盗まれ着る服の無かったジャンヌは再び男装した。

そして再び火刑を宣言される。

ジャンヌは火刑台に立たされる。そして徐々に炎は自分の肌に迫ってくる。

そして気づけば、ジャンヌは火の中に居た。

(ああ……私は死ぬのか……)

自分の今の状況を悟る。

火は彼女の肉体を焦がし、焼いていく。

辛いか……?と問われれば世間的には「はい」と答えるだろう。

だが、不思議と辛くはなかった。自分には信じられる神がいる。傍に居てくれる神がいる。

この火刑が神による宣告であるのであれば、迷いはない。こうして焼かれて消えていくのがきつと正しいのだ。

彼女は目を閉じた。

辛くはない。苦しくはない。悲しくもない。痛くもない。ただ信じるだけ。

彼女の祈りが誰かに否定されたとしても神だけは決して自分を裏切らない。彼女の祈りは本物だ。

彼女は最後まで神を信じ、そして消えていった。

\*\*\*\*\*

カール二世はジャンヌの心臓を剣で貫いた。

そう、それはフランスの聖女、ジャンヌダルクの二度目の死だった。

「ば……か……な」

驚いた様にジャンヌは目を見開いた。

自分は一度死んだ。それは神が自分に必要な死だと、そう宣告した。だから何の迷い

もなく死を受け入れることが出来た。神を信じていたから…。

しかし、二度目はどうだろう…？

確かに自分はあるてはならない二度目の人生を手にした。

だが、再びこの世で目醒めても神への想いは変わらなかった。二度目の人生…。それも神が自分を望んでこの世に転生させたのだと思つた。

だが、神はまたしても自分の死を望んだ。仮にこの死が必然的なものであつたとしても、そのままでは自分は消えなければいけない存在だつたのだろうか…？

そして今になって迷う。自分の生き様は本当に正しいものだつたのだろうか…？

「ああ。決して間違つてはいないよ」

ジャンヌの迷いを掻き消すようにカヲール二世が言う。

「ただ、もつと楽な生き方もアンタは選べた…。ただ、アンタはそれを選ばなかつた。それだけだ。」

そう言う。

つまり、自分の歩んだ道は決して外れてはいなかつた。

「…そ…うか…」

ジャンヌは僅かではあつたが満足げな表情を浮かべ消えていく。

それはまるで妖艶と言うべき笑みだつた。







先へと吹つ飛んだ。常人が持つ腕力ではなかった。

常人離れした腕力の持ち主——西村宗一だ。

「助かったよ。西村」

素直に感謝の気持ちを述べる竹原。

「いいえ。まだ安心するのは早い。彼はまだ生きているはずだ」

西村は眉間に皺をよせ、拳を強く握る。

「ああ、今のはとても良い一撃だ。流星は人間を上回った人種とでもいいですか……。西村宗一」

顔中血にまみれながらも、笑みを絶やさない高城。西村の常人離れした拳は外見的な傷だけではない、内面的——つまり、内臓にも相当負荷が掛かる筈なのだ。なのに、この反応はある意味化け物だ。

そして、高城は二人に襲いかかる。

だが、高城の動きは遅かった。今の西村の攻撃が相当効いたみたいだ。

竹原も動く。速度は高城より速かった。そして、頭上には高城の剣が迫っていた。

そこで竹原は柔軟を活かしてその攻撃を回避。そして彼の右腕を斬りおとした。

「……な……」

しかし、まだ左腕にも剣を握っていた。その残った左腕に全霊を降り注いで竹原に斬



「はい」

竹原の言葉に西村は頷いた。

そう、これで全て終わった。この世界を混乱に招いた大罪人は死んだ。

「ですが、妙ですね…」

西村は言う。

「何がだ？」

「俺達はずつと打倒を目標とした高城がこんなにも呆気なくやられるなんて…」

「…あれだよ、雑魚だったんだよ。」

竹原の頭の中には既に自分が高城を倒した英雄化され、浮かれていた。そのため、もう

高城が強い、弱いというのは大した問題ではなかった。

だが、そこで声が聞こえた。それも有り得ないところから。

先ほど、竹原と西村が倒した高城の遺体から声が聞こえた。

「…確かに終わりました。」

高城の口は動いていた。それは本当に有り得ないことだった。彼は胸を剣で貫かれて  
ているのだ。

「《人》としての僕は死にました」

高城はさらに口を動かした。

「此処からは《神》として戦闘を望もう。この『修羅界の王』が。」

すると起き上がれない筈の体を野良猫のようにムクリと起こし、立ち上がる。

「さあ。戦おう。修羅こそが僕の生きる世界。」

高城の姿が形を変えていく。『人』から『神』へ。

高城の髪は白銀へ変わり、瞳は真紅に輝く。そして獣のような牙。

そして何よりも人間らしさを見せない部分は六本の腕が生えていた。

「お前は…何者だ…?」

竹原は息を飲んで問う。そして、高城は答える。

「…高城雅春なんて言う名は本当に仮の名に過ぎない」

そして高城は言う。

「僕の本当の名は『阿修羅』（あしゆら）だ」

彼は不気味ともいえる笑みを浮かべた。

---

下の方から地獄界、餓鬼界、畜生界、修羅界、人間界、天上界、声聞界、縁覚界、菩

薩界、仏界という十にもわたる世界が存在する。これ等全ての世界を『十界』と言う。人間はこの地獄界から天上界までの世界を繰り返していると言われている。いわゆる六道輪廻というものだ。

その中で修羅界という世界。そこはまさしく戦の世界。争いの堪えない世界だ。そこには神が居た。戦闘神ともいえる神。その神の名こそ『阿修羅』（あしゅら）。

彼は帝釈天、そして四天王といった神々に幾度も戦いを挑んだ。

理由は彼の娘である舎脂（シャチー）を帝釈天の妻にしようとしたのだが、帝釈天はそれに待ちきれず、遂には阿修羅から奪ってしまった。

それに当然、阿修羅は怒った。

しかし、舎脂は帝釈天を愛した。そのことに阿修羅はさらに怒った。そして戦いを挑んだ。しかし、彼には勝つことが出来なかった。

だが、彼は滅び修羅界の主になったとされるが、彼は何度滅んでも何度でも甦り、何度でも帝釈天と戦い続けるとも言われている。

「つまり、お前は……人ではない？」

竹原は恐る恐る訊いた。

「ええ。この六本の腕、真紅の瞳、白銀の髪、獣のように鋭い牙が証拠でしょう」

高城雅春と呼ばれた男——阿修羅は答える。

「う……オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ」

西村は拳を振るう。

だが、高城は表情を変えない。高城の攻撃を素手で止めた。

「……確かに君の力は脅威です。人間からすればね。ですが、神にはこの程度は攻撃とは言わない。」

すると、高城は手刀で西村の腹部を斬り裂いた。

「が……っ」

西村はゆっくり倒れる。人間よりもはるかに強い肉体、生命力を持つ西村だが、神の前ではこうも脆い。

そんな姿を竹原はただ茫然と眺めていた。

これは人間では勝てない……人である限り永遠に勝つことが不可能なのを悟る。

「後ろ……。ガラ空きですよ」

高城は手刀で竹原に襲いかかる。

だが、目の前に人影が現れる。その影は——。

「へ、陛下下ッ！」

カヲール二世は『天叢雲剣』を向けるが手刀により弾かれる。

そして手刀は真っ直ぐ、カヲール二世と竹原を襲う。

「ぐ…………はあッ」

「い…………あ」

二人は倒れた。

「ハハハハハハハハ。君達は良くやったと思います。ただ相手が悪かったんですよ。あ、それと君たちの剣は僕が頂きましょう。」

そう言い、高城の姿は消えていく。

「陛下……。申し訳ない。」

「いいや。誰のせいでもない。これ…は本当に文月が崩壊するかもねえ」

いつになく弱気になるカヲール二世。

そして、傷口からは血が止まらない。地面に沁み込むように流れ込んでくる。

木下優子の姿をした少女——アリスは町の外れにいた。

そこは死霊兵による被害で死体しかなかった。彼女はその死体を見つめた。

アリスとなる前——。つまり前世でも争いは幾度となくあった。それどころかア



リスは騎士達を指揮する王だった。

騎士達は皆彼女についていき、そして数々の戦場を潜り抜けた。

そして、彼女も迷うことなく剣を振るった。彼女の伝説は後世にまで伝説を残し、語られていった。

だが、その為に何人もの騎士達が名誉だの栄誉だの命を落とした。彼女はそれを間違ひなく自分のせいだと思っている。

自分を信じ、ついて行つたがために命を落とした。

自分は恐らく狂っていた。王でありながらも、普通の町娘のような生活を心の何処かで憧れた。

しかし、そんな思考は許されない。自分を信じついできた者達がたくさんついできた者がいる。死んだ者がいる。

自分だけ幸せになることは許されない。

しかし、どんなに自分を攻め続けてもやはり会いたかった——。彼に。自分を騎士でも王でもない、ただの女として接してくれた彼に——。

そのとき声が聞こえた。聞き間違いではなかった。自分を呼んでくれる彼の声が——。

「アリス……。」

明久は町中を走り回っていた。

避難出来た人達も居たのだが、死霊兵の襲撃により命を落とす者も多数いた。

町には血と死体の匂いが漂っていた。

「……………」

明久は唇を噛みしめた。

この全ての元凶は恐らく高城の仕業だ。しかし、そこにはアリスも彼に協力している。  
る。

当然、彼女が望んで高城に協力してるわけではないことも分かっていた。

しかし、それでもやはり思う。これだけの人が命を落としている。彼女は一体どんな  
気持ちでその光景を目にしているのか…？

「ああああああああああああああああああああああああああああああ」  
死霊兵が攻めかかった来た。

明久は黒い剣を召喚し、斬り裂いていく。数は先程よりも少ない。しかし、数百体はいる。

明久は死霊兵の攻撃を上手く躲し、斬り裂いていく。だが、それでも数は多い。

だが、明久の斬撃、そして速さ、回避能力といった力が格段に上昇していく。

黒い闘気を全身に纏わせたのだ。それによって急激な身体強化が発動したのである。

「オオオオオオオオオツツ！」

明久は次々と斬っていく。しかし、そこで死霊兵の動きはピタリと止まる。そして何故か後退していく。

「……？」

明久はその理由が分からず、彼らの後を追っていく。もしかしたら何か分かるかもしれない。

そして死霊兵の行き着いた先は――。

「……！」

そこには腰まで伸びる長い髪の少女がいた。木下優子だ。

しかし、今、彼女の中には二つの精神がある。彼女自身の精神、そして、アリスとい

う少女の精神。

そして目の前にいる少女は恐らく――。

「アリス――」。

明久はその少女の名を呼んだ。

すると、その少女は妖艶の様に美しい笑みでこちらに振り向いた。

これは悪魔でも明久の勘ではあつたが、これがアリスとの最後の戦いだ。明久は彼女を助けられるのか――？ 最悪の場合、ここで明久が死ぬのか、アリスが死ぬのか、もしくは両方死ぬか――。

二人は再び刃を交える――。

## 明久とアリス

「…アリス…」

明久は彼女の名を呼んだ。

「ああ、明久君ですか」

アリスはニコリと微笑んだ。彼女の手には優子の刀、『鬼切』を手にしている。

「私の下に来た…ということは決着をつけに来たということでしょうか？」

アリスは明久に訊く。明久はそれに応える。

「ああ。終わりにしよう、この戦いを」

その言葉にアリスは頷き、

「そうですね、終わりにしましょう。この戦いを」

そう言い、アリスは動き出す。明久も動き出す。そして黒い刃と赤い刃が交わる。

そして二人は距離をとる。そして、アリスの刃から凄まじい千本攻撃が放たれる。

「…『紅千本』（べにせんぼん）ッ！」

向かってくる数本の千本を明久は物ともせずにはたき飛ばす。そして、そのまま前進し、アリスに剣を向けていく。

しかし、アリスはその攻撃を完全に見切り、右手の指先でそれを止め、逆にアリスの方から刃を向けていく。

「ぐ……ッ！」

明久は呻く。今の攻撃が回避されることが予想できても素手で止められるとは思わなかったからだ。

「アレ？ 明久君。この前の方がもつと手応えあつたような気がするんですけど気のせいですか？」

アリスは腑に落ちない表情で言う。

「それなら君こそご自慢の聖剣で僕を殺せばいいじゃないか。そうすれば簡単に僕を殺せる。」

明久も少しムキになり言いかえす。

「フッフ。それでは戦いにはならないからですよ。アナタは最後の『戦い』を望んだ。なら、それ相応の力で応えるべきでしょう？」

アリスは笑って言う。

つまりは明久とアリスにはそれほどの戦闘力の差があつたのだ。

「……成程……」

すると明久の刃から黒い鬨気が竜の形を描く。それと共に明久の瞳も紅く輝いた。



アリスはその攻撃を鬼切の斬撃で明久の巨大な斬撃の規模を軽減し、何とか回避することが出来た。

しかし、明久は既に目の前に迫っていた。

「……………」

明久は既に剣を振り上げようとしていた。その動きは早かった。

しかし、アリスほどの実力者であればその攻撃は躲すことも出来た。しかし、アリスはそれをしようとししない。むしろ、その攻撃を受け入れようとした。

(…これで良い)

アリスはそう心の中で呟いた。

きつとこのフミヅキは終わる。そしてこの王都が滅んだ後は、自分も高城の手により消えてしまいかもしれなかった。

しかし、それが高城ではなく明久の手で殺されるのであれば、それは本望だった。

おそらく、今自分が憑代としている優子の体も朽ちてしまう。それでも、あの男に消されるよりはまだ良かった。

アリスは目をつぶった。

見えていたものは見えなくなる。そして感覚的に明久の刃がこちらに向かってきているのが分かる。



(ああ、これで終わる。これで終えられる。)

すぐに肉を裂くような痛みが走るだろうと思った。

だが、その痛みは来ない。それどころか痛みではなく、温かい温もりを感じた。

アリスはゆっくり目を開ける。この温もりが何なのかを知るために。

「……………」

それは驚くべきものだった。

アリスは剣を捨て、アリスを抱きしめていた。

「……な……んで」

アリスは小さな声で言う。何故明久がこんなことをするのか分からなかった。

「何やってるんですか?」

アリスは言う。

自分はもう彼に抱かれるような資格などない。彼はこんな血に染まった殺人者に触れるべきではなかった。そして自分はこんな幸福を望んではいけなかった。

しかし、それでも彼は強く強く抱いた。

「君は……もう自由だ。」

明久はそう言う。

——自由——?アリスはその言葉に疑問を抱く。

「自由じゃありませんよ。高城が生きている限りは私の中の呪縛は消えない。そうでなくても私は何人も殺しました。決して自由なんて言う言葉は存在しませんよ。」

アリスは悲しげに言う。

しかし、それでも明久は…。

「いいや、自由だ。君の命は高城のものではない。君の命は君のものだ。あんな奴の為に君が不自由になることはない。…それに前も言った筈だ」

「…え？」

「君の罪は僕も背負う」

その瞬間——。アリスの心の中から強烈な感情が込み上げてきた。今まで必至に堪え、溜めこんできた感情。

「…何…言ってるんですか…」

アリスは下を俯き小さく言う。

「高城の呪縛は簡単に解けない…。今まで犯した罪は消えない」

「……………」

「それでもアナタは私を自由だと…そう言ってくれるんですか？」

アリスは下を俯いたまま訊く。それに明久は「うん、勿論だ」と言う。

「誰が何て言おうと君は自由だ。僕が保証するよ」

そう断言した。

しかし、そう断言出来るほどの保証は実際なかった。それは明らかに非現実的でただの夢にすぎなかった。

それでも…。

「…明久君…」

彼女の瞳から溢れるほどの涙が零れ落ちる。彼女は喉を詰まらせるように声を上げ泣いた。

そして、明久に抱き付いた。明久はそんな彼女を強く抱いた。

アリスの心の傷はあまりにも深かった。それでも今、この瞬間、傷が僅かではあるが癒された気がした。

ようやく長年の呪縛から…

まだ高城も生きている、罪も消えない。しかし、長年の呪縛から解放された…そんな風に思えた。

そんな風に———思った———。

「まさか、此処まで来て裏切るとは———」

声が聞こえた。何かを呪うように低い低い声。

「た、高城？」

現れたのは高城だ。しかし、その姿は異形とも言えるべき姿だった。白銀の髪に真紅の瞳、六本の腕。明らかに人ではない。

「…消えなさい、アリス」

高城はそんな風に言うのと、アリスは急に全身に痛みが回ったかのように悶え始めた。

「う……あああああああああああああああつ」

アリスは叫んだ。

「君はもう用済みです。聖剣だけ置いてとつとつと消えろ。」

怨みの籠った声でアリスは言う。

「お前、アリスに何をした!？」

「いえ、何も。ただ消えろと言っただけです。彼女はこの世から消えるだけです。ああ、安心してください。木下優子には何にもしてませんので。」

しかし、それはこうも言える。アリスには何かした…と。しかし、明久は何故、アリスがこんな苦しそうに声を上げているか分からない。

「いいから、アリスに何をしたか答えろ。」

明久は命令口調で言う。その声には怒気が籠っていた。高城はやれやれと言わんば

かりに首を振り、答えた。

「いいですか?《人間》としての僕は死霊術士だった。死霊の魂なら僕は生かすことも殺すことも出来る。つまり…。もう、分かりますかね…」

「そういう…?」

つまりはこういうことだった。死霊術士は死んだ者の魂なら自由に操ることが出来る。生かすことも可能であり、魂の存在自体をも壊せる圧倒的な存在である。その死霊術士が「消えろ」と言えば、その死霊の魂は存在そのものが消えざるを得ない。

つまり、死霊に対し、言霊の力だけで殺せる。そして今、高城はアリスに「消えなさい」と言った。要するに今のアリスは……。

「アリスの存在が…消えようとしている…のか?」

明久は唾然とした。そんな言霊だけでアリスの存在は消えてしまう。

「…あ…き…ひさ…君」

アリスは辛そうに息を荒くさせながら、明久の名を呼んだ。

「アリス…、アリスッッ!」

明久は必死に呼び返した。悲痛にも似た叫びだ。

「御免…なさい。…ようやく…アナタに…アナタの優しさに…もう一度触れることが出来たのに私は…」



「……これは……」

明久はその花の名前を知っていた。

この花は四年前、アリスが教えてくれた花だった。

この花には歴史があり、ある騎士が死ぬ際に恋人に別れを告げる際に残した言葉があった。

『私を忘れないで』…。

それが花に込められた思いだった。そして、それを教えてくれた時のアリスの顔が酷く悲しそうだったのも覚えている。

そして四年前の『血のクリスマス・イブ』と言われたあの日も彼女は死ぬ際にこの花を手にかけていた。自分が居なくなっても自分の存在が明久の中で生き続けるよう、そう願いを込めて。

「ふざけるなッ！君は助ける……ッ。簡単に……自分の命を諦めるなよ……」

明久の瞳からは溢れるほどの涙が頬を伝った。

「君は、この世から消えられるほどの満足な思いをしていない。それなのに消えるのは、僕が許さない……ッ」

明久はそう言った。その言葉にアリスは薄く微笑んで言った。

「そう……ですね。でも良いんです。私は……もう。それでも私はアナタに愛されたから

…」

苦しい筈なのに、悲しい筈なのにアリスは笑った。

「アツハツハハハハハアア。悲しい恋物語ですかあ？アハハハハハ。残念ですなえ。」

すると背後から高城があざ笑うように言ってくる。

明久は今にも消えそうなアリスを手放し、高城を睨みつけた。

「あれ？何ですか…？その眼。あれ、嫌だな。僕に勝てるでも思ってますか、この野郎」

全ての元凶はこの男だった。この男が居なければ、フミツキの町人は死ななくて済んだ。優子を苦しめられずに済んだ。アリスを失わなくて済んだ。

「二重召喚…ッ！（ダブル）」

明久は黒と白の二本の剣を召喚した。

「高城オオオオオツッ!!」

明久は咆哮して前へ飛び出す。

「餓鬼が…。《神》の僕に勝てると思ってるのか…？ああ？」

高城は吐き捨てるように言った。そして高城も前へと駆けだす。



——最後の戦いが始まろうとした——。

## 最後の戦い

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ!!」

明久は黒と白の剣を高城に向け、駆けてゆく。

何故、アリス、そして優子は此処までしてこの男に苦しませなければならぬのか？いや、それ以外にも町人達もこの男の手によって命を落とした。

明久は心の中で誓う。この戦いを終わらせようと。

高城も明久が動くと共に足を一步前へと踏み出してゆく。そして、明久は二本の剣を一気に振り下ろした。

「甘いなア」

高城はその攻撃に少しも恐怖めいた感情を見せず、指先でその攻撃を止めた。

「《神》の僕にこの程度の攻撃で傷を付けようだなんて相当自惚れてますねえ」

「神だど!?!」

「そう、《神》。君も阿修羅という名前くらいは知っているはずですよ」

実際、明久も少しではあるがその名前を耳にしたことがあった。彼は娘を奪った帝釈天に幾度も戦いを挑み、そして敗れた。そして彼は修羅界の主、もしくはは戦闘神とされ





「ハハハハ。その黒と白の名もなき剣は元々『騎士王の聖剣』（エクスカリバー）を二つに分割した不完全な剣だ。そんな成り損ないの剣で一体何が殺せると言うんです…？」

そして高城の刃は迷うことなく明久の心臓を貫いた。

「ア…が…」

明久はそれを茫然と見た。そして自分がこの世に遠ざかって行くのを実感した。

---

気付くと明久は夕日の光が綺麗に染まる海辺の砂浜に居た。

「ハハハ…は」

明久は見覚えのないその光景にキョトンとした表情でいた。何故自分はこんなところで居るのだろうか——？先程まで自分は高城と戦っていた筈だった。

しかし、その疑問はすぐに消えた。

（ああ、そうか。僕は死んだのか…。）

明久はフフフと涙を目に溜めて笑った。

結局、《神》が相手では自分に勝ち目はないことは分かっていた。そんな力の差くらい

赤ん坊でも分かりそうなものだった。

それでもやはり何も出来ないずに朽ち果てていくのは悔しい。

優子、そしてアリスにもいつも自分が二人を護ると言っておきながらいつも二人が消えていくのを見ているだけ。そんな自分が堪らなく嫌いだ。

そんな時、声が出た――。

「…吉井君――。」

明久はその声がある方へと振り向いた。

「木下さん」

そこには優子が立っていた。ブラウンの長い髪が夕日の光に照らされ、とても綺麗だった。

「…ゴメン、僕は…君を護れなかった…」

明久は海を眺めて言った。

「いつも君に護ると言っておきながら僕は君が傷ついていくのをただ見ているだけだった」

そう明久は言った。それも酷く悲しそうな目で言う。

しかし、優子は首を振った。

「ううん。それは違う」

と、優子は明久の言葉を遮るように言った。

「アナタのその言葉で私は勇気づけられた。何度も何度も。恐怖するだけしかない明日を私は笑って見ることが出来た。全部全部、アナタのおかげよ。明久君」

優子は笑った。その笑顔は夕日の光以上にとても眩しいものだった。

「だから、アナタはここにいちやいけな。アナタはこれからもその言葉でいろんな人を救っていくの。これは私からの約束だよ？」

優子は優しく微笑んだ。

それを聞くと共に夕日の海の光景が……。優子の姿が消えていく。

「ま、待って。木下さん！僕はまだ……君に」

しかし、光景は徐々に現実へと変わっていく。最後に見えたのは明久に「ありがとう」と言い、涙を頬に伝う優子の姿だった。

「つ……ゴホツ……ヴァ……ア」

明久は咳き込んだ。咳き込んだ咳には真っ赤に染まった血が吐き出される。

「アレ？可笑しいですね。君の心臓は確かに止まった筈なんです」





高城は叫んだ。

「僕も同じだ。こんな現実が許せない。お前の為に誰かが死ぬのはもうたくさんだ」

明久は高城を睨みつけて言う。

「フン。許せないッ!?アハハハッハハハアアハハアッハアッ!!でも、お前は僕を殺せない。お前の武器はもうない。そうでなくても神の前では何もかもが無意味となるッ!!だから、とつとと消えろオオオオオオオオオオッ!!」

高城は一気に六本の剣を振り落した。その速度は人間が見切ることが不可能なほどに速い。

「明久…君」

その時、倒れているアリスから声が聞こえた。

\*\*\*\*\*

そこは嘗てアリスと見た花畑だった。そこには一面ワスレナグサという花が綺麗に咲いていた。

「明久君、覚えていますか？アナタにあの名もなき黒と白の剣が私の聖剣、『騎士王の聖剣』（エクスカリバー）を二つに分割した力だということ…。」

「ああ、覚えているよ。」

明久は頷く。するとアリスは何故か少しだけ嬉しそうに微笑み、金色の長い髪を揺らした。

「今こそ、アナタに私の聖剣を差し上げます」

アリスのその言葉に明久は目を丸くした。

「いや、でもこれは……」

しかし、アリスは明久の言葉を遮って……。

「良いんです。元々この剣はアナタに差し上げるつもりだった。アナタなら私の想いを、意志を継いでくれると……。そう思ったから」

アリスは聖剣を召喚し、それを明久に差し出す。

明久はそれに少しだけ躊躇った表情を見せるが、その剣を手を取った。黄金の光が明久を優しく包んだ。

\*\*\*\*\*

破片となった黒と白の剣から黄金の輝きを生み出した。その輝きは天にまでも上りはるか遠くにいる人でも見れる輝きだった。

夜の暗い闇をも輝かせる光だった。その光は月の光よりも眩しい。

「この輝きは……」

雄二はその光を目にし、息を飲んだ。

「一体何が……」

傷口を抑えながら翔子が言う。そして、その場に居た清水や久保もその光を見てポカんと口を開けた。何が起きたかは分からない。しかし、何かが起きた。それは確かだった。

そしてまたカロール二世たちもその光を目にしていた。

「へ……陛下……。なんですか？ コレ」

「分からない。だが……この光は……」

竹原の問いにカロール二世もどう答えていいのか分からなかった。しかし、この光は決して雄二達やカロール二世達を咎めようとしている風には見えなかった。むしろ、護るために、この町を光で覆っているようにも見えた。

そしてその元凶となる場所は明久達がいる地点だった。

「この光は……」

高城はその光の眩しさに思わず目を手で覆う。

今まで修羅の主として崇められた彼は闘いという血にまみれた光景しか見慣れてい

ない。戦場で此処まで輝かしい黄金の光を見るのはこれが初めてかもしれない。

明久の破片となった白と黒の名もない剣は光を帯びて一つの剣と形を変えていく。

二本の無名の剣は後世にまで語り継がれた嘗ての剣に、原型へと戻っていく。嘗てアリスという少女が一国の王として手にした宝剣。

その過去は、想いは願いは明久の心に直に伝わってくる。そしてその全てが黄金の光へと導いている。

その剣の名は——。

「……『騎士王の聖剣』（エクスカリバー）……！」

明久はその剣を手にし、構える。その矛先は高城へと向けられる。

騎士王の聖劍（エクスカリバー）、騎士王の宝劍（クラレ  
ント）

「…『騎士王の聖劍』（エクスカリバー）」

明久は黄金に輝く劍を手にした。その矛先は真つ直ぐ高城に向けられる。

それを目にした高城は……………。

「アハハハアハハハハハハハハハハアハハハハハハッ」

高城は声を高くして笑う。もう精神が何処か壊れてしまっているかのような態度だった。

「君は一つ勘違いしている。その劍は確かに人間界では最上級に位置する劍だと思うよ。それは僕も認めるよ。だが、忘れているだろうか？僕はさつき、この世の武器では僕に傷を付けることが不可能…。そう言った筈だ。」

「……………」

そう、高城の真名は阿修羅。修羅界の主だ。そして高城雅春という人間の肉体を捨て《神》の肉体を手に行っている。つまり、人間である限り彼は斬れない。そしてこの世のどんな武器でも彼は斬れない。

もしかしたら死後の世界に武器という物が存在していたら阿修羅界も一つの死後の世界。同じ神で死後の世界に存在する武器であるのなら、きっと高城に傷を付けるのも可能かもしれない。

しかし…。

「勘違い…してるのはアナタの方です」

倒れているアリスの口が動いた。

「確かに私の聖剣は元々はこの世の武器。ですが『今』はどうでしょうか…？」  
すると高城の中に疑問が生まれる。

そう、確かに聖剣エクスカリバーはアリスがアーサー王として活躍していた時に使われた剣。即ちこの世で活躍した剣であるのでこの世の剣と言える。しかし、それは旧時代の意味においてだ。

昔は確かにこの世に存在する剣でしかなかった。

しかし、アリスという少女は高城がアーサー王の死霊を人造人間（ホムンクルス）として転生させた人間。つまり、魂は死霊。死者である。死者とはこの世の人物というよりはあの世に生きる存在だ。

そして『騎士王の聖剣』（エクスカリバー）もその死者であるアリスから召喚された剣。つまり、この世の剣でも死者から召喚される剣であるのなら、その剣は自動的にあの

世の剣となる。

「ハ……ハハハハハツハハハハハ。良い……良いよ。面白い……。面白いじゃないか。吉井明久。なら、貴様にはそれ相応の報いを受けさせなければならぬ。しかし、僕に傷を付けられる剣を持っているからと言って力の差が埋まるわけじゃあないだろう？」

瞬間、高城の姿は消える——。

「……ッ!？」

明久は辺りを見回す。何処にいるのか——？右、左、上、下、正面、後方、斜め下、斜め上。全ての方向を見る。

「……遅い……。」

そして、すぐ目の前に高城は居た。それも正面。

「これでは容易く殺してしまいそうだ。」

高城は剣を振り上げ、すぐに振り下ろそうとする。速い。人間の反射神経を超えるほどの速さだ。

そう、結局は高城を殺す剣を手にしても明久の肉体は人間。この世の体。そのため限度が定められ、人が扱える力にも許容範囲という物がある。

しかし、あの世に生きる高城にそんな制限という物はない。使いたい力は扱うがままに発揮される。

「…くそ」

明久は唸る。この一撃は躲せない。この世の概念に縛られた体では躲せない。エクスカリバーと同じく死者から召喚されて自動的に死の世界の武器になるのならともかく、人間そのものが肉体を保ったまま死者になるのは不可能だ。

「いや…。」

明久は咄嗟にアリスの方を振り向く。

たった一つだけ…。たった一つだけだが、自身を死者化する方法があった。

「ゴメン、アリス。辛いところ悪いけど君の力が必要だ。」

明久はアリスに懇願する。アリスはそれを笑みを浮かべて受け入れる。

「…憑依しろ『アリス』。」

今まで優子の体に憑依していたアリスの魂は明久の体に憑依する。

それを見た高城は…。

「そう…か。そういう…ことなのかッ！」

高城は少しだけ悔しそうな表情を浮かべた。

そう、あの世の存在に唯一勝つ方法は同じあの世の魂を自分の体に憑依させること。そうすることで一時的にはあるが、憑依した人間は死者の力を得る。

そして同じあの世の者同士なら例え敵が《神》でも、この世の制限された身体よりは







何かがおかしい……。高城はそう思った。

相手は《神》である自分よりも遙かに弱い人間だ。少しでも自分が本気を出せば、簡単に身を滅ぼしてしまうほどに弱い存在なのだ。

それなのに何故目の前の人間は自分に刃向つてくる？何故勝てない筈の勝負だと分かっている？あまりにも無謀な行為だ。

しかし、この人間はそんなことは少しも考えてはいない。自分に勝ると信じ切った瞳をしている。それは異様に腹立たしかった。

無謀だ、無謀なのだ。しかし、何処か焦りが生まれる。力は圧倒的に自分が強い。しかし、何処か自分が劣っているのではないか？自分が強大な存在でなくてはならないという焦り。

戦場で此処まで光り輝いた戦士は見たことがない。

その力はある意味、他の神よりも脅威的なものだ。高城は思った。

高城は十本の武器を一斉に振った。回避不可の絶対的な一撃だ。しかし、目の前の戦士は前進しながらその攻撃を躲した。

そもそも躲せるはずがない。しかし、後退して躲したのならまだ分かる。だが違う。



振り下ろした。

その斬撃は巨大化され、真っ直ぐ高城に向かっていく。高城はその一撃を見切り躲した。

しかし――。

「な……………」

明久は聖剣を高城の胸に突き刺した。

「馬鹿な……………」

それは阿修羅の敗北…。帝釈天と戦った時以来の初めての負けだった。

「アンタの負けだ。」

明久は言う。確かにこの状況は負け以外の何でもない。

「く……………」

高城はこの世界から消える。

\*\*\*\*\*

人間に負けた…。これは神にとって恥じるべき敗北だ。何故、自分が敗けたのか全く

分からない。自分の方が何においても圧倒的な筈だった。それなのにこのザマだ。

そしてこれが二度目の敗北。

そして一度目は帝釈天との戦いだ。そして、あの戦いの敗北が元で悪神、戦闘神なんて言う風に崇められるようになってしまった。そして自分のいる世界は修羅。戦いこそがその世界の存在意義。

もし、自分があの時、帝釈天に戦いを挑まなければ違う未来もあつたのかもしれない。だが、やはりそれはなかった。

娘の舎脂を奪われた。だが、その舎脂は帝釈天を愛した。

しかし、その時の自分に「戦わない」なんて選択肢はなかった。どうしようもないほどの怒りが自分を戦いへと導いた。

だが、後悔はないか？ そう問われれば、「ない」と断定した答えにはならなかった。

だが、オレはあの時どうすれば良かった？ どうすれば一番良かった？？

『…お父様…』

その時、天から声が聞こえた。娘の舎脂だった。

そして舎脂は言う。

『ごめんなさい。悪い…とは思ってます。私はきつとアナタを苦しめました。でも、私はあの人と居られたことに後悔はありません』

そう言った。

「お前は…不幸じゃなかったのか…？」

『はい、幸せでした』

舎脂は嬉しそうに笑った。

それと共にオレは気づいた。自分の愚かしさに…。

そうだ、舎脂は幸福である、そう言ったのだ。親は娘の幸せをただ願うだけで良いのに…。なのに、オレは怒り狂い、帝釈天と戦うことしか考えられなかった。

愚かだ。とんでもなく愚かだ。

苦しめたのはオレの方だ。娘の幸せを願う筈の親が逆に娘の幸せを奪おうとしてしまった。

「済まない…。舎脂」

謝罪の言葉を述べる。そして、瞳が濡れる。濡れた瞳から雫が零れ落ちた。

修羅界に生きる王の涙だった。

戦いは終わった。これでようやく長年の因縁も斬ることが出来た。

「……………」

明久は聖剣と宝剣の召喚を解く。そしてアリスの憑依も解いた。

アリスは再び肉体のない霊体となった。姿は四年前と何一つ変わらない姿。金色の長い髪と淡いブルーの瞳がとても印象的である。

「…終わりましたね…」

その声は今にも消えてしまいそうなほどに小さい。

アリスの存在が薄れている。この世から遠ざかろうとしていた。

「アリス…」

明久は何か言おうとしたが言葉に出来なかった。

「高城が先程放った言葉が私の霊体…いえ、魂にまで響いている。もうじき私はこの世から…いえ、存在までもが消えてしまうでしょう…」

アリスはそう言った。それはとても悲しそうで、とても儂げな感じがして見てとても辛かった。

「ゴメン…。君を最後まで護れなくて…」

明久は拳をブルブルと震わせて言った。

自分が護ると言った。なのに、何故自分は護るべき相手がただ消えていくのを茫然と



見ることしか出来ないのだろうか…？悔しくて仕方ない。

「良いんですよ。私はアナタに感謝している。」

「何言ってるんだ？そんなこと…」

しかし、アリスはそんな明久の言葉を遮って「いいえ」と言う。

「アナタのお陰でアリスという少女の魂は救われた…。ようやく騎士でも王でもない、ただの少女になれた。」

ニコリと微笑み言う。

「アナタのお陰で前世から背負っていた王という枷が騎士という枷が外れたような気がします。前世に望んでも望んでも出来なかった恋をアナタにすることが出来た。」

「…アリス」

「…アナタと居られることが私の幸福だった」

そしてアリスは悲しそうに笑う。

「本当はもつと一緒に居たかった。もつとアナタを愛したかった。」

それが今のアリスの望みだった。叶えられそうもない、今にも消えてしまいそうなアリスの望み。

「僕だって君と同じだ。君のことが好きで、君と居られることが幸せで…それ…で」

しかし、涙が邪魔して言葉にならない。明久だけでなくアリスも同じだった。瞳から

は溢れるほどの涙が頬を伝う。

そしてアリスは光の粒子となって消える。その粒子は天を駆けのぼるかのよう  
に空を舞った。

『私を忘れないで下さい』

アリスが愛したワスレナグサの花言葉だ。

忘れる気などなかった。アリスという少女は明久の中で永遠に生き続けるだろう――

## 終わり

温かい…。自分の掌が温もりに包まれているのを感じた。

「……んあ……」

ゆっくりと瞼を開ける。蛍光灯の光が眼に射しこんでくる。明久は体を起こす。体には包帯などが巻かれ、病院のベッドに居る。ということとは此処は病院なのだろう。

だが、そこは大した問題ではなかった。明久の視界に真っ先に入ってきたのは…。

「ようやく起きたわね、吉井君」

ニコリと微笑む少女がそこに居た。薄い茶色の髪が腰まで伸びたせいで少し雰囲気には違和感を感じてしまうが、間違えない。彼女は…。

「木下さん…」

明久は驚いたように目を見開いた。

しかし、彼女が今此処に居る理由は納得出来た。先日まで彼女の体にはアリスが憑依していた。四年前の高城の戦いで優子は命を落とすものの、アリスがその時既に優子の体に憑依していたため、完全な死から仮死状態と死の状態は和らいだ。そして再び現れた時は『アリス』として復活を遂げた。

しかし、そのアリスはもうこの世から消えた。明久に別れを告げ、涙を零し、光となつて消えた。そうなったことで優子は本来の自分をようやく取り戻したのである。

「吉井君、傷は痛まない？三日間くらい目を覚まさなかつたけど…。」

「え？ああ、うん。まあ、大丈夫。」

明久は目の前にいる優子の姿に目がいつてて自分の体の傷のことなどすっかり忘れていた。

そうだ、彼女は再び此処に戻ってきてくれたのである。

「ようやく…。君に会うことが出来た。」

「…吉井君…？」

すると明久は包帯だらけの体で無理やり立ち上がり、優子を力強く抱いた。

「…おかえり。木下さん。」

明久は笑顔で言う。

優子はその顔を見て涙を滲ませた。明久はずっと優子が帰ってくるのを待っていたのだ。そして、ようやく会えたのだ…。

「うん、ただいま。」

優子は泣き笑いのような表情で言った。

離れていた二人の距離はようやく零となった。ようやくこの手の温もりに触れられ

る。

窓から差し込んでくる太陽の光が二人を照らした。

戦いは終結し、二か月ほど経つ。

しかし、戦いの終わりには何人：いや、そんな極小の単位ではない。何千、何万の命が犠牲の上で終結を迎える。そうして国は平和を得る。

今回の戦いもそうだ。フミツキの住人も逃げきれず命を落としたものが多数いる。町人だけではない。騎士達も命を落とした。

皮肉なことに平和は犠牲の上で成り立っている。国を治めるカヨール二世はそれ痛いほど理解していた。

二か月前よりは荒廃した町も復興しつつある状況だが、やはりこの町が戦地となった証拠が所々残っている。そんな町中をカヨール二世と竹原は見回っていた。

「フン。あの男を殺したものの、こちらの戦死者の数はこの町の人口の約半数は超える。」

「ええ。終結したものの、外面的に無事でも心に傷を負ったものも何人もいるでしょう。」

…」

カヲール二世の言葉に竹原は言った。心に傷とはつまり、この戦いで当然、家族や親族、友人などを失った人間は多い。そう言われると、戦いは終わっただけであり、平和は何処か程遠いものがある。今の現状はきつと仮初の平和というのが妥当なのかもしれない。

そして二人はある場所にたどり着いた。そこは美しい海が見える場所だった。そこには早くも、此度の戦いで命を落とした者を癒すための慰霊碑が建っていた。そこには死んだ一人一人の名が刻まれていた。

カヲール二世はその慰霊碑に触れる。

「お前たち…よく、戦ってくれたね。本当に感謝してる。同時に護れなくて済まなかったと思ってる。けど、お前たちの死は無駄にしないよ。この町を、国を必ず平和に導く。必ずだ。」

カヲール二世は死者達に自分の誓いを口にした。この先、再び戦いは起こらないと断言できる人間はきつとない。しかし、それでも平和を遠ざけるような真似は絶対にしないと誓った。

もしかしたら平和までのその道のりがこれからの戦いなのかもしれない。

朝の七時くらいだった。明久はまだ眠っていた。

「おい、コラ。明久、クソババアが呼んでるぞ、コラ。」

雄二はドアを勢いよく開け、明久の部屋に入ってくるが、明久は起きない。眉一つ動かさず、起きる素振りを一切見せない。

「チツ…。やっぱ、寝てたか」

仕方ないと呟き、雄二は明久に踵落としを食らわした。

「いっ…だあアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!」

流石の明久でもこれほど重い一撃を寝てる間に喰らったら、起きざるを得ない。それどころか痛みを堪え、悶えてしまう。

「雄二…。一体何の用…?てか、後で殺す!」

「あ?クソババアが呼んでるんだよ。」

「は?今日は休みの筈じゃ…」

「いいから行くぞ、ハゲ」

ハゲじゃねーよ、と心の中で突つ込みつつも明久は身支度の準備をする。

そして、王宮の間には明久以外に国家騎士が集まっていた。しかし、この高城との戦

いで、第七国家騎士の土方と第六国家騎士の小山が戦死した。そのため七人居た国家騎士は今五人しかない。

「あく、よく来たね。」

カヲール二世は気怠そうな表情で奥の部屋から出てきた。

「おい、ババア。何で今日は僕らを呼んだ？」

「馬鹿、私語を慎め、馬鹿」

態度の悪い明久を雄二はチョップして静める。正直、雄二も毎度のことかのように生意気な口をきいているので、あまり人のことは言えない筈なのだ。明久は少し不服そうにムスツとした顔をする。

「確か今日は休暇を頂いた筈ですが、任務か何かですか？」

清水はカヲール二世に訊く。

「あー、違う。」

カヲール二世は端的に答えた。

「では自分たちは何のために呼ばれたのですか？」

と、今度は久保が訊いてくる。

「あく。実は今日はだな。おい、霧島。二人を部屋に入れさせろ」

カヲール二世は翔子に命令しその二人とやらを部屋に入れさせた。



入ってきたのは…。

「ええ。紹介する。今回の戦いで国家騎士が二人戦死した。そこで新たな国家騎士を用意しなければならぬということで、今回昇格した騎士だ。」

その二人は明久もよく知る人物だ。一人は沖田総悟。一人は木下優子だった。

「ええ、木下には第四国家騎士、沖田には第七国家騎士として就任してもらおう。」

と発表があったところで不服そうな顔をする者が現れる。

「あの、すみません。陛下。自分が第四国家騎士の筈では…?」

不安そうに訊いてきたのは第四国家騎士の久保利光だ。

「ああ、今回の国家騎士昇格試験で沖田は七位相当の実力のため七位に就任はすぐには決まったが、木下優子の実力は四位以上の実力だった。実際に以前、優子が第三国家騎士の時の実力はお前も知ってる筈だ」

「ええ、それは、まあ」

久保は頷いた。確かに実力としては以前も木下優子の方が上だった。

「しかしだ。そこで以前のように第三国家騎士に就任させても良いだろうという風にも考えたが、今現在、第三国家騎士についている坂本の戦闘力のデータと見比べると、劣っている部分がある。そこで私は四位相当と見て第四国家騎士に就任させる。」

「はい。まあ、話は分かりましたが…。ということは僕は降格するということですか?」

「ああ、悪いがこれは他の王族騎士達とも相談して決めたことだ。悪いとは思いますが従ってもらおう。久保利光は以後第五国家騎士、清水美春は第六国家騎士に就任してもらおう。」  
そう言われた二人は僅かに受け入れられないような表情をしていたが、二人は顔を見合わせ、「ま、仕方ないか…」と納得したように頷いた。

今回の戦いで死んだ国家騎士もいるのだ。久保も清水も死にかけてたものの、今こうして生きている。それに比べれば順位など大したことはなかった。

しかし…。

「いやあ。隊長。これから宜しくお願いします」

「く…。沖田がまさか国家騎士になるとは…。」

沖田の軽い態度に清水は眉を顰めた。

嘗て清水は警務部隊の部隊長に勤めていて、沖田はその副隊長だった。そのとき、沖田は清水の弱みを幾つも握っており、そしてその弱みを何度も突かれた。その為、彼は中々悔えることの出来ない人物だった。

そして今回の国家騎士の就任でも、きつと同じことが言えるだろう。

ある程度の話がついたところでカヨール二世は、

「じゃ、これから再びこのメンバーで国家騎士には活躍してもらおう。以上、解散」

そう言われ国家騎士達は部屋から出ていく。

\*\*\*\*\*

王宮から出ると、そこには明久の従者、木下優衣がいた。

「あれ？優衣ちゃん、待っててくれたの？」

「あ、いえ。そう言う訳じゃないんですけど…」

妙に照れくさそうな表情で優衣は言う。

「その…何て言うか…。ありがとうございます。姉さんを助けてくれて…」

優衣はペコリと頭を下げた。

どうやら今までずっとそれを言いたかったらしい。

「…確かに僕は木下さんを助けた。でも、僕が最後まで立てたのは優衣ちゃんや、皆が居てくれたからだよ…」

その言葉を聞いた途端、優衣は顔を赤くした。

「あの…。明久さん…」

しかし、優衣が何か言おうとしたところで…。

「あ、吉井君。アレ優衣も居たの？」

「お姉ちゃん…」

後ろからヒョッコリ現れたのは優子だった。

「吉井君。少し用があるんだけど、いいかしら？」

「え？ああ、まあ…。優衣ちゃん、何か言おうとしてたけど何？」

明久の質問に優衣は首を振り、「いいえ、なんでもありません」と言う。そして、明久と優子が行ってしまう。

すると、建物の陰から人影が現れる。

「よう、優衣ちゃん」

出てきたのは雄二だった。

「良かったのか？明久に自分の想いを告げなくて…」

そう言われ優衣は少し悔しそうな表情をしたが、すぐにそれは消えて笑みを浮かべた。

「はい、良いんです。それでも私は今の自分のこの気持ちを大切にします。」

「…そうか…」

恐らく優衣なりに二人に気を使っているのだろう…。雄二はそう思った。  
暖かい春の風が吹いてくる。

そこは桜に覆われた場所だった。此処は恐らくフミツキの中でも一番桜が見渡せる場所なのだが、何故か人の通りが少ない。そのせいかな、この小道を歩いているのは明久と優子だけだった。

「へえ、スゴイ綺麗な場所だね」

「でしょ？ 此処は私のお気に入り場所なんだ…。」

優子はニコリと微笑んだ。

だが、不意に思い出してしまう。この桜もとても美しい。しかし、アリスが最も愛した花、ワスレナグサも。

彼女がこの世から消えて約二か月。しかし、未だ頭から離れない。

そんな明久の思惑を見透かすかのように優子は訊いた。

「…吉井君は…アリスのこと、好きだったの？」

「……え？」

予測もしないその質問に明久は思わず戸惑う。かと言って誤魔化そうとも思わなかった。

「好きだよ。彼女が例え僕の敵だろうと、この世から去ったとしても僕は彼女を愛している。」

そして恐らくそれはアリスも同じだったのだろう。

「そっか……。そうなんだ。」

そんな明久の言葉に優子は妙にしおらしく頷いた。

「でも、多分。それは木下さんにも同じことが言えるのかもしれない……。」

「え？」

優子は驚いたように顔を上げた。

「君が居ないこの二年間、僕は君を忘れたことがない。君といた日々がとても懐かしかった。」

明久はこの二年間を振り返るように言った。

高城の剣で優子が斬られた時、あそこまで身を引きちぎるような想いをきつと明久は今までしたことなかった。そして、今こうして優子が居てくれることが本当に幸福である。

そしてそんな言葉を発した明久を見て優子は言う。少し、赤面した表情で、とても言い難そうなものはあつたが口を開いた。

「私、吉井君のことが好き。例え、アナタがアリスを愛したとしても。私は世界の誰よりもアナタが好き。」

優子は笑って言う。

アリスは確かに消えた。しかし、だからといって全て失ったわけではなかった。明久にとつて得た物もあつた。

「ああ、僕も木下さんが好きだよ。」

明久も笑つて言つた。そして、その言葉に嘘はなかつた。

そして明久は優子に手を差し出す。その差し出された手を優子は迷うことなく自分の手で重ねる。

そして二人はこの桜の舞つた道を歩いていく。一歩ずつ、一歩ずつ。

きつとこの手が離れてしまつてもこの手の温もりは永遠に消えない。永遠に残り続けるだろう。

日の光が二人を照らす。恐らく、明日もその先も照らし続けるだろう——。